

勝手にシン・エヴァン
ゲリオン

hekusokazura

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シン・エヴァンゲリオン公開を前に、エヴァQの続きを勝手に書いてみました。

なお、作者は原作の内容、特にエヴァQについては9割がた理解しておらず、また原作のような緻密で壮大なストーリーとは懸け離れた、主に綾波レイを巡る周囲のあれやこれやをちまちま描いた大雑把なお話です。なお、一部に読み手を不快にさせる表現・展開（暴力、登場人物による殺人、鬱展開等）がございますので、ご了承ください。

※2021. 3. 7 映画封切前に何とか無事完結できました。それでは皆さん、感染対策を徹底しつつ、劇場でシン・エヴァを楽しみましょう!!自分は暫く映画館に行けそうにないので、ネット断ちに入らねば…。

目次

第一章	第壹話	1
	第貳話	28
	第參話	47
	第四話	64
	第伍話	82
	第六話	98
	第七話	119
第二章	第八話	135
	第九話	161
	第壹拾話	195
	第貳拾話	286
	第參拾話	308
	第肆拾話	324
	第伍拾話	347
	第陸拾話	364
	第柒拾話	381
	第捌拾話	395
	第玖拾話	410
	第拾拾話	433
第三章	第壹拾參話	255
	第壹拾肆話	236
	第壹拾伍話	219

第貳拾參話

—————

450

第貳拾四話

—————

463

最終章

第貳拾伍話

—————

475

第貳拾六話

—————

508

第貳拾七話

—————

533

第貳拾八話

—————

553

最終話

—————

583

第一章

第壹話

それはまるでたつた3色の絵の具のみで描かれたような風景だった。

荒涼とした大地に大量の赤いペンキをぶちまけたような、赤い砂漠。

禍々しい色を放つ大地とは対照的な、抜けるような青い空。

ぼつぼつと浮かぶ、白い雲。

そんな抽象画のような奇怪な風景の中をてくてくと歩く3つの細い影。

たつた3人のキャラバンを率いるように先頭に歩くのは、左目を眼帯で覆った少女。まるでこの大地のような赤いスーツを身に纏い、背中まで伸ばした赤い髪を風になびかせながらきびきびとした動きで歩いている。

その後ろをとぼとぼと歩く紫色のスーツを着た少年。生ける屍という表現がびつたりなほど、虚ろな眼差しで、無気力な足取りで歩いている。

歩き始めた当初、赤毛の少女は今にも立ち止まってしまい、その場にへたり込んでし

まいそんな少年の手を引つ張りながら歩いてしたが、行く手に廃墟と化した大きな街が見えた頃にはいい加減少年の態度に嫌気が差し、そして街の入り口に近づいた頃にはもう好きにしなさいとばかりに少年の手を離してしまっていた。

全てがどうでもよかった。

世界を壊し。

その世界と引き換えに救えた思っていた少女はどこにもおらず。

絶望していた自分に尊い希望を示してくれた少年は、目の前で命を散らした。

惰性だ。

今は惰性のままに歩いている。

惰性で生きてきたこれまでの半生と同じように。

少し視線を落とし気味に歩く。

少し前を歩く赤毛の少女の、形の良い小ぶりのお尻を、無感動に見つめながら歩き続ける。

赤い土が、赤いアスファルトに変わったことに気付いた。

赤毛の少女に手を引つ張られながら歩き始めて、そしてまるで突き放されるように少

女の手が離れ、惰性で歩き続けて、初めて視線を上げる。

そこは廃墟化した街。

大きく傾いたビル。

支えるべき電線を失った電柱。

打ち棄てられた車の群れ。

少年の目に入ったのは、一つの朽ちたバス停留所の標柱。

その標識に書かれた文字。

『第3新東京市立第一中学校前』

少年は息を呑んだ。

すぐに視線を標柱の背後へと向ける。

鉄筋コンクリート製の3階建て。

結果的にそこで過ごした期間は僅かに過ぎなかったが、少年にとっては幾つもの思い出が詰まった学び舎。

生徒たちの喧騒で溢れていた校舎は、今は全ての窓ガラスが砕け、白かった壁は赤黒く爛れ、しんと静まり返っている。

少年の足が止まり掛けるが、しかし数歩前を歩く赤毛の少女の足は止まらない。

少年と、そして友人たちとの思い出を象徴する建物の変わり果てた姿に、一瞥をくれ

することもなく。

少女の背中から伸びる見えざる手にでも引つ張れるかのように、少年の足も進み続ける。

しかしその足は徐々に速度を落としていく。

毎日通った歩道橋。

友人たちとよく買い食い寄った商店。

学校帰りに本部に行くために利用した駅。

あの少年から、14年前の真実を告げられた時に見せられた世界。

あの巨大な塔から見下ろした、遙か下にある地上。赤一色に覆われ、奇妙な赤い十字架が天に向かって何本も立つ、現実離れた光景。彼が告げた真実は、未だに何処か別の世界、どこか遠い遠い世界での出来事のように思えた。

そして今、改めて、自分がしてしまったことを、目の前に突き付けられている。

いつも当たり前のようにそこにあった、日常の風景。

それら全てが、無残にも変わり果てていた。

街に入り、少年の歩く速度は明らかに鈍り始めた。

赤毛の少女は相変わらずきびきびと歩き続けている。

少年と、その前を歩く赤毛の少女との距離が、少しずつ空いていく。

赤く爛れた線路の踏切りを渡り始めた頃。

少年の隣を、すつと音もなく人影が通り過ぎた。

踏切を半分以上渡つて。

空色髪の少女はふと背後を振り返つた。

今しがた追い越したばかりの、少年の姿を見つめる。

ふらふらと力なく歩く少年。

前方を見つめなおす。

すでに遮断器まで辿り着いた赤毛の少女の背中。

赤毛の少女の歩みは淀みない。自分に付いてくる2人の存在などお構いなしとでも

言わんばかりに、一度も振り返ることなく、遮断機を越えてしまった。

少し歩いては立ち止まり、後ろを振り返り。

また少し歩いては立ち止まり、後ろを振り返ることを繰り返す。

空色髪の少女は、少しずつ開いていく2人の距離を埋めるように、2人の間を歩いた。

広い場所に出て、赤毛の少女の足がようやく止まった。

そこは陸上競技用のグラウンドがあつた場所だつた。

赤毛の少女は、手に持っていた小型端末の画面を見つめている。

その赤毛の少女の様子を、少し離れた場所で見つめる空色髪の少女。2人に遅れてやってきた少年は、崩れた建物の壁の側に尻餅をつくようにして腰を下ろし、抱えた膝に額を当てる。

赤毛の少女、式波アスカ・ラングレーは画面を見つめながら呟く。

「……まで下がればオツケーか……」

踵を返すと、ツカツカと歩く。

蹲っている少年、碓シンジの前に立った。

シンジはすぐ側に立つアスカの気配に気づいているはずだが、顔を上げようとしな
い。

綺麗な渦を巻いているシンジのつむじを詰まらなそうに見つめていたアスカは、ふんと小さく鼻で息を吐くとその場に膝を折り、シンジへと手を伸ばした。

アスカの手はシンジの頬を掠め、耳を掠め、後ろ髪を掠め、そしてシンジが背負う背囊へと辿り着く。背囊のファスナーを開け、中へと手を滑り込ませる。暫く背囊の中身をゴソゴソと探った後、目当てのモノを掴んだ手を背囊の中から引っこ抜いた。

立ち上がり、再びシンジのつむじを見つめる。

アスカとの顔の距離が縮まり、アスカが背囊に手を突っ込んでいる間も、微動だにし

なかつたシンジの頭。

アスカは再び鼻で息を吐くと、踵を返し、グラウンドの中央へと向かつた。

背囊から引つ張り出した拳大の機器を操作する。

つまみを捻つて幾つかの設定をすると、最後に筐体の端つこにある出つ張りの先端を引つ張つた。によきによきと棒状のアンテナが伸びる。

「さて、鬼が出るか、蛇が出るか……」

願掛けでもするかのように呟きながら、一番大きなボタンを押した。機器からピピつと、控えめな電子音が響いた。

アスカは機器を地面に置くと、振り返る。

空色髪の少女と目が合った。

「さて、と」

腰に手を当てて、空色髪の少女を見る。

無造作に摘まれた短い髪。真っ白な肌を包む、真っ黒なスーツ。シンジとはまた別の意味で、無気力な赤い瞳。

そんな少女を、アスカは詰まらなそうに見つめながら口を開く。

「アタシはあんたを何と呼べばいいのかしら？」

問われ、空色髪の少女は一度だけ瞬きする。

やや間を置いて。

「…アヤナミレイ」

小さな唇が僅かに開き、小鳥の囁りのような掠れた声でぼそりと呟いた。

空色髪の少女の返答を聴き、アスカの眉が不愉快そうに捻じれる。

「悪いけど、アタシにとつての綾波レイはあんたじゃないの」

再び、空色髪の少女は瞬きを、今度はやや強めにぎゅつと瞬きをする。

背後を振り返り、蹲っている少年を見やった。

——綾波じゃないのに…。

少年を見ている間に2回瞬きした空色髪の少女は、赤毛の少女の方に視線を戻した。

「ゼーレ供給の綾波タイプ。シリアルナンバー96」

相変わらず最小限の動きしかしない唇で、ぼそりと呟く。

ふんと、やや呆れ気味のアスカの溜息。

「96体目…か」

アスカの呟きに、少女はこくりと頷いた。

「あんたの前の95体のうち、アタシに…、赤いエヴァにやられたのは何体？」

「…52体」

「マリの…、ピンクのエヴァにやられたのは？」

「…13体」

事も無げに答える空色髪の少女に、アスカは今度は本気で呆れたような溜息。

「替えが効く命つてのも考えものね…。死んでも次があるつて甘い考えしてるから、あんた達は何時まで経つても弱いまんまなのよ」

アスカは後ろ髪を搔きながら吐き捨てるように言った。

空の彼方から爆音が響いた。

「んじゃ、とりあえず96つて呼ぶことにするわ」

アスカは「96」と呼ぶことにした少女の返事を聞くことなく、爆音が響く北の空へと目を向けた。

赤い大地とは対を成すような青い空。

その空に、染みのように浮かぶ黒い点。

その黒い点が少しずつ大きくなっていく。

アスカが発信した救難信号を辿ってきたのだろう。

大きなVTOL機が、アスカらが居るグラウンドへと近づいてくる。

アスカは機体を凝視しながら、少し前に呟いた同じ文句を繰り返す。

「鬼が出るか、蛇が出るか…」

徐々にはつきりと見えてくる機体。

「ちっ……」

アスカは舌打ちをした。

V T O L機の機体に大きくペイントされた文字。

『NERV』

それはアスカが敵対する組織の名前。

身を隠すべきか。

当然の考えがアスカの頭に過ったが、V T O L機の両脇に備えられた厳つい機関砲の砲口が正確にこちらに向けられていることに気付き、それは良策ではないと悟った。自分が逃げる素振りを一瞬でも見せれば、あの砲口が火を吹くだろう。

V T O L機は風を巻き上げながら地面に着地する。

アスカは肩幅に足を広げ、右手は暴れる髪を押さえつつ、左手は腰に当てると言う堂々とした出で立ちで巨大な「敵」を迎えた。

V T O L機の搭乗口が開く。

短いタラップを伝って、一人の男が降りてきた。

黒いジャケット。

両目を蔽ついバイザーで覆い、顎に髭を蓄えた男。

「…碇ゲンドウ…」

V T O L 機から降りてきたのは碇ゲンドウ。

ネルフの最高司令官。

自分が所属する組織にとつての宿敵。

世界の破壊を企てた悪の巨魁。

空から現れた意外な人物に、一瞬呆けたような表情をするアスカ。

しかし次の瞬間には。

「碇ゲンドウ!!」

叫びながら走り出していた。

プラグスーツの隙間に忍ばしていた、小さなナイフを取り出して。

倒すべき敵。

14年前に世界を滅ぼしかけた人類の敵。

それが、自分の足で走れば10秒も掛からぬ場所で、無防備に立っている。

願つてもない好機。

手に握ったナイフを奴の喉元に突き立てれば、全てが終わる。

何度も血反吐を吐いたこの14年間の全てが報われる。

待ってて。マリ、ミサト、リツコ、みんな。

あと10歩で終わるから。

あと5歩で終わるから。

あと3歩を駆け抜けければ、明日からあたしは14年ぶりに心の底から笑うことができるだろうから。

耳を劈くような銃声。

遠くの空から爆音を轟かせる何かが近づいていたのは分かっていた。

その爆音を轟かせる何か巨大なものが近くに降り立ったのも分かっていた。

アスカが、自分の父親の名前を叫んでいるのも聴こえていた。

それでも頭を上げることはしなかった。

自分のすぐ傍の世界で、何が繰り広げられているか、確認しようとするしなかった。

全てがどうでもよかった。

今更何が起ころうと。

あらゆるものに心を割くことを止めていたシンジがその銃声に顔を上げたのは、単にびつくりしただけの反射的な動きに過ぎなかった。

不意に視界に入ったもの。
青い空。

その下の、赤い大地。

赤い大地に降り立ったVTOL機。

赤い大地の上に立つ、父親。

そして。

赤い地面に伏した、赤のプラグスーツを着た少女。

アスカが、地面に倒れている。

左肩から、スーツよりも更に赤い血を流しながら。

シンジは目を真ん丸に見開きながら、ゆっくりと視線を銃声がした方向へと移動させた。

そこに立つのは黒のプラグスーツを着た少女。

自分の問いに「アヤナミレイ」と名乗った空色髪の少女が、拳銃を構えて立っていた。彼女の細い腕には不釣り合いな厳つい拳銃。その銃口から立ち昇る煙。

銃口が指す方向には、地面に血の池を広げるアスカの姿。

「わあああああ!!」

シンジは訳も分からぬまま叫び、そして前のめりになりながら駆け出していた。目指す先には、シンジの叫び声に少し驚いたような表情で振り返る、「アヤナミレイ」と名乗る女。

女の胸倉を両手を伸ばし、走ってきた勢いをそのまま女の細い体にぶつけた。もつれるようにして地面に倒れ込む。

「なんで…!! どうしてアスカを…!!」

地面に組み敷かれ、苦しそうに目を細める女。

「僕たちは…!! 僕たちは仲間じゃ…!!」

違う。

自分が組み敷いているこの女は、あの少女ではない。

それは分かっている。

でも。

ああ、でも。

もう訳が分からない。

もう何も考えられない。

頭が真っ白になっていたため、その接近に気付けなかった。

父親は興奮状態の息子の首筋に、スタンガンの電極を突き立てた。

首に焼け付くような痛み。

見上げると、父親が立っていた。

バイザーで覆われた目。それでも分かる。そのバイザーの向こうにある瞳は、こちらを一瞥すらしていない。

全身を襲う痺れ。

急速に視界が狭まる。

視線を右へ投げる。

地面に倒れたままのアスカ。

「ちくしょう……」

薄れゆく意識の中で、辛うじてその一言だけを絞り出して、シンジは前のめりに地面に倒れた。

ゲンドウはスタンガンをポケットにしまうと、VTOL機へと振り返った。

V T O L機から降り、周辺に散開していた数人の武装した兵士がゲンドウのもとに駆け寄ってくる。ゲンドウは兵士の一人と二言三言、言葉を交わす。

シンジによる拘束から解放され、咳き込みながら上半身を起こす空色髪の少女。自分の身体に覆いかぶさるように地面に倒れている少年の顔を見つめる。表情が怒りと憎しみで固まったまま意識を失っている少年の顔を。

視線を上げると、兵士に指示を終えたゲンドウがそのままV T O L機への搭乗口へと歩き始めていた。

遠ざかっていくゲンドウの背中をぼんやりと眺めていると、その背中を遮るように兵士の一人が立ち塞がった。

「立てるか？」

問われ、頷いて答える。

自分に覆いかぶさったままのシンジの身体をそつと横にずらし、立ち上がる。

視界が高くなり、再びゲンドウの方へと視線をやったが、彼の姿はすでにV T O L機の中へと消えていた。

足もとのシンジの顔を見つめる。

少しずつ意識が回復し始めているのか、時折呻き声を上げながら薄く瞼が開き始めて

いた。

シンジに押し倒された拍子に落としていた拳銃を拾い上げ、ボディバックの中に仕舞う。

そこで気付く。

ずっと手に持っていたはずのアレがない。

少女の顔に、珍しく焦りの表情が浮かんだ。

キヨロキヨロと周囲を見渡した。

そこら中の地べたに視線を這わす。

幸いにも、それはすぐに見つかった。

少女は小走りで地面に転がるそれのもとに行く。

黒い筐体。

携帯音楽プレイヤーを拾い上げる。

プレイヤーに付いた泥を、手で丁寧に払い落とす。

プレイヤーを両手で包み、胸に抱きしめる。

背後で音がした。

振り返ると、回復したシンジが両手を地面に付いて起き上がろうとしていた。

電撃が駆け抜けた四肢が未だに戦慄している。視界の端々で火花が散っている。睨んでいた地面に人の影の形が現れた。

顔を上げる。

シンジの顔を覗き込むようにして、空色髪の少女が立っていた。

その右手を、シンジの方へと差し伸べて。

未だに朦朧としているシンジは、少女の顔と手を交互にぼんやりと見つめた。

薄闇に囲まれていた視界が、少しずつ広がっていく。

見覚えのあるプレイヤーを胸に抱き締め、手を差し伸べてくる少女。

その肩越し。

視界の隅に、兵士の一人に肩に受けた銃創の治療を受けているアスカの姿。

「アスカ！」

起き上がるのを手伝おうと手を差し伸べていたら、少年は突然叫んで自力で起き上がると駆け出した。

駆け出した拍子に少年の肩が少女の胸に当たり、少女は短い悲鳴を上げながらその場に尻餅をつく。その拍子に少女の手からプレイヤーが零れ落ち、地面に転がり落ちてしまふ。

少女は血相を変えてプレイヤーまで這い寄ると、それを拾い上げ、それがまるでこの世界の何ものよりも貴重な宝物であるかのように、ぎゅっと抱きしめた。

抱きしめながら、視線を少年が走り去っていった方へと向ける。

「アスカは！ アスカは助かるんですか！」

シンジに詰め寄られた兵士は、アスカの腕に輸液用の針を刺しながら答える。

「止血は出来た。おそらく大丈夫だろう」

近くに立つ兵士2人が話している。

「ヴィレに対し、捕虜は不要となっていたはずだが」

「あの女は別だそうだ。このまま本部へ連行する。おい」

兵士の一人が、地面にぺたんと座り込んだまま、胸にプレイヤーを抱き締めている少女に声を掛ける。

「貴様もさっさと乗れ。出発する」



「以上が13号機から回収したデータを解析して得られた本作戦の顛末だが」

無駄にだだっ広い上に必要最低限の照明しかない薄暗い部屋で、冬月コウゾウは年々

視力が落ちる目を細めながら手に持ったタブレット端末の画面を睨んでいた。表示されていた文書を読み上げ終えると、視線を部屋の端に立つ少年へ向ける。

「これが正しければ本作戦が我々が望む形と少々異なる形で結末をみたのは、葛城大佐の妨害行為以上にゼーレの少年の叛意によるもの大きい。つまりゼーレの少年が我々を裏切ったということになるが。：何か異論や他に付け加えるべき報告はあるかね？」

学生服に着替えた姿でこの部屋に入ったシンジは、冬月が長つたらしい話しを息をしていることすら怪しくなるほどに微動だにせず聞いていた。

しかし冬月が言ったその言葉に、シンジの拳がぎゅつと握られる。

裏切った？

誰が？誰を？

そもそも僕たちを裏切り続けているのはお前たちじゃないか。

腹の底で滾ったそんな言葉は口には出さない。また冬月の質問に対しても返事せず、シンジの口から出たのは。

「アスカは？」

腹の中の滾りを抑え込み、努めて平坦な声で話す。

「アスカは無事なんですか？」

冬月は少年の態度に諦めたように目を閉じる。

「彼女は順調に回復に向かつてるよ」

「会わせて下さい」

「彼女は我々の敵。我々に最も損害を与えてきたヴィレのパイロットだ。君と会わせる訳にはいかんよ」

我々？

その我々には僕も含まれているのか？

だったら笑えないジョークだ。

視力の落ちた冬月の目から見ても、少年の眉間に深々と溝が刻まれたのが見て取れた。冬月は軽く手を上げる。

「もういい。次の命令が出るまで待機を命ずる」

部屋から出ると、黒いスーツを身に纏った少女が立っていた。

只でさえ寄っていたシンジの眉根の皺が、さらに増え、深くなる。

少女は、涼やかな顔でシンジの顔を見つめ返してくる。

いつもと変わらない少女の表情。まるで思考というものを持たない、ロボットのよう
な立ち振る舞い。

「なぜ……」

気が付けば低い声で。冬月の前では抑えることができていた腹の底の滾りを、少しばかり漏らした声で問うていた。

「なぜ、アスカを…撃ったの？」

少女は一度だけ目を瞬かせる。

やや間を置いて。

「碇司令に危害を加えようとしていたから…」

予想以上でも、以下でもない返答。

シンジは歯ぎしりをした。

「じゃあ、僕が父さんを襲おうとしたら、君はやっぱ僕を撃つの？」

少女は2度ほど目を瞬かせる。

瞳を泳がせた後、視線を床に落とした。

「…分からない」

ロボットどころではない。

自分では何も決められない。判断できない。

ロボットの方がまだ賢く、融通が利く。

これではロボット以下だ。

シンジはこれまで何とかねじ伏せてきた衝動をもはや抑えることはできなかつた。

ツカツカと、少女の近くまで歩み寄る。

急に少年の顔が鼻先まで接近し、少女は驚いて後ずさったが、その背中はずぐに廊下の壁へ突き当たった。

少年は少女の赤い瞳を睨んだままその手を、廊下の壁で逃げ道を塞がれた少女の体へと伸ばす。

伸ばされた少年の手に、少女は怯えるように肩を竦ませる。

少年はそんな少女の様子に、しかし少しも躊躇わずに少女の胸に手を伸ばす。

少年の手は少女がずっと大事そうに胸に抱き締めていた携帯音楽プレイヤーをむんずと掴み、奪い取った。

そしてそれを壁に向けて乱暴に投げ付けてやった。

カタン、カタン、と硬い音を立てて床に転がるプレイヤー。

それを目で追っていた少女は、身を振って少年から離れると、床に膝を付いてプレイヤーを拾い上げる。大切な大切な宝物を守るように、筐体の所々が欠けてしまったプレイヤーを抱き締める。

少女の背後で、シンジはすでに少女に背中を向けて廊下の奥へと歩き出していた。



浮上し始める意識。

意識がはつきりするに連れ、まずは自分はベッドらしきものの上に寝かされていることに気付いた。

背中とお尻でベッドの感触を確かめているうちに、自分が素っ裸にされていることに気付いた。

視界が明るくなっていく内に、天井には強烈な光を放つ照明器具がぶら下がっていることに気付いた。

どこかで見たような光景。

そう。例えば、グンダーの娯楽室で鑑賞した医療ドラマに出てくる手術室のような……。

「撮影開始」

「よし。ではこれより検体甲の調査を開始する。検体甲は14年前、使徒の浸食を受けながらもなお人としての姿を留め、人間としての自我を保ったままにいる極めて希少な例である。すでに画像検査、血液検査は終了。これから行う調査により、検体甲に秘められた特異性についての更なる解明に期待したい」

「KT39. 2、パルス104。いずれも人の平均値を上回っています」

「左肩の銃創はすでに塞がり始めている。驚異的な回復スピードだ」

「眼帯はどうしますか？」

「念のためそのままです。では解剖を始めよう。まずは開腹から。メスを……」

「じよ・う・だ・ん・じゃないわよ!!」

アスカはそう叫びながら右拳を解剖台の脇に立つ、手術着姿の男の顔面に突き出そうとした。

しかし突き出そうとしたその右拳の手首には黒いベルト。ベルトは解剖台にしっかりと固定されている。そのベルトは解剖中に被検体が万が一覚醒し、加減なしに暴れてしまったとしても、その体を解剖台に縛り付ける極めて強力な拘束帯。たとえ被検体がクマだろうが、ゴリラだろうが、解剖台から逃すことはない強固な鎖。

の、はずだった。

「ぐおっ!!」

手術着の男のくぐもった声。

拘束帯をまるで紙切れのように引き千切ったアスカの右拳は、見事に手術着の顔面に炸裂する。手術着の男はまともに悲鳴を上げることすらできず、奇妙な呻き声を残して

その体は部屋の隅っこまで吹き飛んでしまった。

部屋の隅っこまで吹き飛ばされ、顔は間近で砲弾でも浴びたかのように陥没し、首が振り切り切れている手術着の男。それを茫然と見つめる、解剖台を囲んでいたその他の手術着の面々。

再び解剖台に目を向けた時には、被検体は左手の拘束帯も引き千切っていた。

「ば、馬鹿な！ゾウでも丸3日は起きない量の麻酔を投与したはずぞー！」

手術着の一人が叫ぶ。

「人間と使徒のハイブリットを舐めないでよね！」

アスカは右足の拘束帯を千切り様に、振り上げた右足のつま先を手術着の一人の顎に向けて突き上げてやった。顎を砕かれた体は勢いそのままに宙へと浮き上がり、頭は天井を突き破る。

両手・両足・体幹全ての拘束帯を引き千切り、自由になったアスカは、解剖台からジャンプ。

アスカのすらりとした足が着地した場所。

人の背丈はありそうな程の、大きなガスボンベ。ボンベのラベルには「医療用酸素」の文字。

ボンベの口に繋がれたチューブを引き千切り、バルブを全開まで回す。

シューッと圧縮された空気が勢いよく吐き出され始める。

抜群のバランス感覚でボンベの上に立つアスカは、解剖台の周囲で固まってしまっている手術着の面々を見た。

歯を見せて笑う。

その手には、解剖台側の台に置いてあった医療用ハンマー。

解剖室の中に居る、アスカ以外の全員の体に戦慄が走った。

アスカは、ガスを吐き出し続けるボンベの口に向かって、握ったハンマーの先端を力いっぱい振り下ろす。

ハンマーの先端がボンベの口に接触し、小さな火花が瞬いた。

第弐話

館内をけたたましい警報が鳴り響く。耳障りな警報の間を縫って、『医療区画で火災発生』の音声アナウンス。

廊下を歩いていたらシンジの頭に真っ先に浮かんだのは、V T O L機から降ろされ、そのままストレッチャーで運ばれていった赤毛の少女の顔。

「アスカ……！」

シンジは走り出した。

廊下を走っていくに連れ、前方からもくもくと黒い煙が天井を這い始める。警報に混じって、人々の怒号。

医療区画に入ると、そこは既に火の海と化していた。暴れ周りその支配域を広げていつている炎に対し、防火服で身を固めた者たちが懸命に消火剤を撒いている。そして彼らに混じって、武装した兵士が数人。

火災の現場に、なぜ兵士が居るのだろう。

シンジが疑問に思つて見ていると、兵士の一人が突然叫んだ。

「奴だ！撃て！撃て！」

その兵士の号令と共に、手に銃火器を持った者たちは一斉に号令した兵士が指さす方向へと発砲を開始した。

凄まじい銃声の乱舞に、シンジは咄嗟に両耳を塞ぎ、その場に蹲る。

連中は一体何に向けて発砲しているのか。

シンジは熱と煙に煽られる目を薄く開けながら、兵士たちの持つ銃火器の銃口が睨む方向を凝視した。

黒い煙に混じつて、一瞬大きな黒い影のようはものが横切つたような気がした。

炎と煙が充満する方に自動小銃の銃口を向け、我武者羅に引き金を絞つていた。自分や仲間が放つ銃弾の一発でも奴に当たつてくれたら。そう願いながら、我武者羅に銃を撃っていた。

気が付けば、足もとにそれは居た。

まるで孔雀の飾り羽のように大きく広がった赤い髪が視界を塞ぐ。

続けて視界を塞いだのは大量に飛び散った赤い液体。

それが自分の碎けた顎から嘔き出した己の血であると気付く前に、その兵士は絶命していた。

煙が立ち込める廊下を歩いていたら、いきなり前方から大量の銃弾が飛んできた。

アスカは咄嗟にその場にしゃがみ込み、身を低くして銃弾の雨をやり過ぐすと、今度は膝を目一杯伸ばして、天井すれすれまで一気に跳躍。

着地した場所は、首尾よく兵士の足もと。

持っていた医療用ハンマーを兵士の顎に向けて突き上げる。兵士の顔の半分が吹き飛んだ。

息つく暇もなく、近くに立っていた別の兵士に向かって跳躍。

着地様に、兵士が被っていたヘルメットに向かって、ハンマーの先端を振り下ろす。

眼前で繰り広げられている現実離れた虐殺劇を、シンジは呆気にとられて見ていた。

煙の中から飛び出してきたアスカは、瞬く間に2人の兵士を屠ると、悪魔にでも遭遇したかのように恐慌状態に陥っている残りの兵士たちの頭部を、手に握るハンマーで容赦なく次々と碎いていった。

武装した者たちをあらかた殺害し終えたアスカは、次に消化班にも襲い掛かる。消化班は健気にも持っていたホースから吐き出し続けられる消火剤で抵抗を試みたが、真っ白な消火剤は瞬く間に真っ赤な血で彩られるのだった。

アスカの動きは止まらない。消化班の最後の一人の頭部を砕き終わると、この場において自分以外で息をしている唯一の人物に向かって飛び掛かる。

「わああああ!!」

ハンマーを振り上げながら飛び掛かってくるアスカ。

シンジは悲鳴を上げながら咄嗟に両腕で頭部を守った。

体に強い衝撃。

背中から床に倒れ込む。

やがて来るだろう、頭部への破壊的な衝撃に備えていたら。

「あれ? シンジ?」

衝撃の代わりに振ってきたのは、呆けたアスカの声だった。

シンジはゆっくりと閉じていた腕の隙間を開け、自分に馬乗りになっているアスカの顔を覗き見る。

「やあ、アスカ…。元氣そうで何より…」

冗談めかして言うシンジに、アスカは少々バツが悪そうに眉を顰めつつ、振りかざし

ていたハンマーを下ろした。顎の辺りに付着した誰の者とも知れない真つ赤な血を、手の甲で拭う。

立ち上がったアスカは屍餅を付いたままのシンジを見下ろしながら言う。

「アタシ、行くわ」

シンジはアスカを見上げながら言った。

「僕も一緒に行つていいかな…?」

「はあ?」

明らかに不満そうなアスカの声にシンジは苦笑しつつ、床に手を付き、ゆっくりと腰を上げる。

「ここは僕が…、居るべき場所じゃないんだ…」

そう呟くシンジの横顔を、アスカは目を細めて見つめる。

「ふん。好きにすれば」

そう言い残して、アスカはさっさと歩き出そうとした。

「あ、ちよつと待ってよ、アスカ」

「は?」

呼び止められ、アスカは不愉快そうに振り返る。

振り返った先のシンジを見て、アスカは瞼を何度もしばたたかせた。

「ちよ、ちよちよ、あんた！ななな何してんのよ！」

誰の者とも知れない血で汚れたアスカの顔が、さらに真っ赤に染まる。

シンジが、着ていた学校指定のワイシャツのボタンを外し始めているのだ。

——いくらガキだからって、何こんなどころで盛り付いてんのよ！

アスカがあらぬ妄想を抱いている間にシャツを脱ぎ終えたシンジは、それをそのままアスカへと差し出す。

「へ？」

差し出されたカッターシャツを、呆けた表情で見つめる。

「とりあえず……、これだけでも着といてくんないかな……？」

カッターシャツを見つめていたアスカ。

その視線を、おずおずと自分の体に向ける。

素っ裸の体。

「きゃあああああああ!!」

頭から湯気を立ち昇らせながら歩く。

袖を通したワイシャツのボタンを留める。シンジのものとしてはやや大きめのその

シャツは、アスカのお尻を辛うじて隠してくれた。

アスカの数歩後ろを、ワイシャツの下に着ていた黒のTシャツ姿で歩くシンジ。その右頬は、真つ赤に腫れ上がっている。シンジの頭には、小さなハンマーで兵士たちの頭部を分厚いヘルメットごと次々と砕いていったアスカの姿が浮かんでいる。

「よく僕は死なずに済んだな…」

鉄拳処刑ではなく、鉄拳制裁で済んだ自分の身にホツとしていた。

暫く歩いていて、アスカの足が止まる。

軽く舌打ちをした。

「あたしが居た頃とはずいぶんと変わっちゃてるわね」

シンジは恐る恐る声を掛ける。

「もしかして迷った?」

「うっさいわね」

「どこに行つたらいい?」

「外に出られるんだつたらどこでも」

「そう」

シンジは渚カヲルと過ごした日々の事を思い出していた。

彼が自分に14年前の真実を告げるために、外界が見える階段へと案内してくれたあの場所。

確か、あの場所に行くまでは警備らしい警備は何も無かったような気がする。

「こつちだよ」

先導し始めたシンジの後を、アスカは仕方なしに付いていく。

暫く歩いていて、シンジの足が止まる。

「え、ええっと」

アスカはシンジの背中に不機嫌そうに声を掛ける。

「もしかしなくても迷ってるわよね？」

「ご、……ごめん……」

アスカがシンジの背中を蹴り飛ばしてやろうとした、その時だった。

延々と続く薄暗い廊下の奥に一つの影。

影が徐々に近づいてくる。

「なに……？ あれ……」

シンジも近寄ってくる影に気付いた。

「ちっ……」

アスカは軽く舌打ちをする。

「なんとまあ、良い趣味を持つてらっしやるネルフ様でございますこと……」

皮肉めいたセリフを吐きながら、右手に持っていたハンマーの柄を改めてぎゅつと握り締めた。

近づいてくる影。

4つ足で忍び寄ってくる影。

一見して、それは狼のような生き物。

無駄な肉が削ぎ落された細い猟犬のようなシルエット。

鋭角の頭部には耳まで避けた大きな口。口から見え隠れする鋭利な牙。中央に1つしかない眼窩には、真っ赤な大きな瞳が収められている。

ホラー映画から飛び出してきたような、見るからに危険な怪物の接近に、シンジは1歩後退りする。

シンジが怯んだ瞬間を見計らったかのように、その怪物は細い体躯を躍動させた。

シンジは叫んだ。

「アスカ！」

大きな口を目一杯に広げて飛び掛かってきた怪物。突き出された前足の長い爪と、口

に並ぶ鋭い牙が狙うのは、シンジの隣に居たアスカの喉笛。

アスカは咄嗟にハンマーを前に突き出す。

怪物の大きく開かれた口が、ハンマーの棒に食らいつく。怪物の爪が、アスカの前髪を掠めた。

寸でのところで怪物に喉元を食い破られることを防いだアスカだが、自分の体よりも一回り大きい怪物の突進の力までは受け止め切ることができず、そのまま床に押し倒された。

ハンマーに食らい付いたままの怪物は、その口を強引に前に突き出す。アスカの鼻先まで急接近する化け物の鼻先。剥き出しの牙の隙間から滴り落ちる大量の唾液がアスカの顔を汚し、3つある鼻の穴から吐き出される生温い息が吹きかかり、ただただ不快だった。

シンジは壁に備え付けられた、錆塗れの消化器を両手で抱え上げる。

大きく振りかぶり、寺の鐘付きの要領で、消化器の底を化け物の胴体に向けて打ちつけた。

アスカの首を狙ってひたすら前へ前へと向かっていた怪物の体は、突如横からやってきた重い衝撃に、鈍い音と共に吹っ飛び、ゴロゴロと床へと転がる。

シンジは間髪入れずに追い打ちを掛けた。

床に転がりながらも早くも体制を立て直そうとしている怪物の、今度は頭部に向けて消化器の底を落とした。

グシヤリ。

神経に悪そうな音と共に、化け物の頭部は完全に砕け散った。肩で息をしながら、動かなくなった怪物を見下ろす。

「な、何なんだよ、これ……」

その足はまるで人間の手のように長い指が5本ずつあり、その先端は猛禽類が持つような鋭い爪が伸びている。全身を毛で覆われていると思つたが、胸から下はまるで魚の鱗のような肌をしていて、おまけにお尻にはまるで爬虫類の、それこそ蛇を思わせるような尻尾が生えていた。

そして化け物の腹。そこには大きな球体が埋め込まれている。

シンジは、その球体を今まで何度も目にしてきたような気がした。

気がしたのだが、今はそんなことを思い出すために脳味噌を使つてる場合ではないことを思い出し、すぐに背後を振り返った。

「アスカ！」

床に仰向けに倒れたままのアスカのもとまで駆け寄った。アスカの顔を覗き込む。

「うへー。ぼっちー」

「アスカは化け物の唾液で汚れた顔を、シャツの袖で一生懸命拭いているところだった。」

そんな様子のアスカを見て、シンジはほつと胸を撫でおろす。

「良かった。怪我はない？」

「コアは？」

「へ？」

アスカの短い問いを理解できず、シンジは呆けた表情をする。

「コアは砕いたの？」

「コアって？」

オウム返しするだけのシンジに。

「あーもう！」

アスカはうんざりしたように唸りながら、右手のハンマーを振り上げた。

左手でシンジのシャツの胸倉を掴む。

「え!？」

訳も分からず間抜けな声を上げる事しかできないシンジ。

そんなシンジに構わず、アスカはシャツを引っ張って、シンジを床へと組み伏せた。

アスカに強引にねじ伏せられるシンジの体がぐるりと半回転し、その視線は天井へと

向かう。

そこを、何かが横切った。

それは怪物の前足。まるで人間のような指に、猛禽類を思わせる爪が伸びた手。それが、今の今までシンジの頭部があつた空間を引き裂いている。

「でやああああー！」

アスカは、頭部を失いながらもなお動き、シンジの背中に向かって襲い掛かつてきた怪物の腹に向かつて、ハンマーを振り上げた。

怪物の腹にある球体。渾身の一撃を食らつたその球体は、まるでガラスのような音を立てて碎け散る。

床に倒れた怪物の体。今度こそ絶命したと見え、ぴくりとも動かない。それどころか、怪物の体は見る見るうちに崩壊を始め、やがて弾け、真っ赤な液体を床に広げてしまった。

怪物がすっかり液体化したのを見て、アスカはふうと溜息を吐く。

「エヴァの小型版つてところか…。ATフィールドまでは発生できないようね…」

「あ、あの…」

不意に声を掛かれ、声が出た方へと顔を向ける。

声の発生源は、すぐ側にあつた。

視界一杯に、シンジの顔。

「あ、ありがとう……。助かったよ……」

仰向けに倒れているシンジ。

そのシンジを床に組み敷いていたアスカ。

ちょうどアスカがシンジの体に密着しながら乗る形となり、顔と顔同士がすぐ側にあ
る。

アスカに胸を押さえられているシンジは、顔を苦しそうに歪めながらも、自分の命を
間一髪で助けてくれたアスカにとりあえず感謝の言葉を送った。

「わ、わっ……!」

素っ頓狂な悲鳴を上げながら、まるで池から飛び上がった鯉のように、シンジの体か
ら離れるアスカ。そのまま、シンジに背を向けてしまった。

「大丈夫? どこか怪我した?」

アスカの背中に、シンジは心配そうに声を掛けた。

「だ、大丈夫よ!」

背中ですう答えつつ、アスカは真っ赤になってしまった顔を一刻も早く冷まそうと両
手をうちわ代わりにして仰ぎ始める。

肌に残っていた化け物の汚らわしい鼻息の感触は、シンジの吐息の感触にすっかり上

書きさされていた。

「ねえ？アスカ？」

「何よ。大丈夫って言ってんでしょ」

「いや、ねえ、アスカ」

「うっさいうっさいうっさい」

「アスカさんってば」

「何よ！」

しつこいシンジに、アスカは怒鳴り散らしながら振り返った。

シンジはすでにアスカの背中を見ていなかった。

アスカの背中への代わりに見つめていたもの。

うす暗い廊下の奥。

その奥で、蠢く影。

怪物が、群れをなしてシンジたちが居る方向へと迫っていた。

「小型版かつ量産型ってわけ、んもう!!」

アスカは呻くように悪態を吐きながら、シンジの手を掴んで強引に引き起こすと、怪物たちが来る方向とは逆の方へと走り始めた。

延々と続くかに思われた廊下は、遂に行き止まりになった。

廊下が尽きた場所にはエレベーターの扉。

アスカはすぐに壁の昇降ボタンを押す。押すが…。

「くそつ。電源が落ちてる…！」

ボタンは何度押しても反応しない。

「ア、アスカ！」

シンジの悲鳴のような呼び声。振り返ると、怪物の群れがすぐそこまで迫っている。

「でっやあああああ!!」

アスカは喚き散らしながら、ハンマーの先端をエレベーターの扉へと打ち付ける。尖った先端は扉と扉の僅かな隙間の中に嵌り込んだ。そのままハンマーの先端をテコにして扉の隙間を広げると、今度はその隙間に自身の両手の指をねじ込んだ。

「こなくそおお!!」

強引にエレベーターの扉をこじ開けていく。

「アスカ…、まるでハルクみたいだ…」

「あんたも手伝いなさいよおお！」

アスカに怒鳴りつけられ、シンジも慌てて開き掛けた扉に腕を差し込む。

「ふんぬー！」

アスカの掛け声に合わせて腕に力をこめたら、エレベーターの扉は一気に開いた。

アスカはすぐに扉の向こうに現れた垂直に伸びるエレベーターシャフトの下を覗き込む。

「ちっー！」

シャフトの底が見えない。エレベーターのカゴも見えない。

今度は上を見上げる。天井も見えなかった。カゴを昇降させるガイドレールが、天と地に向かつて延々と続くだけ。

「アスカ！来るよー！」

獲物を徐々に追いつめる猟犬のようにゆっくりとした足取りで2人を追い掛けていた怪物たちは、2人が立往生していると見るやその醜くもどこか均整の取れた体軀を躍動させ、瞬時に己が発揮できる最高速に達して獲物との距離を詰めようとしてきた。

「シンジー！」

「え？」

アスカは相手の返事を聞くよりも早く、右腕をシンジの両膝の裏へと回す。アスカの右腕に足もとを掬われてしまいバランスを崩しそうになったシンジだが、シンジの背中に回されたアスカの左腕が支えとなり、尻餅を付いてしまうことは免れた。

シンジの体重を両腕で受け止めたアスカは、そのままシンジの体をうんせと抱え上げた。

俗に言うお姫様抱っこの状態。

「行くわよ！ シンジ！」

「え？ …ええええ!？」

今度も相手の返事を待たずに、アスカはその場から跳躍。

シンジを抱いたアスカの体は、底が見えないエレベーターシャフトへと躍り出た。



「だ、大丈夫…?？」

見上げたその先にあるアスカの顔が、硬直してしまっている。

一体何秒間降下したのか分からない。

一体何どれほどの距離を落下したのかも分からない。

いずれにしろ、その高さは人が落ちて無事で済む高さではなかった。

アスカの顔が見るからに青ざめ、額からは大量の脂汗を滴らせている。

「も・ち・の・ろ・ん・よ」

たどたどしい声で返事するアスカ。

シンジはゆつくりとアスカの腕から降り、エレベーターシャフトの底に立った。

一方で、アスカはエレベーターシャフトの底に着地した時の格好のまま動こうとしない。

シンジは心配そうに尋ねた。

「動けそう…?」

「い・ま・は・ちよ・つ・と・む・り・そ・う」

第参話

パラシュートなしのスカイダイビングならぬシャフトダイビングを決行した結果、着地した時に足が痺れてしまったらしいアスカを、今度はシンジが背中でおんぶする。エレベーターの最下層の扉をこじ開け、その扉の向こうに現れた廊下を歩いた。

この廊下は突き当りにある部屋のためだけに造られたものらしい。廊下は一度も分岐することなくやがて途切れ、2人をドーム状の広い空間へと導いた。

この空間に足を踏み入れて、シンジの頭の中に真っ先に浮かんだものは、友人たちと行った「海洋研究所」という名の巨大な水族館だった。

空間の大半を占めるのは、巨大な水槽。

てっぺんは見上げなければならぬほどに高く、あまりの大きさにその全貌は視界の中に収まりきらない程だ。

その空間には僅かな光源しかなく、巨大な水槽の中身はよく見えないが、水槽の中は

水とは違う、何かしらの液体で満たされていることは分かった。そしてその液体の中を、複数の物体が浮遊していることも。

アスカを背負ったシンジはゆっくりと巨大な水槽のガラス面へと近づいた。

ただでさえ薄暗い空間。おまけに水槽の中を満たしている液体は少し濁っており、より一層見通しを悪くさせている。

ガラス面へ顔を近づけ、中を覗き見る。シンジに背負われたアスカも、シンジの背中から身を乗り出してガラス面に額をくっ付け、中を凝視した。

ドン！

「きゃっ!?!」

不覚にも乙女のような悲鳴を上げてしまったアスカは、跳ねるように顔をガラス面から離し、背中を大きく仰げ反らせる。そのままシンジの背中から滑り落ち、床に尻餅を付いてしまった。

尻餅を付いたまま、濁った液体の向こうから突然現れたそれを凝視する。

尻餅を付いたまま動けなくなってしまっているアスカ同様、シンジもまた硬直してしまっていた。

濁った液体の向こうから現れたそれ。

濁った液体の中でふわふわと浮きながら、両手と額をガラス面に引っ付け、真つ赤な瞳でこちらを覗き見ているそれ。

「…あやなみ…れい…」

まるでシンジのその眩きが合図にでもなったかのように、巨大な水槽のそこかしこでふわふわと浮いていた影が次々とシンジとアスカが居るガラス面へと集まってきた。最初の一体目と同じように、それらの影もガラス面に両手と額をくっ付け、水槽のすぐ側に立つシンジを凝視する。

「…ネルフ様の悪趣味もここに極まれり…ね…」

アスカがそう眩いた瞬間、ガラスの向こう側からシンジを見つめていた赤い瞳が、一斉にアスカの方へと向いた。

「ひっ!」

確認できるだけでも20はある同じ顔、そして40個の赤い瞳に一齐に見つめられては、兵士相手に無双したさしものアスカも生理的な嫌悪感を抱かずにはおれず、短い悲鳴を上げてしまった。

白い髪。白い肌。赤い瞳。

濁った液体に浮かぶそれらは、全てが寸分たがわず同じ顔、同じ体をしていた。

「つまりここは綾波タイプのプラントってことか。…いや、プランテーションと言うべきかしら」

アスカの声がどこか遠い。

シンジは放心状態のまま一步後退る。

ことり、と足音がした。

その足音に反応するかのように、40個の瞳が一斉にシンジの方へと向かう。

「…あやなみれい…、…あやなみれい…」

その6文字を繰り返し眩きながら、更に水槽から遠ざかっていくシンジ。

この異様な光景にも少しずつ慣れてきたアスカは、痛むお尻を擦りながらまだ痺れが残る足でゆっくりと立ち上がった。

「ここいづらはあんたが知ってる綾波レイじゃない。ただの空っぽの器。まだ何ものでもない、ただの細胞の集合体よ」

アスカの声が届いていないのか、シンジは呆然とした顔で巨大な水槽と、その中に浮かぶ「それら」を見つめている。

そんな様子のシンジを見て鼻から溜息を漏らしたアスカは、シンジから視線を外すとツカツカと歩き始めた。アスカが立てる足音に反応し、水槽の中の群れが一斉にアスカの方へと向く。アスカは巨大な水槽の端っこを指していた。そのアスカに率いられるように、水槽の中の「それら」も群れを成して付いてくる。

水槽の端っこにはコンソール台が設置されていた。コンソールの真ん中にあるタッチパネル式の画面に触れる。暗かった画面に光が灯り、様々なボタンや数字、図形が画面上に浮かんだ。アスカは画面上に表示されたボタンを次々と押していく。

ふと視線を上げると、そこには無数の顔。

アスカのしていることに興味を示しているのか。いや、次々と変わっていく画面の様相にただ反応しているだけなのだろう。

分厚いガラスの向こうで、幾つもの赤い瞳がアスカの手もとを覗き込んでいる。

生理的な嫌悪感はいらいできたものの、作業中に人（の形をしたもの）からジロジロ見られるのは、あまり気分の良いものではない。

「ああ、鬱陶しいわね！」

アスカがドンとガラスを小突いたら、コンソールの前に集まっていた「それら」は驚いたようにガラス面から離れていった。しかし空いた空間はそれらの背後に詰め寄せていた別の「それら」によってすぐに埋められ、相変わらずジロジロとアスカを見つめ

てくる。

切りがない。

「もう、好きにすれば…」

アスカは諦めたように溜息を漏らすと、コンソールに視線を落とし、作業を続けた。

アスカがガラスを小突いた音でようやく我に返ったシンジは、巨大な水槽の端っことで何かをしているアスカに顔を向けた。

「何…、してるの…?」

アスカはシンジに背中を向けたまま作業を続ける。

「あたしたちはね、ずっとここいつらと戦争してきたの」

「え?」

まるで昨日の晩御飯の内容でも報告するような軽い口調で言うアスカ。シンジは聞き間違いかと、聞き返す。

アスカは変わらない口調で続ける。

「やっつけてもやっつけても後から後からワラワラ湧いてくるこいつらに、もう心底うんざりしてるのよ」

「アスカ…」

「これでこいつらの顔を、もう見なくて済むわ…」
アスカの手が止まる。

画面上に表示されているのは2つのボタン。

『Enter』『Cancel』

画面から視線を上げ、目の前のガラス面を見つめる。

相変わらずそこには同じ顔がいくつも並んでいて、こちらをじっと見つめてくる。ふと、14年前に学友たちと訪れた海洋研究所を思い出した。あまり面白い場所ではなかったし、随分と昔のことなので細かいことは忘れてしまったが、最後に回った養殖池で、鯉相手にエサをやったことは覚えている。

その時のエサ欲しさに口を開けて群がってきた間抜けな鯉の有様と、今日の前に群がってガラス面に貼り付いてくる「それら」がダブって見えて、アスカは思わず笑ってしまった。

「ごめんね…、バイバイ…」

そう呟いて、アスカは『Enter』のボタンを押した。

水槽の奥で変化があった。水槽内を満たしている液体とは明らかに別種の、青い液体が湧き出てきたのだ。

「それら」も水槽内に広がる異種の液体に気付いたようで、一斉に振り返る。

徐々に「それら」に向かつて近づいてくる青い液体。液体の一端が、「それら」の群れの一番端でぶかぶかと浮かんでいた一体の足に触れる。

分厚いガラス越しであっても、悲鳴が聴こえてきた。

液体に触れられた一体は途端に苦しみだし、四肢をぶんぶんと振って暴れ出す。背筋を仰げ反らせ、喉を仰げ反らせ、両手が喉元を引つ掻く。暴れまわっていた四肢は突然ピンと硬直し、やがて弛緩したようにだらんとぶら下がった。動かなくなり、液体の中を漂流する「それ」は、つま先からポロポロと崩れ始め、やがて砂のように液体の中へと消えていった。

「それ」が悶え苦しみ、動かなくなり、やがて溶けて無くなつていく様の一部始終を見ていた「それら」。

水槽内はたちまちパニックになった。

今も広がり続けている青い液体から逃げ惑う「それら」。

しかし四方を分厚い強化ガラスに囲まれた場所に逃げ場などなく、「それら」は次々と青い液体に巻かれていく。

何体かはガラスにへばり付き、内部から拳でバンバンと叩き、何とかこの水槽の中から。「それら」にとっては唯一の世界であった水槽の中から飛び出そうとしているが、非

力な「それら」の膂力ではガラスはびくともしない。

一体は水槽の側に立つアスカの目の前に行き、まるでアスカに助けを求めるかのようにガラスを叩きながら、その無垢で空虚な瞳をアスカへと向けてくるが、アスカは何の感情も宿さない瞳で「それ」を見つめ返すだけだった。

「アスカ…。アスカ…。」

いつの間にかシンジはアスカの隣に立っていた。

「何したんだ！」

まるで咎めるかのようなシンジの口調に、アスカは冷めた眼差しでジロリとシンジを見た。

「言ったでしょ。こいつらはあんたが知ってる綾波レイじゃない。人の姿をしているだけの、ただの入れ物よ」

「でも…。でも…。」

シンジもその理屈は分かっていた。しかし、目の前で繰り広げられている惨劇は、理屈というものを遙かに越えている。

今も、アスカに助けを求めてガラスを懸命に叩いていた「それ」が、力を振り絞って暴れまくった末に体を硬直させ、そして弛緩させ、全身を崩壊させ始めている。

シンジは巨大な水槽を見上げた。

すでに「それら」の殆どは液体の中で藻屑となっていた。

まだ数体残っている「それら」は、水槽の中を必死に泳ぎ回って、青い液体から逃げ惑っているが、青い液体はすでに水槽の大部分に広がってしまっている。

「くっ……！」

シンジはアスカに背を向ける。

「どこに行くのよー！」

アスカの制止も聞かずに走り出した。

巨大な水槽のコンソールがある位置とはちょうど反対側に、水槽の上部へと昇降できる梯子があった。

シンジは10mはあろうかというその梯子を一気に昇ると、水槽の天井へと駆け上がる。水槽の天井も分厚いガラスで覆われているが、何か所かに鉄製のハッチが設置されており、水槽の中に入りできるようにになっていた。

すでに水槽の中で動いている「それ」は一体だけ。

水槽の右上の隅に追いやられた「それ」の周囲も、すでに青い液体が取り囲んでいた。「それ」は迫る青い液体に対し、ただ身を縮こませることしかできない。

ハッチを開ける。

ハッチのすぐ下の水面に、見慣れた空色の髪がたゆたっている。

シンジは迷わず右腕を液体の中に突っ込んだ。

すでに青い液体が浸食を始めているのか、シンジの腕に激痛が走ったが、シンジは構わず上半身ごと水槽の中へと突っ込む。

突然、頭上から差し伸べられた手。

「それ」は驚いて天井を見上げた。

少年が居る。

少年が何か喚きながら、こちらに手を伸ばしている。

「それ」は差し伸べた手をぼんやりと見つめたまま。

シンジは液体の中で怒鳴った。

「手を！」

「それ」は差し伸べた手をぼんやりと見つめたまま。

「来い！」

シンジの必死な眼差しを、ぼんやりと見つめ返す「それ」。

しかし「それ」の手が少しずつ、徐々に徐々にシンジの方へと伸ばされ始める。

こちらに向かつて躊躇いがちに伸ばされる「それ」の手。

シンジはその機を見逃さず、強引に「それ」の手を掴んだ。

左手をハツチの淵に掛け、両足を踏ん張る。

全身に力を込め、「それ」を掴んだ右手を一気に引き上げた。

シンジの手に引つ張られ、「それ」の体が水飛沫を上げながら水槽の外へと飛び出す。

引き上げた拍子にシンジの体はバランスを崩し、「それ」と絡み合うようにして水槽の

天井へと転がっていった。

初めての外界。

初めての重力。

初めての空気。

「それ」の肺はその中を満たしていた液体を一気に吐き出すと、空っぽになったところへ今度は急速に外気を吸い込んでいく。肺の隅々まで空気を行き渡らせた「それ」は、ぐったりとして水槽の天井へと這い蹲った。

皮膚に纏わりつく痛みを耐えながら、ゆっくりと身体を起こす。

隣に倒れている「それ」を見た。

濡れた空色の髪。濡れた白い肌。

「あやな…」

顔を隠してしまっている髪を梳くため、手を伸ばそうした時。

自分たちを覆う、一つの陰に気付いた。

「それ」の頭部に向かって、勢いよくハンマーを振り下ろそうとしたが、シンジが「それ」を庇うように覆い被さったため、寸での所で振り下ろした腕を止めた。

「何の…つもりよ…」

殺気に満ちたアスカの声を、背中越しに聴く。シンジは「それ」に覆い被さったまま、呻くように言った。

「分かってる…。僕がバカなことしてることとは…」

「バカじゃないわ…。大バカよ…。今すぐにそこをどいて…」

「嫌だ…」

アスカの額に青筋が浮かぶ。

「ガキイ！」

シンジの背中に踵を落とした。

「なに？ お持ち帰りして、ダッチワイフにでもしようつての？ あんたも親父に負けず劣らずの趣味してんのね」

「違う……！ そんなんじゃない……！」

「だつたらどうして！」

シンジは背中の中の痛み表情を歪ませながら振り返った。

「副司令が言つてたんだ！」

「はあ？ 副司令？」

咄嗟に叫んだシンジの”副司令”という言葉に、アスカはヴィレの副長である赤木リツコが一体何をこいつに吹き込んだのだと思つた。

シンジは続ける。

「綾波はやっぱり初号機の中に居るつて。初号機に保存されてるつて。リツコさんは、僕とSDAT以外は何も見つからなかつたつて言つてたけど、魂はきつとまだ初号機の中にあるんだよ」

視線を自分の体の下にある、空色髪の「それ」に投げる。

「この体を使えば、綾波の魂を初号機の中から引き戻すことが出来るんじゃないかな？」
シンジの言い分をそこまで聴いて、ハンマーを握ったアスカの手がぶるぶると震え出した。

「あんた、やっぱあの親父の息子ね…」

ハンマーの先端を、シンジの鼻の面に突き付ける。

「あんたもあんたの親父も、人の命をなんだと思ってるのよ…。そんなほいほい簡単に生き返る命に何の価値があるの？ あんたの親父のやつてることも、あんたのその甘い考えも、あんたが庇っているそのいつの存在そのものも生命に対する冒瀆なのよ！」

アスカが胎の底から出したその言葉に、シンジは一瞬だけ下唇を噛む。

しかし、その頭にはすぐ傍で散ってしまったあの少年の顔が思い浮かんだ。自分の身代わりとなって消えてしまった彼。自分なんかよりもずっと生きるに値したはずの彼。何も出来ず、彼の最期の姿をただ泣き喚いて見ていることしかできなかった。

「…でも、…助けられる命は助きたい…！」

もう2度と、あの悲劇は繰り返したくないから。

アスカは相変わらず冷めた表情でシンジを見返す。

「…ほんと、ガキね。言っただでしょ。この世界にそんな余裕はないって。もう消えてしまった命に反応できるほどの余裕なんて…」

「分かつてる。僕の我がままだつてことは…。でも…」

いつになく頑ななシンジの態度に、アスカは呆れたように溜息を吐いた。

「あいつを初号機から出して、それでどうするつてのよ？ あんたの我欲を慰めるためだけに、皆を危険に晒すわけにはいかないわ」

「綾波を初号機から出して、そして僕が初号機に乗る」

「はあ？」

また訳の分からないことを言い始めたシンジに、アスカは整った顔を思い切り歪めた。

「よく分からないけど、僕が初号機とシンクロできないのは、きつと綾波が初号機の中に居るからだと思うんだ。綾波を初号機から出せば、きつとまた僕は初号機を動かせるよ
うになれる」

「…動かして、それでどうしよつての？」

反論するのも馬鹿らしくなり、アスカはシンジの話しの続きを促した。

シンジは伏せていた目をアスカに向けた。

シンジの視線を真つすぐに受け、アスカは思わずたじろいでしまう。

「父さんの計画を…、ネルフを潰す…！」

無言で睨み合う2人。

ついに根負けしたアスカは、口を開く。

「あんたが初号機に乗ることを、ミサトたちは絶対に許さないわよ」

「不安ならまたあの首輪をつけるよ。覚醒しそうになったら、その時は迷わず僕を殺せばいい」

躊躇いなく言うシンジ。

「本気なの…?」

アスカの問い掛けに、シンジは黙って頷いた。

アスカは突き付けていたハンマーを下ろしながら言った。

「好きにしたら…」

第四話

「立てるかいい？」

シンジが差し伸べたその手を、じっと見つめる赤い瞳。

赤い瞳の持ち主は、おずおずと手を上げ、差し伸べられた手を握った。手を握り、しかし「それ」のお尻は水槽の天井に引っ付いたまま。

「ほら。立ってみて」

首を傾げられる。

「分かる？ 立つ。ほら、こんな風に足を地面につけて」

シンジは空いた手で自分の両足を指差してみせた。

シンジの両足を見て、そして握られた手を見て、そしてシンジの顔を見上げて。

「あああ……」

「それ」の口から、意味を成さない声が漏れた。

シンジが「それ」を立ち上がらせるため、その手を握ってから早2分。「それ」はシンジの顔をきよんとした顔で見つめたまま、一向に立ち上がるとうしない。

「ああもう！　時間が無いのよ！」

アスカは苛立つた声を上げて「それ」の背後に立つと、「それ」の両脇に手を差し入れて強引にその体を引き上げた。「それ」の腰を浮かせることには成功したが、その細くて白い足はまるで踏ん張ろうとせず、アスカが腕を離すとあつという間に尻餅を付いてしまふだろう。

「自分の足で立ちなさいよ！　赤ちゃんじゃないんだから！」

我慢しきれなくなり、アスカは「それ」の小ぶりなお尻を引っぱたいてやった。

「ひいっ！」

お尻を叩かれた「それ」は悲鳴を上げると、弾かれたように跳び上がり、そしてようやく自分の足で立った。

そのままトコトコと駆け、

「わっ、わっ」

急に抱き着いてきた「それ」に、シンジは素つ頓狂な声を上げた。

シンジの体に纏わりつく「それ」は、そのままシンジの背中に回った。シンジの肩から、ひよっこりと顔を出す。赤い瞳が、怯えたような眼差しでアスカを見つめた。

シンジの体に抱き着き、シンジの体を盾にするようにして、まるで化け物を見るような眼差しでこちら見つめてくる「それ」。

なんだか色々ムカつとした。

「ちよ、ちよつとあんた、シンジから離れなさいよ!」

シンジのシャツにしがみ付く「それ」の手を掴もうとしたが、

「わっ! わっ!」

「それ」はやはりシンジの体を盾にするようにアスカの手から逃げ回り、「それ」の動きに振り回されるシンジは間拔けな声を上げ続けるのだった。

「ほら、ゆっくり。ゆっくり」

何とも危なっかしい足取りで巨大な水槽の側面に備え付けられた梯子を下りてくる「それ」を、シンジは心配そうな面持ちで下から見上げていた。水槽から引き揚げられたままの格好で下りてくる「それ」は、もちろん今も素っ裸のまんまで、シンジの位置から「それ」のお尻が丸見えである。すでに梯子を下りたアスカに真っ赤な顔が見られなようにしながら、「それ」の先導を続けた。

梯子は床から1メートルの高さで終わっている。

梯子の一段目に立つ「それ」はたった1メートル下の床を不安げに見つめている。

「ほら。ジャンプ。梯子から手を離すんだよ」

梯子の側に立つシンジは身振り手振りを交えながら、「それ」に梯子から飛び降りるよう指示するが、「それ」は床とシンジの顔を交互に見つめるだけ。

「あああ…」

「だいいじよぶ。だいいじよぶ。怖くないよ」

努めて優しい声で呼びかける。

シンジの何度目かの呼びかけに、ようやく「それ」はしがみ付いていた梯子を離れた。あとはその足で、梯子を蹴るだけ。

「うーうー！」

奇妙な掛け声と共に、「それ」は梯子を蹴った。

そのままふわりと床に着地…とはいかず、「それ」は梯子の側で「それ」が飛び降りるのを待っていたシンジの胸へと頭から飛び込んだ。

「ぐへっ！」

蛙が潰れたような悲鳴を漏らしながら、シンジは「それ」の下敷きとなる。

「それ」は着地の衝撃が思いのほか柔らかかったことに安心した様子で、シンジの体に抱き着いている。

「もう！シンジから離れなさいよ！」

アスカの怒号が空間に木霊した。

エレベーターシャフトの梯子を上り、1つ上の階に出た。廊下をてくてくと歩く。
「とりあえず」

アスカは隣を歩くシンジを睨んだ。

正確には、シンジの腕に抱き着いて歩いている「それ」を睨んだ。

「そいつの服をどうにかしないとね」

「そうだね。何か着ないと風邪引いちやうよ」

「違うわ。このままじゃあんたが平常心保ってらんないでしょ」

「え?」

「さつきからずっと鼻血垂らしつ放しなんですけど」

「え? え?」

そこは見覚えのある場所だった。

巨大な水槽があつたドーム状の空間よりも、さらに広い広大な空間。空間の真ん中には大きな縦穴があり、その中にはこれまた巨大な柱が六角形を形作るような配置で垂直に突き刺さっている。

その穴の縁にぼつんと立つ、粗末な天幕。

それはシンジが足繁く通つた場所。「カノジョ」に好きだった本を何冊も届けた場所。「カノジョ」は、もうこの世界には居ないという事実を、突き付けられた場所。

天幕に灯りは灯っておらず、シンジに事実を突き付けた天幕の住人は、今は居ないらしい。

天幕の入り口の前には、散乱した何冊もの本。その側に置かれた段ボール箱。

その中に、まるで捨てられたように入っているものを拾い上げる。

「アスカ、これ」

「あら。懐かし」

シンジから差し出されたものを見て、アスカは思わず表情を綻ばせた。

シンジの手にあるもの。それはアスカがシンジと共にかつて通つていた中学校指定の制服だった。

「とりあえず、これを彼女に着てもらおうよ」

「そうね」

「うん」

「……」

「……」

「……」

「……」

「え？ 何よ」

「え？」

「え？」

「え？」

「だから何よ」

「だから、これ。彼女に着てもらおうよ」

「だから着せなさいよ」

「え？」

「え？」

「え？」

「え？」

「ぼ、僕が？」

「は？ 私に着せろつての？」

「僕が着せさることができないわけないだろ？」

「どうしてよ」

「お、女の子に服なんか着させたことないんだから」

「へー、脱がせたことはあるんだ」

「そんな訳ないだろ！」

「とにかく！ あんたが勝手にやり始めたことなんだから、あんたが最後まで責任持ちなさいよ！」

「そ、そんな……」

「いいから！ ブラウス着せて、スカート履かせるだけよ！ さっさとしなさい！」
「うう……」

シンジは困った顔をしながら、仕方なしに制服を手を持ったまま、2人のやりとりをぼんやりと見つめて突っ立っている「それ」の方へと向かった。

向かおうとして、ふと足を止める。

「え？ もしかしてアスカは、男に服着させられたり脱がされたことがあるの？」

シンジの右側頭部にアスカの真空飛び膝蹴りが炸裂したことは言うまでもない。

得体の知れないものを身に付けさせられることに恐怖したのか、腕と足をじたばたさせて暴れる「それ」を何とか宥めつつ、ブラウスの袖に腕を通させ、スカートに足を通させる。

装飾品までつける必要はないが、ついでだからと赤いリボンタイも結んでやった。

制服の下に下着はないし、靴下も靴もないが、とりあえず素っ裸の状況からは脱し、逆さまに置いた段ボール箱にちよこんと座る「それ」を見つめる。

白い肌。

赤い瞳。

空色の髪。

その顔は相変わらず空虚でぼんやりとしているが、見慣れた制服に身を包んだ「それ」の姿を見て、シンジの瞳が僅かに潤んだ。

「あやな……」

思わずその名を口にしようになって、

「だからそいつは綾波レイじゃないの」

背後からアスカの冷たい声が飛んできた。

「何なの、ここの住人は。霞みでも食べてたのかしら。ろくな食糧がないじゃない」

天幕の中を家捜ししていたアスカは、見つけ出したブロックタイプの栄養食品の幾つかをシンジに向かって投げた。

栄養食品の包装を破って中身を出し、「それ」に渡してやる。手に持った、人差し指大の食品を、ぽかんと見つめる「それ」。

だだっ広い空間。

全く人の気配がない。

自分たちが追われている身であることは分かっているが、さすがに疲れてしまったので、少しでもこの場所で休息を取ることにした。

「いいの？ アスカ？」

天幕の中からシンジが顔を出す。

「いいわよ。そいつと枕並べて寝るなんて、冗談じゃないわ」

アスカは天幕の中にあつた寝袋を天幕の外の床に敷いて、その中に潜り込んだ。シンジと「それ」は天幕の中で、アスカは天幕の外で仮眠を取ることにした。

潜り込んだ寝袋は薄っぺらい安物だったがそれなりに温かく、アスカの意識は急速に眠りの底へと落ちていった。

どこかで声がする。

「…え？ …どうしたの？」

「うう…、うう…」

「ん？」

「うう…、うう…」

「なに？ 震えてるよ？」

「うう…、うう…」

「寒い…？」

「うう…、うう…」

「体は冷たくないな…。あ、あれ。も、もしかして…！」

「うう…、うう…」

「ああダメダメ。ここでしちやダメだよ。外でしなきや」

「ううう…、ううう…」

「ほらもうちよつと我慢して。外に行こう」

「ううううう」

天幕の布が擦れる音。

ペタペタと、2人分の足音。

「んー、何処でしたらいいんだろ。分かんないや」

「ううううう！」

「あー分かったから。しかたない、ほら、あっちの。あの隅っこでしちやおう」

「うううううう」

「大丈夫だよ。怖くないから」

「うううううう」

「どっかに行ったりなんてしないよ」

「うううううう」

「僕がそばに居るから」

「うううううう」

「僕がちゃんと見ててあげるから、怖くないよ」

「このど変態がああああ!!」

今度はシンジの左側頭部にアスカの真空飛び膝蹴りが炸裂した。

ぶっ倒れたシンジを足蹴にして天幕の中に叩き込んだ後、天幕の床に敷かれてあったブルーシートを持って、天幕から離れた場所で、内股気味でもじもじ立っている「それ」のもとに行く。

「ほら、来なさい」

おっかないお姉さんの登場にびくついている「それ」の手を強引に引つ張って、大きな穴の淵に行く。

ブルーシートを広げて、「それ」が外から見えないよう囲んでやる。

「ほら、そこに出してしまいなさい」

いくら「それ」が魂の入っていないただの抜け殻とは言え、生物学上の女子である以上、隠さず、ましてや男の前でさせてしまうことはアスカの中の何かが許せなかった。

ブルーシートに囲まれたそれが不安げにこちらを見上げてくる。

「ほら、しーしーすんの。スカート濡らすんじゃないわよ」

自分は絶対に子供なんて要らない。

我が子に、自分のような思いを絶対にさせたくないから。

幼い頃から、そう心に誓っていた。

それでもこれは。

何だかこれはお母さんになったような気分だ。

子供と言うにはでっか過ぎる赤ん坊だけだ。

思えば自分は見えた目こそ少女の頃のまんまだが、実際はもうアラサー。

子供の一人や二人居たって、おかしくない年齢だ。

しゃがんでいた「それ」がすくつと立ち上がり、ブルーシートの端からひよこつと顔を出した。

「終わった？」

「あああ……」

「じゃあ、これで拭いて」

ブルーシートを取り払うと、「それ」は相変わらずのぼんやり顔だが、どこかすつきりしたような表情で立っている。

その顔に、思わず笑ってしまった。

「もう。スカートが捲れてんじゃない」

「それ」が着ている制服を整えてやる。

「んじゃ、もう少し寝ましよ」

ブルーシートをたたみ、天幕に向かって歩き始めた。

不意に、右手に感触。

見ると、背後から伸びた「それ」の手が、自分の手を握っている。

「な、何すんのよ」

突然のことに、思わず「それ」の手を振り払ってしまう。

「あう……」

振り払われてしまった手を見つめる「それ」。

次第にその口が「へ」の字に曲がり、どこか悲しそうにアスカを見つめた。

「うううう……」

「ああもう……！」

「それ」にそんな表情を向けられ、アスカは仕方なく「それ」に向けて手を差し出す。「それ」は差し伸べられたアスカの手をすぐに握った。

「…調子狂うわ…」

ぼそりと呟きながら、手を繋いで天幕へと戻った。

天幕の入り口にあるカーテンを捲り、「それ」が入ったらカーテンを下ろした。すぐに「それ」がカーテンの隙間から顔を出す。

「ああああ…」

「は？ あたし？」

「ああああ…」

「あたしは外で寝んのよ」

カーテンの隙間からすつと真つ白な腕が伸び、アスカが着るシャツの裾を引つ張る。

「何すんのよ」

「ああああ…」

「い、嫌よ。あんたと一緒に寝るなんて」

「ああああ…」

「ちよ、離しなさいよ」

「ああああ……」

「んもう……！」

ただでさえ狭い天幕。

そこに3人も入ったらすし詰め状態になる。

「……もう……、なんであたしが……」

川の字で寝る3人。

右端はアスカに足蹴にされて気絶状態のシンジ。

中央に「それ」。

左端にはぶつぶつ文句を垂れているアスカ。

アスカが使っていた封筒型の寝袋を布団状に広げ、3人で共有し合う。

ちらりと右隣の「それ」を見る。

口をあんどぐりと開けた無防備な顔で、くーくーと寝息を立てている。右隣にシンジが居て。左隣にアスカが居て。2人に囲まれて、安心し切ったような表情。

「ほんと……、調子狂うわ……」

アスカはぼつりと言って、目を閉じた。

「んんもおおお……」

小声で呻くアスカ。

シンジよりもアスカの方が体温が高いからか、眠ったままの「それ」が暖を求めてアスカの体に抱き着いてくるのだ。

仮眠時間は1時間程度だったが、結局一睡もできなかったアスカであった。

第伍話

「ほらレイ。これを口の中に入れて。こうやって、あむあむ、噛むのよ」

「あむあむあむ…」

眠りの底、と言うか、気絶の底から目覚めたら、隣が何やら騒がしい。

「じゃあ、んぐって。顎を上げて。飲み込むの」

「んんん…」

「そうそう、上手ね、レイ。…なんだ、シンジ、起きてたの。ほら、あんたもこれさつさと食べて」

目を擦りながら体を起こすシンジに、アスカが栄養食品を投げってくる。

「あ、ありがとう…」

シンジは食品の包装を破り、中身を口にしながら、寝ぼけ眼で2人の様子をうかがう。「食べたらこの水飲んで。ああもう、ゆっくりゆっくり。ちよ、鼻から噴き出すんじゃないのよ。誰も取らないから、落ち着いて飲みなさい」

「んぐんぐんぐ…」

「ほら。顔を拭いてあげるわ」

「あうあうあうあ…」

「じゃあレイ。出発する前にトイレに行っておきましょうか」

「ああああ…」

「何よ…」

「え？」

アスカがシンジをじっと睨んでいた。

「なにジロジロ見てんのよ」

「いやあ、その…」

何だかお母さんみたいだね。

と言ったら殺されそうなので、代わりにこう言ってみた。

「レイ」って…」

先ほどからアスカは「それ」をレイと呼び続けている。

「もうアレコレ面倒くさいから便宜上そう呼んでいるだけよ。何？ 文句あんの？」

「いやいやいや…」

アスカに凄まれ、シンジは慌てて首を横に振った。



捕虜と脱走者と彼らに盗まれた「備品」という奇妙な組み合わせの3人。貴重な仮眠時間を提供してくれた天幕を離れ、歩き始める。

広大な空間から、再び延々と続く廊下へ。

ふと、3人の足が止まった。廊下の奥から気配。目を凝らすシンジとアスカ。

散々追い掛け回された、あの四つ足歩行の怪物ではない。

何者かが、2本の足でこちらに向かって歩いてくる。アスカはすっかり使い慣れた医療用ハンマーを構えた。

こちらへとぼとぼと歩いてくる人影。

人影の顔が次第にはつきり見えるようになり、アスカの片方の眉が、ぴくりと動く。昨日撃ち抜かれたばかりの左肩が疼いた。

俯いて、視線を床に這わせながら歩いてきた人物は、10メートルほどの距離になってようやく3人の存在に気付く。驚いたように少し目を丸くして、足を止めた。

その少し見開いた目で先頭に立つアスカを見て、その横に立つシンジを見て、そして

シンジの背後でシンジの腕に抱き着いて立っている制服姿の「それ」を見る。

黒いプラグスーツを着た空色髪の少女の目がさらに見開かれ、眉間に深い皺が寄った。

空色髪の少女はすぐさま身に付けていたボディバッグのファスナーを下ろし、中に手を滑り込ませる。

掴んだ物をバッグから抜き出すと、それを両手で持った。

彼女が手に持ったのは拳銃。

右手で銃把を握り締め、左手は銃把を握る右手を包み込むようにして銃身を支える。

右手の親指で安全装置を外しながら狙いを定めると、引き金に掛ける人差し指に一気に力を込めた。

しかし黒スーツの少女が引き金を引き絞ることはなかった。

黒スーツの少女がこちらに拳銃を向けたと同時に、アスカは地面を蹴った。天井すれすれまで跳躍し、10メートルの距離を一足飛びで一気に詰めたアスカは、振りかざしたハンマーを振り下ろす。アスカの素早い動きに、黒スーツの少女は反応さえできない。アスカのハンマーは拳銃の銃身にぶち当たり、拳銃は黒スーツの少女の手から叩き落された。

アスカは着地様に左手を前に突き出し、黒スーツの少女の体を押し倒す。

「やあ、96じゃないの」

黒スーツの少女の上に馬乗りになるアスカ。

「いつ以来かしら。ああそうそう、あんたがあたしの肩に風穴開けて以来ね」

口調こそ冗談めかしてはいたが、少女を組み敷くアスカの腕はぎりぎりとして少女の胸を
圧迫していく。

「今度は一体誰の体に風穴開けようとしてたのかしら？」

そうアスカに問われ、しかし胸を圧迫されている少女はその苦しさで呼吸する事さえ
ままならない。

アスカはすつとその顔を黒スーツの少女に近づけ、相手の耳元に囁いた。

「あんた。今、あたしでもシンジでもなく、あのコを撃とうとしてたわよね……」

アスカは少女から顔を離すと、ニヤリと笑いながら少女の顔を覗き見た。

少女の顔が、みるみるうちに紅潮し出す。

「なに。あの親父さんから命令でもされた？ 自分のバックアップを消せって」

少女が四肢を振り回して暴れ出すが、暴れる少女に馬乗りになるアスカの体は小ゆる
ぎもせず、アスカは少女に冷ややかな声を浴びせ続けた。

「それともあんたの意思なのかしら？ 素晴らしいことじゃない。自分の意思で動け

るって」

そこまで言つて、アスカは少女の顎を鷲掴みにする。

両目を剥き、真つ白だった肌を湯がいたように真つ赤にさせ、齒を食いしばつてアスカを見上げる少女の顔を、アスカは満足げに鑑賞する。

「いい顔になつたじゃない。まるで あたしたち 人間の ようね」

アスカの視線を受け止め切れなくなったのか、少女はぎゅつと目を瞑つた。

そして暴れさせていた四肢は動かなくなり、少女の体からはすっかりと抵抗の意思は消え、やがてぐったりとして動かなくなった。

アスカは動かなくなった黒スーツの少女から離れる。

体を解放されても、少女は床の上に倒れたまま動かない。

アスカは振り返り、そこに立つ2人に告げた。

「行きましょ。シンジ。レイ」

アスカのその言葉に、動かなくなった少女の体がピクリと反応し、閉じていた目が開いた。

アスカが黒スーツの少女を制圧する様を、何も出来ずただ呆然と見つめていたシンジ。アスカに促され、背後に立つ「それ」を見る。

「行こうか、レイ」

シンジのその言葉に、再び少女の体がピクリと反応し、天井を見つめたまま下唇を噛んだ。

3人は肩を並べて歩き出す。

アスカは一度だけ振り返り、床に倒れたままの黒スーツの少女を見た。

「じゃあね、96」

シンジも一度だけ振り返り、床に倒れたままの少女を見る。

何か声を掛けようとして口を開いたが、結局その口からは何の言葉も出ることはなく。

「あああ……」

「それ」に腕を引っ張られるままに、少女に背を向け、歩き始めた。

3人分の足音が遠ざかり、やがて消えた。

床に倒れたままの少女は体を傾け、背中を床から離すと少しずつ体を縮こませ、背中を丸め、膝を腹に抱える。

空色の髪の間隙から覗く色素の薄い小さな口が微かに開閉し、何事かを呟いている。

「……わたしは……アヤナミレイ……、……アヤナミレイじゃない……、

…わたしは…アヤナミレイ…、…アヤナミレイじゃない…、
…わたしはだれ…、…わたしは96…、
…わたしはだれ…、…わたしは96…」



「ああああもうっ！ どっから湧いて出てくんのよこいつらー！」

「あああ…」

「レイ！ ほら頑張つて！ 走つて！」

「おおお…」

上の階を目指して彷徨っていたら、突如として四つ足の怪物の群れと遭遇した一行。

懸命に逃げる3人は、アスカは獠猛な牙を剥き出しにして群がってくる怪物たちに向けて握ったハンマーを振り回しながら走り、シンジは走ることに慣れておらず何度も転びそうになる「それ」を支えながら走る。

廊下を埋め尽くすほどの数の怪物の群れ。3人は怪物が居ない方向に向けて逃げ続けるしかない。

時に階段を駆け上がり、時に廊下を走り抜け、行き止まりになったらアスカがハン

マーで壁をぶち破って強引に道を作る。

それらを何度も何度も繰り返して。

階段の突き当りの鉄扉を蹴破った。

「空だ!」

頭上に広がる真つ青な空。1日ぶりに見る空に、シンジは思わず叫んだ。

そこは見覚えのある場所。

肩を撃たれたアスカと一緒に乗せられたVTOL機の、離発着場。

「アスカ!あれ!」

シンジが指さす方を見ると、だだっ広い離発着場の中央に1機のVTOL機が停められている。

「行きましょ!」

「動かせるの?」

「当ったり前でしょ!」

「だと思った」

すでに走り出しているアスカの背中を追いかけようとしたが、ふと背後を振り返る。

シンジたちが出てきた扉の向こう。怪物の群れが階段を駆け上がって、すぐそこにまで迫っている。

シンジはすぐに分厚い鉄の扉を閉じた。

ドン！

怪物たちは走ってきた勢いをそのままに、閉じた鉄の扉に突っ込んだらしい。扉が大きく揺らぎ、扉に体重を掛けていたシンジの体が吹っ飛んだ。コンクリート製の地面を一回転したシンジは、しかしすぐに起き上がると扉に突進。扉の向こう側で体当たりを繰り返し強引にこじ開けようとする化け物たちと、扉の押し合いを始める。

「シンジー！」

走り出していたアスカもすぐに引き返し、シンジに加勢しようとするが、
「行つて！ アスカ！」

シンジの怒鳴り声のアスカの動きを制止した。

「でもー！」

「早く！ あれは君にしか動かせない！」

その間も、扉の内側では怪物たちが扉への体当たりを繰り返している。

扉に大きな衝撃が伝う度にシンジの体が大きく揺れたが、シンジは地面を懸命に踏み張り、両手も使つて地面を押し、全身を使つて扉を背中で押さえ付けた。

歯を食いしばりながら扉を押さえつつ、「それ」に視線をやる。

「君も行くんだ！アスカ！頼む！」

アスカは下唇を噛むが、逡巡している暇はなかった。

「すぐに迎えにくるから！ それまで死ぬんじゃないわよ！」

「行つて！ レイを頼んだよ！」

「ほら！ あんた行くわよ！」

アスカは「それ」の腕を握り、V T O L機に向かって駆け出そうとしたが。

「ううううう！」

「それ」はアスカの手から逃れ、扉の前で踏ん張っているシンジのもとへと駆け寄つた。

「あああああ」

そしてこの建物から溢れ出そうとしている怪物たちを封印するべく、全身全霊で扉を押さえ込んでいるシンジの腕を手に取り、あるうことが引つ張り始めた。

「ダメだ！ 僕はまだ行けない！ アスカ！」

シンジに言われ、アスカは背後から「それ」の両肩を抱き締め、「それ」をシンジから引きは剥がそうとする。

「あんた！ シンジが珍しく頑張ってるのに何邪魔しようとしてんのよ！」

「あああああ!!」

アスカの腕の中で激しく暴れる「それ」。テコでもシンジの腕を離そうとしない。結

果的に「それ」とアスカに引つ張られる形となつてしまい、シンジの背中が扉から離れてしまいそうになる。

「アスカ！ 離して！」

「もう！」

シンジのその一声に「それ」を拘束するアスカの腕が緩み、その拍子に「それ」はペタンとその場に座り込む。そのまま、握っていたシンジの腕を両手で包み込んだ。

「ああああ……」

シンジを見つめる「それ」。赤い瞳。

水槽の中を漂い、水槽の中から引つ張り上げ、制服を着せ、栄養食品を齧らせ。

その間、ずっとずっと、虚ろだった瞳。

魂というものが欠落していた瞳。

その瞳が、シンジを見つめている。

悲しみと不安を色濃く浮かべた瞳で。

瞳を潤ませ、眉毛をハの字に曲げて、シンジを見つめている。

「……僕の……ことを、……心配して……くれて……いるの……？」

シンジのその問い掛けに「それ」は返事をしない。

ただ、

「あああ……」

と呻くだけ。

両手に包み込んだシンジの手を、必死に揉みながら。

シンジは口の端をゆつくりと上げた。

背中に、今にも鉄の扉を突き破ろうとする怪物たちの息吹を感じながら、静かに笑った。

こんな状況下で、自分でも信じられないくらいに心が落ち着き、自分の記憶にないほどのとても自然な笑顔を浮かべていた。

シンジは静かに柔らかに「それ」に言う。

「僕のこととは大丈夫。心配いらなから。…ほら」

視線を、アスカへと向ける。

「このお姉さんに付いていつて。彼女が君を守ってくれるから。彼女は僕なんかの100倍は強いんだよ」

そこまで言つて、再び「それ」を見る。

ニツコリとした笑みをその顔に湛えて。

「さあ、ほら。行くんだ…、レイ…」

こんな時に、こんな場所で、なんて顔をするのだろうか。

見たこともないシンジの笑顔。

見る者を暖かい羽毛で包み込むような、そんな笑顔。

「アスカ…」

シンジに呼び掛けられ、2人のやり取りを呆然と見ていたアスカは目をぱちくりとさせる。

慌てて膝を折り、シンジの手を握ったままの「それ」の両手に自身の手を重ねる。

「レイ…、行くわよ…」

しかし「それ」はシンジの手を握り、シンジを見つめたまま動こうとしない。

「何してんの！ 早く行くの！」

そのアスカの怒鳴り声に、「それ」はびくりと肩を竦ませた。

「アスカ駄目だよ」

シンジの柔らかな声は、今度はアスカへと向けられる。

声に導かれるままに、アスカはシンジの顔を見た。

「レイが怖がつちゃうじゃないか。ほら、笑顔笑顔」

自分に向けられる、シンジの柔らかな声、シンジの柔らかな笑顔。シンジのその声も、

笑みも、自分のために向けられたものではないことに気付いているアスカは、その胸に心臓が驚掴みにされたような痛みを覚えるのだった。

しかしアスカはその感じた痛みを表情に表すことなく、そしてシンジに促されるままに。

「ほら…。レイ…。行きましょう…」

今自分にし得る限りの優しい声で「それ」の耳もとに呟き、そして自分にし得る限りの笑顔を「それ」に向けた。

「ああああ…」

すぐ近くのアスカの笑顔を見つめる。

「ああああ…」

扉の前のシンジの笑顔を見つめる。

シンジの手を握った「それ」の手の力が、少しだけ緩んだ。

「大丈夫…。あなたはアタシを守るから…」

アスカは「それ」の手に重ねた自分の手にほんの少しだけ力を籠め、シンジの手から離させた。「それ」がゆつくりと立ち上がる。アスカはぶらんとさがった「それ」の右手を握った。

「シンジ…」

悲痛な面持ちでシンジを見つめる。

「なるべく早く迎えてに来てね」

「分かっている。…これ」

アスカは「それ」の手を握っていない、もう片方の手に握っていたものをシンジの前に置く。

「使って…」

アスカが置いたものを見て、シンジはクスリと笑った。

シンジに釣られてアスカも笑うと、その笑顔をそのまま「それ」に向けた。

「じゃあ行きましょうか」

「ああああ…」

その呻きをYesと受け取ったアスカは、シンジに背を向けると走り出した。

今度は、「それ」は素直にアスカに付いていった。

「ははっ」

赤毛の女の子と、空色髪の女の子が、手を繋ぎながら仲良く走っていく。

14年前には決して見る事のできなかつた「あの2人」のそんな後ろ姿に、シンジは声を出して笑っていた。

第六話

それにしても、どちらかと言えばもやしっ子である自分の体のどこに、こんな力と根性が潜んでいたのだろうかと感心してしまう。群れを成す怪物相手にずっとおしくらまんじゅうを続けてきた自分自身を、褒めてやりたいと思った。

しかしもう間もなく、自分が背にしているこの扉は打ち破られる。両足を踏ん張って背中を扉に押し付け、扉から伝わる衝撃で背骨が折れそうになるほどの痛みにも耐え、絶対に押し負けるものかと懸命に頑張っていたが、肝心の扉の方が根負けし始め、あちこちがひしやげ、すでに所々に穴が開いており、そこから怪物の鋭利な顔の先端が覗いていた。

シンジは遠くに視線をやる。

だだっ広いV T O L機の離発着場の上を駆けていく、2つの細い影。

2人の距離は十分に離れた。

「頃合い……かな……？」

シンジは心の中でカウントダウンを始めた。

10から始めたそのカウントダウンは、やや早めに秒を刻んでいき、そして。

「3、2、1、…ゼロ！」

数字が尽きた瞬間、シンジは扉から背を離れた。

そのまま上半身を前のめりに倒し、前傾姿勢になると地面についていた両手と両足を使って体を一気に宙へと浮かせる。跳躍しながら、アスカが置いていった柄が少し曲がってしまったハンマーを拾い上げると、跳躍した勢いでそのまま走り出した。

シンジの体重が消えた瞬間、抵抗を失った扉は吹き飛んだ。

扉を失った出入り口から、たちまち無数の怪物たちが溢れ出す。

「こつちだーこつちこつちー！」

シンジは怪物たちの注意が一瞬でも遠くを駆ける2人には向かないよう、必死に声を張り上げながら、2人が向かうVTOL機とは別の方向へと走り始めた。

そこは、街も山も河も何も無い、周囲は空しか見えないようなただっ広い場所。目印になるような目標物が何も無く、そんなところを走っていればたちまち方向感覚が失われ、頭がくらくらしてくる。

それでもシンジは懸命に走り続ける。どこに繋がっているかも分からない地平線に

向かって。

怪物の群れがすぐ背後まで迫っている。まるで工場で大量生産されたように大ききや顔の形、足やしっぽの長さが寸分違わず同じである怪物たちだが、走るスピードは個体差があるようで、先頭の一体が群れから先行し、ついにシンジの背中へと襲い掛かるうとする。

「こんにやろー！」

飛び掛かってきた怪物の頭を、シンジは握っていたハンマーでぶつ叩いてやった。怪物の頭部はたちまち砕け、様々な臓物や液体をまき散らしながら地面へと転がっていく。

2体目がシンジに飛び掛かってきた。シンジの頭の位置よりも遥かに高い位置まで跳び上がった怪物。シンジの位置からは、怪物の胴体に収まる大きな球体が丸見えであった。怪物の跳躍する力、化け物の体を引っ張る重力、そしてシンジがハンマーを振り上げる力によって、化け物の球体は粉々に砕けた。

シンジは懸命に走り続けながら、自分が握るハンマーを見つめる。

「ははっ」

思わず笑ってしまった。

彼女から託されたこの小さなハンマー。

「プログナイフなんかよりよっぽど頼もしいね……！」

3体目が飛び掛かってくる。

「……なくそー！」

まるで彼女の魂が乗り移ったかのような掛け声で、その3体目の怪物の、大きく開かれた口の中にハンマーを叩きこむ。シンジの手に、怪物の牙の全てが砕けていく感触が伝わった。

口から大量の血を迸らせながら、きゃんきゃんと、まるで犬のような鳴き声を上げて転がっていく怪物を視界の隅で見送り、シンジは走りながら拳でガッツポーズをした。このハンマーさえあれば、たとえ相手が「最強の拒絶タイプ」であっても負けないような気がしてきた。

不意に、ハンマーを握る右手が軽くなったような気がした。

ハンマーを見る。

シンジが目にしたもの。

それはすでにハンマーではなかった

ただの棒。

ハンマーの頭部が、欠けて無くなっていた。

「ちよ、ちよっと待ってよ……、わわ!？」

嘆く暇もなく、4体目が襲い掛かってくる。

シンジは怪物の目ん玉に向かって、すでにハンマーではなくなった、ただの棒の先端を突き出してやった。1つしかない眼球を潰された怪物は前足の膝を折ってその場に崩れるが、シンジは咄嗟に棒を握った手を離してしまった。

ついに徒手になってしまったシンジ。

「もおおおお！」

悪態を吐きながら、全力で走り続けた。

走り続けて。

走り続けて。

口から心臓が飛び出てしまいそうになっても走り続けて。

酸素欠乏で目の前が真っ白になってしまいそうになっても走り続けて。

奇妙な現象が起きた。

遥か遠くに見えた地平線。

相変わらず見えるのは空だけ。周囲には山も木々も建物も、空に向かう高いものは何もない。地平線より上にあるのは、真っ青な空とぼつぼつと浮かぶ雲だけ。

その、遥か遥か遠くにあるはずの地平線。

その地平線が徐々にこちらに向かって近づいてくるのだ。
迫ってくる地平線。

それに向かってシンジは走り続ける。乳酸が溜まりに溜まった足に鞭打って走り続ける。

時折迫った怪物が振る前足の爪が背中を掠め、肩を掠め、わき腹を掠め、そこから鮮血が迸るが、シンジは体に走る痛みを全て無視して走り続けた。

近づいてくる地平線に向かって、ひたすら、我武者羅に。

そしてついに地平線はあと数歩のところまで迫った。

「あああああああ!!」

シンジは叫びながら最後の力を振り絞って跳躍した。

地面から跳び上がるシンジの体。

両腕を天に向かって突き上げて。

足を前後に大きく開いて。

まるで迫りくる地平線を跨ぐように。

ついに、地平線はシンジの股の真下まで来た。

それは地平線ではなかった。

それはシンジが駆けてきた大地が尽きる場所。大地の、一番の隅っこ。

地面はそこで途切れ、そこから直角の崖となり、そこから先の大地は遙か遙か下。一体何百メートル、何千メートル下にあるのかも分からない。あまりにも遠すぎて、霞み掛かっている大地が、股の下を見るシンジの目には見えた。

シンジは自分の体が崖の先に完全に出る前に、思い切り体を捻った。

空中で体を半回転させる。

体ごと後ろに振り返ると、自分が今跳躍したばかりの断崖絶壁が見えた。

その断崖の向こうに広がる大地。

その大地を埋め尽くさんばかりの、怪物の群れ。

初めてその全容を目にし、こいつら全てが自分の後を追ってきていたのかと思うと、何だか自分がとても大人物になってしまったような気がして、シンジは何だか恐れ多いような気分になってしまった。

やがて地球の重力が仕事を始めた。

シンジの跳躍の勢いが消えていく。

となれば、後は重力に引かれて落下するだけ。

シンジは懸命に両腕を伸ばした。

伸ばした先は崖の縁。大地の、本当に一番の端っこ。

懸命に腕を、肘を、指を伸ばす。

右手の人差し指と中指と薬指と、左手の中指と薬指と小指が、辛うじて崖の縁に引つ掛かった。

途端に、計6本の指にシンジの全体重が襲い掛かる。

「ぐうっ！」

さらに崖にシンジの体が叩き付けられたが、シンジは齒を食いしばって指に全霊の力を込めて崖の縁にしがみ付いた。

辛うじて崖の縁にぶら下がることが出来たシンジの頭上を、黒い影が過ぎ去っていった。

綺麗な放物線を描いて、遙か遙か下の大地に向かって落ちていく黒い影。

それは崖を前に急制動に失敗した怪物。

一体だけではなかった。

シンジの頭上を、止まることができなかつた怪物の群れが次々と飛び越えては、そして遙か下の大地へと落ちていった。

それは巨大な構造物だった。

荒涼とした大地の上に立つ、周囲の山々よりも遙かに高い建造物。あたかも古代書に

出てくるその巨大さ故に神の怒りに触れてしまった塔のような威風を誇る、ひたすら天に向かつて伸びた塔。

所々が崩壊し歪な姿をしている構造物は、しかしつぺんだけは綺麗に真つ平になっている。

その真つ平な屋上で起きた現象。

それはまるで雪崩のよう。

だだっ広い屋上の一角を埋め尽くす黒い影の群れが、次から次へと屋上から遥か下の地上へと転落していく。

辛うじて崖の前で止まることができた黒い影も、後ろから押し寄せてくる黒い影に押し出され、結局転がり落ちていく有様だ。

構造物の屋上の端っこに、両手で必死にしがみ付いていた少年。その頭上を飛び越え、遥か下の大地へと落ちていく怪物の数が少しずつ減っていく。

やがて静かになる。

全体重が掛かっている指の痛みに顔を顰めながら、シンジは足もとに視線をやった。足からその下は延々と真つ平な壁が続いており、地上は遥か遥か下。あれだけ大量の怪物たちが落ちていったのに、地面はあまりにも遠すぎて怪物たちの影も形も見えない。

ここまで高いとかえって現実味がなくなり、高所による恐怖というものをシンジは抱かなかつた。むしろ、怪物たちを一齐に始末してくれたこの高さに感謝したい気分だ。とは言え、落ちていった怪物たちと同じ末路を、自分は今正に辿ろうとしていることは忘れてはいない。

シンジは視線を頭上へと向けると、ふうと大きく息を吐いた。すでに感覚が無くなり始めている指に懸命に力を込める。

引っ掛けるものが何もない壁につま先をこすり付け、少しずつ肘を曲げていく。右腕を思い切り伸ばして屋上の床へと投げる。右足をぶん回し、踵を強引に屋上の縁へと引っ掛ける。

「こんなにやろめええー！」

全身に渾身の力を込めて、壁を這い上がった。

屋上の床に四肢を投げ出し、仰向けになる。

「はあああああ……！」

よく晴れた空に向かって、深い深い溜息を吹きかけた。

限界を超えた距離を全力疾走した足。全体重を支えた腕。

全ての燃料を燃焼し切ってるでマグマのように火照り、あちこちが悲鳴を上げている体。

「はあ、はあ、はあ」

肩で息をするシンジの体に、やや強めの冷たい風が吹き付けた。

火照った体も、節々に感じる痛みも、肌を撫でる冷たい風も、本来不快に感じるはずのそれら全ては、自分が生きている証拠。

「ははっ…」

青い空に向かって笑い掛ける。

どこまでも深い青が続く空に、自分のすぐ隣で散っていった少年の笑顔が溶け込んでいくような幻を見たような気がした。

「カヲルくん…」

シンジは少年の幻が消えていった空に語り掛ける。

「僕…、もう少し頑張ってみるよ…」

床に投げ出していた手を、ぎゅっと握り絞めた。

「よっこらせ…っつと」

年寄りみた掛け声と共に、上半身を起こす。

「やっ…っつと」

周辺に視線を巡らせる。

「どうしよつか…」

シンジを遠巻きで囲み込んでいる怪物たちの群れを見渡した。

無数の一つ目に見つめられる。

異様に裂けた口の隙間から覗く凶悪な牙。

前傾姿勢となり、前足は何度も床を引つ掻き、今にもシンジに飛び掛からんばかりだ。あれだけ大量の怪物が地上に落ちていったにも関わらず、怪物たちはシンジたちが出てきた出入口から次から次へと補充され、再び屋上を埋め尽くそうとしている。

そんな怪物たちに囲まれて、シンジは場違いにもほっと安心してしまった。自分を囲むものが怪物たちでよかった。もしこれがあの水槽で見た空色髪の少女の群れであつたら、自分は正気を保っていられなかつただろうから。

そして、これから自分の目の前で繰り広げられる虐殺劇も、虐殺される相手がまるでゲームの世界から飛び出てきたような現実離れた姿をした怪物たちであれば、それほど大きなショックは受けないだろうから。

「遅いよ…、アスカ…」

シンジが呟いた瞬間、シンジの背中を強烈な爆風が襲った。

爆風に紛れて、巨大な爆音。

シンジの背後からせり上がるように現れる巨大な機影。

両翼に備えられた回転翼を盛大に回しながら、垂直に上昇してくるVTOL機。

単座の操縦席の窓からひよっこり顔を出すパイロット。

暴れる赤毛を押さえながらアスカは叫んだ。

「シンジ!!伏せて!!」

シンジはアスカに指示されるままに床にしゃがみ込む。
間髪入れずに、頭上から轟音が鳴り響いた。

屋上の上のシンジが床に這い蹲った瞬間、操縦桿の頭部に備え付けられた赤いボタンを親指で押した。

機体の両脇にぶら下がる機関砲の砲口から火が吹き、炎を纏った鉄の塊が次々と飛び出し、屋上を埋め尽くす怪物の群れへと降り注いでいく。

「あちっ!あちちち…!」

頭上から降り注いでくるのは機関砲の轟音だけではない。熱々に熱せされた大量の空葉莢が落ちてきて、シンジは悲鳴を上げながら床を駆け回る羽目になった。

轟音が止む。

熱々の空葉莢の雨も止む。

顔を上げた。

周囲を埋め尽くしていた硝煙の幕は、風によつて瞬く間に掻き消える。

晴れた煙の向こうに現れた風景。

つくづく、自分を取り囲んでいた群れが、あの空色髪の少女の群れでなくて良かったと思う。

死屍累々という表現がぴったり。

屋上は、ミンチ化された怪物の死体で埋め尽くされていた。

「お待たせ！ シンジ！」

この凄惨な光景を生み出した張本人のものとは思えないような明るい声が、シンジの背中に投げられた。

「お迎え！ 苦労さん、アスカ」

シンジは操縦席の窓ガラスから顔を出すアスカに向かって手を振った。

「ちよつと待つて。近場に着陸させるから…、つて、うへっ」

不意にアスカが視線を遠くにやり、うんざりしたような声を上げたので、シンジはア

スカの視線が向かう先に目をやった。

「げっー！」

目にしたものに、思わずシンジもうんざりしたような呻き声を漏らしてしまう。

例の出入口から、またもや怪物の群れが懲りずに溢れ出てきているのだ。

怪物たちはその一つ目にシンジたちの姿を捉えると、全身の筋肉を総動員させてシンジたちの方へと迫ってくる。

「アスカ！機体を下げてー！」

振り返ったシンジは、アスカに向かって怒鳴った。

「え？！」

「早くー！」

今度はアスカが、シンジに指示されるがままに操縦桿を動かし、機体をシンジが居る屋上から下方へと移動させた。

シンジは屋上の端っこに立つ。

すぐ下には、VTOL機の大きな機体。

目標としては十分な大きさだ。

ふと視線をずらしてしまうと、VTOL機の遙か下方に広がる地上が目に入る。

山の頂上、その上に点在する雲すら、VTOL機の下にある。

怪物たちを大量に飲み込んだこの光景に、先ほどは頼もしささえ感じていたが、今度は立ち眩みがしてしまった。

慌てて視線をVTOL機へと戻し、意識を集中させる。

単座式の操縦席。ガラス窓の向こうに、強烈なビル風に煽られる機体を必死に制御している彼女の姿が見えた。

彼女の顔を見つめる。

不思議だ。

途端に立ち眩みが止んだ。

シンジは両腕を広げる。

窓越しに見える彼女の顔を見つめながら。

「よつと…」

軽い掛け声と共に、屋上の床をそつと蹴った。

「え？」

暴れる操縦桿を必死に握り締めながら、屋上の隅に立つシンジを見上げていた。

そのシンジの足が屋上から離れたような気がしたので、アスカは間の抜けたような声を上げる。

見間違いだろうか。

いや、見間違いではない。

シンジの足は、明らかに屋上から離れている。

まるで鳥の羽ばたきのように、両腕を広げながら、屋上から跳躍したシンジ。

あいつ、いつの間にか飛べるようになったのだろう。

感心してシンジの様子を見守っていたが。

「おいおいおいおーい!?!」

自由落下を始めたシンジの体。

アスカは慌てて操縦桿を手前に引き、V T O L機の機首を上げた。

ドン!

上げたV T O L機の機首が、その鈍い音と共にがくんと落ちる。

窓ガラスを通して太陽の日差しが一杯に降り注いでいた操縦席が、急に暗くなった。

窓ガラス一杯に、両腕両足を広げたシンジの体。

窓ガラスにへばり付きながら、シンジは言う。

「ナイスキャッチ」

「もう馬鹿!」

悲鳴とも呆れ声ともつかないアスカの声。

「レイも無事だね?」

操縦席の後方。後部座席ではシートベルトをしつかり括り付けた「それ」が座っていた。突然空から降ってきたシンジに感動しているようで、足をばたつかせながら「おおお」と奇妙な歓声を上げている。

「わわー!」

強烈な上昇気流が駆け抜け、VTOL機の機体が揺れる。機体が大きく傾き、シンジの体が窓ガラスから浮き上がった。

「ちよつとー!」

アスカは咄嗟に窓から腕を突き出し、シンジの腕を掴んだ。

「アスカ…、まるでスタローンみたいだ…」

一方では操縦桿で暴れる巨大な機体をコントロールし、一方では転がり落ちてしまいうようなシンジの腕を引っ張る。そんな男前のアスカの姿に、感嘆の声を漏らすシンジである。

大きく傾いた所為で、機体が巨大な構造物の壁に接近しそうになる。

「くなくそー!」

アスカは下品な掛け声と共に、操縦桿を自分の方へと引き寄せる。壁をすれすれで躲した機体は機種を大きく上げ、たちまち高度を上げていく。

「このまま逃げるわよー」

シンジを機内に引き入れている余裕はない。アスカはシンジを操縦席の窓ガラスに乗つけたままで、この場から飛び去ろうと考えた。

垂直飛行から水平飛行へと移行し、屋上すれすれを飛ぶ機体。すぐ下では、無数の怪物たちがVTOL機に向かって飛び掛かってくるが、さすがの怪物たちも高速で飛んでいく機体にまでその牙を届かせることはできない。

機体が安定してきた。

ぐんぐんと高度が上がっていき、巨大な構造物の屋上が急速に遠のいていく。

どうやら上手く逃げられそうだ。

ほっとするアスカ。

そのアスカの視界。

視界の隅っこに映り込んだもの。

アスカたちが出てきた出入口以外は何もない、真つ平だったはずのただっ広い屋上。

その床の一部が開き、その下から何かがせり上がってきた。

それは機関砲台座。

台座の上に備えられた、完全に自動化された速射砲は、淀みない動きで砲身の先端をある方向へと向ける。

速射砲の砲口が、アスカの視線とぴったり絡み合った。

「くっ！」

すぐに回避運動に移ろうとしたが、アスカの見つめる先に、窓ガラスに必死にへばり付くシンジの姿があった。操縦桿を傾けることに、一瞬躊躇してしまふ。

その一瞬が、命取りになった。

アスカが視界の隅で強烈に瞬く閃光を確認した次の瞬間には、VTOL機の右回転翼が吹き飛んでいた。

たちまち操縦席のそこかしこから警告音が鳴り始め、機体が暴れ出した。

「わあああ!!」

急降下を始める機体。浮き上がるシンジの体は完全に逆立ち状態となった。

シンジは必死で操縦席の窓枠にしがみ付く。

「シンジィー！」

アスカも懸命にシンジの腕を握り締める。

左右に暴れる操縦桿を支える右手。

振り落とされそうなシンジの腕を掴む左手。

さしものアスカの腕も限界にきていた。

窓越しにアスカの顔を見る。

腕の痛みに苦悶の表情を浮かべながら、事態の收拾に必死になっている。落下する機体。

振り落とされそうになる自分。

今の彼女に、2つの危機を同時に対処させる訳にはいかない。

この時のシンジの決断は早かった。

「アスカ…」

「何よー…こんな時にー！」

妙に冷静なシンジの声が、悪戦苦闘しているアスカにとっては却って腹立たしく、乱暴な返事をしてしまった。

「レイの事。頼んだよ」

「え？」

アスカがシンジの方に視線を向けた時は、すでにシンジの手は窓枠から離れた後だった。

「シンジー!!」

離すまいと、シンジの腕を握っていた手に力を籠めようとしたが、シンジの腕はアスカの腕をずらすすると滑り抜け、そしてシンジの体は機体から離れるとあつという間に高くへと舞っていき、そして見えなくなつた。

第七話

「シンジ！ うそっ！ そんなっ！ やめてよ、バカシンジ！」

シンジが空の彼方に消えてしまい、たちまちパニックに陥ってしまうアスカ。

しかし訓練に訓練を重ねてきた身体は勝手に動いてしまう。

シンジの腕を離してしまった左手で、コンソールのスイッチを次々と押ししていく。

砲撃を受けて火を吹いていた右回転翼のエンジンから白い消火剤が噴き出し、炎を消していく。続けて左回転翼を停止させて左右不均衡だった推進力をゼロにする。

動力を失ったVTOL機は巨大なグライダーと化した。

もとより滑空には不向きな構造のVTOL機。高度計は恐ろしい速さでその目盛りを減らしていく。

近づいてくる地上。真っ赤な大地。

アスカは後部座席で、きやあきやあ悲鳴を上げ続けている「それ」に向かって怒鳴った。

「不時着するわ！耐衝撃姿勢！」

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、!!」

「黙れ!!舌嚙むわよ!!」

言葉は伝わらなくてもアスカの凄みは伝わったのか。「それ」は恐怖に顔中を引き攣らせながらも口を噤んだ。

遥か下にあつたはずの地表。それが、すでに目の前にまで迫っている。

幸いにも迫る地表は更地になっていて、障害物らしきものは少ない。

アスカは血走った目で計器と眼下の大地とを交互に見やる。

「大丈夫……あたしならやれる……あたしならやれる……」

高度計は間もなくゼロを刻む。

地上に転がる岩や枯れた木々がはつきりと見えてきた。

地上の急接近を知らせる警報が一際高い音を鳴り響かせたその瞬間。

「お願い……」

彼女にして珍しく祈りの言葉を吐きながら、その左手は神業の如き素早さで一連の作業を行った。

水平飛行から垂直飛行へと切り替えるスイッチを叩くと、沈黙していたエンジンを再点火、さらにスラストレバーを殴るように押し上げ、エンジンを一気にフル回転させた。

停止していたエンジンが唸り、生き残った左回転翼が急速に回転し始める。ふわりと、シートベルトで座席に括り付けられていたアスカの体が浮いた。

機体を覆ったのは、地表への激突という破壊的な衝撃ではなく、まるでふかふかのクッションの上にも丁寧に下ろされたような、ふんわりとした浮遊感。

そして。

ドン！

今度こそ凄まじい衝撃。

規定を遥かに上回る速度で地表に降り立ったVTOL機。巨体を支える主脚はたちまち折れ、傾いた主翼が地面に触れ、地表を削っていく。



この世界は何て恐ろしい場所なんだろう。

「みんな」を溶かしてしまった青い液体。

群れをなして襲ってくる恐ろしい化け物たち。

椅子に縛り付けられたと思ったら、次々と襲ってくる衝撃。

こんな世界に、出てくるんじゃないかった。

あの濁った液体の中でぶかぶかと浮いているだけで良かった日々の、何と平和だったことか。

もし「それ」の今の心情を言語化できたとしたら、そのような言葉が並ぶに違いなかった。

体を座席に縛り付けるシートベルトに両手でしがみ付き、膝を折って体を縮こませ、目を閉じるのも怖いとばかりにかつと見開いた両目で、所々から火花を散らす天井を睨んでいた。

衝撃が止んで、静かになっても、しばらくは全身を硬直させて動けなかった。

ぼんやりと天井を見上げていたら、轟音に晒され一時的に麻痺していた聴覚が復活してきた。

どこからから人の声がした。

「ああああ……」

身じろぎする。

後部座席に縛り付けているシートベルトが、「それ」の動きを邪魔する。バックルの解除方法なんて知らない「それ」は、肩を右に左に何度も揺り動かし、身を振らせながら、何とかシートベルトの束縛から脱出。

途端に、

「あうっ！」

座席から床に真つ逆さまに落ちてしまった。

「うううう……」

打ってしまった頭を摩りながら、おずおずと立ち上がる。

「それ」が座っていた席の一つ前。操縦席の横に立つ。

そこに座る彼女。

赤毛の少女。

ちよつと。

いや。

かなりおつかないけど、でもここまで手を引いて導いてくれた少女。

その少女が膝を抱え、その膝に額をくっ付け、その細い肩を震わせている。

「嫌よ……、そんなの……、シンジ……、シンジ……」

「あああ……」

「それ」の手がアスカの肩に触れようとした、その時。

「あんたの所為よ！」

突然顔を上げたアスカは、「それ」の手を乱暴に振り払った。

「あんだなんかを助けなければ！」

両目を見開き、両眉を吊り上げた、アスカの顔。

今にも「それ」に掴みかからんばかりの、怒りに満ちたアスカの顔。

しかしすぐに眉尻は「ハ」の字に下がり、目は細くなり、その顔はたちまち悲しみに暮れる。

「シンジは……。あんななんか…助けなければ…。……シンジは……」

再び顔を俯かせ、額を膝にくっ付け、肩を震わせ始める。

揺れる赤毛を見つめる。

しばらく赤毛の頭をつむじを見つめていて。

すつと視線を落とし、足もとに向けて。

そして座席の奥の薄暗いキャビンを見つめて。

今度は割れた窓ガラスの向こうに見える外の風景を見つめて。

ここには自分と赤毛の彼女と、2人しか居ないことを確認して。

天井を見つめる。

14年振りに再会して。

それでもあの時は14年の歳月で鬱積したものが爆発してしまって。

あいつは自分たちのもとを飛び出してしまって。

それでもまた再会できて、あいつは散々辛い目に遭って、なお強い意志で自分たちと一緒に戦うと誓ってくれて。

いつの間にか、当時のように軽口をたたき合えるような雰囲気になっていて。

ああ、もう少しで14年前に戻るんだな、とそう思っていた矢先。

あいつは空へと消えてしまった。

まだ自分の手には、あいつの腕がすり抜けていった感触が残っている。

なぜ、この手はあの時あいつの腕をもっとしっかりと握っていなかったのだろうか。

もう何も見えない、見たくない。

何も聴こえない、聴きたくない。

自分の周囲に厚い厚い殻を築き、自分の世界に閉じこもろうとしていたアスカの意識。

しかしそれはアスカが一生懸命造り上げた殻をいとも簡単に突き破って、アスカの覚へと届いた。

額を、くっつけていた膝から離し、顎を上げる。

視線を少し上に上げる。

うんざりした。

本当にもう、いい加減にしてと言わんばかりの、げんなりとした顔で、「それ」の顔を
見上げた。

「何よお…」

「それ」は天井を見上げたまま。

「何よお…、もお…」

アスカの抗議の声にも、耳を貸さない。

「あ、—————!!」

大声を上げて泣き喚いている「それ」。

赤い双眸から大粒の涙を流している「それ」。

小さな口を目一杯広げ、人目もはばからずに大声で泣いている「それ」。

「なんであんたが泣いてんのよお…」

「あ、—————!!」

「うるさいなあ…」

「あ、—————!!」

「もう勘弁してよお…」

「あ、—————!!」

膝を抱えていたアスカはついにその膝を伸ばし、座席から立ち上がり、「それ」の顔の

前に自分の顔を突き出した。

「うっさい!! 泣くな!!」

急に目の前でアスカに怒鳴られ、泣き声を飲み込んだ「それ」は一瞬きよんとしてアスカの顔を見つめる。

しかしすぐに。

「あ——————!!」

アスカの顔を見つめながら泣きを再開。

「ああーもー……」

「あ——————!!」

「やめてよお……」

「あ——————!!」

「泣きたいのはこっちよお……」

「あ——————!!」

「シンジい…、何とかしないさいよお……」

「あ——————!!」

「あんたがやり始めたことでしょお……」

「あ——————!!」

「さつさとこいつ黙らせてよお…」

「あ———！！」

「ねえ…、シンジい…」

「あ———！！」

「さつさと出てきなさいよお…」

「あ———！！」

「シンジい…」

「あ———！！」

「シ…ン…ジ…」

「あ———！！」

「うう……」

「あ———！！」

「ううわあ……」

「あ———！！」

「うわああああ——ん！」

「あ———！！」

「わああ——ん！」

「あ………あ………あ………あ………」

「わああ………ん！」

「あ………あ………」

「わああ………ん！」

「………」

とつてもおつかない赤毛の彼女が泣いている。

人目もはばからずに。

青い双眸から大粒の涙を零しながら。

自信ありげな大きな口を、今は情けないまでに歪ませて。

そんな彼女の泣き顔をぼかんと見つめていた「それ」。

困ったように辺りをきよろきよろと見渡して。

何度か目をしばたたかせて。

そして。

「あ………!!」

「わああ………ん！」

「あ、――――！！」

「わああ――――ん！」

2人分の鳴き声が木霊する機内。

2人の少女は互いに向かい合いながら、声が枯れるまで泣き続けた。

お互い泣き疲れ、いつの間にか狭い機内の床にぺたんと尻餅を付き、互いに肩を寄せ合っていた。

妙な対抗意識が芽生えるもので、「それ」が泣き止むまでは絶対にこっちから泣き止んでやるものかと思っていたが、結局先に泣き疲れてしまったアスカは、今はまだ完全に泣き止まずひつくひつくとしやくり上げている。「それ」の頭を、自身の胸元で優しく抱いてやっている。抱いた「それ」の後頭部をぼんぼんと、ゆつくりとしたテンポで優しく叩いてやりながら。

こんなに泣いたのはいつ以来だろうか。久しく記憶にない。心は未だに悲しみに打ちひしがれているが、流した涙が少しだけ荒んだ心を潤してくれた。

「ありがとね…、あいつのために泣いてくれて…」

アスカの口から漏れたのは、そんな感謝の言葉だった。

優しい言葉を口にする、ほんの少しだけ心に余裕が出てくる。ふ、とアス力は笑った。

それにしても何て無様な泣き顔だったことだろう。両目尻をだらんと垂らし、だらしなく口を広げ、顔中をしわくちやにした泣き顔。

自分が知る「彼女」は、それはもう鉄仮面と表現するのがピッタリな、瞬きする以外は殆ど顔の筋肉を使わない、その顔に感情というもの殆ど宿さない女だったが。

「えっひいきって…、泣いたことあったのかな…」

電話越しに聴いた「彼女」の最後の言葉を思い出す。

感情なんて持たない、人形のような女だと思っていたけれど。「彼女」にも人に感謝できる心があつて、また想い人を想って頬を赤らめる感情の起伏も持つていて。

鼻を大きく吸った。自分が着るシャツの胸を、涙と鼻水で汚している「それ」の横顔を見る。

「そうよね…。あんただって…、生きてるんだもんね…」

「それ」の空色の髪に顔をうずめる。

「生きてたら…、そりゃ泣くことだって…あるよね…」



「ほら、レイ。これに鼻かんで」

「びいびいびい…」

「もう。女の子なんだから、最低限の身だしなみは整えなきゃ」

「うううううう」

「えこひいきも見た目にはほんと気を使つてなかつたわね。ドライヤーとか櫛とか使つたことあつたのかしら、あいつ」

「おおおお…」

「はい、これでオツケーと。じゃあ立てる？」

「ううう…」

ハッチをこじ開け、機外へと出る。

周囲を見渡す。

赤い砂地が延々と続く砂漠のような土地。

V T O L 機の機器は不時着の衝撃で全て壊れていて、ここが何処かも分からない。

機内にあつた緊急脱出用の背嚢を背負う。

後ろでぼんやりと突つ立ってっている「それ」を見る。

「ん…」

アスカは「それ」に向けて手を差し出した。

「うう…」

「それ」はすぐにアスカの手を握った。

「それ」の手を引きながら、歩き始める。

昨日はあいつの手を引いて歩いて。

今日は「それ」の手を引いて歩いて。

「まったく…。たまには誰かの手に引かれてみたいものだわ…」

そう独り言ちるアスカの視線の先にある砂の丘から、数羽の鳥が羽ばたいた。

風にばたつく髪を押さえながら、空高くに舞い上がる鳥を見上げる。

「へー、こんな所にも生き物があるんだ…って、ちよつと！」

「ああああああ」

初めて見る鳥に感動でもしたのか、「それ」が奇妙な歓声を上げながら、走って空の鳥を追いかけ始めた。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ！」

「ああああああ」

「んもうー！」

腕を懸命に振って走る「それ」だが、握ったアスカの手は離さない。走る「それ」の手に引つ張られるままに、アスカも走るしかない。

「ふふっ」

アスカの口もとが綻んだ。

「ははっ」

もう笑うしかなかった。

「シンジ…」

この空に消えてしまったあいつの名前を呟く。

「あたし…、もうちょっと頑張ってみるわ…」

第一章 《終》

第二章

第八話

相変わらず人格や知性というものが感じられない、ぼんやりとした表情。

「ああああ……」

それでも目にするもの、触れるもの全てが初めてのものだから。

「うううう……」

空に鳥が飛び交えば掴んでみようと手を伸ばし。

「おっおっおっおっ……」

砂地に足が沈めば慌てて足をばたつかせ。

「およよよよよ……」

強めの風が脇を通り抜けたらくすぐったそうに肩を竦ませる。

目にするもの触れるものにいちいち大袈裟に反応する「それ」。最初こそそんな「それ」の様子を愉快そうにみていたアスカだったが、あっちへふらふらこっちへふらふら

寄り道してしまう「それ」に合わせては、歩くペースは一向に上がらない。このままでは何処にも辿り着けないまま陽が暮れてしまうため、途中から「それ」の腕を強引に引っ張って歩みを進めた。

そうしている内に、変化の乏しい風景が延々と続く赤い砂漠にいい加減飽きてしまつたらしい「それ」は、今はいかにもやる気なさげに両腕をぶらんと下げ、力なく歩いている。

「ちよつと。しつかり歩いてよ」

ずっと「それ」の手を引っ張り続けて歩いてきて、さすがのアスカも疲れてきた。まるで歩き疲れた子供のようになり、両肩を左右に大袈裟に揺らしながらという余計に体力を消耗しそうな歩き方をする「それ」を叱咤する。

「ああううう……」

「ああもう抱き着かないでよ！ 嫌よ！ あんたをおんぶするなんて！」

「うううう……」

「そんな風に睨んでも無駄よ。それよりもほら、見て、あれ」

自分の体に纏わりついてくる「それ」を引き離しながら、アスカは前方を指差した。

「あそこまで頑張つて歩こ。ね？」

アスカが指差す方向。真っ赤な砂地が延々と続く砂漠の向こうに、廃墟と化した小さ

な街が見えた。

遠目から見ればそれは小さな街に見えたが、実際に近づいてみれば、かつてはそれなりに大きな街だったらしい。平屋の低い建物に見えた建造物は、砂に埋もれた建物のてっぺんの部分で、砂を全て取り除けば砂の下からそれなりに大きなビルが現れるに違いない。そんな頭だけをぽつんと出した建物が、方々に点在している。

アスカと「それ」がその廃墟化した街に入った頃には、陽はすっかり暮れてしまい、周囲を夜の帳が包み始めていた。

手近の建物の中に入って、そこで一晩を過ごすことにした。

V T O L 機から持ち出した緊急脱出時用の背囊。中にはサバイバルに必要な物品が一通り揃っていた。

「おおおお……」

その一つである、床に置かれたシングルバーナー。その先端から立ち昇る青白い炎を、「それ」はまるで猫のように床に這いつくばりながら、物珍しそうに見つめている。目を輝かせている「それ」の様子に、アスカは口許を綻ばせた。

「ふふっ。「人類、火を発見す」、ね」

シングルバーナーのゴトクに乗せていたコツヘルの蓋を開ける。中身の様子を確認した後にコツヘルを持ち上げ、中身の半分を別の小さなコツヘルに移す。

「そんなじゃ、人類史上最大の発明をあんたにご覧に入れましょうか……」

コツヘルの中身にフォークを突き刺し、「それ」の前に置いてやる。体を起こした「それ」は、アスカが置いたコツヘルの中身を覗き込んだ。コツヘルの中には濁った液体と、その中に浮かぶ幾つもの長細い糸状のもの。

「いんすたんとらあめーん!」

どこかの未来の青狸型ロボットのようないくつ口調で自慢げに言ったアスカは、自分の手に残ったコツヘルのラーメンをフォークで掬い、ずらずと欧州出身にしては実に慣れた様子で盛大な音を立てながら啜り始めた。

「うつまーい! もうさいつこー! ラーメンなんて何年ぶりだろお……」

一口啜った途端に手を頬に当て、うっとりとした表情で天井を見上げる。

「おおお……」

そんなアスカのどこか恍惚とした表情を、ぼんやりと見つめていた「それ」。

コツヘルの中身を、真上から覗いてみる。立ち昇る湯気と共に、嗅覚をくすぐる匂い。

「おおお……」

初めて体験する、摩訶不思議な、何だか嗅ぐだけでふわふわと良い気分になるような

匂い。

もう一度、アスカを見る。

「このいかにも体に悪そうな味がまた堪んないんだよね」

相変わらず美味しそうにコツヘルの中身を嚼っている。

ごくりと、生唾を飲み込んだ。

じつとコツヘルを見つめて。ゆつくりと、コツヘルに手を伸ばして。丸いコツヘルを両手で包み込むように手に取って。

「あうっ」

熱々のコツヘルに直に触れてしまい、「それ」はびっくりして手を引っ込めてしまう。

まるで警戒するように、じつとコツヘルを睨んだ。

「もう何やってんのよ。ここを持つよ。ほら」

アスカは自分のコツヘルを床に置くと、「それ」の前に置いたコツヘルの取っ手を「それ」の左手に握らせ、ついでにフォークも「それ」の右手に握らせてやった。

「早く食べなさい。伸びちやうわよ」

そう「それ」に告げて、再びラーメンを嚼り始めるアスカ。

そのアスカの動きを、まるで観察するようにじつと見つめる「それ」。

赤毛の彼女は何やら先端が奇妙な形をした平べったい板状の棒を器に突っ込み、しばらく器の中をござござとした後で棒を引き抜くと、棒の奇妙な形をした先端に何本もの糸状のものが絡みついている。その糸状のものは開いた少女の口の中に吸い込まれ、ずずという音と共に少女の口の中に消えていった。そして、

「んんんん！」

彼女の幸せそうな顔。

温かい器。器から漂う香り。

「それ」に与えられた、初めての真つ当な食事。

ぐうう、と「それ」の腹から音が漏れる。

「それ」は正面のアスカの様子を窺いながら、見様見真似でフォークの先端をコツヘルの中に突っ込む。汁の中に沈めて、ござござ動かしてみても、そしてフォークを引っこ抜いてみる。

何も引っこ掛かっていないフォークの先端。

もう一度突っ込む。ござござ動かして、そして引っこ抜く。やはりフォークには何も引っこ掛かっていない。

もう一度突っ込む。ござござ動かして、そして引っこ抜く。一本の麺がフォークの刃の隙間に引っこ掛かったが、引っこ抜いた瞬間にするすると汁の中に戻ってしまう。

突っ込む。引っこ抜く。突っ込む。引っこ抜く。

不毛な動作を繰り返す「それ」。

「あー！」

堪えきれなくなった「それ」は、痲癩を起こしてフォークを床に投げってしまった。そして、

「うううう」

コッヘルの中に顔を突っ込み、口で直接ラーメンを啜り始めた。

「ちよつとやめてよ。犬じゃないんだから」

「げほっ、げほっ！」

たちまち咳き込んでしまい、コッヘルから顔を離す「それ」。

「それ」の口の周りは汁で汚れ、小さな鼻には麺が一本ぶら下がっている。

「ぷっ！」

「それ」のあまりにも下品な喫食手段に顔を顰めていたアスカだが。

「ははははははっ！」

滑稽な「それ」の顔を見て盛大に吹き出してしまった。

床を転げ回って笑っているアスカを、ぼんやりと見ている「それ」。

「うううう……」

とりあえず初めて口にしたラーメンの味はいたく気に入ったようで、笑い過ぎてひきつけを起しているアスカの事は放っておいて、再びラーメンの中に顔を突っ込もうとした。

「もう待ちなさい。こうするのよ」

アスカは床に転がったフォークを拾い上げると、シャツの裾でフォークを拭き、「それ」が持つコツヘルの中へとフォークの先端を突っ込んだ。フォークを摘まんだ指を捻り、フォークをくるくると回していく。

ゆつくりとフォークを引き上げていく。

徐々にコツヘルの中からその姿を現していくフォーク。

固唾を呑んで見守っていた「それ」の目が、大きく見開かれていく。

「おおおおお……」

「それ」の口から感嘆の声が漏れた。

フォークの先端には汁を纏ってまるで黄金のように光輝く麺の塊。

「おおおおお……」

どんな魔法を掛けたのだろう、とでも言いたげな表情で、アスカの顔を見つめる「それ」。

「人からこんなにも素直な尊敬の眼差しを受けたのは初めてだわ……。ほら、口開けて。」

あーん

アスカに促されるままに開けた「それ」の口に、アスカはそつとフォークの先端を入れた。

「あむ」

口に入れたものを絶対に逃すまいとばかりに、すぐに口を閉じる。

もごもごと、この1日でようやく覚えた「咀嚼」を始める。

ごくと、「それ」の喉が鳴った。

「んーんー」

口を閉じたまま、頭を左右に揺らす「それ」。

「美味しい?」

アスカの問い掛けに「それ」は返事をしないが、弾むように頭を左右に揺らすその仕草は、「それ」が「美味しい」と言っているようにアスカには見えた。

「美味しかったら笑いなさいよ」

「あうあうあう」

アスカの呼びかけに、しかし「それ」は「次、次」とばかりに口をぱくぱく開閉させ始めた。

「もう。まるで鳥の餌やりね」

フオークの先端にラーメンを絡ませ、「それ」の口に運んでやる。

「あむあむあむ」

頭を左右に揺らしながら口の中のもの咀嚼する「それ」。その表情は、ぼんやりとしたまま。感情を表情で表すことが出来ない代わりに、動きで表現しているような「それ」を、アスカは優しい気な眼差しで見つめる。

「アタシ、さつき何年か振りに腹を抱えて笑ったわ…」

3 口目を、「それ」の口に運んでやる。

「あんたも笑えたらいいね」

頭を左右に揺らしながら、あむあむと咀嚼する「それ」。

「大声で泣いて…、顔をくしゃくしゃにして笑って…、美味しいものをお腹一杯食べて…」

4 口目を運んでやる。

「それはきつと、えこひいきにも出来なかったことよ…」

「げうっ」

「わっ、げつぶしないの!」

背囊に入っていた寝袋は成人男性用。少々きついですが、2人の少女は何とか一つの寝袋

の中に収まった。

「それ」と共にする2回目の寢床。やっぱり「それ」は暖を求めてアスカの体に抱き着いてくるが、もう慣れたというか諦めてしまったアスカは、好きなようにさせてやっている。

ふと、視線を頭上へと向けた。

「わあ……」

思わず感嘆の声を漏らしてしまった。

隣ですでに口を開けて寝息を立て始めている「それ」の腕を肘で小突く。

「ううう……」

「それ」は眠いまなこを擦りながらアスカを見る。

アスカは顎をくいくいつと2度動かして、「それ」に視線を上に向けるよう促した。

アスカの形の良い顎が指し示す方向に視線をやる「それ」。

「おおお……」

「それ」の口からも、やはり感嘆の声漏れた。

2人の視線の先にあるガラスのない窓。

その窓から見える濃紺の夜空。

その一面に、無数の星々が瞬いている。

「ふふっ」

初めて見る満天の星空を食い入るように見ていた「それ」。不意に隣の赤毛の彼女が声を出して笑ったので、視線を隣に向けた。

「それ」から投げ掛けられる視線に、アスカは自分が気付かない間に笑っていたことに気付く。

「いや。こんな風にゆつくりと星を見るのも、久しぶりだなくと思つてね…」

アスカは星空に向けていた視線を、ゆつくりと隣の「それ」へと向ける。

「ごめんね…、レイ…」

「それ」に向けられた、アスカの掠れた声での呟き。アスカの言葉をこれっぽっちも理解していない「それ」は、ただぼんやりとアスカを見つめている。

「あんたを壊そうとして…。あんたの姉妹たちを…壊してしまつて…」

あの地下の空間で、自分がやったこと。

それはヴィレのパイロットとしては、当然の行為。

敵戦力を削ぐためにやった自分の行為に、何ら恥ずべきものはないはず。

それでも。

「あんたたちには何の罪もないのにね…」

まだ何者でもない「彼女たち」を、無抵抗な「彼女たち」を破壊した自分の行為に、果

たして正当性はあつただろうか。

アスカはぐつと、「それ」の胸に自分の顔を押し付ける。

「あんたも…、生きてるのにな…」

「それ」の胸から聴こえる鼓動。「それ」の体から伝わってくる温もり。

「それ」が生きている証を肌で感じて。

アスカの頭が、小刻みに震え出した。

「ねえ…、レイ…」

アスカの口から呟かれる声も、震えていた。

「シンジ…、本当に死んじゃった…のかな…」

自身の顔を「それ」の胸で隠し、アスカは嗚咽を漏らし始めた。

頭に感觸。

何かが頭に触れている。

何かが自分の頭を撫でている。

「それ」の手が、自分の頭を撫でてくれている。

「なに…？ アタシを慰めてくれるの…？」

「ああああ」

相手の胸に顔を押し付けたまま呻くように言うアスカの声に、まるで返事をするように「それ」は唸る。

「ありがと…ね…」

「ああああ…」

「ありがと…、レイ…」

「ああああ…」

「優しいね…、あんた…」

「ああああ…」

「えこひいきも、ああ見えて優しいところあったんだよ…」

「ああああ…」

「悩んでるアタシに声かけてくれたり…、食事会に招待してくれたり…」

「ああああ…」

「まあとことん不器用な奴だったから全部空回りしてたけど…」

「ああああ…」

「もう少し一緒に過ごせたら…、えこひいきとも友達になれてたかもね…」

「ああああ…」

「ああ、でももう少ししたら、えこひいきと会えるのかな…」

「ああああ……」

「あんたをヴンダーまで連れて行って……」

「ああああ……」

「あんたの中にあいつの魂を入れて……」

「ああああ……」

「あれ……？ でもそしたらあんたは……、って、いてててて！」

突然頭皮に痛みが走り、アスカは悲鳴を上げる。

「ちよ、ちよつとあんた何やってんのよー！」

自分の髪の毛を引つ張る「それ」にアスカは怒鳴った。

「それ」はアスカの頭を撫でているのではなかった。アスカの頭に付いていた何かを、取り外そうとしていたのだ。

「あんた、それ！」

ついにアスカの頭から目的のものを奪い取った「それ」。

「それはダメよ。返して」

「それ」の手に握られたもの。

エヴァンゲリオン・パイロットに与えられる、インターフェイス・ヘッドセット。

エヴァを操縦する時以外には身に着ける必要のないものだが、エヴァのパイロットで

あることに強い誇りを持つているアスカは、平時においても髪留め代わりとして頭に被っていた。いつもは寝る前に外しているのだが、色々あり過ぎた今日は頭に被ったそのまま寝袋に入ってしまった。

ヘッドセットをぐねぐねと折り曲げたり振り回したりして、玩具にしている「それ」。どうやら不思議な形状をしたヘッドセットが、いたく気に入ったらしい。

エヴァパイロットとしての象徴であるヘッドセット。いくら何も知らない「それ」であつても、自身の誇りを玩具にすることは許せない。

「返しなさい」

やや語気を強めて言う。

「うううう……」

「ほら。返して」

「うううう……」

「怒るわよ?」

「うううううう……」

アスカが本当に怒り始めているのを察したのか、「それ」は渋々といった様子でアスカにヘッドセットを返した。

どこか落ち込んでいるような、拗ねているような「それ」の顔。

そんな「それ」の様子に、ヘッドセットを被りなおしたアスカは少々呆れながら。「…もう、仕方ないわね」

「それ」に両腕を伸ばし、慰めるようにその体を優しく包み込んでやった。アスカの温もりに包まれて、しばらくは拗ねた顔をしていた「それ」も、やがて表情は柔らかくなり、目を閉じ、すぐに寝息を立て始める。

暫く「それ」の気持ちよさそうな寝顔を見つめていたアスカ。彼女の意識も、そう間を置かずして眠りの底へと沈んでいった。



何やら外が騒がしい。

喧騒に意識の扉を叩かれ、眠りの底に落ちていたアスカの意識がゆっくりと浮き上がってくる。

瞼を薄く開く。眼球を、柔らかな自然光が刺激する。

いつの間にか夜は終わり、世界は朝を迎えていたようだ。

太陽光に刺激された視覚。続いてアスカの聴覚を、しとしとという雑音が刺激する。次に嗅覚と触覚を、むわつとした湿気が刺激する。

どうやら外は雨らしい。

雨の中を歩いて移動する気にはなれない。

どうせすぐ止むだろうから、それまでもう暫く寝ていよう。

そう思い、寝返りを打とうとして。

隣にあるはずの感触がない。

一緒に寝袋にくるまつていたはずの、「それ」が居ない。

「えーなに？ どこ行つたの、あいつ…」

寝起きの悪さは折り紙付きのアスカは、整つた顔をしわくちやに顰めながら体を起こした。

窓の方へ目をやる。

やはり外では雨が降っている。地表を撫でるような、しとしとと降る静かな雨。

所謂「お天気雨」というものだろうか。雨だというのに外は明るく、天から降り注ぐのは雨だけでなく柔らかな陽射しも降り注いでいて、地上を明るく照らしている。

陽の光を雨粒が反射し、地面に出来たばかりの水溜まりは雲と青空を映し出す。

そこら中がきらきらと輝く、光に満たされた空間。

その中に佇む、一人の少女。

それはとても不思議な現象。

何もない空間から、大量の水が落ちてくる。

しばらくぼんやりと天を仰いでいた「それ」は、広げた両腕を空に向けて伸ばし始めた。

すでに全身はぐっしより。コバルト色のスカートからはぽたぽたと水滴が滴り落ち、白のブラウスはその下に何も着ていない肌にびったりとくっついて、お臍から胸の隆起までがはつきりと見える。

そんなあらゆる格好の「それ」が、しかしアスカの目には酷く幻想的に見えた。

光に満ち溢れた空間で、全身に水滴が付いた少女もまたきらきらと光を纏い、そんな少女が天を仰ぎ、空に向けて腕を伸ばしている。

「えっひいきっ？」

どこか現実離れた「それ」の姿が、何故かアスカに14年前に消えてしまった少女を想起させた。

しかし、

「おおおお……」

「それ」が両腕は伸ばしたままで奇妙な唸り声を上げ、まるでスキップでもするかによ

うに軽やかに飛び跳ねながらくるくると回り始めたものだから、妖精と見紛うような幻想的な空気を纏っていた「それ」は、途端に雨の下ではしやぎまわる無邪気な子供へと姿を変える。

アスカはくすりと口元を綻ばせた。

「なんだ。やっぱあいつだ…」

アスカは床に頬杖を付きながら、窓の外の「それ」を見つめた。

「それ」は相変わらず両腕を空に伸ばし、くるくると回り、わざと水が飛び跳ねるように水溜まりの上でステップを踏んでいる。

何か心を大きく突き動かすような物事に出会った時、声を上げたり、腕を上げたり、スキップしたり、踊りだしたり。全身のあらゆる器官を使って心の中の衝動を表現しようとするところは、「それ」も自分たち人間と大して変わらないらしい。

「それ」は初めて体験する雨という奇妙な現象の下で、実に楽しそうにはしやぎ回っている。

時折、きやつきやと声を上げながら。

え？

と言うか。

「なんだ…。あいつ笑えるんじゃない…」

今もくるくると回っているためその顔はよく見えないが、「それ」の口角は確かに上がっていて、その口からは控えめながら確かな笑い声が漏れていた。

ずっとくるくると回っていていい加減目が回ってきたようで、「それ」の足もとがふらふらとし始めた時。

「ひゃっほーいー！」

突然、どこからか元気のよい奇声が聴こえてきたので、「それ」はびっくりして足を止め、声をした方を見た。

「それ」の視線の先では、窓から外へと飛び出したアスカが、着ていた男物のワイシャツを脱ぎ始めているところだった。

シャツを脱ぎ捨てたアスカは途端に両腕を抱き、肩を竦め、
「つめたーいー！」

と悲鳴を上げる。しかしその悲鳴はすぐに、
「でもきんもちいいーいー！」

歓喜の悲鳴に変わる。

「ああ、シャワーなんて何時以来だろう」

顔を上げ、目を閉じ、全身で雨を受け止めた。

全身の隅々まで天からの恵みを行き渡らせたアスカは、顎を下ろすと、驚いたように目を丸くしてこちらを見ている。「それ」に視線を向けた。

「なーにぼんやり突っ立ってんのよ」

アスカは「それ」の側に駆け寄ると、両腕を伸ばし、「それ」の両手首を掴む。

「ほーら」

そして手を繋いだまま、「それ」と一緒にくるくると回り始めた。

「はっはっは。それそれそれえ！」

アスカは声を上げて笑いながら回転する速度をどんどん上げていく。

「あうあうあうあうあう」

すでに十分に目が回っている「それ」は、アスカに強引に振り回されて、ますます目を回していく。

「うあー！」

「わわっ！」

ついに「それ」の両足が絡まってしまい、背中から地面に倒れてしまった。「それ」の腕を握っていたアスカも、「それ」に引つ張られる形で地面に倒れてしまう。

地面に大の字になっているアスカと「それ」。

雨は小降りになり始め、小さな雨粒は2人の顔を柔らかく撫でている。

ふと隣を見ると、「それ」が口をだらしなく開けながら「ああああ」と情けなく呻き、開いた瞼の内側では眼球が渦を巻くようにくるくると回っている。

その顔があまりにも滑稽で、

「はっはっはっはっはー！」

アスカはまた大声を上げて笑いだす。

何度か瞬きをし、ようやく泳いでいた視界が定まってきた。「それ」は、隣で馬鹿笑いしているアスカの顔を不思議そうに見つめた。

赤毛の彼女が口を大きく開けて奇声を発している。口角を上げ、目を細め、眉尻を下げ、顔中をくしゃくしゃにして。

何だかとても疲れそうなことをしているが、でもそんな顔をして奇声を発し続ける彼女の姿は、どこかとても気分が良さそう。

そんなに気分が良いものであれば、自分もやってみたい。

「それ」の頭の中で、そんな極めて単純な公式が出来上がった。

「はっはっはっはっはっはー！」

突如隣から湧き上がった大きな笑い声に、アスカは驚いて「それ」を見た。

「はっはっはっはっはっ！」

「それ」が、盛大に笑い声を上げている。ただし、表情は真顔のまま。

口を大きく開けて、肩を上下に揺らして、大きな笑い声を上げる「それ」。ただし、表情は真顔のまま。

実に気持ち良さそうに豪快に笑うアスカを真似て、一緒に大声で笑ってみた「それ」だったが、声に出して笑うことと、笑顔を作ることという、2つの作業を同時に行う器用さは持ち合わせてなかったらしい。

真顔で笑い声を上げる「それ」。それがまた可笑しくて、

「きやはははははは！」

アスカの笑い声は収まるどころか更に高鳴った。

「はっはっはっは」

一生懸命アスカを真似て、真顔で笑い声を上げ続ける「それ」。

「きやははははは！」

「それ」の姿が可笑しすぎて、腹が振れるほどに笑い続けるアスカ。

「はっはっはっはっは」

「きやははははは！」

「はっはっはっはっはっは」

純真な笑顔。無垢な笑い声。

へー、こんな顔で笑うんだ。

見る者全てを幸せにするような笑顔。

見ているこつちもついつい釣られて笑ってしまいそうな笑顔。
別に釣られるのを我慢する必要はないから。

「ははははははー！」

結局アスカも一緒に笑った。

雨に濡れ、陽光に照らされ、きらきらと光る廃墟の街を、2人の少女の笑い声が木霊した。

第九話

雨が止み、天から降り注ぐものは強烈な太陽の光のみ。容赦のない日差しは、雨に濡れた地上のものをたちまち乾かしていく。

建物の屋上から伸びる電線らしきケーブルブルに干された男物のワイシャツと学校の制服。アスカも「それ」も、風に揺れる服が作る陰の下で地面の上に大の字となり、服と一緒に体を乾かしていた。アスカは立ち上がると干された服に手を伸ばして乾いたことを確認し、ワイシャツに袖を通す。コバルト色のスカートと白のブラウスも取り込み、「それ」に着せてやった。忘れずに、赤いリボンタイも結んでやる。

荷物を詰め込んだ背嚢を背負った。

さて、何処に行こうか。

行く当てなんてまるでないけれど、とりあえず、自分たちが脱出したあの塔からはなるべく離れた方がいいだろう。遠くに目をやると、昨日半日掛けて歩いたというのに、未だにあの巨大過ぎる塔の姿を、地平線の彼方に見ることができず。せめて、今日中にあの塔が見えなくなるところまで行きたい。

おのずと、向かう方向は決まった。

「じゃあ、行こっか」

天然のシャワーを浴びてすっきりした様子のアスカは、「それ」に向けて手を差し伸べた。

「それ」も、すつかり板についた笑顔を浮かべながら、アスカの手を握り締める。

塔に背を向けて、肩を並べて歩き出す2人。

砂の上に裸足の足跡を付けながら、てくてくと歩く2人。

砂に埋まった建物の数は少しずつ少なくなり、やがて2人は街の外へと出た。

2人の目の前に広がるのは、果てしない赤の砂漠。

地平線は遙か向こうにあり、全く行き先の見えない場所に、しかし2人の足は少しも躊躇うことなく進んでいく。お互いの手を、しっかりと握り締めながら。

後にした廃墟の街が見えなくなり始めた、その時だった。

彼方から轟く爆音。

それを耳にした瞬間、アスカは握った「それ」の手を一旦離すと、「それ」に目配せでここに居るよう指示し、近くの砂の丘へと走る。

丘の頂上まで一息で駆け上がったアスカは、音がする方向に顔を向け、目を凝らした。その顔が、たちまち険しくなる。

「…もう。ヴィレは何やってんのよ…！」

今度は砂の丘を一気に滑り降りると、指示された通りぼんやりと突っ立っていた「それ」の手を握り、そのまま走り続ける。ついさつき、発ったばかりの廃墟の街に向かつて。

空の彼方から轟いた爆音はどんどん近くなり、そして身を隠すところなどなにもない砂漠の上を駆ける2人を中心にして、上空を大きく旋回し始めた。

背後に回った爆音は、まっすぐに2人の背中を指す。迫ってくる爆音から逃げようと、アスカは「それ」を引っ張りながら懸命に走り続けるが、爆音の迫る速度は2人が走る速度を遥かに凌駕していた。

よく晴れ渡った空。

空から降り注ぐ太陽の光は廃墟の街の隅々までを明るく照らしていたが、突如、地上を駆ける2人の周辺だけが真っ暗になった。

アスカは走りながら空を見上げる。

空を覆いつくした巨大な機影。

アスカたちが巨大な塔からの脱出に利用した機とは比較にならないほどの大きさを

誇る、地上強襲用の超大型V T O L機。

大型V T O L機の底に備え付けられた機関銃座。その銃身が、まっすぐに地上の2人へと向けられる。

突然、目の前の地面が爆ぜた。

「あー！」

舞い上がった砂を頭から被り、「それ」は悲鳴を上げるが、アスカは構わず「それ」の手を握ったまま走り続ける。

それが大型V T O L機からの機銃掃射であることは、もちろんアスカは分かっていたが、アスカは無視した。2人の行く手の地面が、上空から降り注ぐ無数の銃弾で次々と爆ぜるが、アスカの足は止まらなかつた。

あの地下の水槽にストックされていたクロウンたちを尽く破壊した今、「それ」はネルフにとって唯一残された貴重なバックアップだ。「それ」が自分の側に居る限り、敵は強引な手は打てないはず。現に、敵は上空から丸見えの自分たちを一息に殺そうとはしていない。もし敵が本気であれば、最初の一撃で2人は蜂の巣の巣になつていたはずだ。

「それ」には申し訳ないが、アスカは「それ」を人質にすることが、この窮地を乗り越えるための材料の一つになると目論んでいた。

目指す廃墟の街まであと少し。

街まで戻れたら、とりあえず、どこかの建物に身を隠そう。

隠して、それから次の手段を考えよう。

大型VTOL機の側面に備えられた砲座。砲座からによきつと水平に伸びる、長い砲身。

大型VTOL機はその巨体を大きく傾ける。機体の傾きと合わせて、砲身の先端でぼつかりと口を開けた大きな砲口が地上を睨んだ。

「えっ？」

頭上から鈍い爆発音が轟き、アスカは小さな声を上げて視線を上げた。

空を見上げて。

しかし見上げたその時には、すでに何かが視界の隅を横切っていた。

眼下の廃墟の街が、雷鳴のような爆発音を響かせながら一瞬にして巨大な土煙に包まれる。

地上に向けて一発の榴弾を撃ち込んだ大型VTOL機。砲弾の着弾点を中心に、上空

をぐるりと旋回し、水平飛行から垂直飛行へと移行する。上空をホバリングする大型V T O L機が発生させる強烈な吹き下ろし風が、地上を包んでいた土煙をたちまちに掻き消してしまふ。土煙の下から現れたのは瓦礫の山。大型V T O L機から放たれた砲弾は、たつた一発で廃墟の街の一角を破壊してしまつていた。

限界ぎりぎりまで高度を下げた大型V T O L機。地上に向けて、何本かのロープを垂らす。ロープ伝いに、機内から地上へと降りていく何人もの人影。武装した兵士たちを降ろし終えた大型V T O L機は、機首を上げてぐんぐんと高度を上げていく。

大型V T O L機が響かせる爆音の下で、兵士たちはお互い身振り手振りで合図を送り合つた後、ある地点を指して走り始める。そこは、大型V T O L機が地上に砲弾を撃ち込む寸前まで、2人の少女が地面を走つていた場所。砲弾が落ちたのはその場所からずっと西だったが、砲弾の強力な破壊力は着弾点から遙か離れたその場所にまで、爆風と土砂と瓦礫をまき散らしていた。

砂埃が立ち込めるその場所で、兵士たちは自動小銃を常に構えるという強い警戒心を持ちながら周辺を搜索する。何しろ彼らが捜している2人の少女の片割れは敵対する組織のエースパイロットであり、さらにはつい昨日、彼らの本部で多数の兵士を殺害し、猟犬型兵器を大量に破壊し、本部の中枢機能の一つを機能停止に追いやった恐ろしい敵なのだ。どんなに警戒したところで警戒し過ぎるということはない。

うず高く積み上がった瓦礫の山の上で、一人の兵士が手を上げた。周囲を搜索していた兵士たちが、瓦礫の山に集まってくる。

合図を送った兵士が持つ自動小銃の銃口が睨む先。

大きな壁の瓦礫を背に、2人の少女が倒れていた。

仰向けになって、ぐったりと力なく倒れている2人。

全身に泥を被って顔も区別できないほどの2人。

背中まで伸びた髪の毛の少女と、首筋で切り揃えた短い髪の毛の少女と。

2人、仲良く手を繋ぎ合って、倒れていた。

彼女らを最初に見つけた兵士は、一步一步慎重に2人に近づいていく。

2人のすぐ側に見つめた兵士は、銃口は長い髪の毛の少女の額に向けたまま、つま先で長い髪の毛の少女の頭を小突いてみる。

1度、2度、と何度も何度も少女の頭を小突く。

反応なし。

その兵士は、今度はその隣で倒れている短い髪の毛の少女に銃口を向け、そしてその少女の頭部をつま先で小突いた。

1度、2度。

そして3度目になって。

「うう……」

短い髪の少女の口から呻き声が漏れ、眉根に皺が寄った。

短い髪の少女の生存を確認し、その兵士は様子を遠巻きに見ていた仲間の兵士たちに顔を向け、手を上げて合図を送った。

「あつ」

その声は、少女たちの生存確認をしていた兵士を、遠巻きに見ていた兵士たちの一人が上げたものだった。

兵士の足もとで倒れていた長い髪の少女が、いつの間にか上半身を起こし、いつの間にか兵士の腰に手を伸ばし、いつの間にか兵士の腰のホルスターの拳銃に手を掛け、いつの間にか拳銃をホルスターから抜き出し、いつの間にか兵士のわき腹に銃口を突き付け。

パン！

いつの間にかその兵士は脇腹を銃弾で撃ち抜かれていた。

それはほんの一瞬の出来事。

声を上げた兵士は、仲間の兵士が膝から地面に崩れ落ちる様を、呆気に取られて眺めていた。

そして、いつの間にか一人の兵士の命を奪い去っていた長い髪の女の子は、いつの間

にかこちらに拳銃の銃口を向けていて、いつの間にかその銃口は閃光を瞬かせ、いつの間にか銃口を向けられていた兵士の意識はブラックアウトしていた。

3発目、4発目、5発目。

限られた残弾で、一人の眉間に一発ずつと、着実に仕留めていく。

6発目、7発目。

ついに弾倉の中の銃弾が尽きる。

立っている敵は、まだ3人も残っている。

少女が拳銃を投げ捨てた時になって、ようやく石化の呪縛から解き放たれた兵士たちは、慌てて手にした自動小銃の引き金を絞った。

拳銃を投げ捨てた瞬間に敵の反撃がくることを予測していたアスカは、すぐ側で地面に正座をした姿勢で絶命している兵士の服を両手でむんずと掴み、自分の体へ引き寄せた。自身の体を折りたたみ、兵士の死体の影に隠れる。直後に銃弾の雨霰が、兵士の死体に降り注いだ。

兵士の死体を盾する一方で、手を死体の右腕に伸ばす。死体の右手には、まだ自動小銃が握られている。死体の手から自動小銃を奪い取ったアスカは、すぐさま残り3人の

兵士を屠りに掛かった。

全員が動かなくなったことを確認したアスカは、盾にするためにずっと抱いていた兵士の死体をぞんざいに投げ捨てると、別の兵士の死体のもとに這い寄る。兵士が腰に巻いていた装弾ベルトを自身の腰に巻き、奪った自動小銃の先端に銃剣を取り付け、小脇に抱えると、倒れたままの「それ」のもとへと駆け寄せた。

「レイ……レイ……！」

「それ」の頬を、ぺちぺちと叩く。

うつすらと瞼を開く「それ」。

「レイ！ 返事して！」

「あ……あ……」

反応が薄い。臍げな「それ」の返事。瞼の隙間から覗く、虚ろな「それ」の瞳。脳震盪を起しているのか。それとも何か重大な怪我でも負っているのか。

いずれにしろ自分の足で歩ける状態ではない。

アスカは右手で自動小銃を握り、左手で「それ」が着るブラウスの胸元を掴んだ。そのまま「それ」の体を引き寄せ、

「よ……と……」

「それ」の体を「く」の字にさせて、自分の左肩に抱え上げる。
「ちっ、軽いのね…」

それほど背丈は変わらないはずなのに、自分よりもずっと軽い「それ」の体。変なところで女としてのプライドが刺激され、舌打ちを漏らしてしまう自分に笑ってしまった。

遙か上空で轟いていた爆音に変化があり、アスカは空を睨んだ。

自分たちが居る場所を中心にして、上空をぐるぐると旋回していた大型VTOL機。それが急激に高度を下げ始めている。

ぐずぐずしては居られない。アスカは「それ」を抱えたまま、瓦礫の山を駆け降りた。
「…絶対に見捨てないわよ…」

上空では一気に降下してきた大型VTOL機が、機体の底の扉を開き、そこから大量の何かを投下し始めている。

◇ ◇ ◇ ◇

VTOL機から投下された大量の何か。

綺麗な球体をしたそれらは、地上に到達する寸前に球体を解き、正体を現した姿で地

上に着地する。

4つ足歩行の獣のような怪物。廃墟の街の一角を埋め尽くすほどの大量の怪物の群れは、一斉に少女たちを追いかけ始めた。

時折振り返っては、自動小銃をぶつ放す。

しかしアスカが確保している銃弾の量を遙かに上回る数の怪物相手に、自動小銃での応戦など焼け石に水だ。

「とりやつ」

装弾ベルトにぶら下がっていた手榴弾を投げてみる。爆発と共に怪物の群れのうち先頭の数体が吹っ飛んだが、それもやはり焼け石に水。少女たちを追いかける怪物たちの群れの足は、一向に怯む気配がない。

「くっ！」

瓦礫に足を取られ、すっ転んでしまった。右手は自動小銃を構え、左手は肩に抱えた少女のお尻を支えているアスカは、顔面から地面に突っ込んでしまう。

「ええい、くそっ！」

それでもアスカはすぐに立ち上がる。立ち上がって、走り始める。泥だらけの顔。血を垂らす鼻。拭うための手は全て塞がっているので、構わず走り続ける。

しかしさしものアスカも、一人抱えた状態で怪物の群れから逃げ切ることはできそうにない。あるいは、ここで左肩に抱えたものを打ち棄て、身軽になってしまえば、怪物たちとの追いかけっこにも勝てる可能性は十分にあつたが、そんな選択肢はアスカの頭に掠めもしなかつた。

走つて、走つて、走り続けて。

榴弾の爆風で瓦礫と化した街並みが続いた中で、前方に形を保つた建物が見えてきた。

その判断が果たして吉か凶かは分からなからぬ。この状況で屋内に逃げ込めば、逆に袋小路に追いやられる結果となつてしまうかもしれない。

しかしアスカの足はその建物に向かつていた。

入り口は1つしかない。

その中に駆け込む。

建物の中に足を踏み入れ、アスカはすぐに振り返つた。

入り口の外では、すぐそこまで迫っている怪物の群れ。

アスカは腰に巻いた装弾ベルトを外すと、残つた手榴弾全てのピンを抜き、入り口に向かつてベルトごと投擲。

そして「それ」を庇うように体の下に隠し、地面へと伏せた。

爆発。

続けて爆風。

巻き上がった土砂。

それらに混じって。

「いつっ」

砕かれたコンクリートの破片がアスカの背中に降り注ぐ。

土砂とコンクリート片混じりの爆風が止む。顔を起こし、手榴弾の束を投げた方向を睨んだ。

この建物唯一の入り口が、爆発によって崩れたコンクリートの塊で塞がれている。アスカはほっと安堵の溜息を漏らした。しかしその表情はすぐに険しくなる。

何とか間一髪のところまで怪物たちとの建物への侵入は防げたが、しかしこの急ごしらえのバリケードが何時までももつとは考えられない。ここに立て籠もったところで救援の望みが無いのであれば、敵に囲まれて逃げ場を失っている状態と変わりない。

すぐに次の行動に移さねば。

部屋の壁を背もたれにして、「それ」を床に座らせる。

「レイ…、レイ…」

アスカの呼びかけに、「それ」がすつと瞼を薄く開ける。

その瞳は相変わらずぼんやりとしていて、焦点は定まっていない。まだ「それ」の意識はつきりとしていない様子だ。それでも、

「ああああ…」

それは目の前のアスカの顔を見て、少しだけ笑った。どうやら泥塗れのアスカの顔が可笑しかったらしい。

呑気な「それ」の笑顔に釣られるように、アスカも笑う。

「…まったく、あんたの笑顔には救われるわ…」

バリケードの方でガツガツと激しい音がする。どうやら外では怪物たちがバリケードに体当たりでもして突破を試みているらしい。大きなコンクリートの塊がそこかしこで揺れ、今にも崩れてしまいそうだ。もう間もなく、このバリケードは突破されてしまう。

今にも崩れそうなバリケードを見つめて。

逃げ場のない室内を見渡して。

そして口元に緩やかな笑みを浮かべたまま、また目を閉じてしまった「それ」を見つめて。

バリケードを見つめて。

室内を見渡して。

「それ」を見つめて。

アスカは決断する。

「ちよつとごめんね…、レイ…」

アスカは自動小銃を足もとに置くと、両手を「それ」の両肩へと伸ばす。「それ」が履く吊りスカートの吊り紐を肩から下ろし、そのまますると吊り紐を腕から外した。続けて「それ」の腰に手を回し、スカートのホックを外す。裾を引っ張り、「それ」からスカートを脱がせた。

立ち上がると、今度は「それ」から脱がせたばかりの泥だらけのスカートを、アスカ自身が履き始めた。スカートの口を広げ、足を差し入れる。

「わあ…、スカート履くなんて何時以来だろ…」

変なところで感動してしまう。

スカートを腰まで上げて、ホックを締めようとして。

「ちっ」

腰回りがきつくてなかなか締まらないホックにイラつとしてしまう。何とかお腹を引っ込めて、ホックを留め、吊り紐を肩に掛ける。

スカートを履き終えたアスカは、その場でくるっと回ってみた。

「見た目はJC！ 頭脳はアラサー！」

久しぶりの女の子らしい格好にちよつと浮かれて変なセリフを口走ってしまい、壮絶な後悔に打ちのめされ、落ち込みたくなつたアスカ。両手で頬をぱんぱんと叩き、気持ちを取りセットする。

足もとに置いていた自動小銃の先端から、銃剣を取り外した。

あまり手入れが行き届いてないと見えて、刃こぼれや錆が浮いている銃剣。刃に映る、自身の青い瞳を見つめる。

多少の未練を感じつつも、覚悟を決めたアスカは後ろ髪を掻き上げて一つに纏めた。

銃剣の刃を自身の後頭部へと向ける。

後ろ髪の束の付け根に、銃剣の刃を押し付けた。

パサ、パサ、とアスカの足もとに大量の髪の毛が落ちていく。

手入れの行き届いていない銃剣の刃では、アスカの豊富な髪を一気に切断とはいかないようで、アスカは髪に押し付けた歯をノコギリの要領で前後に動かし、泥まみれの髪を挽いていった。

手に握つた一束の髪を見つめる。

「せつかく……まで伸ばしてあげたのに……。……めんね……」

そう呟いた後、手を広げる。一束の髪は重力に引かれ、ふわりと地面に落ちた。

首を振り、頭に残っていた切断された髪を振り落とす。

「ショートカットなんて、それこそ赤ん坊の頃以来じゃないかしら…」

風通しのよくなった首回りが冷たい。

アスカは首もとを摩りながら、地面に銃剣を捨てた。

「それ」が自分の側に居る限り、敵は簡単に強硬手段をとれないはず。そう高を括つていたアスカにとって、アスカと「それ」を泥まみれにしたあの一発の榴弾は、アスカの淡い期待を粉々に打ち砕いた、かに思えた。

しかし、もし敵が自分も「それ」も諸共に殺害するつもりでいたのなら、わざわざ砲弾の着弾点を大きく外すような真似はすまい。自分たちの頭上に直接砲弾を落として、その体を粉々にして終わらせていたはずだ。

すでに多数のネルフ兵士を殺害し、中枢機能の一部を破壊した自分はともかく、「それ」は敵にとって生きたまま確保しなければならぬ価値がまだ残っているのではないか。

であるとしたら。

部屋の中は随分と荒れている。

風に吹かれて周辺からこの部屋に流れ着いてきたのか、そこら中に色々な物が散乱し

ている。アスカは木材やトタン板、ブルーシートなど、とにかく使えそうなものを手当たり次第にかき集めた。

そしてかき集めたものを、目を閉じたままの「それ」の上に被せていく。

スカートを脱がされた素足にトタン板を被せ、白いブラウスを着た胴体をブルーシートで覆い、両腕はそれぞれをビニール袋で隠し。それらが簡単に動いたりずれたりしてしまわないよう、周囲を木材や石で固定した。

露出している部分は、あとは顔だけ。

その顔に、逆さにした段ボール箱を被せようとしたところで。

「それ」の瞼が、うつすらと開いた。

「ああああ……」

暫く呆けた顔で視線を宙に彷徨わせていた「それ」。ふらふらしていた視線がアスカに留まり、途端に笑顔になる。

それに応えるようにアスカもにっこりと笑った。

「おおお？」

「それ」の唸り声の語尾が上がり、薄く広げられただけの目が、まん丸に広がる。

頭を左右に振って、アスカの顔の形を確認するかののように、色々な角度から見つめる。どうやら、長かったはずのアスカの髪が、すっかり短くなっていることに驚いているら

しい。

「ふふ、あんたとお揃いよ」

アスカは笑顔のまま、「それ」の短い髪の毛先をぼんぼんと撫でた。

「ああ…」

少し驚いていた様子の「それ」も笑顔に戻り、アスカの真似をしようとしたのか、アスカの髪に手を伸ばそうとした。

伸ばそうとした右手が動かない。

動かそうと肩を揺らしてみても、肩から下が何かに縛られたように動かせない。

仕方ないので、今度は左手を伸ばそうとする。

伸ばして、目の前の、自分とお揃いになった彼女の髪を撫でようと思った。

ところが、左手も動かない。

肩も揺らしてみたが、やはり肩から下が何かに縛られたように動かない。

腕だけではなかった。

お腹もお尻も、両足も、首から下が、何かに縛られたかのように動かない。

「それ」が、自分の体を見下ろして、また目をまん丸にしている。

ブルーシートやトタン板、木材や石ですっかり埋められてしまっている自分の体を見て。

「ああ！」

「それ」は目をまん丸に広げたまま、アスカを見た。

「ああ！」

瞳が、なぜ、と言っている。

アスカは真剣な顔で言う。

「ねえ、聴いて、レイ」

「ああ！」

「これからあんたの顔にこれを被せる」

手に持った段ボール箱を「それ」の目の前に寄せる。

「ああ！ ああ！」

アスカの言葉の意味が分かっているのか。「それ」は頭をぶんぶんと横に振った。

「あたしがこれを被せたら、それから絶対動かないで。静かにしてて。ここでジツとしてるの」

少しずつ、「それ」の頭に段ボール箱を被せていくアスカ。

「ああああ！」

「それ」はアスカの思惑に逆らおうと、必死で全身を揺さぶる。

「そうね。周りが静かになって、何も聴こえなくなったら、その時は動いていいわよ」
しかし幾ら「それ」が体をじたばた動かそうが、アスカが組んだ即席の隠れ蓑はびくともしない。

ゆっくりと降りてくる、段ボール箱。

目の前のアスカの顔が、段ボール箱によって少しずつ欠けてゆく。

「最後まで一緒に居てあげたかったけど…」

「ああああああ！」

「ごめんね。レイ…」

「ああああああ！」

「生きて…、レイ…」

「ああああああ！」

アスカの顔が消え、視界を暗闇が包んだ。

「ああああああ！」

彼女に言われたのに。

「あああああああ！」

静かにしていてと言われたのに。

「あああああああ！」

「それ」は叫び続ける。

「あああああああ！」

喉が枯れるのも構わず叫び続ける。

「あああああああ！」

暗闇の中で叫び続ける。

「あああああああ！」

この世界に生まれて。

「あああああああ！」

ずっと長い間、水の中にぶかぶかと浮かんでいて。

「あああああああ！」

何の変化もない、平穏な日々は過ぎて行つて。

「あああああああ！」

一人、また一人と、水の中から引き揚げられていった姉妹たちは、誰一人として戻つてこなくて。

「あああああああ！」

それでも相変わらず平穩な日々は続いて。

「あああああああ！」

でも、その日々は唐突に終わって。

「あああああああ！」

姉妹たちは次々ともがき苦しみながら水の中に消えていって。

「あああああああ！」

自分ひとりになってしまったと思っていたら。

「あああああああ！」

彼に手を引つ張られて。

「あああああああ！」

彼が消えてしまったと思ったら。

「あああああああ！」

今度は、彼女が手を引いてくれて。

「あああああああ！」

この世界に生まれて以来、自分の側には必ず誰かが居てくれたのに。

「あああああああ！」

これっぽっちも寂しい思いはしなかったのに。

「あああああああ！」

でもここは違う。

「あああああああ！」

真つ暗闇。

「あああああああ！」

真の孤独。

「あああああああ！」

嫌だ。嫌だ。

「あああああああ！」

嫌だ！ 助けて！

「あああああああ！」

私を一人にしないで！

「ああもおお！」

うんざりとしたようなその声と共に、ぱつと視界が明るくなった。

暗闇の向こうから現れた、彼女の顔。

さつきまで真剣な表情だった顔が、大粒の涙に濡れている。

「世話の焼けるコね！ まったく！」

頭を隠すために段ボール箱を被せた。

箱の中で、「それ」は泣き喚いているが、いずれ諦めて泣き止んでくれるだろう。そう思つて暫く待つていたが、箱の中からの泣き声は収まるどころかさらに大きくなつていく。

この世界でここまで人の胸を抉る、不快な音があつただろうか。

だからきつと、これは生理的不快感からくるものだろう。

あまりの不快さに、自分の目から涙が溢れ始めている。

待つても待つても、段ボール箱の中からの不快な音は止まない。

下唇を噛んだ。

すでに、視界は涙で霞んでしまった。これでは、これから自分がする行動にも支障を来してしまう。

だから仕方ない。

仕方ないから、被せた段ボール箱を除けてしまったのだ。

被せていた段ボール箱の向こうに現れたのは、本当にもうどうしようもないほどにみつともなく情けない顔で泣きわめている「それ」。

「世話の焼けるコね！ まったく！」

そう怒鳴りつけてはみたものの、「それ」と同じように大量の涙を流していたアスカは、まるで吸い寄せられるように「それ」に手を伸ばし、「それ」の頭を抱き締めていた。散々言い聞かせたのに、「それ」は自分の言葉をてんで理解できていないようである。だから。他に方法が無さそうだから。他に「それ」を大人しくさせる方法が浮かばなかったから。

だから仕方なく、「それ」を抱き締めたのだ。

「それ」の泣き声を聴いていて。

急に人肌が恋しくなつて。

急に「それ」との別れが怖くなつて。

それで段ボール箱を除けたわけでも、「それ」を抱き締めた訳でも、決してないのだ。

お願い。

泣き止んで。

あんたが泣き止んでくれないと。

あたしはここから離れることができない。

ママは泣きじやくる幼いあたしを、こうやって抱き締めてあやしてくれた。だからきつとこのコも。

ああもう。お母さんになるつもりなんて、これっぽっちもないのに。嫌なことばつかりさせて。

人の世話をしたりとか、誰かのために命を投げ出したりとか。

そんなの、私のキャラじゃないのに。

あたしもこんなに我慢してるんだから。

だからね、レイ。

お願い、レイ。

お願いよ…。

アスカの願いが重ねた肌の温もりを通して伝わったのか。

「それ」の泣き声が少しずつ大人しくなっていく。

アスカは「それ」からゆっくりと顔を離れた。泥と涙と鼻水でたいそう汚れた「それ」の顔を見つめる。

何度も鼻を吸り、しゃくりあげている「それ」。

頑張つて涙を堪えようとしているらしい。

自分の欲求に素直に従い、我慢することなんて知らなかったはずの「それ」が、こちらの願いを感じ取り、頑張つて泣き止もうとしている。

そんな様子の「それ」を見て、アスカは泣きながら笑った。

ああもう、可愛い奴だなあ……！

「ああ、そうだ。あんたにこれあげるわ」

そう言うのと、アスカは自身の頭からそれを取り外し、「それ」の前に差し出してやる。

「ひつく…、ひつく…」

しゃくり上げていた「それ」は、

「うう…うう…」

アスカが差し出したものをみて、

「う…う…う…」

徐々に涙は収まっていき、

「おおお…」

アスカが差し出したものを興味深げに見つめ始めた。

「もう髪留めは必要ないし、今は動かせるエヴァもないしね」

アスカは少し寂しそうにそう呟きながら、手に持ったものを「それ」の頭に被せてやつ

た。

「それ」の頭の上にちよこんと乗った、赤いインターフェイス・ヘッドセット。

「ぶっ、似合わないわねー」

やっぱりエヴァのパイロットの中で赤を着こなせるのは自分だけだと、よく分からな
い自己満足に浸りつつ、ヘッドセットを整え、乱れた「それ」の髪を梳いてやる。

「これあげるから、大人しくしてんのよ」

「ああああ…」

「ご機嫌な声で返事する」「それ」。

「これにも出力は弱いけど発信装置が付いてるから、いずれヴィレの連中があんたを見
つけてくれるはずだわ」

「ああああ…」

アスカは自分の目尻に溜まった水滴を拭くと、両手で「それ」の頬を包む。顔を「そ
れ」に近づけ、こつんと額を「それ」の額に当てた。

「ごめんね…。本当なら…、このままネルフに帰った方が…、あんたにとっては幸せなの
かもしれないのにな…」

「ああああ…」

「でもあんたは、シンジが残した最後の遺志だから…」

「ああああ…」

「あんたをヴンダーに連れていくって、シンジに約束させられちゃったから…」

「ああああ…」

「あたしも「最後」まで頑張るから…」

「ああああ…」

「あんたも頑張るのよ…」

「ああああ…」

「もう。ホントにあたしの言ってること分かってんのかしら」

「ああああ?」

「それ」の頭に、そつと段ボール箱を被せていく。

「じゃあね、レイ…」

「あああ…」

段ボールの向こうに隠れていく「それ」の顔。

アスカが最後に見た「それ」の顔は、にっこりとした笑顔だった。

「うううう…」

視界を塞がれ、「それ」の口から低い声が漏れるが、先ほどのように泣き叫ぶようなこゝ

とはない。あんなヘッドセットでも、「それ」を落ち着かせる効果が少しはあったようだ。

アスカは「それ」の側からそつと離れると、自動小銃を手に取り、立ち上がる。

小銃の弾倉を確認する。中はすでに空っぽ。小銃を地面に投げ捨てる。

周囲をきよろきよろと見渡した。

「あら、いいものがあるじゃない」

周辺から色々なものが流れ込んでいる部屋。建物の近くに工事現場でもあったのか、あるいは建物自体が建造中か解体中だったのか、部屋の隅には様々な工用具が雑然と転がっている。

その中の一つ。

柄の長さは一メートルほど、その先端には巨大な金属の塊が付いてる、大型ハンマーに手を伸ばす。

大の男でも持てばふらついてしまいそうな重さを誇るハンマーを、アスカは軽々と持ち上げる。

随分と手に馴染むハンマー。そう言えば昨日も一日中、小さなハンマーを振り回したつけ。

「もし生きて帰れて…、新しいエヴァが支給されたら…。今度は兵装に超大型ハンマー

でも加えてもらおうかしらね」

バリケードから響く音が一際大きくなった。

間もなく、バリケードは突破される。

アスカはもう一度、段ボール箱を被った「それ」を見た。

よしよし。大人しく座っている。

自分が施したカモフラージュも完璧だ。傍から見ればどう見ても集積されたゴミの山にしか見えない。

念のため、足もとの地面の泥を掬い上げ、自分の頭にペタペタと塗りたくる。短くなった汚れた髪はすっかり泥まみれになって、彼女自慢の赤毛は土色に染まった。

アスカは「それ」が座っている壁とは反対側の壁の前に立った。

ふう、と深呼吸を一つ。

ハンマーを両手で構えると、その先端を頭上に掲げる。

「どっせえええー!!」

奇妙な掛け声と共に、ハンマーを壁に打ち下ろす。

コンクリート製の壁は、アスカが振り下ろしたハンマーのたった一撃で崩れ、大きな穴が開く。外から強烈な日差しが室内に刺し込んだ。

壁の外では、一面を埋め尽くす怪物たちの群れ。

アスカはスカートをなびかせながら、躊躇いなく外へと躍り出た。

第壹拾話

「もう。ホントにあたしの言ってること分かってんのかしら」

彼女はちよつと困つたような表情をしながらも、顔は笑顔。

その彼女の笑顔が、自分の頭に被せられていくものによつて見えなくなつていく。ちよつと怖かつたけれど。

でも目の前の彼女は笑顔だから。

頭には彼女からもらったへんてこなものに乗つてもらつたから。

だからきつと大丈夫。

彼女の顔が見えなくなるのは嫌だけど。

暗闇の中は怖いけど。

彼女が笑つてくれるから、我慢していよう。

真つ暗になる。

何も見えなくなる。

顔に被せられた何かによって、自分の息遣いが酷く大きく聴こえる。

近くで彼女がごそごそと何かをやっている。

彼女が立てる足音。

彼女の足音が遠ざかる。

「どっせえええー！」

彼女の奇妙な叫び声と共に、何かが破壊され、崩れる音。

その崩れる音と共に。

彼女の気配が無くなった。

彼女の気配が消えると共に。

ドン!!

今度は別の方向から激しい物音が轟き、何かが崩れる音。

何かが崩れる音に続けて、何かが大量に室内へと雪崩れ込んでくる音。

どどど、と幾つもの、大量の足音。

大量の何かが、室内を這いまわっている。

色んなものを被せられた自分の体の上も、大量の何かの足が踏みつけていく。

怖かった。

すぐにでも泣き叫びたかった。

ここから飛び出してしまいたかった。

でも、見つめる漆黒の闇に、彼女の笑顔を思い浮かべて。

心の中に、彼女の声を思い浮かべて。

——あたしも最後まで頑張るから…

「…あう…あう…」

——あんたも頑張るのよ…

「…あん…あう…」

どどど、と激しい大量の足音。

「…あん…ある…」

大量の何かが動き回り、そこかしこを破壊する音。

「…あん…ばる…」

大量の何かの足に、何度も何度も体を踏みつけらる。

「…がん…ばる…」

それでも動かなかった。

「…がん…ばる…」

本当に怖くて堪らなかったけれど。

「……がん……ぼる……」

動かなかった。

「……がん……ぼる……」

もしかしたらこの世に生まれ落ちてから初めて使ったかもしれない、自制心というものを総動員させて。

「……がん……ぼる……」

その4文字をまるで呪文のように繰り返し呟きながら、じつと嵐が過ぎ去るのを待った。

「……がん……ぼる……」

待ち続けた。

嵐は過ぎ去った。

大量の何かの足音はやがて消えて、気配も無くなった。

それでも、「慎重さ」というものを手に入れていた「それ」は、嵐が過ぎ去ってから

動かなかった。

じっと、じっと。

息を潜めて。

嵐が過ぎ去ってから、一体どれだけの時間が経ったのか。

自制心と慎重さを駆使して、まるで石にでもなったかのように動かなかった「それ」だが、ずっと座り続けた所為で発生したお尻の痛みまでは、さすがに我慢しきれなくなってきた。

足をばたつかせてみる。

足に被せられたトタン板。石や木材で固定され、なかなか動かない。

「うう！　うう！」

しかし「それ」が何度も足をばたつかせている内に、トタン板の上に乗った石や木材がずれ落ちていく。そして、

「あうー！」

蹴られたトタン板が跳ね、その下から泥だらけのほつそりとした足が現れた。

「それ」は今度は自由になった両足の膝を伸ばし、地面から踵を浮かせ、つま先を高く上げた。そして、

「うーうー！」

掛け声と共に勢いをつけて両足を一気に下ろす。

その反動に上半身が引つ張られ、上半身を覆っていたブルーシートとそれを固定していた石や木材がばらばらと崩れ落ちた。

「うー！ うー！」

両腕も片方ずつ、引つ張り出す。

ゴミの山から現れる、ほつそりとした手足。泥だらけの制服。ようやく全身が外に出た。

せつかく全身が出たのに、視界は真つ暗闇のまま。

もしかしたら我慢して我慢して待ち過ぎてしまつて、夜になつてしまつたのかもしれない。

「それ」はおつかかなびつくり立ち上がると、両手を前に突き出しながら暗闇の中をゆつくりと歩き始めた。

「あうっ」

裸足の裏が時折硬い石やらコンクリート片を踏む度に、「それ」は小さく悲鳴を上げる。それでも頭を、肩を、腕を、足を、ぶるぶると震わせながらも、「それ」はゆつくりと歩き続ける。

歩き続けて。

「あうー！」

右足が何かに躓いてしまい、「それ」は盛大に前のめりに転んでしまった。

「うううう……」

思いつきり顎を打ってしまい、「それ」はすぐにも泣きそうになったが、覚えたばかりの「我慢」を発揮させ、下唇をぐつと噛んで堪えた。

転んだ拍子に、被せられていた段ボール箱が頭から外れ、地面の上を転がっていく。

急に開けた視界。「それ」の視覚を刺激したのは茜色の光。

「それ」の前には、夕暮れ前の赤く染まった空が広がっていた。

「おおおお……」

擦りむいた膝を押さえつつ、「それ」はゆっくりと立ち上がる。

西に大きく傾いた真つ赤な太陽を、ぼんやりと見つめた。

しばらくぼんやりと見つめていて、そしてはつとして。

「ああ……ああ……」

周囲をきよろきよろと見渡し始める。

「それ」が這い出た建物の周辺に広がるのは、赤い砂に埋もれた廃墟の街。

無言で佇む鉄とコンクリートの塊以外、何も無い。動くものは、何も無い。

夕暮れ前の茜色の日差しに晒され、余計に禍々しく映える、赤褐色の世界。時折強い風が吹き、ブラウス一枚の「それ」の体を冷たく撫でる。

「それ」は自身の両腕を抱き締めながら、危なっかしい足取りで歩き始めた。地面には無数の足跡。

とほとほと歩きながら、足跡を辿っていく。

「ああ……」

時折声を上げて、周囲から反応がないか確かめてみる。

「ああ……」

砂に埋もれ、高い建物もない廃墟の街並みは、音の反響も薄い。

「ああ……」

「それ」が上げる声は、静かに虚空へと吸い込まれていく。

足跡を辿って歩き続けて。

「うう……」

ついに「それ」は廃墟の街から出てしまった。

「うう……」

眼前に広がるのは、一面の砂。

砂の向こうに見えるのは、遥か遠くの地平線。

砂と空と雲と大きく西に傾いた太陽以外、何も無い。動くものは、何も無い。

「それ」は怯えたように肩を竦ませると、後ろを振り返った。

「ううう…」

後ろにあるのは、薄闇に包まれた廃墟。

太陽を見て、廃墟を見て。

そして最後に地面の上の無数の足跡を見て。

その足跡は、まっすぐに太陽の方へと伸びている。

「それ」は廃墟を背にした。

そして走り始める。

無数の足跡を辿って、走り始めた。

「ああああ…」

まるであの人の髪の色のような、太陽の光に向かって。

「うううう…」

裸足で懸命に砂を蹴って。

「ああああ…」

両腕を思いっきり振って。

「ああああ……」

太陽に向かつて。

「うううう……」

走つて。走つて。

「くああああ……」

走り続けて。

ドン、という音と共に、前から突然の突風。

「それ」は強烈な突風に吹き飛ばされて尻餅をつき、そのまま地面の上をコロコロ転がって行く。

砂の上をコロコロ転がって、ようやく止まって。

「ああああ……」

「それ」は定まらない視点に頭をふらふらさせながら、突風が吹いてきた方を見やる。奇妙なものが2本。

とても大きなものが2本、によきつと生えていた。

やたらと大きな2本の柱はとても「それ」の視界の中には収まり切らず、「それ」は2

本の柱の先端を追って視線を上げていく。2本の柱は途中でくつつき合い、一本に纏まった。纏まった先もまだまだ天に向かって伸びており、その先端を指してどんだん顎を上げていく「それ」はついに、

「あうっ」

ひっくり返って地面に倒れてしまった。

地面に仰向けになって空を見上げる形となり、ようやく突然目の前に現れた2本の巨大な柱の全体像が見えるようになった。

2本の巨大な柱の正体は、大きな足だった。

それは巨人。

突然目の前に現れたのは、巨人。

天から飛び降りてきた巨人。

太陽を背にして立つ巨人。

漆黒の巨人。

「おおおお…」

巨人を見上げる「それ」は、恐怖とも感嘆ともとれる呻き声を漏らした。

暫く仁王立ちで「それ」を見下ろしていた巨人は、左足を半歩ほど後ろに下げ、腰の

位置を降ろしていき、左膝を地面に付けた。巨大な左膝が地面に付いた衝撃で巻き上がった砂塵に、「それ」は咄嗟に目を閉じ、激しく咳き込む。

地面に跪く形となった巨人は、まるで「それ」に対してかしくくかのように、こうべを垂れた。

「わうっ」

砂塵が止み、薄く目を開いた「それ」は、目の前に迫っていた巨人の顔にびっくりしてしまふ。

「それ」が地べたで呻き声を上げている一方で、巨人の背部では変化が起きた。巨人の背部を覆う装甲が開き、そこから一本の棒が天に向かってよきつと突き出る。

その棒の上部が開いた。

開いた場所から、すらりとした人影が出てくる。

その人影は棒の先端から飛び降りると、巨人の肩に着地。そこからさらに巨人が地面に立てた右膝へと飛び移る。

「よっつと」

最後に小気味よい掛け声と共に、人影は地上へと飛び降りた。

「それ」が倒れている場所から10メートルほど離れた場所に降り立った人影。太陽

を背に跪く巨人同様、その人物も陰になっており顔は見えない。

「はい、ゼーレのパイロットさん」

その厳つい風貌の巨人から降りてきた人物のものとは思えない、軽やか声が「それ」に向けて投げ掛けられた。

「なーにそんな所ですつ転んでんのかなー？ つて、え？ なに？ 下半身すつぽつぽんじやない。わーお、扇情的いゝ」

おどけた口調で、と言うよりもどこか芝居じみた口調で言いながら、その人影は「それ」の近くへゆつくりと歩み寄っていく。

近づいてきて、ようやく「それ」の位置からも人物の顔がはつきりと見えるようになってきた。

「え？ 何があつたの？ 追い剥ぎにでもやられた？ 気の毒うゝ」

背中まで伸びた栗色の髪を2つにまとめ、メガネを掛けた女性。

「ところでさ、ネルフのパイロットさん」

ピンク色の奇妙なスーツを着た女性は、「それ」の前に立つと両手を腰に当てて仁王立ちする。

「この辺でうちの姫を見なかったかな？ 髪が赤くて、スタイル抜群で、まあ、おっぱいはちよこーつとちつさめだけど、それがまた可愛いんだよねー。顔は間違いなく美人

ね。んで性格はちよこーっとキツめなんだけどさ、ちよこつと突いてやればあつさりデレる、こんな時代でも地でツンデレやつてるような可愛いくいコなんだけど」

一方的に喋る女性を、ぼんやりと見上げる「それ」は。

「あああ……」

ただ呻くだけだった。

そんな態度の「それ」に、女性は溜息を漏らす。

「えつと……。一応さ、こつちはそのコが出す信号はキャッチしてるんだ。だからそのコがこの近くに居るってことはこつちも掴んでるわけよ。だから隠し立てしても意味ないと思うんだ……けど？」

「あああ……」

「うん。ごめん。正直今の私、ちよつと余裕ないんだわ。あんたの遊びに付き合ってる暇なんてないんだけど。さっさと早く白状してくんない？」

「あああ……」

「言ってる意味分かんないかな……」

「あああ……」

「何？ それで時間稼ぎしてるつもり？」

「あああ……」

「ねえ」

「あああ…」

「早く答えて…」

「あああ…」

「答えろつてゆつたら答えろよ!!」

激昂する女性は腰に巻いていたベルトのホルスターから拳銃を引き抜き、その銃口を「それ」に向ける。

「ああああ!」

突然怒鳴り声を上げた女性にびっくりして、「それ」も反射的に大きな唸り声を上げた。

「ふざけんな! バカにしてんのか!」

女性は、唸り声を繰り返すだけの「それ」と、まったく同じ顔をした「これ」と対峙するのはこれが初めてではなかった。敵対組織との10年以上に渡る戦争の中で、戦場で幾度となく遭遇してきた。同じ顔をした「これ」を巨人の足で踏み付けてやったこともあったし、同じ顔の「これ」の顔面に、直接銃弾を撃ち込んでやったこともあった。

遭遇する度にイライラする。

揃いも揃って、みんな同じ、死んだ魚のような目をしやがって。

それにしたって、今日のこいつの死んだ魚具合は度が過ぎている。

なんだ、この知性の欠片も感じられないような目は。

その顔で。

「あの人」とおんなじ顔で、そんな呆けた目をするのは、女性にとつてはとても許容し切れないものだった。

普段は人を食ったような態度で飄々と過ごしている女性だが、この時は腹の底から湧き上がる怒りに突き動かされるままに感情を発露させている。本人が言うように、余裕のない顔で「それ」に迫った。

「言え!! 姫はどこ!! アスカはどこにい……」

女性の声が萎んでいく。

女性の視線が、ある一点に注がれる。

女性の視線が注がれる先。

目の前で大の字で倒れている「それ」の頭部。

泥まみれの髪の間隙から覗くものに。

「え? ちよつと……。え? ごめん……。それ、何の冗談?」

泥まみれの髪の間隙から覗く、赤いもの。

「やめてよ…。その冗談はちよつとキツイわ…」

それは女性の同僚が、いつも身に付けていたもの。片時も離さなかつたもの。

「何したのよ…」

「それ」にさらに歩み寄つた女性は、「それ」の腰を跨ぐ形で立ち、「それ」を見下ろす。

「お前!! アスカに何したの!!」

銃口を、「それ」の額に突き付けた。

拳銃を突き付けられているというのに。

「ああああ…」

「それ」は相変わらずぼんやりとした表情のまま呻くだけ。

何かおかしい。

初めて「それ」を見た時から、女性は「それ」が今まで会ってきた同じ顔の「これ」と、どこか様子が違うことには気付いていた。

でも、今はそんなことはどうでもいい。

今、重要なことはそんなことじゃない。

こいつが何であろうと、どんな状態であろうと、今は知つたことではない。

今、大切なことは、同僚の安否のみ。重要なことは、その一点のみ。

駄目だこいつは。

今も、拳銃を突き付けられているのに、自分の命を他者に握られているというのに、何の意味も示さない。周囲のなすがまま、なされるがまま。生命として最低限の自己保存に対する欲求すら見せない。長きに渡って死に物狂いで戦い続けてきた女性にとって、一番癪に障る態度。

もぅいい。

こいつとの問答にこれ以上時間を割く必要はない。

そしてこの戦争において、ヴィレは敵対組織の捕虜を認めてはいない。

「もういいわ。アスカは自分で捜すから…」

引き金に人差し指を掛ける。

「どうせ死んでもまたすぐ復活しちゃうんだよね？」

引っ掛けた人差し指に力を籠める。

「んじやね。また会いましょう。それまでバイバイ」

引き金を、目一杯引き絞る。

引き絞ろうとして。

「ああああ……」

それまで地面に大の字に倒れたままだった「それ」。銃を突き付けられても、ただ唸るだけでなんの動きも見せなかった「それ」。

「それ」の腕が、少しづつ上がっていく。腕が、少しづつ女性の顔へと伸ばされていく。引き絞る寸でのところで引き金に掛ける人差し指の力を弱めた女性。

目の前の「それ」が、その両手を自分の顔へと伸ばしてくる。

ここに来て、初めて唸る以外の反応を見せた「それ」。

女性はすぐにもこいつを殺害して同僚の捜索に戻るべきだったが、「それ」が見せる反応がどのような方向へ向かうのか興味を持ってしまった。例え「それ」の手が反抗を示したとしても、例えば「それ」の手が自分を殴ったり自分の首を絞めようとする素振りを少しでも見せたら、その前に拳銃の引き金を絞り切ってしまうええよいだけのこと。こんなのもまな相手であれば、どんな状況からでも殺害することは容易いことだ。

30秒だけ与えてやろう。

女性は「それ」の額に銃口を押し当てたまま、「それ」の手の動きの行方を見守った。「それ」の両手はゆっくりと女性の顔へと近づく。手はやがて女性の顎の先を掠め、頬に触れ、耳を撫で、髪を梳き。

「*thc*」

「それ」の手がとった意外な動きに、女性は思わず調子の外れた声を漏らしてしまっ

た。

「それ」の両手は女性の頭に乗ったものを両手で挟み込むと、そつと持ち上げた。目的のものを手に入れた「それ」は、今度はその手をゆつくりと自分の胸の方へと引き寄せる。

自分の頭に付けていたヘッドセットを「それ」に奪われても、まだ女性は拳銃の引き金を引き絞らなかつた。「それ」がヘッドセットを壊そうとする動きを少しでも見せた時に撃つてしまえば、十分に間に合うだろうから。

「あああ……」

手にした紫とピンクのヘッドセットを見つめる「それ」。

そのヘッドセットを左手のみで持つと、空いた右手を今度は「それ」自身の頭に伸ばす。「それ」の頭に乗ってかかっていた、赤いヘッドセットを外し、顔の前に持つてくる。

赤い色のヘッドセットと。紫とピンクのヘッドセットとを。

交互に見比べる「それ」。

両手ずつに持った、色は違うけれど、形はそっくりなもの。

「それ」の目が2つのヘッドセットから外れ、女性の顔に向けられる。

すでに心の中で決めた30秒は過ぎた。それでも女性は、まだ引き金を絞れないでい

る。「それ」がとる意味不明な行動がどんな結末に辿り着くのか、興味を持ってしまったからだ。もうあと30秒だけ待ってやろう。そう心に決めてしまった。

そしてこちらを見つめ返してきた「それ」の顔を見て、女性は自身の眉根に何本もの皺を寄せることになる。

女性を見上げた「それ」は、途端に顔をしわくちやにさせて、目に大粒の涙を浮かべ始めたのだ。

「ああああ……！」

一際大きな唸り声を上げながら、「それ」は両手にそれぞれヘッドセットを持ったまま、女性の拳銃を握った手を両手で包み込む。

「ああああ……！」

「……」

「うううう……！」

「……」

「ああああ……！」

ひたすら唸り声を上げる「それ」。

意味が分からず、女性はただただ困惑の表情を浮かべるのみ。

「ああああ……！」

「何……?」

「うううう……!」

「何なのよ……、一体……」

「ああああ……!」

今までのどこかぼんやりとした表情とは明らかに違う、「それ」の必死の形相。明確な意思が込められた、「それ」の行動。

「ああああ……!」

「はあ?」

「うううう……!」

「何よ」

「ああああ……!」

「何が言いたいのよ?」

心に決めていたもう30秒もすでに経過したにも関わらず、女性は引き金を引くどころか、引き金から人差し指を離してしまっていた。

「ああああ……!」

「ああ?」

「うううう……!」

「うう？」

「ああああ……！」

「ああ？」

そして「それ」が繰り返す、明確な意志が込められた唸り声を解読しようとして試みている有様である。

「ああああ……！」

「……」

「すううう……！」

「……」

「くうああ……！」

「……」

「それ」の額から銃口が離れる。

「ああああ……！」

「……」

「すううう……！」

「……」

「かああああ……！」

「……」

女性は拳銃を握った腕を、だらんと下げた。

「ああああ……！」

「……」

「すううう……！」

「……」

「かああああ……！」

「……」

「それ」の顔を、呆然と見つめる。

「ああああ……！」

「すううう……！」

「かああああ……！」

「たああああ……！」

「すううう……！」

「けえええ……！」

「てえええ……！」

第壹拾壹話

西の空では、もう間もなく太陽がその身を地平線に着底しようとしている。

真っ赤に彩られた砂の大地に、ぼつんとある小高い丘。

その小高い丘をぐるりと囲む、無数の影。

四つ足の怪物たち。

怪物の群れが、赤く染まった丘の周辺を埋め尽くしている。

その怪物たちの間を縫うように、数人の武装した兵士たちが歩き、丘の頂きを目指している。

兵士たちが丘の頂上に辿り着く。

兵士たちの視線の先にある、丘の頂上の小さな岩。

その岩を背にして蹲っている人影があった。

ぐったりとした様子で膝を抱えているスカート姿の少女。

全身泥だらけ、傷だらけ。

右手に握る大型ハンマーは先端が曲がり、頭部の金属の塊は大きく欠けている。襟元

で雑に切り揃えられた髪は、時折強めに吹く風にさらさらと揺れていた。

兵士の一人がうんざりとした口調で言う。

「手間を掛けさせやがる…。我々から何時間逃げ続ければ気が済むんだ…。ヴィレのパイロットから何か吹き込まれたか…」

「まあいい。母艦へ連絡だ。素体を確保したと伝えろ」

指示された兵士は、無線機の回線を開きながら、上空をゆっくりと旋回している大型VTOL機を見上げた。

兵士の一人が少女に近づく。

「おい。立て。本部へ帰るぞ」

そう告げて、少女の左脇に腕を差し入れ、少女の体を引っ張り上げた。

俯いていた少女の顔が上がる。

「おい、待て」

何かに気付いたらしい兵士の一人が声を上げた。

その兵士は少女の前に立つと、少女の顎に手をやりくいつと顎を上げさせ、その泥だらけの顔を凝視する。

「誰か水持ってないか」

隣に立っていた兵士が腰にぶら下げていた水筒を渡す。

少女の顔を凝視していた兵士は、受け取った水筒の口を開けると、少女の頭の上で水筒をひっくり返した。水筒の口からどぼどぼと水が零れ落ち、少女の頭を濡らしていく。

兵士は空になった水筒を乱暴に投げ捨てた。

「やられた……！」

洗い流された泥のむこうから現れたのは、夕焼けの空のような赤い髪。

「……あくあ、……バレちゃったか……」

いつの間にかうつすらと瞼を開けていた赤毛の少女は、その口もとに小さく笑みを宿しながら呟いた。

「くそつ。貴様！ 我々の素体をどこに隠した！」

「あんたバカ……？ ゆうわけないでしょうが……」

少女の額に突き付けられる自動小銃の銃口。

「言え！ 今すぐ言わなければ……」

「どうせ吐いても殺すでしょ、あんたらは……」

相手の脅しの文句を、少女の掠れた声が掻き消す。

銃口を突き付けていた兵士は、隣に立つ兵士を見た。その兵士は、時間の無駄だと言

わんばかりに首を横に振る。

兵士は改めて自動小銃を構えた。片目で照準器を覗き込み、銃身の先を正確に少女の額に向ける。

自分を睨む銃口。

それをぼんやりと見つめていた少女は、すっと視線を地べたに落とした。

「…あいつ、うまいことヴィレの連中に拾われたかな…」

こんな時まで他人の心配をしている自分が少し可笑しかった。そして、

「シンジ…、あたし…、頑張ったよ…」

不思議なほどに満たされた気持ちの中で、静かに瞼を閉じた。

ドン！

頭上から大きな音。

自動小銃の発砲音にしては、えらい低い音だな、とどこか他人事のようにその音を聴いていた。

まあいずれにしろ、後は自動小銃から放たれた銃弾が自分の額を貫いていくのを待つだけとなってしまった。今は死ぬまでの余韻を暫し楽しむしかない。

それにしてもこれが走馬灯という奴だろうか。人間は死を目の前にすると、時間の流れが極端に遅くなるという。自分のすぐ頭上で発砲されたはずなのに、その銃弾は未だに自分の頭部を撃ち抜かないのは、その所為なのだろう。

そして走馬灯という奴は、その極端に遅くなった時間の中で様々な記憶を蘇らせるといふ話だが。一説によれば目前に迫った死を回避しようと脳がフル回転した結果起こる現象らしいが。

はてさて、自分はどんな走馬灯を見るのだろう。これはこれで楽しみだ。

やっぱりママが出てくるのかな。

…できれば、優しかった頃のママが出てきてほしいな。お別れした頃のママをここで見るのはちよつと辛いから…。

それともシンジが出てくるのかな。

あのバカ。結局大切なことは何にも伝えられなかったな…。まあまたすぐに会えるよね。

あとはミサトとかも出てくるのかな。

ヒカリとか。

マリとか。

マリ、心配してるだろうな。ずっと一緒に戦い続けてきたけど。先に居なくなっちゃってごめんね。

ん？

お？

出てきた、出てきた。

んん？

はあ？

よりによって、あんたなの？

んー、まあ最後の1日を過ごしたのが、あんただったからね。しよーがないか。

ま、でも、あんたと過ごさせてよかったよ。

こんなに優しい気持ちで過ごせた日はなかったからね。

また、笑えるようになったからね。

笑って、死ねるからね。

ん？

あんた、何か言ってるの？

何を言ってるの？

は？

『げう』

え？

『げう』

ん？

『げう』

は？

『げう』

「どーして最後の走馬灯があんたのゲップなのよ!!」

思わず我を忘れて天に向かって叫んでしまったアスカ。

その空では。

「えっ?」

巨大な爆炎を立ち昇らせる大型VTOL機が、黒煙を引きながら墜落を始めていた。

呆然と墜落するV T O L機を眺めていたのはアスカだけではなかった。

アスカの周囲を囲んでいた兵士たちも、アスカに自動小銃を向けていた兵士も、その場にいた全員が墜落していくV T O L機を呆然と眺めている。

彼らの視線の先で、V T O L機は遂に地上へ到達し、大爆発を起こした、その時だった。

ふわっと、背後から風。

兵士たちはV T O L機の墜落する様に目を奪われており、その不自然な風に気付いたのはアスカだけだった。

風が吹いてきた方向に振り返る。

ギョツとした。

すぐ目の前に、巨人の顔があった。

異形の巨人の8つの目が、尻餅を付いているアスカの姿を捉える。

全身泥だらけ、傷だらけのアスカの姿を。

『おどれら、うちの姫にぬわにしとんのじゃー！』

スピーカーを通してよく知った声が聴こえた。

巨人はその巨大な右腕を空高くに掲げる。そして大きく指を開いた状態の手を、そのまま地上に向かって打ち下ろした。

「わわ!!」

自分目掛けて打ち下ろされる手に、アスカは思わず悲鳴を上げた頭を抱え込む。

ドン!

凄まじい衝撃と共に地面が揺れ、突風が巻き起こり、アスカの体が10センチばかり浮いた。

風と衝撃が止み、おずおずと目を開ける。地面に叩き付けた巨人の右手の人差し指と中指に挟まれたアスカ。それぞれの巨人の指の下には、つい5秒前までアスカを取り囲み、そして今はペしやんこになっている兵士たち。

「げっ……」

その見るもおぞましいスプラッターな光景に、思わず下品な悲鳴を漏らしてしまうアスカである。

すると、いち早く異変に気付き丘の下から駆け上がってきたか四つ足の怪物の一匹がアスカ目掛けて飛び掛かってきたが、勇猛果敢なその怪物は、巨人のデコピンによってあっさりとはるか彼方に吹き飛ばされる羽目になる。

空の彼方に星となった怪物を呆気にとられて見送っていたアスカを、巨人の左手が庇うように覆い包む。その直後、怪物たちが一斉にアスカに向かって襲い掛かってきたが、時すでに遅し。怪物たちの牙と爪は、巨人の装甲によってあっさりとは阻まれたのだっ

た。

巨人の右腕は、まるで砂を均していくように地上の怪物たちを薙ぎ払っていく。圧倒的な力の差を見せる巨人に対し、しかし圧倒的な数を誇る怪物たちは、後から後から巨人目掛けて襲い掛かり、その足に、その腕に、その腹に、その肩に、その頭に次々と噛み付いてく。

たとえ小さな蟻であつたとしても、それが群れを成せば遥かに大きな牛や馬さえも捕食することがあるという。その大きな体をあつという間に無数の怪物たちによって埋め尽くされてしまった巨人は、今様に窮地に追い込まれているように思われた。

しかし、

『ああ、もう鬱陶しいなあ、このちゅーちゅー鼠どもが』

スピーカーから聴こえてくるのは、窮地とは正反対を行くような、どこかのんびりとした声。

『殺鼠剤を撒いちゃいまーす！』

地面に四つん這いになった巨人が背負う、無数のロケット弾発射セルが一斉に火を噴いた。巨人の背中から幾つもの光の矢が天に向かって伸び、やがてそれらは重力に引かれて地上へ向けて落下していく。

巨人の周辺を、大量の火柱が埋め尽くした。

砂の丘の頂上周辺に大量に転がる黒焦げの怪物たちの死体。その死体の輪の中心では、全身をこんがりと焦がしたエヴァ8号機が四つん這いの姿勢で活動を停止している。

背部の装甲が外れ、圧縮空気が一気に吐き出される音と共に、天に向かってエントリープラグがよきつと伸びる。プラグの上部が開き、

「ひいーめー……!!!」

プラグから飛び出した真希波マリは、悲鳴のような声を上げながら、3階建てのビルくらいはある高さから一気に地上へと飛び降りると、そのまま8号機の左手へとダッシュ。左手がそつと握っている中身を覗き込んだ。

「姫!」

「ああ…、マリ。お迎え…ご苦労さん」

巨大な手の薬指中節にぐつたりとした様子で腰掛けているアスカは、力なく手を上げてマリの呼びかけに応える。

憔悴しきった顔、四肢のそこかしこに走る創傷、頭部以外は泥だらけの体。いつも美しく勇ましい同僚の姿は、そこには欠片もない。

「ひめえ…」

そんな様子のアスカに、マリは思わず目を潤ませ、口をへの字に曲げる。

「ひめええええ！」

そして泣きながらアスカの首に抱き着いた。

「ああ、姫、大丈夫？ちゃんと貞操は守ったかな？」

「なにバカなこと言ってるの……」

「つーかどーしちゃったのさあ。こんな髪になっちゃって……。わんこ君にふられちゃったのかな？」

「ただの気分転換よ……。つてかあんた遅いのよ……」

「ごめん、ごめん。ちよつと、パリまでバカンスに行つてたんだよお」

「はああ？」

「うそうそ、ジョーダンジョーダン。（半分ホントだけど……）」

「もう……」

アスカは問い詰める余力もなく大きく溜息を吐きながらも、ホツとした様子でマリの腕に自分の体重を預ける。しかし、すぐに何かを思い出して顔を上げ、

「姫？」

「そうだった……。こんなことしてる場合じゃないんだ……」

マリの腕から逃れて立ち上がるとした。

「あれ？」

しかしアスカの膝は体重を掛けた途端にすぐに折れてしまう。その場に倒れてしま
いそうになったアスカの体を、マリが慌てて支えた。

「ちよーつと、ちよーつとー。どこ行こうとしてんの？」

「あいつを迎えに行かなきゃ。あいつ、あたしが居ななきゃ何にも出来ないんだから…」

「あいつ？ あいつつて…、あーもしかしてゼーレのパイロットさん？」

「え？」

マリの顔を睨むアスカ。

「あんた、あいつのこと知ってるの？」

アスカの何時にも増して真剣な顔に、マリは少し不愉快そうに顔を顰める。

「知ってるつーか。何なのあいつ。こっちが姫のこと聞き出そうとしても、「姫を助けろー」の一点張りで、まともな情報なーんもくくんないだよ。ここまで来るのに苦労したさあ。まあ、あいつが連中の足跡のこと教えてくんなくや、姫を見つかるのもうちーとばかり遅くなつたかもしんないけど」

「へー、あいつが…」

存外「あいつ」に助けられたことを知り、アスカは口もとに小さく笑みを浮かべる。

「ん？ え？」

しかしすぐにアスカの頭上に、クエスチオンマークが浮かんだ。

「つてか何？ あいつがあたしを「助ける」つて？」

「そだよ。「アスカア」「助けてえー」つてうっさいんだよお」

「あいつが？ つてゆーか、あいつは今どこ！」

マリの肩を借りながら、アスカはエヴァ8号機の腹部の前に立っていた。

エヴァの人間で言えばちようどお臍がある場所。

そこから。

臍の内側からどんどんと何かを殴る音。

装甲の向こうから、怒鳴り声が聴こえる。

「ああーすうーかあー！！ ああーすうーかあー！！」

エヴァのお臍を見上げながら、アスカは思わず吹き出してしまった。

「ほんとだ。あいつ、喋ってる」

笑顔のアスカに、マリはまたもや少し不愉快そうに顔を顰める。

「あいつここに閉じ込めるの大変だったんだよ」

そう言いながら、「あいつ」の爪に引つ搔かれた頬を撫でた。

「どーでもいいから、ほら、可哀そうじゃない。さっさと出してあげてよ」

「はあ？ 可哀そう？ 姫の口から可哀そう？」

「うっさいわね。いいから、さっさと出す」

「いや。マジで危険なんだって、あいつ。野生児っつか、狼少女っつか」

「ああ、もう！」

渋るマリに痺れを切らしたアスカは、マリのプラグスーツの手首にあるコントロールパネルを勝手に触る。

するとエヴァのお臍の部分に埋め込まれた球体が動き、パカッと割れた。

「あくあ、もう知らないよ〜？」

割れた球体から、ブラウス一枚の少女が落ちてきた。

「あうー！」

真つ逆さまに落ちてきた空色髪の少女。ドサッと、砂地の地面に倒れ込む。

「ふう……ふえ……ふえ……」

頭を押さえ、ぐずり始める「それ」。

「あくあももう。泣かないの」

「ふえ？」

今にも大泣きしてしまいそうだった「それ」は、すぐ近くから掛けられたその声に、溢れ出しそうだった涙が一気に引っ込んだ。慌てて声が出た方に顔を向ける。

「ああああああー！」

「やつ。レイ。また会えたね」

「ああああああー！」

そして結局大泣きし始めた「それ」は、アスカに向かって飛びついた。

「ぐへえ!？」

「ありやりや!？」

「それ」に勢いよく抱き着かれたアスカ、そのアスカに肩を貸していたマリは、「それ」ごと地面にひっくり返ってしまった。

「もー、だからゆったじゃーん!」

抗議の声を上げるマリは、きつと押し倒されてしまったアスカもさぞかし立腹だろうと思っただが。

「はは、…レイ。…よく頑張ったわね。…偉いよ」

そのアスカは自分の胸で泣きじやくっている「それ」を抱き締めてやりながら、とても満ち足りたような笑顔を浮かべている。

そんなアスカを見て、どこか納得いかないような表情を浮かべていたマリだったが。

「なーんか毒気抜かされちゃって〜」

とにかく今は彼女と無事に再会できたことを、「おまけ」のひとりに一緒に喜ぶことにし

た。

第壹拾貳話

「おうおうおうおうおうー！」

絶え間なく続く激しい揺れと体中を床に押し付けられるような凄まじい重力に、「それ」は奇妙な悲鳴を上げながら目を回している。

「ぎいいいいいいいいー！」

「大丈夫、大丈夫。すぐ終わるから」

「それ」の隣に座るアスカは激しい揺れにも凄まじい重力にも顔色一つ変えず、隣で喚んでいる「それ」の頭を優しく撫でてやっていた。

やがて。

「おおおお…」

揺れが収まり、重力から解放され、ふんわりと浮き上がる体。

「はい、もういいよ」

アスカは自身のシートベルトを外すと、「それ」の体を拘束していたシートベルトも外

してやる。途端に、

「あわわわ……！」

座席から浮き上がった「それ」の体はそのまま天井まで達してしまいそうになり、
「うううううー！」

慌ててアスカの腕にしがみつく。

「はははは」

慌てふためく「それ」の姿が可笑しくて、アスカは声に出して笑った。

「ほら」

アスカは慣れた様子で床をぼんと軽く蹴る。するとアスカの体は自分の腕に抱き着いている。「それ」ごとふわっと浮き上がり、ゆつくりと壁際まで移動した。

壁には小さな丸い窓が開いている。

「()、覗いてみて」

「それ」はアスカに促されるままに、小窓のやたらと分厚いガラスに額をくっ付け、窓の外を覗き込んだ。

「おおおおお……」

窓の外に広がる光景に、「それ」は感嘆したような唸り声を漏らす。

「これが地球よ……」

眼下に広がる赤い海、赤い大地。大気に包まれ、淡い光を放つ地球が小窓一杯に広がっていた。

「宇宙によっこそ、レイ」

「おとおお…」

エヴァのお臍の部分にある小さな格納庫。その中で、仲良く小窓を覗き込む2人。その様子をカメラの映像を通してエントリープラグ内のモニターから見ていたマリ。

「あ、吐いた…」

どうやら宇宙初体験の空色髪の少女が、宇宙酔いしてしまったらしい。前屈みになり、その口から光る液体を迸らせている。無重力の空間に光る液体が広がり、慌てふためく赤毛の少女。

「あっはっはっはっはー！」

そんな2人の様子に膝を叩いて笑うマリ。堪忍袋の緒が髪の毛並みに細い彼女のこただ。烈火のごとく怒りだすだろうと、半分期待してモニターを見ていたら。

赤毛の少女は手早く格納庫内に備えられたビニール袋を手にとると、その口を広げてパパッと宙に広がる光る液体を回収。ビニール袋の口はそのまま空色髪の少女の口に当て、その背中を優しく擦ってやっている。

期待したものと違う反応を見せる彼女に、マリはつまらなそうに唇を尖がらせた。
「なくんだか甲斐甲斐しくなっちゃって〜…」

『こちらトリプルA。ポッドエイト、ポッドエイト』

スピーカーからノイズ交じりの音声。

「はいはい。こちらポッドエイト。プリンセスは無事回収したよーん。着艦許可おくれー」

『了解。3番デツキへの進入を許可。よくやったわね、マリ』

「お茶の子さいさいです、葛城艦長」

背負っていたロケットブースターのノズルから炎が消え、慣性飛行へと移るエヴァ8号機。その行く手では、宇宙空間の中で漂う巨大な艦影が待ち構えている。



ヴィレの母艦、ウンターの格納庫に收容されたエヴァ8号機。排出されたエントリープラグから降りてくるパイロット、真希波マリは、エヴァの足もとで待っている2人の人物の姿を認め、思わず「げっ」と下品な声を上げた。

「にやにも、艦長と副長がわざわざ迎えにでなくてもいいのにな〜」

予想外かつ余計なVIP待遇に、マリは仕方なしといった表情で、8号機の膝からぴよんと2人のもとへと飛び降りた。

「真希波マリ、ただいま帰還いたしましたー」

組織のトップとトップ2を前に、一応真面目に背筋を伸ばして敬礼をする。

部下の敬礼に、葛城ミサトも赤木リツコも軽く敬礼をして応える。

「おかえり、マリ。それで、アスカは？」

表情はいつもと変わらないように見えるが、ミサトの声はどこか弾んでいる。我がエースパイロットが無事帰還できたことを、喜んでいるのだろう。

しかしそんなミサトの問い掛けに対し、

「えつとー、それがあー」

マリの返事は歯切れが悪い。

「え？　もしかして…」

マリのその態度に、掛けたサンングラス越しにも分かるほどに、ミサトの表情が険しくなった。

「ああ、だいじよ、だいじよぶ！　姫は無事ですよ。ちょっと怪我しちゃってますけど、もう元氣ピンピンです」

それを聞いて安心したようにほっと溜息を吐くミサトに、マリは零れそうになる笑み

を必死で堪えた。艦長という重大な立場に居る以上、部下の前で動揺した姿は見せられないと、かつての上官を真似てか常にサングラスを掛けるようになったミサトだが、マリからして見れば艦長の心情はガラス張りの筒抜け状態だった。

「じゃあアスカはどこ？」

ミサトの後ろに立っていたリツコが口を挟む。

「うー、うー」

両拳で自分のこめかみをぐりぐりしながら身を振らせ、「私、今困ってます」アピールをするマリ。

「なんなの？ 私たちは早くアスカの口から報告を聞きたいし、アスカにも「ネルフ本部制圧作戦」のことを伝えておきたいのよ」

「うー、そりゃ分かかってるんですがねい〜…」

「いい加減、怒るわよ」

リツコの冷たい言葉。

「わ、分かりましたよお。……おこんない？」

「は？」

「は？」

ミサトとリツコの調子の外れた声が重なる。

「…絶対におこないって、約束してくれませんか？」

「…事と次第によるわね…」

「ですよね…」

「何ちんたらやってんのよ、コネメガネは…！」

格納庫内はすでに重力が戻っている。つまり、8号機は無事、母艦に收容されたはずだ。であるにも関わらず、自分たちが格納庫に閉じ込められたままの現状に、アスカは苛立ちをすでに噴火寸前にまで募らせていた。

あと3分待つて何の音沙汰も無かったら、格納庫の扉を蹴り破つてやろうか。そう考え始めた頃。

プシュツと、圧縮された空気が漏れる音と共に、目の前の扉がゆっくりと開き始めた。「はーやれやれ。やつと外の空気が吸える」

扉が開くと、そこにはマリ、そしてミスアトとリツコが立っている。

「やつほ。Ich bin wieder da」

アスカの母国語交じりの挨拶に、ミスアトも少しだけ口もとに笑みを浮かべながら応える。

「おかりなさい、アスカ。本当によく無事で帰つ…て…！」

ミサトはアスカへの挨拶を言い切る前に、腰のホルスターから拳銃を抜き、アスカに向かつて構えた。

一瞬の躊躇いもなく引き金を引く。

銃口から放たれる小指ほどの鉄の礫。その礫はアスカの額に向かつて。いや、そのアスカの背後に立っていた、空色髪の少女の額に向かつて、空気を切り裂きながら突き進んでいく。

しかしその銃弾は、ミサトがホルスターから銃を抜いた瞬間にアスカが「それ」の体に素早く抱き着き、押し倒したことによつて、「それ」の空色の髪の毛先を掠めただけに留め、背後の格納庫の中を何度か跳弾した後には止まった。

「ミサト！ こんな所で発砲しないで！」

突然の発砲とその後の跳弾に頭を低くしながら怒鳴るリツコを無視して、ミサトは指示を下す。

「保安部に連絡！ 第3格納庫に敵侵入！ 急いで！」

「艦長お…、おこんないでつてゆつたじゃん」

「黙りなさい！ アスカ！ 何のつもり！」

ミサトは「それ」を庇うアスカに銃口を向けたまま、厳しい声で問うた。

「あちゃー、やっぱこうなるか…」

この事態をある程度予想していたアスカは、ミサトの厳しい声とは対照的などこか緊張感のない声で呟く。

「そいつが敵つてことは、そいつと同じ顔をした連中を一番多く殺したあんたが一番分かっているはずよ！」

「いや…、そうなんだけどさ…」

アスカは押し倒したと同時に「それ」の額とごつつんこしてしまった自分の額を擦りながら、少しだけ顔を起こした。床の上では、額をごつつんこされた「それ」がくるくと目を回している。

「ねえミサト。このコを殺すのはちよつと勘弁してくれないかな」

「却下。例外は認められません。そこをどきなさい」

「ミサトがそれをこつちに向けてる限り、それはちよつと出来ない相談ね」

「アスカ！」

「シンジの！」

ミサトの怒鳴り声と、アスカの怒鳴り声が重なる。ミサトは構わず続けようとしたが、

「…シンジの、…遺言なのよ…」

今にも泣きそうなアスカの口から掠れ声で搾り出されたその言葉に、ミサトは構えて

いた拳銃を下ろさずにはいられなかった。

「シン…ちゃん…の？」

ミサトがかつての同居人をその愛称で呼ぶのは、14年振りのことだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

艦長室に集まった3人。艦内に收容された時は全身泥だらけだったアスカは、ドライシャンプーと濡れタオルでとりあえずの洗身を済ませ、スウェットパンツにTシャツというリラックスした格好でこの艦のナンバー1、ナンバー2、ミサトにリツコと対峙していた。

そのミサトはサングラスを外し、左手の親指と中指で目頭を押さえている。

「…少し時間置こっか？」

そのアスカの申し出にミサトは頭を横に振り、目尻に溜まっていた涙を拭いて顔を上げた。一度だけ深く息を吸い、大きく息を吐く。サングラスを掛け直し、アスカを見つめた。

「私は反対よ」

「は？」

「綾波レイ」のサルベージ。艦長として許可できません」

「だからこれはシンジの遺志なんだって……!」

「たとえそれがシンジくんの遺言であったとしても承認できかねます。危険過ぎるわ。そもそもシンジくんが聞いたっていう、冬月コウゾウの話し自体がブラフだという可能性だつてある」

「リッコ」

アスカは援護射撃を求めてリッコに視線を送るが、

「私も艦長の意見に賛成よ。不確定要素が多過ぎる」

「そんな……」

組織のトップとトップ2による十字砲火を浴び、アスカは下唇を噛む。ところが、十字砲火の片翼を担うリッコが意外にも手のひら返しをする。

「副長としては艦長の意見に賛成だけど、技術開発部の責任者としては、シンジくんの案は実に興味をそそられるわね」

「え?」

「何を言い出すのよ! リッコ!」

「初号機によるシンジくんのシンクロ拒絶。ウンダーの主機としての初号機の非力さ。初号機の中に「綾波レイ」という異物が居るとすれば、原因不明だったそれらの事象に

説明がつくわ」

「初号機の非力さ？」

リツコの発言の中で前者についてはアスカも承知のことだったが、後者については初耳だった。

「艦長には前にも伝えたことだけど。「神殺し」の異名を持つヴンダーの性能はこんなものじゃない。ヴンダーはまだその能力を完全には発揮できてはいない。その原因は、主機たる初号機のパワー不足。初号機のパワーは単体兵器として運用していた頃に比べて、明らかにスケールダウンしてると思われるわ。あのサードインパクトを起こせるほどの初号機からのエネルギー供給量が、この程度とは考えられないもの」

「初号機に在る「綾波レイ」の存在がリミッターになっているとでも言うの？」

「考えられない話ではないわ。あくまで初号機の中に「綾波レイ」が居ると仮定した上での話し فقط」

「リツコはこのサルベージが、ヴンダーの覚醒、ひいては我々ヴィレの戦力増強に繋がる、そう言いたいなの？」

「ええ」

ミサトは腕組みをして、床を睨む。

「判断は艦長に委ねるわ。私は副長としてはこの案に反対だから」

「…ずるいわね」

ミサトにジロリと横目で睨まれ、リツコは肩を竦める。

再び床を睨み、長考すること1分。

今度はジロリとアスカを睨む。

「もしサルベージ中に初号機暴走の兆候が少しでも表れたら、サルベージは即時中断し、あの素体も即刻処分する。それが条件よ」

腕組みしながら問うてくるミサトに対し、アスカも腕組みをしながら答える。

「オツケー。いいわ、それで」

「リツコ」

「3時間で準備するわ」

「3時間？ 凍結状態のシンジくんを初号機からサルベージさせた時とは訳が違うのよ？」

「我々の調査では、初号機の中に「綾波レイ」の存在は確認できなかった。おそらく通常の観測では認識できない、量子のような状態で初号機の中に保管されていると推測できるわ」

「そんなの…、サルベージなんて不可能じゃない」

アスカの顔に不安の色が浮かぶ。

「実は初めての試みじゃないのよ、量子状態からのサルベージは。私がネルフに入るよりも前の話だけだね。その時の記録を流用できるわ」

アスカは不安げに尋ねた。

「その時の結果は？」

「失敗したらしいわ……」

アスカ、そしてミサトの顔が瞬時に曇る。

「でも今は素体がある。我々は、この場合「ネルフは」、だけど、綾波タイプのパークソナルデータ移植技術もすでに確立させている。それを当時の実験データに応用すれば、量子状態からのサルベージも不可能ではないはずよ」

「オツケー、決まりね」

アスカとリツコは腕組みしたままの艦長を見つめる。

「分かりました。サルベージ実験の開始を今から3時間後とします。それまではアスカ、ゆっくり休んでて」

「はい。あくひっさしぶりにベッドで寝れる〜」

緊張から解き放たれた様子のアスカは、背伸びをしながら廊下へ出る扉を開いた。

「うううううううううう！」

「もう！レイさん、待ってーなー！」

目の前を走って横切っていった「それ」に、アスカは頭を抱えなくなった。

素っ裸の「それ」の後を追って、鈴原サクラがアスカの前を横切っていく。サクラはアスカの存在に気付き、

「あ、アスカさーん。もう助けて下さいよー。レイさん、ちつともジツとしててくんないんですよー」

関西弁のイントネーションでアスカに助けを求めてくる。どうやら泥だらけだった「それ」の体を洗っていたらしい。サクラ自身、白のTシャツにハーフパンツと腕も脚も剥き出しの格好であり、肩や手には石鹸の泡が付いている。

「おうっ?」

サクラの「アスカ」という言葉に敏感に反応した「それ」。すぐに踵を返し、こっちに突っ走ってくる。

「ああああすうううかああああ!」

「ぐへえ!」

「それ」に飛び付き様に抱き着かれ、「それ」と共に床にぶっ倒れるアスカ。

「え! アスカさん! ちよつと、レイさん、ダメですよー!」

アスカの堪忍袋の緒が高血圧のオヤジの血管並に切れやすいことを知っているサクラは、慌てて「それ」をアスカから引き剥がそうとする。

「いいいいいやああああああ！」

サクラの手にじたばた抵抗する「それ」は、ますますアスカに抱き着く腕と足に力を籠めていく。

「ちよ…、ギブ、ギブ…」

頸動脈を締め上げられるアスカは目を白黒させながら「それ」の背中をタツプ。

「それ」の腕が少しだけ緩み、アスカは「それ」に抱き着かれたままむくりと上半身を起こす。

サクラも、そしてミサトもリツコも、次の瞬間には烈火のごとく怒りだすだろうアスカを予想し、さあどうやって宥めようかと思案していたところ。

「もう、何やってんのよ、レイ。ちゃんと顔洗いなさい。あ、サクラ。あとはいいわ。あたしがやるから」

「はあ」

サクラが拍子抜けしたような返事をしている間にアスカは立ち上がると、サクラの手からタオルを受け取り、「それ」と手を繋いで歩き出してしまった。「それ」も何の抵抗もせず、素直にアスカの後を付いていく。

「ねえ」

2人の後ろ姿を見つめながら、ミサトは隣に立つリツコに声を掛ける。

「なに？」

「あれ、誰？」

「あれって…、どっちが？」

「いや、赤ちゃんプレイしてる「綾波レイ」もショックはショックなんだけど」

「アスカも色々あつて、ようやく大人になつたつてことじゃない？ 突つ張つてはいるけど、見た目に引つ張られて中身はどこかお子様だったから」

「そうなのかしら。まるでお母さんみたいじゃない。あのアスカが」

「いいことじゃない。この艦にお母さんは一人も居ないんだから」



「あうあうあう…」

宇宙での水はとても貴重だ。洗身一回につき与えられる水は洗面器一杯分。アスカは洗面器の水に浸したタオルに石鹸をこすり付けると、「それ」の背中をこしこしと拭いてやる。

「まったく。文字通りの赤ん坊のような肌ね、あんたは」

きめの細かい真っ白な「それ」の肌を羨ましそうに見つめる。

「生まれたての体」

わき腹を「ごしごし」と拭いてやる。「それ」がこそばゆいとばかりに、くすくすと笑いな
がら身を振らせる。

「無垢な心」

一通り全身を洗うと、手で洗面器から水を掬い、タオルの泡を落とす。

「あんたの中に入ることできるなんて、えこひいきも幸せものね…」

固く絞ったタオルで、今度は体に残った石鹸を拭き取っていく。絞られたタオルに体
を擦られて痛いのか、「それ」はうーうーと唸りながら身を振らせる。

ふくらはぎの泡まで拭き取って。ふと、アスカの手が止まった。

額を「それ」の背中に付ける。

「これで…、本当に…、良かったんだよね…」

誰に問うわけでもなく、そう独り言ちた。

「ああああ…」

「は？ なに？」

「それ」は身を振らせて振り返ると、アスカの手からタオルを奪い取った。

「あーすーかー、あーすーかー」

「へ？ あたしの体を洗ってくれんの？」

「うろうろう」

「んじやお願いしよつかしら」

今度はアスカが「それ」に背中を向けた。

「ああああ」

「それ」はアスカの見様見真似でタオルを固く絞ると、手加減なしでアスカの背中を擦り始めた。

「いったああああー！」

艦内にある女子専用の居住区。戦艦という限られた空間の中で個人に与えられるスペースは僅かであり、かつ簡素で、部屋一つに幾つものカプセル状の簡易ベッドが置かれているだけである。

その中で束の間の仮眠を取っている真希波マリ。彼女が寝るカプセルの一つ上のカプセルから、うら若き乙女たちのきやつきやというはしやぎ声が響いてくる。

マリは涙で枕を濡らしていた。

「あたしも姫と洗いっこしたあゝいいゝ…！」

第壹拾參話

時計はすでに約束の時間を指している。

アスカは「それ」にワンピースタイプの検査衣を着せると、その両肩にぼんと手を置いた。

「ああああ……」

柔らかに微笑む「それ」。

アスカは両手を「それ」の肩から腕へとするすると滑らせ、そして最後に「それ」の手を握る。

「じゃ、行きましょうか」

「あう」

2人は手を繋いだまま部屋を後にした。

最初は肩を並べて歩いていた2人だが、扉を越える度に狭くなり、そして暗くなる廊下に、あからさまに怯えの表情をその顔に宿す「それ」は、アスカの背後に回りアスカが着るシャツにしがみ付きながら歩いた。

最後の扉の向こうに現れた赤い光に満たされた部屋に足を踏み入れた2人。最初に飛び込んで来たのは、部屋の中央に収まる巨大な赤い球体だった。大きな目ん玉に睨まらているようで「それ」は益々体を縮こませてアスカの背中に隠れてしまったが、見慣れているアスカはそのままスタスタ歩みを進める。

球体の周辺には様々な機材が配置され、その機材に繋がれた端末のキーボードを赤木リツコの10本の指が忙しく叩き、その隣でも伊吹マヤがリツコの指と遜色ないスピードで端末を操作している。鈴原サクラはそんなリツコとマヤの側にあるテーブルに淹れたてのコーヒーマグのカップを置き、少し離れた場所では葛城ミサトが巨大な球体を静かに見上げている。

「なに？ あんたたち4人だけなの？」

これから行われる実験の規模と重大性に比して、あまりにも少な過ぎる人員。リツコは端末の画面を見つめたまま答える。

「極一部の乗員にしか知らせてないのよ。余計な不安を与えてしまいたくないから。実験プログラムはオートメーション化されているから、オペレーションは私たち2人で事足りるわ」

「そっ」

リツコは右中指で最後のキーを押し、隣のマヤを見る。リツコの視線を受け、マヤは

大きく頷いた。リツコは頷き返すと、球体の前のミサトに視線を向ける。

「艦長。被検体が到着しました。いつでも始められます」

ミサトは球体から視線を外して振り返った。

「結構。進行については赤木副長に一任します」

そう短く答え、ミサトは球体から離れると、リツコが座るコンソールから数歩後ろに置かれた椅子に腰を下ろし、サクラから湯気が立ち昇るカップを受け取る。

「アスカ。それを被検体の首に」

リツコはコンソール側の台を指さす。アスカは台に置かれた金属製の首輪を手にとった。それは、以前にミサトが碇シンジの首につけたものと同じもの。

「レイ、ちよつとごめんね」

首輪を開くと、「それ」の首に回し付け、首の後ろで留め金を留める。

「ううう…」

首を絞めつけられる感触に、ちよつと不快そうに眉根を寄せる「それ」。アスカは苦笑いする。

「あなたには必要ないものだとは思っただけだね。あつちの怖い大人たちがうるさいから」

アスカの言う怖い大人たちの片割れは、後ろで座っているもう一人の怖い大人に手を

伸ばす。

「ミサト、これ」

リツコはミサトに首輪の起爆装置を渡そうとした。

「やめとくわ」

ミサトは頭を横に振り、起爆装置の受け取りを拒否する。

「私には前科があるからね」

ミサトの言う前科とは、あの少年がネルフに自ら攫われた一幕のことを言っているの
だろう。

「そう」

リツコは短く答え、起爆装置を自身のジャケットのポケットの中に入れた。

「じゃあ、アスカ。被検体をあのカプセルの中へ」

アスカはリツコが見つめる先に視線をやる。

巨大な赤い球体の前には、円筒形のカプセルが頭を球体の方に向けて寝かされてい
た。

「レイ、行きましょう」

「それ」の手を引き、カプセルに向かって歩き始める。

カプセルの前に立つと、圧縮空気が吐き出される音と共に、ガラス張りのカプセルの

上半分が浮き上がった。急に動き出したカプセルに、ようやく赤い部屋の中の空気に慣れてきた「それ」はびっくりして、またもやアスカの背中の後ろに隠れてしまう。カプセルの上半分はそのまま静かに下へとスライドしていく。

「それ」は恐々とカプセルの中を覗き込む。カプセルの中は、一人が横になることができる程度のスペースがあつた。

アスカはリツコに向けて言った。

「服は脱がせた方がいいのかしら？」

「いいえ。そのままで結構よ」

「そつ。ねつ、レイ」

「それ」を見つめるアスカ。

「あう？」

カプセルの中を不安げに見つめていた「それ」は、声を掛けられゆっくりとアスカに向き直る。

アスカはカプセルの中を指差す。

「この中に寝てちょうだい」

アスカのその指示に、しかし「それ」は。

「うううううう！」

物凄い勢いで首を横に振り始めた

「い……や……い……！」

「大丈夫よ。ほら、何にも怖いものなんてないでしょ？」

そう言いながら、アスカは右手をカプセルの中に入れてみせる。

「うううう……」

「それ」はカプセルの中でひらひらと揺れるアスカの右手を、不安を色濃く宿した表情で見つめる。涙ぐんだ目でアスカを見た。

「あーすーかー……？」

「こんな狭くちや2人は無理よ。あんた一人で入るの」

「いいいいやあああああ！」

「それ」は叫びながらアスカに腕を伸ばし、その胴体にしがみ付いてきた。

「ちよ、ちよつとレイ！」

困ったように「それ」の体を抱きとめるアスカ。「それ」はアスカの腕の中で、足をじたばたさせ始める。

「鎮静剤が必要ならすぐに用意できるけど？」

背後からリツコの冷たい声が飛んでくる。

「ちよつと待つてよ。ね？ レイ。お願いだから言うこと聞いて」

アスカは出来る限りの優しい声で語り掛けながら、「それ」の顔を覗き込む。
「やああああああ！」

しかし腕の中の「それ」は目をぎゅつと閉じたまま、アスカの方を見ようとしな
い。「ねえレイ。お願いよ」

アスカは辛抱強く声を掛け続ける。

「ああああああああ!!」

しかし「それ」はアスカの声すら一方的に拒絶するかのように、声を張り上げ。

「レイ……」

「ああああああああ!!」

ついには耳を塞いでしまった。

「レイ……」

「ああああああああ!!」

「ねえ、聴いてよ……、レイ……」

「ああああああああ!!」

「レイ……」

「ああああああああ!!」

「いい加減にしなさい!!」

突然のアスカの怒鳴り声に、自分用に用意したコーヒーのカップに口を付けていたサクラは舌を火傷してしまい、小さな悲鳴を上げてしまう。顔を顰めながら怒鳴り声が出た方を見ると、アスカが「それ」の両腕を掴んでいた。

「あたしの言うことが聞けないの!?!」

アスカの激しい剣幕に、「それ」は目を丸くして口を噤む。

「散々面倒見てきてやったのに!!少しはあたしの言うこと聞いてくれたっていいじゃない!!」

そう怒鳴りつけたアスカは、突き放すように「それ」の腕から手を離し、背を向けてしまった。

「あ……す……か……」

「それ」はすぐにアスカの腕にしがみ付こうとした。しかし、

「鬱陶しい! 触るな!」

アスカは「それ」の手を振り払う。

「あんたなんか大嫌いよ!!」

カプセルの前で突然始まった2人の仲違い。サクラはそわそわしながら2人の様子を黙って見守り、リツコは煙草を吹かしながら冷めた目で天井を見つめ、マヤは淡々と端末のキーボードを叩き続けており、ミサトは腕組みをしながら椅子に深く腰掛けてい

る。

「それ」の顔が悲痛に歪む。今にも泣き喚き出してしまいそうに顔をしわくちやにしたが、必死に下唇を噛んで腹の底からせり上げつつくる何かを喉の奥に押し留めた。

そっぽを向いてしまったアスカの横顔を見つめていて、そしてカプセルの中を見下ろして。

ぼつかりと空いたカプセルの入り口。

無機質なカプセルの、何も無い中身。

ぶる、と「それ」の肩が震えた。

縦るような視線をアスカの横顔に向けるが、アスカは肩を大きく上下させ、あからさまに怒りを纏った溜息を吐いている。

そんなアスカの様子に「それ」は慌てて、

「あ、あ、あ、あす……か……、あすか……」

まるでアスカのご機嫌でも取るかのように、震えた声で何度もアスカの名を呼びながら、そして急いでカプセルの入り口の淵面に両手を置き、右足を跨いでカプセルの中に入ろうとして。

しかし、

「あうー」

入れようとしたつま先が淵面に引っ掛かってしまい、「それ」は頭からカプセルの中にひっくり返ってしまった。反対側の淵面に思いつきり顔を打った「それ」は、鼻を摩りながら救いを求めるような目でアスカを見上げた。

しかしアスカは助けの手を差し伸べてくれるどころか、壁を睨んだままで「それ」を見ようともしない。

「それ」の顔を益々焦燥が支配し、ぎこちない動作で足をカプセルの奥へと滑らせていくと、肩を震わせながらカプセルの底に背中を付けていく。

「それ」の体は、すっかりカプセルの中に収まった。

「あすか…、あすか…」

まるで許しを乞うような「それ」の声。

アスカはようやくカプセルの中の「それ」を見下ろす。

「ふん。最初っからあたしの言うこときいてりやいいのよ…」

冷たいアスカの眼差しと声音に、「それ」はまるで母親に折檻された幼子のような表情で、小刻みに何度も頷いた。

「リツコー」

アスカは苛立った声で副長の名を呼んだ。

「それではサルベージを開始します」

リツコは淡々と告知した。

カプセルの開いた前面が元の場所へ戻ろうと、スライドし始める。

徐々に顔の方へとせり上がってくるガラスの壁。

「あすかあ…」

カプセルの中から、情けない声が漏れ出る。

せり上がってくるガラスの壁と、アスカの顔とを交互に見る「それ」。

アスカの反応は変わらさず冷たい。

「そこで黙って寝てなさい。すぐに終わるから」

それだけ言い残し、アスカはカプセルに背を向けて歩き始めた。

「それ」はすでに涙が零れ始めた目でアスカの背中を見つめ、やがてせり上がってきた

ガラスの壁で見えなくなってしまうと、唇を噛み締めながらぎゅつと目を瞑った。

「LCL注入開始します」

マヤが端末のキーの一つを押す。

ゴボツと、足もとから奇妙な音がした。

すでにカプセルは密閉され、まともに身動きが取れない状態。「それ」は眼球だけを動

かして、足もとを見た。

カプセルの一番端っここから、大量の液体が進入し始めている。

「うう…、うう…」

たちまち足は液体の中に沈んでしまう。液体はカプセルの底をどんどん広がっていき、「それ」のお尻を、腰を、背中を、肩を、後頭部をひんやりと浸していく。

「うううう…」

「それ」の体の震えが大きくなっていく。恐怖に何とか耐えようと、ぎゅつと両手を握り締める。

「ううううう…、ううううう…」

すでに液体はカプセルの半分を埋め、ついに「それ」の耳の穴に進入してきた。「それ」の顎が小刻みに震え、上の歯と下の歯とがカチカチと不快な音を鳴らす。

そして液体が「それ」の口の端にまで達した時。

「ああああああ!!」

「それ」はついに耐え切れなくなった。

カプセルの内側から激しい物音。「それ」が腕を、足を激しく動かし、ガラスの壁をどんと叩いている。

「——っ!! ——っ!!」

ガラスの向こうでは、「それ」が必死の形相で叫んでいる。しかしその叫び声は分厚いガラスに阻まれ、外までは伝わらない。

「リッコ…」

少し揺れているカプセルを見つめていたミサトは、リッコの背中に声を掛けた。

リッコは端末に視線を落としたまま答える。

「大丈夫よ。あれくらいでは、あのカプセルは破壊できないわ」

「そう」

「マヤ、少しLCL濃度を上げて。被検体の意識レベルを下げせましょう」

「分かりました。LCL濃度を0.5パーセント上げます」

カプセルの中の喧騒を他所に、実験は粛々と進められている。

その様子を、アスカは少し離れた場所で、壁に背を預けながら眺めていた。

カプセルからは変わらず激しい物音。

「それ」の両拳が必死にガラスを叩き、つま先がカプセルの側面を蹴っている。

ガラスの中は気泡だらけ。

時折ガラス面に覗く「それ」の口が、裂けんばかりに大きく開き、必死に叫んでいる。

「被検体のBP、パルス共に300を越えています」

「抑制剤を投与して」

「分かりました。交感神経抑制剤を…」

ドン！

リツコの指示をマヤが復唱しようとしたその時、カプセルの方から一際大きな衝撃音が鳴り響いた。

ドン！ ドン！ ドン！

その音は立て続けにカプセルの中から響き、響くたびにカプセルが大きく揺れた。

「なに？」

マヤはすぐさまカプセル内のカメラを確認する。

「どうやら被検体がカプセルに頭突きをしているようですね」

マヤのその報告に、リツコは呆れたように溜息を吐いた。

「被検体の額に裂傷を確認。どうしましょうか。今のところ実験の進行に支障はありませんが」

「仕方ないわね。途中で死んでもらっちゃ困るし。LCL濃度をもう2パーセント上げましょう」

「しかしそれでは被検体の脳神経に損傷を来す可能性が…」

「最悪、サルベージの器としての機能を果たしてくれさえすれば問題ないわ」

「分かりました。LCL濃度をもう2…」

「あー」

そのちよつと調子の外れた声はリツコとマヤの背中の方から聴こえた。

振り向くとそこには、両手を天井に向けて万歳した格好のアスカが居る。

「あーごめんごめん」

2人の視線に見つめられるアスカは、万歳した手をひらひらさせながら何故か2人に謝る。

「やっぱなし。なしなしなし。やめよやめよ、こんなこと」

アスカは上ずつた声でそう言いながら、カプセルの方へと歩いていく。

「急になに？ アスカ」

ミサトは椅子に腰かけたまま怪訝そうな顔で問いかける。

「いやー、何考えてたんだろうね、シンジも。魂なんてそう簡単に出したり入れたりできるわけないじゃない。これだからガキシンジはバカシンジなのよ。それに乗っちゃうあたしもバカよねー。何やってんだろほんとまったくあつほらしー」

「アスカ…」

「はい、止め止め。こんなバカなことやってる暇があったら、ネルフ本部制圧作戦の準備

をするべきよね。はい中止い！」

「アスカ…」

「ほら何やってんのよりツコ。実験は中止よ。マヤ。さっさとLCL抜いてこのカプセル開けてよ」

「アスカ…」

「マヤ。早く開けて」

「アスカ…」

「マヤ！ 早く開けろって言うてるのよ！」

「式波大尉!!」

アスカの怒鳴り声と、ミサトの怒鳴り声が重なる。

「式波大尉」

ミサトは殊更アスカを階級で呼んだ。

「本実験はすでにヴィレの最高意思決定機関で承認されたものです。パイロットの生存で中止できうるものではありません」

「最高意思決定機関って…、あんたとリツコだけじゃないの…。何こんなくだららないことに本気になってんのよ。バカらしい…」

ミサトはアスカの無理に作ったような笑顔をじっと見つめて。

そしてリツコに言った。

「リツコ、実験を続けて」

「言われなくても」

そう答えるリツコは端末から目を離さず、作業を続ける。

「ちよつと待つてよ！」

アスカの悲鳴のような訴えに、しかしミサトの声は酷く平坦だ。

「式波大尉。この実験はあなたが提案したものよ」

「だから言ってるじゃない。こんなの無理だつて。あたしが間違つてたわ」

「間違いかどうかは、実験の結果を見れば分かります」

「ミミも譲ろうとしないミサトを前に、アスカは眉根を寄せて目を閉じ、口から深く息を吐いた。

「ねえ、お願い。もうやめよ。これじゃあ……」

悲嘆に暮れた眼差しでミサトを見つめる。

「これじゃ、レイが可哀そうじゃない……」

アスカのその言葉に、今度はミサトが口から深く息を吐くことになる。やや失望したような表情で、アスカを見返した。

「アスカ。あれはただの綾波タイプの一つ。魂の入ってない、空っぽのただの器よ」

「でもー」

アスカは胸の前に拳を握って訴える。

「でも、あいつは泣いて笑って！ あたしたちと一緒になのよ！ えこひいきよりもよっぽど人間らしい奴なの！」

「二種の依存症ね…。ようやく人形遊びを卒業したと思ったのに…。母親のトラウマがそうさせているのかしら…」

リツコがぼそりと呟いたその言葉に、アスカは咄嗟に我を忘れそうになったが、奥歯を噛み締め、理性を総動員させて怒りの衝動を抑え込んだ。

「なんでもいいいわよ。ねえ、ミサト。お願い。今すぐこの実験を中止して。ヴンダーの能力がイマイチだっていうなら、あたしがその分働くから。ネルフなんて、あたしが一人ですべて潰してやるから。だから、お願い」

そこまで捲し立てるように話し続けて、一度口を閉じ、生唾を呑み込んで乾いた喉を潤す。ミサトを正面から見つめ、そして。

「お願いします…」

もしかしたら、アスカが人に対して頭を下げたのは、これが初めてだったかも知れない。

膝を手の指先をまっすぐに伸ばし、腰を折り、ミサトに対して深く頭を下げる。

「あの子を、レイを…、消さないで下さい…」

暫しの沈黙の後。

ミサトは言った。

「実験は継続」

「ミサト…！」

「アスカ。私たちがヴィレを結成した時、みんなで誓ったはずよ。ネルフ殲滅とフォー
スインパクトの阻止という大義の前に、一切の私事は捨てる。自分だけは例外だとも
も言いたいのか？」

ミサトのその言葉に、アスカは言い返す言葉を見つけることができず、口を噤んでし
まう。

「アスカ」

リツコが端末の画面を見つめたままアスカに声を掛ける。

「ミサトがどんな思いをしながらシンジくんにチョーカーを付けたか。分からないあな
たではないでしょうか？」

端末のキーボードを叩いていたリツコの手が止まる。アスカを見上げた。

「アスカ。ここが正念場よ。あなたが揺るがぬ強い意志を持った人間か。それとも私情

に溺れる弱い人間か」

アスカは口を噤んだまま、視線を床に落とした。

すぐ傍のカプセルでは、「それ」が今もカプセルのガラスを殴り、蹴り、額を打ち付けている。

アスカは膝を折り、カプセルのガラスに手を乗せた。

「アスカ！」

アスカを止めようとリッコが椅子から立ち上がり掛けたが、隣に立っていたミサトの手がリッコの動きを制した。

アスカはゆつくりとカプセルに顔を近づけ、ガラスの向こうを覗き込む。

苦しい。

苦しい。

濁った液体が口に、鼻に、耳の穴に。

あらゆる場所から体の中に入ってくる。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

苦しい。

苦しい。

助けて。

お願い。

助けて。

ここは嫌。

一人は嫌。

ここから出して。

私を助けて。

私を一人にしないで。

「レイ…」

ガラスに額を引っ付けて、中を覗き込む。

ガラスの向こうでは、「それ」が口から鼻から泡を吹き出しながら、もがき苦しんでいる。

「ねえ、レイ…。こっち向いて。…レイ」

「それ」の目が少しでもだけ開き、ガラス越しに覗き込むアスカの顔を捉えた。苦痛と恐怖を忘れ、一瞬呆けた表情をする「それ」。

しかしその顔はたちまちしわくちやに歪み、目から大粒の涙を滲ませて濁った液体の中へと浸透させていく。

「それ」が液体の中で必死に口を開閉させている。アスカにはその口が、繰り返し必死に「ごめんさい」と言っているように見えた。

「いいのよ、レイ。あたし、もう怒ってないからさ。こつちこそ、ごめんね」

こちらの声が分厚いガラスを伝って中に届くはずはないが、ガラス越しの「それ」はどこか安心した表情で口から小さな泡を吐いた。

その表情がアスカの心臓をまるで針の先端のようにちくりと刺し、アスカは辛そうに目を細める。

そして安心した表情を浮かべたのも束の間、「それ」も眉尻を下げ、顔を不安に歪ませてアスカを見上げた。

アスカは唇を噛み締めながら首を横に振った。

「ごめん。あんたをここから出すことは…、できないの…」

「それ」が両手でぺたぺたとガラス面に触る。「このガラスを開けて」とでも訴えるように。

アスカは唇を噛んだまま、首を横に振る。

「それ」は両手を握り締め、ガラスを叩き出す。

アスカは唇を噛んだまま、目を閉じ、首を横に振る。閉じた目の端から、一筋の涙が顎に伝った。

「ごめん…、ごめんね…。本当に…ごめん…」

アスカがカプセルの側で膝を折り、中に向けて何かを語り掛けている。おそらく被検体の説得を試みているのだろうが、状況は芳しくないようで、カプセルからは相変わらずどんどんとガラスを叩く音が響いている。

マヤは上官に言った。

「やはりLCL濃度を上げますか？」

「そうね…」

ねえ、どうしたらいい？

シンジ。

どうしたら…？

——アスカ駄目だよ。

あいつが耳の側で囁いたような気がした。

——レイが怖がつちやうじやないか。ほら、笑顔笑顔。

すぐそこにあの人がいる。

すぐそこに。

手を伸ばせば、すぐ届きそうなところに。

でも届かない。

いくら殴っても。

いくら蹴っても。

あの人にこの手は届かない。

何かに阻まれ、この手はあの人に届かない。

あの人が悲しんでいる。

苦しんでいる。

目から大粒の涙を流して。

すぐにその手に触れて。

頬に触れて。

大丈夫だよって、伝えたいのに。

悲しまないでって、伝えたのに。

でも。

あ、でも。

あの人が笑ってる。

すぐそこで。

あの人は口の両端を上げ、目を細め、眉尻を下げ、小さく笑っている。

あの人は笑っている。

そう。

もう大丈夫。

きつと、もう、大丈夫。

あなたが笑ってさえいてくれたら。

私は平気。

心に響いた「あいつ」の声に促されるままに。

零れ落ちる涙を必死に押し戻して、何とか笑顔を作って「それ」を見つめた。すると、どうだろう。

ガラスの向こうで。

濁った液体の向こうで。

あいつが笑っている。

顔の上半分はまだ不安を残しているが、しかし下半分は、確かに笑っている。

「レイ。怖がらないで」

自分の声が届いているはずはない。それは分かっているが、アスカは静かな声でカップセルの中に語り掛ける。

「思い出して。レイが生まれた場所を。レイが育ったところを。その液体は、あの水槽を満たしていたものと同じもの。そこは言わば、あなたのふるさとよ」

「それ」の顔の上半分も、少しずつ笑い始めている。

「大丈夫。あなたはただ、母なる海に身を委ねてればいいの……」

「BP100、パルス50。バイタル安定しました」

「被検体を自我境界パルスに接続させます。カプセルをコアの前へ」

「分かりました」

カプセルの下から駆動音が鳴り響く。

カプセルが頭部の方から徐々に上がり始め、カプセル全体が起立し始めた。

カプセルの動きに合わせ、アスカも立ち上がる。カプセルの中の「それ」の視界から、自分の顔が片時も外れないように。

「レイ……」

アスカのその呼び掛けに応じるように、「それ」はガラスに手のひらをくっつける。

「……」

ガラスの向こうで、「それ」が鼻の孔から小さな泡を漏らしながら口を開け閉めしている。おそらく、目の前に立つ赤毛の彼女の名前を呼んでいるのだろう。

アスカも、自分の手のひらをガラスに当て、「それ」の手に自身の手を重ねた。

「……」

アスカも、笑う。涙を流しながら笑う。

「パルス接続確認。問題ありません」

「それ」の脛が下がり始めた。

こく、こく、と、顎が落ち、上がっては落ち。

やがて「それ」はすっかり目を閉じ、顎はがくと落ち、四肢を弛緩させ、その体はふわりと底から浮いた。

「サルベージ、スタートです」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

椅子にだらしなく腰掛けながら、窓ガラスの外に広がる漆黒の宇宙を眺め、時折ソフトドリンクが入ったボトルのストローを齧る。そんな赤毛の少女の背中を、マリは少し離れたソファに寝そべりながら見つめている。

「ね、ひめ」

時折間延びした声音で読んでみるが反応はなく、

「ちえーっ」

マリは拗ねたように唇を尖がらせる。

休憩室の扉が開き、サクラが入ってくる。

室内にはアスカとマリの2人のみ。明らかに重い空気に、サクラはすぐにも踵を返したい気持ちで一杯だったが、その衝動を何とか堪えた。

「アスカさん」

窓ガラスに向いたままのアスカの背中に声を掛けるが、返事はない。

「実験終了しました」

やはり返事はない。せめてマリの方から何かしらの反応があるのではと期待してマリの方をちらりと見たが、マリはソファに寝そべったまま面白いはずもない広報誌をつまらなそうに眺めている。

ああもう、と心の中で地団駄を踏んでいたら、

「で?」

「え?」

「結果は?」

それはアスカの方から飛んできた声だった。サクラは慌てて窓ガラスに向いたままのアスカの背中に答える。

「あ、え、ええと。結果は成功です。サルベージは成功しました」

「そっ」

「素っ気ないアスカの返事。」

アスカは両足を上げ、反動をつけてひょいっと椅子から立ち上がると、そのまま扉の方へと行ってしまふ。

「あ。あの。会わないんですか？」

「は？　なんで？」

「へ？　いや、なんでって…」

「マリ」

「は？　はいはい！」

突然アスカに呼ばれ、マリは弾かれたようにソファから起き上がる。

「制圧作戦の発動は明後日よね」

「え？　そだけけど」

「んじや、あたし、今日明日は休暇申請するわ。ミサトに言つといて」

「はあ？」

マリが何か言う前に、アスカは休憩室を出ていつてしまった。アスカが出ていったドアを、残された2人は呆然と見つめていた。

「えつと…」

サクラはマリを見る。

「マリさんはどうします？」「綾波レイ」に会いますか？」
「ん？？」

マリは腕を大きく伸ばして背を反らし、

「あたしもいいや、これから哨戒任務だしねえ」

ソファからぴよんと飛び起き、休憩室を出ていった。

第二章 《終》

第三章

第壹拾四話

冬月コウゾウは苦虫を噛み砕いたような顔で廊下を歩いていた。

この組織のナンバー2という重大な地位に身を置く冬月だったが、この組織が数年前から本部警備用に運用している自律稼働式の小型量産機エヴァについては、その造形の醜悪さという一点において冬月の嫌悪感を掻き立てるものであり、そんな怪物と見紛う姿の小型量産機が「脱走者」を求めて構内をうろろうしている姿を見るのは、気分の良いものではなかった。

そんな冬月が抱く不快感は、とある場所に行きついて一層深いものとなる。

巨大な水槽を見上げる。

「全ては計画の内とはいえ…、碇」

水槽の中を漂う残骸。

「この被害は甚大だぞ…。パイロットの「ストック」がない今、ヴィレの連中が攻めてきたらどう対抗するつもりだ…」

「脱走者」がもたらした被害を目視で確認した冬月は、次の目的を果たすために再び廊下を歩く。彼はあるものを探していたのだが、探しものにはその所在を知らせる発信機が付けられているので、それは労せずともすぐに見つかった。

廊下に真ん中に、その探しものが倒れている。

冬月は眉間に皺を寄せながら溜息を吐いた。

まるで母体の中で眠る胎児のように膝を胸の中に抱え、床に横たわっている黒いプラグスーツを着た少女。その側に立つ。

立ったまま、空色の髪の毛の隙間から見える少女の顔を観察する。

うつすらと開いた瞼。

その瞼から覗く虚ろな瞳。

薄い唇は小刻みに開閉を繰り返し、何事かを繰り返して呟いている。

「わたしはだれ…、わたしはだれ…、わたしはだれ…」

冬月は目を閉じ、かぶりを振る。

彼らがエヴァの操縦システムとして運用している少女「たち」。常に改良を重ねているエヴァ本体とは違い、少女「たち」は開発した初期の頃から20年以上経った今でもその仕様は殆ど変わっていない。しかしそれは少女「たち」がシステムとして完成されているという訳ではなく、むしろ複雑奇怪なエヴァの操縦システムとしては、少女「た

ち」は完成とは程遠いものだった。

何しろ、あまりにも精神が不安定なのだった。

開発した当初は「入れ物」に魂を注入してもすぐに自我を崩壊させ、発狂し、廃人としてしまうケースが続出した。

精神の安定化を図るために、極力少女には感情というものを芽生えさせないよう教育してみたが、それでも肝心のエヴァとの同調は困難を極めた。苦肉の策として、この組織の最高司令官の庇護下に置かせ、司令官を盲信させることによつて精神の安定化を図らせてみたところ、ようやくその個体は理想的な精神状態を維持することができ、当初予想された耐久年数を大幅に上回る期間の運用に成功したが、その個体も初号機を覚醒させるために失ってしまった。

そして始まったヴィレとの戦争。組織は戦力の増強に迫られ、少女「たち」複数体の同時運用を計画したが、いざ数体の「入れ物」に同時に魂を注入してみたところ、目覚めた少女「たち」は自身と全く同一の存在を目にしたたちまちパニックに陥り、同じ顔同士で殺し合いを始めてしまった。この計画は封印され、自立稼働型エヴァの開発によつてヴィレに対抗したが、そのエヴァもヴィレの歴戦のパイロットたちによつて打ち破られている有様である。

冬月は常々思っていた。

少女は失敗作だと。

何度も最高司令官には具申したが、冬月の意見は聞き入れられず、司令官は少女の運用継続にこだわった。

「第一の少女……」

足もとで無様に横たわっている黒スーツの少女に声を掛ける。

冬月の声に少女は反応を示し、床を見つめていた赤い瞳が冬月を見上げたが、その瞳孔は開いたまま。

「立ちたまえ……、レイ……」

再度呼び掛けると、少女の瞼は一度だけ閉じられ、次に開いた時には、床に向けられていた赤い瞳が、少女を呼び掛ける冬月の方へと向いていた。しかしその瞳の焦点は合っており、虚ろな光を宿したまま。そして、

「わたしはレイ……、わたしはレイ……、わたしはレイじゃない……、わたしはレイじゃない……、わたしはだれ、わたしはだれ、わわたしはだだだだだれ、だだだだれえれれ、わわわたたわわたわわわわ……」

言葉が詰まり、急にぱちぱちと瞬きを繰り返し始め、体がびくびくと痙攣し始める。盛大にバグが発生したコンピューター、あるいは歯車の一部にゴミでも詰まり、動かな

なくなつてしまつた機械仕掛けの人形のように。

「何たる有様だ……」

冬月はうんざりしたようにこめかみを押さえながら、少女の側に膝を折る。少女が身に付けたボディバッグのファスナーを開いた。

「……まで症状が進めば、本来は処分対象となるが……」

ボディバッグの中から、拳大の輸液バッグを取り出す。バッグから伸びるチューブを引つ張り、先端に付いた針のカバーを外す。少女の左腕を掴み、針を肘窩に突き立てると、その先端をスーツ越しにぐいと刺し込む。針を摘まむ指の先が、針の先端が血管に到達したことを感じ取ると、輸液バッグを握りつぶし、その中身を一気に少女の体内へと注入する。

「ゼーレの少年が消え、ストックも破壊された今、君がネルフに残された唯一のパイロットなのだ」

冬月が一連の行為をしている間も、少女はまるで陸に打ち上げられた魚のように全身をびくびくと震わせていたが、補液バッグの中身が全て少女の体内へと移動してから暫くするとその震えも次第に大人しくなり、やがて四肢を投げ出してぐつたりと動かなくなつた。

そんな少女の様子を冷めた目で見ていた冬月の口もとに、自嘲めいた笑みが宿る。

「こんなものに頼らなければならぬとは…。我々もいよいよ末期だな…」

少女の腕から針を引っこ抜くと、チューブをバッグに括りつけ、そのまま廊下の隅へと投げ捨てる。

右腕を少女の背中へ、左腕を少女の膝の下へと滑り込ませる。そのままひよい、と抱え上げた。最近では椅子から腰を上げる度に「よっこらしよ」が口癖になってしまったが、そんな自分でも軽々と抱え上げることができる少女の体。

「とてもこれが君の複製体とは思えんよ…。ユイくん…」

少女によく似た顔の女性の名前を呟きながら、廊下を歩き始めた。

エレベーターで1つ下の階へと降りる。

暫く廊下を歩いて、その突き当り。扉を開いた向こうに現れた、様々な残骸がぶかぶかと浮いている巨大な水槽。

冬月は少女を抱えたまま水槽を大きく迂回し、その裏側へと回る。

巨大な水槽の裏側にも大きな空間は続き、その奥に縦に設置された円筒形の水槽があった。

冬月が円筒形の水槽の前に立つと、水槽の周囲にあった機械類が自動的に起動する。どこからか駆動音が鳴り響き、頭上から3本指の巨大なロボットアームが降りてきた。

ロボットアームは冬月の腕の少女を無造作に掴むと、そのまま持ち上げていく。少女一人分の重みが腕から消え、冬月はやれやれと手で肩を揉んだ。

ロボットアームは少女を円筒形の水槽の口まで移動させると、ぱつと手を広げる。重力に引かれた少女の体は、真つ逆さまに、濁った液体に満たされた水槽の中へと落ちていく。

水槽に少女の収容を感じした機器は、自動的にプログラムを走らせ始める。

逆さ状態で水槽の中をたゆたう少女を、冬月はじつと見つめる。

暫くすると、水槽の底に幾つかの穴が開き、そこから薬液が注入され始め、少女の体を音もなく包み込んでいった。

水槽を囲う機器の一つ。その画面上に映し出された、観察対象の精神状態を示す心理グラフ。観察対象が水槽に落ちた時はまるで縄れに縄れた糸のように乱れてたグラフが、やがて規則正しい波を描き始めた。

ビーツと、聴覚を刺激するやや不快な電子音。

同時に水槽の下部から水槽を満たしていた濁った液体が排水されていく。

全ての液体を吐き出し終え、空っぽになった水槽の底で、体を折りたたんでぐつたりと横たわっている少女。

再び頭上から駆動音が鳴り響き、巨大なロボットアームが降りてくる。アームは水槽

の中へとその手を突っ込み、やはり無造作に少女の体を掴み、持ち上げていく。

ロボットアームは冬月の前に、ゆっくりと少女を降ろした。

口から濁った液体を零しながら、床に寝転んだままの少女。

「立てるかね……？ 第一の少女……」

冬月のしわがれた声が構内に木霊する。

促され、少女は床に両手を付きながら、ぎこちない動きで上半身を起こしていく。

毛先や鼻先、顎から滴る水滴が作る床の上の小さな水たまりを、見開かれた赤い瞳が見つめている。

「……」が何処か分かるかね？」

冬月に問われ、少女はぎこちなく頷く。

「私が誰か、分かるかね？」

冬月に問われ、少女は唇を小さく動かして「副司令」と呟く。

「では君自身が誰か、分かるかね？」

冬月に問われ。

「……」

しかし、少女は答えない。

見開いた真っ赤な双眸から放たれる視線を、床の水たまりにぶつけたまま、押し黙つ

ている。

冬月はうんざりしたように溜息を吐く。

そしてやや強めの声で、再度問う。

「君は誰だね？」

その問いに、少女は一度だけ瞬きをした。

「私は……」

少女の小さな唇が、微かに動く。

「私は……、アヤナミ……レイ……」

「そうだ。君は綾波レイだ」

少女の言葉尻に被せるように。

「この世界に綾波レイは君一人だけだ」

少女に余計な邪念を抱かせまいと間髪入れずに冬月の声が続いた。

「体の方は問題ないか？」

「はい……」

「では体を乾かしたら、司令室に上がってきたまえ。何やら上が騒がしい。君の出番があるやもしれん」

「はい……」

冬月は床に両手を付いたままの少女に背を向けると、水槽の前から立ち去って行った。

冬月の足音が聴こえなくなつてからも、少女は暫く床を見つめたままでいた。濁つた液体を吐き出した喉と肺の痛みがようやくやく落ちて着いたところで、顔を上げる。

目の前に聳え立つ、巨大な水槽。

その中を漂う何か。

腕。

足。

骨。

内臓。

それら「残骸」の一つがガラス面に近づき、ゴンと音を立てて当たる。

それがくるつと回転する。

たゆたう髪の間隙から覗く、自分とうり二つの顔。

その頭部はガラスに当たつた衝撃で、まるで砂で作られた人形のように頬から急速に崩壊を始める。皮膚の下から覗いた骨や歯も細かい粒子と化し、頭蓋骨の下から現れた脳味噌はまるでミミズのように細かく分解していき、髪の毛の一本一本も消えていき、

最後に残った真つ赤な2つの眼球も潰れ、液体の藻屑と消えていった。

自分とうり二つの顔が液体の中に溶けていく様の一部始終を、食い入るように見ていた少女。いつの間にか動悸が高鳴り、肩で息をしていたことに気付き、暴れる心臓と肺を何とか落ち着けようと鼻で必死に深呼吸を繰り返す。

「わたしは…アヤナミレイ…、わたしは…アヤナミレイ…」

少女の唇からはまるで呪文のように同じ言葉が漏れる。

「わたしは…」

瞼を閉じる。眉間に僅かな皺を寄せながら。

繰り返されてきた深呼吸が止まる。

瞼を開く。

「私は…、最後の…、綾波レイ…」

膝を立て、ゆっくりと腰を上げていく。

両膝を伸ばす。

全身を束縛する重力を感じ、足もとがふらつく。頭部が揺れ、髪から散った液体が床に幾つかの斑点を作り出す。

上半身を前に倒す。右足を前に出す。右足に体重を移したら、今度は左足を前に出

す。

ゆつくりと。

ゆつくりと歩きだす。

「自分」の残骸が漂う巨大な水槽を迂回して、扉を開け、廊下へと出る。暫く歩くとエレベーターの昇降口に行き当たる。壁の昇降ボタンを押す。

扉が開き、エレベーターに乗り込む。

僅かな機械音が響くだけのエレベーター内。

目の前の閉じた白い扉を、じっと見つめる。

——なんで本、読まないんだよ。

「綾波レイなら……そうするの……？」

扉を見つめながら呟く。

——ねえ、綾波だよね？

「そう。私は綾波レイ……」

扉を見つめながら呟く。

——綾波じゃないのに。

「いいえ……。私は綾波レイ……」

——綾波じゃないのに。

「いいえ……。私は綾波レイ……」

——綾波じゃないのに。

「いいえ……。私は綾波レイ……」

——綾波じゃないのに。

「いいえ……。私は綾波レイ……」

ガタン、とエレベーターが揺れ、白い扉を見つめていた少女は目を瞬かせた。整備不十分なエレベーターの扉は不快な軋む音を立てながら開いていく。扉が開くと、再び長い廊下。

「私は……。綾波……。レイ……」

エレベーターから降り、廊下を歩き出す。

廊下が尽き、今までの扉とは違う、漆黒の重厚な扉が現れた。

扉の上部に備えられたカメラが少女の顔を捉え、認証を確認すると扉のロックを自動的に解除した。漆黒の扉は音もなく開く。

扉の向こうに現れたもの。

鮮やかな光を飛ばす巨大なパネル。大型ビジョン。

大型ビジョンに映し出される映像。

それは青い空。そして少女が居る巨大構造物の屋上。

その屋上を埋め尽くす番犬たち。

青い空に、ぼつんと浮かぶもの。

それは機影。

ぐんぐんと高度を増していくVTOL機。

そのVTOL機に向かって、光の球が高速で吸い込まれていく。

VTOL機の一部が弾けた。

たちまち炎を上げるVTOL機の回転翼。

大きく傾き、煙を引きながら旋回していく機影。

映像はVTOL機に大きく寄る。

VTOL機の機体が、画面一杯に映し出された。

VTOL機の機首にある操縦席。

操縦席のガラス窓。

その窓に、必死にしがみつくと少年。

墜落していくVTOL機。

やがて少年の体は、落ちていく大きな機体に引つ張られるように逆立ち状態になる。

少年がしがみ付く窓枠から機内に居る女性と思しき腕がよきつと伸びていて、少年の腕が窓から離れないよう懸命に掴んでいる。

VTOL機の墜落は止まらない。

少年は機内の誰かに語り掛けている。

そして。

そして少年は窓枠から手を離す。

大型ビジョンの前には2人の男。

一人はこれまた大きなテーブルの席につき、テーブルに両肘をついて組んだ手に顎を

乗せ、静かに映像を見守っている。

その男の側に立つもう一人の男、冬月は低い声で言った。

「お前の息子が落ちたぞ…」

冬月の実況に、しかし男は黙ったまま映像を見守っている。

「いいのか…」

冬月の問い掛けに、やはり男は黙ったまま映像を見守っている。

「碇くん…」

背後から響いたその声に冬月は振り返り、ようやく少女の存在に気付いた。

少女はV T O L機から落ちた少年の名前を呟いたときり何も言葉を発せず、ぼんやりとした表情で映像を見つめている。

そんな少女の表情を確認した冬月はすぐに少女に対する興味をなくし、視線を映像へと戻した。

瞬く間にV T O L機から離れていく少年の体。

暫く誰もみ状態でぐるぐると宙を回転していた少年は、構造物周辺を覆う強烈な上昇気流に乗って天高くへと舞っていき、やがて映像から姿を消した。

静まってたはずの心臓が再び高鳴り始める。
落ち着いていたはずの呼吸が切迫しだす。

「碇くん……」

もう一度、蒼い空へと消えていった少年の名を呟く。

こんな時、綾波レイなら、どうするの？

「……分からない、……分からない」

こんな時、綾波レイなら、どうするの？

「……分からない、……分からない」

背後で少女がぶつぶつと独り言を呟いている。

冬月は訝し気に後ろに視線をやると、少女がやはりぼんやりとした表情で映像を見つめている。

小さな口を、小さく開閉させながら。

暫く少女の様子を覗っていた冬月だったが、VTOL機に動きがあり、視線を映像へと戻した。

こんな時、

綾波レイなら、

どうするの？

——知るか！

いつの間にか映像から視線を落とし、床を見つめていた少女。その声は不意にどこかから頭の中に舞い降りてきて、少女ははっとして顎を上げる。

——知るか！

あんたはどうしたいの！

少女の体はまるで電撃に打たれたように硬直し、そしてその細い体はゆっくりと左へと傾き始める。

傾いて傾いて。

やがて肩が床に付きそうになる寸前。

少女は左足を横に突き出して全体重を左足に乗せると、続けて腰を捻って右足を思いつきり前に突き出した。今度は右足に全体重を乗せる。軽くなった左足を前に出す。すぐに右足を前に出す。左足を前に出して、右足を前に出して。ひたすらそれを繰り返す。慣れてきたら、繰り返す速さをぐんぐん上げていつて。

少女は走り出した。

背後で足音。

振り返ると、扉に向かって走っていく少女の後ろ姿。

冬月は今日何度目かの溜息を吐く。

「矯正はもう効かぬか…。あれももう長くないな…」

少女の姿が消えていった扉を見つめながら、隣に座る男に問う。

「いいのか。このままで…」

その問い掛けに、やはり男は沈黙を守り続けている。

冬月はかぶりを振りながら、映像に視線を戻した。

砲撃を受けたVTOL機は、パイロットの腕がよほど良いのか動力を失いながらも辛

うじて滑空を続け、この構造物から離れていつている。

冬月は男に同様の質問を繰り返した。

「いいのか。あれをこのまま逃して……」

冬月はその問いに相変わらず男は沈黙したまま、しかし顎を手から離し、ゆっくりとした動作で椅子の背もたれに背を預けた。

「またもや冬月の溜息。」

男のその振る舞いは、全ての対応を副司令に一任するという意思表示だった。

冬月はテーブルの端にある小さなコンソールのボタンの一つを押す。

「冬月だ。ただちにVTOLを追跡。「脱走者」が奪った「ストック」を回収せよ。「脱走者」は殺害して構わん」

廊下を駆ける。

息をするのも忘れて。

走る先に見えてきた廊下の突き当たり。

ボディバッグのファスナーを開け、中に手を滑り込ませる。

取り出したのは、細い手には不釣り合いなほどの厳つい拳銃。

右手で銃把を握り、左手で銃床を支える。

銃口はまっすぐに廊下の突き当りへ。

引き金を絞る。

腕に衝撃。

さらに絞る。

もう一度、引き金を絞る。

銃口から放たれた3発の銃弾。

鉄の礫は空を切り裂いて、廊下の突き当り、ガラス張りの壁へと吸い込まれる。

たちまち、ガラスには3つの蜘蛛の巣状のヒビが広がる。

拳銃を投げ捨てる。

頭部と胸を守るように、両腕を体の前で交差させる。

ガラス張りの壁の2メートル前で跳躍。

体ごと、ガラス張りの壁へと突っ込む。

ガラスの碎け散る音。

全身を襲う激しい衝撃。

続けて全身を覆う凍てついた風。

腕の隙間から見える光景。

下半分に赤い大地。上半分に青い空。

少女の細い体が、大空へと躍り出た。

第壹拾五話

窓枠から手を離すと、VTOL機とは一瞬にして遠く離れてしまった。

もはや見えなくなってしまうたが、操縦席のガラス窓の向こうでは、赤毛の彼女がさぞかし呆れた様子で自分を見つめていることだろう。

ああでも。

さすがだね。

燃え盛るエンジンを白い消火剤が覆い炎を消していくと、機体は平衡感覚を取り戻し、曲がりなりにも滑空を開始していく。

大丈夫だ。彼女なら、きつとあのコをミサトさんたちのところまで送り届けてくれる。

そうすればきつとカノジヨも…。

突風に叩られ体がくるつと半回転し、VTOL機は見えなくなってしまうた。視界に収まるものは赤い大地から青い空へ。

さて、と。

さあ、僕はどうしようか。

この強烈な上昇気流に乗って、うまいことこの馬鹿みたいにデカイ建造物の屋上に着地できないかと思ってみたけれど。

あゝあ。

これはすでに落下を始めちゃってるね。

ここから地上まで、自分を受け止めてくれるものは何もない。

もう自分でできることはなにもない。

自分の背中と地上とがくつつくまで、ただ空を眺めながら待つだけ。

彼を失って。

初めて出来た、心の全てを赦せる少年の命を、目の前で散らせてしまつて。

もう全てがどうでもいいと思つていて。

でも、もう少しだけ頑張ってみよう。

そう空の彼方の彼に誓つた。

その矢先にこれだ。

何と言うか…。

まったくもつて、僕らしい。

まあでも。

僕にしては頑張った方だよね。

そうだろ？

カヲルくん。

君は言っていたね。

また会えるって。

ああもしかして、こうゆうことなのかな？

地上までの時間はあとどれくらいだろう。

もう少して君に会えるね。

あと少して。

なんて気持ちの良い空なんだろう。

青い、青い空。

まるで全てを包み込んでくれる君の笑顔のような空。

その空の隅に、まるで染みのような黒い点があつた。

なんだろう。

鳥だろうか。

まあどうでもいいか。

今さら黒い点の正体が鳥だろうが何だろうが。

地上に激突してしまえば、この空も何もかもが見えなくなってしまうのだから。でも気になってしまう黒い点。

なぜならその黒い点が少しずつ大きくなってきているからだ。

黒い点は、明らかにこちらに近づいてくる。

少しずつその面積を広げていく小さな黒い点が、少し大きな点になって。

黒い点が、黒だけではないことに気付く。

それはまるでこの青い青い空のような色。

黒い点の上に、空色の何かが乗っている。

それは空色の髪。

風に暴れる空色の髪の下に収まるのは、見知った顔。

「碇くん！」

見知った顔が、僕の名を呼ぶ。

その声音で、そんな大きな声を聴くのは初めてだったから。

ちよつとびつくりしてしまった。

いや。

空から女の子が降ってきたこと自体が、かなりびっくりなんだけれど。

背筋も肘も膝も足首も、体の全ての関節をぴんと伸ばし、空気の抵抗となるものを最大限に削った姿勢で、まっすぐにこちらに落ちてきた彼女。

お互いの顔がはつきりと分かるまでの距離まで近づくと、彼女は空気の塊を全身で抱き締めるように両腕と両足を大きく開いた。

全身で空気抵抗を最大限に発生させ、限界の速度で落下していた彼女の体が一気に減速。互いの落下速度を可能な限り近づける。

空気の塊に煽られ、彼女の髪が全て逆立っている。

そう言えば、この顔の額を見るのはこれが初めてだな、とどこか呑気に彼女の顔を見つめていたら。

「碇くん……」

再び彼女に大声で名を呼ばれた。

彼女がこちらとの距離を埋めようとしている。まるで大気の中の海の中を泳ぐように、必死にその細い手足をばたつかせて。

この顔のこんなに必死な表情を見るのもこれが初めてだな、とやはりどこか呑気に彼の顔を見つめていたら。

「手を……」

彼女がこちらに向けて手を懸命に伸ばしていた。

彼女が伸ばす手を見つめる。

その手の向こうの彼女の顔を見つめる。

よく知っている顔。

でも僕の知らない彼女。

その彼女の口が、大きく開く。

「来て……」

僕の知らない彼女が叫び、手を差し伸べてくる。

おずおずと、その手に自分の手を近づけてみる。

彼女の中指と、自分の中指とが触れ合い。

そして彼女は一気に肘を伸ばすと、その細い体からは想像できないような強い力で、

僕の手を握りしめた。

一度掴んだ手は二度と離すまいと、彼女はその指を僕の指に絡めていく。

そして少しずつ肘を曲げ、彼女と僕との距離を縮めようとする。

彼女の鼻先と、僕の鼻先とが、触れる寸前にまで近づく。

彼女はすぐさま空いた腕を僕の背中に回し、僕の体をぐつと抱き寄せた。

そして僕は。

僕は少し躊躇った後。

彼女に倣って空いた手を彼女の細い背中へと回した。

空中で抱き締め合う2人。

頭から真つ逆さまに地上へと向かつて落ちていく。

少女は少年が自分の背中にしつかりと腕を回したことを確認すると、少年の背中を抱き締めていた腕を一旦解き、その手で自身が着る黒のプラグスーツの腰の辺りを探る。スーツの突起部分を引っ張ると、そこからするすると紐が伸びた。紐の先端は小さな鉤状になっている。

間もなく自分たちを襲うことになる衝撃で2人の体が離れてしまわないよう、そのフックを少年のズボンのベルトに引っ掛けた。

少年の顔を見上げる。

少年は、腕の中の少女の顔を見下ろす。

少女は少年の顔を見つめながら、手を自身の背中へと回した。

細い指がスーツの背部に触れる。指で、ぐつと押し込む。押し込んだ部分が浮き上がり、そこからも小さなフックが現れた。

少女はそのフックに人差し指を引っ掛ける。

少年の手を握る自身の手に、ぐっと力を籠める。

少年もその手を強く握り返し、少女の背中を抱いていた腕を腰まで下ろすと、自身の体へと力強く抱き寄せた。

少年の胸元に、少女の頬が埋まる。

少年の体温と、微かに聴こえる胸の鼓動を感じながら、少女はフックを思い切り引つ張った。

空気が一気に膨張するような音。

少女のスーツの背部がたちまち膨れ上がり、次の瞬間には音を立てて破裂。

スーツの背部に圧縮して収められていた白い布が空中へと解き放たれる。

空気を纏い、瞬く間に広がっていく白い布。

少年の目には、少女が大きな白い翼を広げたように見えた。

抱き締め合う2人を、何かに引つ張られるような強い衝撃が襲う。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

どこまでも続く赤い大地。

その上空を浮遊する真つ白なパラシュートは、天から見ればまるで赤い海に浮かぶ小さな孤島のようなだった。

その傘にたつぷりと空気を抱き込んだパラシュートは、ゆつくりとその高度を下げていく。

傍から見ればゆつくりと地上に近づいているように見えるパラシュート。しかし実際にそのパラシュートに吊り下げられている者から見れば、足もとの地上がぐんぐんと凄く速さで迫っているように見える。

パラシュートにぶら下がる少年と少女。少女はパラシュートによる降下訓練を受けていたが、2人吊り下げられた状態で降下するのは初めての経験であり、おまけに十分に安全とは言えない高度でパラシュートを開いているため、訓練を受けた時とはかけ離れた状況だ。

結局、2人は自然の成り行きに任せて、地上へと落下することになる。

「わわっ！」

「きやつ！」

大地に足を襲撃され、2人の悲鳴が重なる。

2人の踵ははずると大地を引き摺っていき、続いて膝が地面を削り、腰が地面を削る。

腕の中で少女の顔が痛みに歪む。強い衝撃に体もまともに動かせないが、せめて頭部だけはと少年は少女の頭部を守るように精一杯抱き締めた。

2人を錨にして大地を削っていったパラシュートはやがて速度を失い、停止する。

暫く風を纏って宙を漂っていたパラシュートの傘。重力に引かれ、ゆっくりと地上へと舞い降りていき、錨の2人を隠していった。

白い布地と、赤い地面に挟まれて。

少年は少女の顔を見つめていた。

視界一杯に広がる少女の顔。

自分の鼻先と、少女の鼻先とが触れ合うほどの、間近にある少女の顔。

上気し、火照った頬。大粒の汗が浮かぶ額。

瞬きもせず、自分の目を見つめ返してくる真っ赤な瞳。

小さな鼻の孔が小刻みに拡大と収縮を繰り返し、肺の中の空気を出し入れしている。

自分の鼻先を、彼女の呼気が擦った。

握った少女の手が温かい。スーツ越しでも、少女が滲ませた手の汗が伝わってきそう。

もう一方の手も彼女の体温を感じる。

彼女の激しく脈打つ鼓動を感じる。

彼女の体の柔らかさを感じる。

鼓動？

柔らかさ？

仰向けに倒れている彼女。

俯せに倒れている自分。

折り重なっている2人の体。

右手は彼女の手を握っていて。

そして左手は。

「わああああ!?!」

シンジは情けない悲鳴を上げながら左手を少女の胸から離す。

「びい、びいめん!」

何かに弾かれたように上半身を起こした。

途端に、

「うう!」

少女が呻き声を上げる。

シンジが起き上がった拍子にシンジのズボンのベルトと少女のスーツの腰の部分とを結びつけていた紐がピンと張り、少女の体も背を弓なりに反らせて浮き上がった。

「ああ、ごめ…、わっ！」

少女の呻きに慌てて動きを止めようとしたシンジだったが、只でさえ浮足立っていたところに視界をパラシュートの白い布に覆われてしまい、パニックになってしまった。

「わっ、なんだこれ、なん…！」

腕をばたつかせている間に布はどんどん2人の体に纏わりつき、2人の体を包み込んでしまう。

「わっ…わっ！」

「うっ」

相変わらずシンジの情けない悲鳴と、少女の控えめな呻き声が重なり合って。

そして2人の体も重なり合って、再び地面へと倒れ込んだ。

今度はシンジは背中に地面を付け。

少女がシンジの体に覆い被さって。

そして触れ合う2人の鼻先同士。

少女は相変わらず上気した頬で、瞬きもせずにシンジの瞳を見つめていて。

額から伝う汗はやがて少女の小さな鼻先へ集まり。

少女の鼻先から垂れる汗の粒は、少年の鼻の頭へと滴り落ちる。

そんな少女の顔を、シンジは顔を真っ赤にしながから見上げていて。

全てを白が埋め尽くした世界。

真っ白な世界の中で、2人はただ黙ってお互いの顔を見つめ合う。

少女の呼吸は相変わらず小刻みなまま。

一方、シンジの呼吸は小刻みなものから、深く、ゆっくりとしたものへと変わっていき、

シンジの深呼吸に合わせてシンジの胸が大きく上下し、シンジの胸に合わせてその上に乗る少女の背中も上に下にゆっくり揺れた。

「これも…」

長い沈黙の後、最初に口を開いたのはシンジだった。

「これも…、父さんの命令…?」

シンジのその問い掛けに、少女は地上に降り立って以来初めての瞬きをする。

ゆっくりと首を横に振った。

「じゃあ…、なぜ…」

シンジは掠れた声で問い掛けを続ける。

少女はシンジの顔を見つめたまま、控えめな喉仏を縦に動かして、口の中に溜まっていた唾液を呑み込んだ。

そして小さな唇を微かに開く。

「私が…」

ぼそりとした少女の呟き。

「私が…、そうしなかったから…」

少女の口から漏れ出る吐息が唇に降りかかり、こそばゆかった。

「君が…?」

シンジの再度の問い微かに首肯する少女。そして静かにシンジの顔を見つめる。

シンジも少女の顔を見つめ返す。

お互い見つめ合ったまま、再び暫しの沈黙。

「あり…が…とう…」

シンジの口から、ややぎこちなく告げられる感謝の言葉。

「ありがとう…。僕の命を…救ってくれて…」

繰り返された感謝の言葉は、今度は少しはつきりとした口調で告げられる。

自分に向けられた感謝の言葉。

少女にとって、シンジからその言葉の耳にするのはこれで2度目。

それでも少女はその言葉をまるで生まれて初めて耳にでもしたかのように、少しだけ目を丸くし、小刻みだった呼吸を止めた。

そしてそつと目を閉じる。

肩を大きくゆつくりと上下させ、深く深呼吸をする。

もたれかかるように、顎をシンジの胸に乗せ、そのままくんと頭部を傾け、頬をシンジの胸にくっ付けた。

自分の胸に少女の体温を感じて。

大人しくなっていたはずの自分の心臓が再び暴れ始める。

自分の耳にも伝わってくる心臓の鼓動。

落ち着かない心音を少女に聴かれ、心の中を恥ずかしさが覆っていくシンジだったが、今は黙って自分の肉付きの薄い、やや頼りない胸を少女に貸していた。

赤い大地の上に、まるで孤島のように丸く広がる真つ白な布。

地面にぴったりとくっつく布の、その真ん中だけがこんもりと盛り上がっている。

パラシュートが降り立った吹き曝しの岩場。

時折強い風が地表に吹き付けるが、白い布はまるでその下にあるものを風から守るように、ただ静かに地面を覆っていた。

第壹拾六話

2人が降り立つた場所は緑一つない、見渡す限り赤褐色の岩山が続く巨大な台地の一角だった。台地の淵はほぼ垂直の断崖絶壁であり、深い深い谷の向こうには2人が居る台地と同じような、幾つもの剥き出しの岩山を抱えた台地が続いている。

崖の淵に立ち、ぼんやりとその風景を見つめていたシンジ。以前、何かのテレビ番組で何処かの国の壮大な大渓谷を見た時は、いつかこんな場所に行つてみたいと思つたものだが、図らずもその夢が叶ってしまった。

視線を落とすと、谷の底は遥か下。

あの塔ほどではないにしろ、この高さでも十分に立ち眩みしそうになつたため、崖の淵から離れる。

振り返ると、平べつたい、ちょうどベンチ替わりになるよう岩の上に、黒スーツの少女が腰掛けていた。

少女は左足を岩の上に乗せ、その足首に包帯を巻いている。

パラシュートでこの岩場に着地した際、足を挫いてしまったらしい。

ブーツの部分だけをスーツから切り離して脱ぎ、真白い肌に真白い包帯を巻いていく。甲に巻き付け、足首に巻き付け、踵を囲むように足をガチガチに固定していく。そして包帯の端っこ同士をきゅつと結び付ける、が。

指を離れた途端、結び目は緩んでしまい、巻かれた包帯も緩んでしまう。

改めて結び目を作つて。手を離せばすぐに緩んでしまつて。

ひたすらそれを繰り返す少女。

存外、ぶきつちよらしい。

シンジがその様子を苦笑交じりに眺めていたら、10回目の挑戦が失敗に終わったところで、少女は「もういいや」とばかりに結び目を作らないままブーツを履こうとし始めた。

「いやいやいや…」

シンジは少女の近くに歩み寄ると、その前で膝を折る。

「ダメだよ、ちゃんと固定しないと」

少女の足に手を伸ばし、足首に巻かれた包帯を剥がし始める。

「テーピング用の包帯は伸縮性がないから巻きにくいんだ」

そう説明しながら、シンジは手慣れた様子で少女の足に包帯を巻きなおしていく。

「前の学校ではサッカー部に入ってたんだ。ずっと補欠だったから雑用ばかりさせられ

てたんだ。おかげでテーピングの腕は上がったんだけどね」

包帯を足の甲に巻いて固定すると、少女の踵を自分の膝の上に乗せ、その踵を囲むように足首に巻きつける。

「つて、あ、ごめん。前の学校つて言っても、この世界じゃもう10年以上も前のことなんだよね…」

独り言のように呟きながら、甲と足首とを、交互に巻いていく。

小気味よく作業を進めながら、ふと、シンジは笑みを零した。

「君つて、包帯とか扱いなれてると思ったけど…」

「初めて」会った時のことを。

初めて紫色の巨人と対峙し、その場にストレッチャーで運ばれてきた、全身包帯姿だった「彼女」のことを思い出したので。

「ふ、ふっ」

一度笑つてしまうと、急に色々なことが思い出されて、思わず声に出して笑つてしまった。

ふと視線を感じ、少女を見る。笑っている自分を、訝し気に見つめている。

「ああ、ごめん」

シンジは一旦包帯から手を離すと、ぽりぽりと鼻の頭を搔いた。

「君って、何だかいつつも突拍子無いな、って思ったから」

初めて出会った時、いきなり全身包帯姿で現れた時も度肝を抜かれたものだし、自分が瀕死の目に遭って病室で目を醒ましたらいきなり作戦スケジュールの説明を始めるし、急に手に幾つもの絆創膏を巻いて登校してくるし、いきなり食事会なんて催そうとするし、14年ぶりに目覚めたらいきなり艦の外壁をぶち破って自分を攫っていったし。

極めつけはさっきのだ。

まさか空から女の子が降ってくるだなんて。

ネルフに来て、色んな非現実的な体験をして。

もう多少の事じゃあ驚かないぞと思っていたが、君が青い空から真つ逆さまに落ちてきた時には、もう驚きを通り越してちよつと呆れてしまった。

「…ああ、…そっか」

「彼女」にまつわる色々な思い出を振り返っていたシンジ。

大切なことを忘れていた。

目の前に居る彼女は、「彼女」ではないことを。

シンジの口もとから笑みが消え、その手は淡々と作業を進めていく。

少女は笑みが消えたシンジの顔から視線を外し、白い包帯が巻かれていく自分の足を

じつと見つめた。

包帯の端と端をきゅつと結ぶ。

「はい、終わつたよ」

そう告げて、シンジはゆっくりと少女の足を自分の膝から地面に下ろした。

少女は立ち上がろうとする。

「あ、無理しない方がいいよ」

とシンジが忠告するよりも先に、少女は途端に表情を苦痛に歪ませ、岩の上に尻餅を付いてしまった。

「痛む?」

シンジの問い掛けに、少女は小さく頷く。

「何か冷やすものがあるといいんだけど」

シンジがそう言うのと、少女は岩の上に投げっていたボディバッグに手を伸ばす。中身をぐそぐそと探り、その中から小さなパックを取り出した。少女は左の手の平に乗せたそのパックを、右拳の腹でパンと叩く。叩いたパックを、包帯が巻かれた足の甲に当てた。「瞬間冷却剤か。色々なものが入ってるんだね、そのバッグ」

バッグのファスナーの隙間から、見覚えのある携帯音楽プレイヤーが見えたが、そのことについてはシンジは触れない。

少女が座る平べったい岩の上に、シンジも少女から少し距離を置いて座る。

さて、これからどうしようか、と思案に暮れるが、すでに陽はかなり西に傾いおり、もう間もなく夜が来る。暗がりの中、こんな岩だらけの場所で行動するのは、アウトドア経験の薄いシンジであっても危険だと分かる。

くう、とシンジの腹がなった。

怪物に追い回されて、何度も全力疾走したのだ。あんなに走ったのは、多分あの時以来2度目だ。この世界では14年前。最強の敵が本部を急襲し、「彼女」が乗る零号機が敵に飲み込まれる様を見て、懸命に本部に向かって駆けた、あの時以来。

気配を感じ、シンジは横に視線を向ける。

少し離れた場所に座った少女と、自分との間に、何かが置かれている。目を凝らしてみると、それはブロックタイプの栄養食品。最後にそこを見た時には、無かったものだ。おそらく、いや間違いなく、少女が置いてくれたものだ。

「いいの？」

尋ねると、少女は遠くの山々を眺めなたまま小さく頷いた。

「ありがとう」

シンジはお礼を言っただけで固形食品に手を伸ばす。

「これもそのバッグに入ってたの？」

小さく頷く少女。

「本当に何でも入ってるんだね、それ」

少女はよく分からないとでも言いたげに、首を傾げている。確か、アスカの肩をぶち抜いた拳銃が入ってたのもそのバッグだったよな、と思い出しながら、シンジは栄養食品の包装を破ると、中身に齧り付く。

何度が咀嚼して。

「うわ…」

シンジは栄養食品の半分を一気に口の中に入れてしまったことを後悔した。

クッキーのような形態の栄養食品。口の中の水分が、一気に栄養食品に持っていかれてしまったのだ。

「げほっ、けほ、けほ」

口の中のものを上手く飲み込むことができず、咳き込んでしまう。

気配を感じ、シンジは涙目で横に視線を向ける。

少し離れた場所に座った少女と、自分との間に、水が入った透明の小さなペットボトルが置かれている。

シンジはすぐにボトルに手を伸ばし、キャップを外すと口を付け、中身を啣った。

「はー、生き返った…」

口腔から咽頭に掛けての清涼感に満足しながら、シンジは手にあるペットボトルを見つめ、少し離れた場所に座る少女の横顔を見る。

「あ、ありがとう…」

遠慮がちにお礼を言うシンジに、少女は相変わらず遠くの方々に目を向けながら、小さく頷くだけだった。

「これもそのバッグに？」

小さく頷く少女。

「四次元ポケットかな？」

そう呟くシンジに、少女は言っている意味が分からないとばかりに首を傾げている。

ついに太陽はその身を地平線の向こうに沈めてしまった。空の半分は真っ赤に彩られ、もう半分は濃紺から漆黒の闇へと染まり始めている。

これからどうしようか。夕陽を見つめながらあれこれ思案し、結局何も思い浮かばなかったシンジ。

一方で、これまで岩に腰かけたまま殆ど動くことのなかった少女は、太陽が沈むとバッグに手を伸ばした。中から指サイズの小さなLEDランタンを取り出し、灯りを点して岩に置く。そして再びバッグの中身をぐそぐそと探り、一本の棒を取り出す。棒の

先端を摘まみ、引つ張ると、棒はよきによきと一メートルくらいの長さまで伸びた。少女はその棒を一旦地面に置き、岩から腰を上げた。痛めた左足に体重を乗せないよう体を傾けながら、ひよこひよこ歩き始める。

シンジは少女の行動を黙って見守っていたが、その少女の左膝が折れ、少女が尻餅を付いてしまったのを見て慌てて少女のもとに駆け寄った。

「だ、大丈夫?」

少女はお尻を摩りながら、小さく頷いている。

シンジは少女に肩を貸してやり、立たせると、ランタンを置いた岩のもとまで戻り、腰掛けさせた。

「どうしたらいい?」

何かをしようとしていたらしい少女に指示を乞う。

少女は少しだけ迷ったような表情をした末に、右手をすつと上げて何かを指差した。

少女が指差す方を見ると、少し離れた地面に2人をこの地に降り立たせたパラシュートが広がっている。

「あれを持ってきたらいいの?」

小さく頷く少女。

一片が10メートル以上あるパラシュートを地面に引き摺りながら少女のもとに戻

る。

「はい、持ってきたよ」

少女はシンジが掴んだパラシュートの端っこを受け取ると、それをパタパタと振りさばき始める。

どうやらパラシュートに空気を含ませ、広げさせたいようだが、少女の細腕では大きなパラシュートの生地を大きく振りさばくことはできないようで、パラシュートはただ上下にぱたぱたと動くだけ。

シンジは少女の手に割り込むようにパラシュートの端っこを両手で掴むと、上下に勢いよく振り始めた。

パラシュートの生地がばっさばっさと上下に激しく揺れる。パラシュートを掴んだままの少女の腕も、頭ごと上下に激しく揺れた。

パラシュートの生地は綺麗に地面に広がった。

激しく揺れて肩でも痛くなってしまったのか、少女は首をこきこきと左右に曲げながら、地面に置いていた棒の手に取り、その端っこをパラシュートの生地の端っこの布に引っ掛ける。そして棒の反対側を、地面に突き刺した。

「あ、なるほどね」

完成したのを見て、合点がいった様子のシンジ。

少女がパラシュートと棒で作ったものは、小さな即席のタープだった。これで雨風や夜露をしのぐというらしい。

つまり、少女はこの吹き曝しの岩場で、一夜を過ごす覚悟を決めたのだ。

少女はランタンとバッグを手に岩から腰を上げると、タープの小さな三角形の入り口に身を滑り込ませる。地面に腰を下ろし、体の正面を外に向けて膝を抱えた。

タープの中で、膝を抱えてちんまりと座っている少女。

その様子が何となく犬小屋から顔を覗かせる子犬を連想させ、シンジは笑いだしそうになってしまい、慌てて手で口を塞ぐ。

少女がシンジを見上げてくる。

シンジは笑い出しそうになったことを少女が怒っているのかもしれないと思ったが、少女は相変わらずの仏頂面。そして少女の右隣り、タープの屋根の下のもう半分の空間の地面を、右手でぼんぼんと叩く。

どうやらシンジにタープの中に入るよう促しているらしい。

◇ ◇ ◇ ◇

タープの支柱を挟んで、すぐ隣に彼女が居て。

あまりにも近くて、空気を通して彼女の体温が自分の左腕に伝わってくるのを感じる。

妙齢の女性と、同い年の少女と、数カ月同じ屋根の下に暮らしたというのに、自分体には女性に対する免疫というものが全く生成できていないことを改めて自覚した。

すでに外の世界は漆黒の闇。

その中を、このタープの中だけが小さなランタンの灯りで煌々と照らされている。

広い広い漆黒の宇宙で、たった2人つきり。このタープから夜空を見上げていると、そんな錯覚を覚えてしまう。

まるであの時のようだ。

シンジは物思いに耽る。

全ての明かりが消えた街を見下ろしながら、決戦の時を待っていた2人。この国の全てのエネルギーを預けられ、巨大過ぎる敵に少年と少女がたった2人で対峙する。

すぐ目の前に死を突き付けられたあの時ほどではないにしろ、草一本も生えてないような荒廃した大地にたった2人つきりで放り出されてしまった今の状況も、理不尽さという点では似たようなものだ。

あの時は目の前の受け入れがたい状況を、しかし自分が受け入れなければ世界が滅んでしまうと言ひ聞かされ、自分を納得させるための答えが欲しくて、まるで縋るように

彼女にこう尋ねた。

「君は…、何故エヴァに乗るの…？」

瞬きと呼吸以外は何もせず、ただぼんやりと闇を見つめていた少女。

隣に座るシンジが呟いたその問い掛けに、ゆっくりと顔をシンジの方へと向ける。

シンジの顔を見ながら、2回ほど瞬きをして。

そして顔を正面に向け、視線を暗い地面へと落とす。

「…命令だから…」

少女の掠れた呟き。

「そっか…」

シンジはその掠れた呟きと共に、夜空を見上げていた視線を、まるで少女の視線を追うように暗い地べたに落とす。

「綾波レイ」は…」

「え？」

この岩場に落とされてから初めての少女からの問い掛けに、シンジは少しだけ驚いて少女の横顔を見つめた。

少女は地べたを見つめたまま続ける。

「綾波レイ」は…、どう答えたの？」

少女の問い掛けの意味を、シンジはすぐに理解できなかった。

「いつか、遠い昔に…、碓くんから同じようなこと、訊かれたような気がする…」

「君は…、あの時の記憶があるの…?」

そのシンジの問い掛けに、少女は頭を振る。縦とも横ともとれるような、曖昧な動作で。

「私たちの記憶は定期的にバックアップしてる。もしその個体がダメになっても、保存された記憶は次の個体にリストアできるよう」

「それじゃあ…」

「でも代を重ねていくごとに、データは劣化していくから、…昔の記憶は曖昧…」

「僕の話は、分かるの?」

そのシンジの問い掛けに、少女はやはり肯定とも否定ともとれるような曖昧な動作で頭を振る。

「第三の少年…。碓司令の一人息子…。2001年生まれ…」

少女はシンジのプロフィールを、まるで用意された台本を読み上げるように、淡々と話していく。

「エヴァ初号機のパイロット…。第3新東京市立第壹中学校の生徒…。葛城ミサトの被保護者…」

そこまで言つて、少女は視線を地べたから離し、隣の少年の顔へと向けた。

「綾波レイ」の同僚……。 「綾波レイ」のクラスメイト……。 「綾波レイ」の……」

それ以上は続かず、少女は目を伏せ、再び地べたを見やる。そのまま黙りこくつてしまつた。

少女の横顔を見て、シンジもこれ以上あれこれ訊ねる気になれず、視線を星々が散りばめられた夜空へと向けた。

長い沈黙の後。

「綾波レイ」は……」

少女が口を開く。

「綾波レイ」は……、どんな人……、だったの……？」

奇妙な質問だ、とシンジは思った。

隣に座る少女は、自らを「あやなみれい」と名乗つたのに。その「あやなみれい」自身が、「綾波レイ」とはどんな人かと問うてくるのだ。

答えに困る質問だ、ともシンジは思った。

自分は誰かに説明できるほど、「彼女」のことを知っていたのだろうか。

それでもシンジは少女の質問に頑張つて答えようと思つた。

「綾波は……その……、ちよつと変なコだったな……」

第一印象の感想を正直に口にした。いや、正直ではない。実際の第一印象は「めっちゃくちや変なコ」だったが、そこはちよつと控えめにしておいた。

「だって、いきなり大怪我した格好で僕の前に連れてこられたんだよ。あんな状態でエヴァに乗ろうなんて、ちよつとどうかしてるよ。まあ、どうかしてたのは父さんとか周りの大人たちだったんだけど」

当時のあの理不尽という文字を絵にしたような状況を振り返り、今は却って笑いが込み上げてしまうシンジである。

「ずっと一人だったし。誰とも交わろうとしないし。唯一まともに話す相手があのお父さんだけって。やっぱどうかしてるよね。おまけにあの部屋だよ。あの部屋。女の子の部屋なのに何も無いんだ。まともに掃除もしてなさそうだったし。僕の前ですつぽんぼんで現れるしさ」

「すつぽんぼん…?」

「あ、い、いや。僕が綾波の部屋に勝手に入ったのがいけないだけだよ。いくら自分の部屋で、周りも誰も住んでないからって、女の子の一人暮らしであんな無防備はなしだよね。おまけに父さんの悪口言ったらいきなり殴ってくるしさ。何もあんな往來で殴ることないじゃないか」

「殴られた…?」

「そうなんだよ。僕、女の子から殴られたのあれが初めてだったんだよ。おまけに瀕死の状態から目覚めた僕に、さっさとメシ食えって言うしさ。僕がぐずってたら「じゃあ寝てろ」とか言うしさ」

思ひ出話に耽るシンジの横顔を、じっと見つめていた少女。

「碓くんは…」

「え？」

「碓くんは…、「綾波レイ」のことが…、嫌いだったの…？」

「え、ええ？ ど…、どうしてそうなるのか…？」

少女の問い掛けに戸惑うシンジだが、そう言えばさつきから自分は彼女についてのネガティブなことばかりを話していたことに気付く。

「でも…」

少女は再び目を伏せ、地べたに視線を落とす。

「「綾波レイ」は…、とつても怖い人…、だったのね…」

そう思われても仕方がない。今の自分の説明ではそう思われても仕方がないのだが、シンジは慌てて全力で否定する。

「こそ、そんなわけないじゃないか！ とつても優しいコだったよ！」

そう心の底から熱弁している内に、シンジの中で彼女との思ひ出がふつつつと蘇って

いく。

「とつても優しいコで…、とつても強い人…だったよ…」

目の前に突き付けられた死に、僕は半分、生きることを諦めていて。

そんな僕を、彼女は守り抜くと誓ってくれて。

「絆」という儂く曖昧なもの一つを胸に戦場に身を置いて。

絶対の死を約束する光の束に、躊躇いなく飛び出して。

泣いている僕に、優しく微笑んでくれて。

熱っぽく語るシンジの横顔を見つめていた少女。ぽつりと呟く。

「綾波レイ」は…、強い…人…」

「そうなんだよ」

理解してくれて嬉しいのか、シンジは少し得意げな顔で少女を見た。気のせいか、少女の表情に影が見える。

少女は膝を抱く自分の手の指を見つめながら言う。

「私は…、とても弱い…ヒト…」

「そうなの？」

少女のその弱々しい告白に、シンジは意外そうな顔をする。少なくとも、この少女も自分が知る「彼女」のようにどんな過酷な任務に対しても臆することなく就いているように見えるが。

「そうは、見えないけど…」

少女は僅かばかり頭を横に振る。

「私は…、ただ命令に従っているだけ…。誰かを守るためとか…。絆のためとか…。そんなことを思つて…、エヴァに乗つたことは…、一度もない…」

「そっか…」

「…私は…、「綾波レイ」とは…、全然違う…」

そう呟いて、少女は自身を抱き締めるように膝を抱く腕に力を籠める。

「でも…、それは仕方ないんじゃないかな…」

シンジも少女と同じように膝を抱き締める。

「君は君なんだから…。僕が知っている「綾波」じゃないんだから…」

「「綾波」じゃ…ない…?」

「うん…」

「でも…、私は「アヤナミレイ」…」

「ああ、うん。そうなんだけどね…」

何だか禅問答のようになってしまった。シンジ自身、自分の言いたいことが何なのかはつきりとしておらず、続く言葉が見つからずに黙ってしまった。

長い沈黙。

お互い、膝を抱き締めながら、少年は空を、少女は地べたを見つめている。

シンジは膝を抱える腕に、益々力を籠めている。肩が小刻みに震え始めていた。

震えているシンジに気付き、少女はタープの奥に置いていたバッグに手を伸ばし、中身を「ごそごそ」と探る。

隣の少女から、何かを差し出された。

手の平に収まる程度の、小さなスタツフバッグ。

「あ、ありがとう」

中身が何かも分からずに、差し出されたものを受け取る。

スタツフバッグにある表記には「Emergency Sheet」の文字。

中身を取り出し、折りたたまれたものを広げてみると、布団くらいの広さのアルミシートだった。スタツフバッグの英語の説明書を見ると、どうやらこれは体に羽織るものらしい。説明書きの指示に従い、シンジはそのアルミシートを背中から羽織ってみた。

陽が暮れてからというもの、外気温はどんどん下がっていく。学生ズボンのTシャツ

姿という薄着のシンジの体温は、どんどん奪われていた。寒さに体を震わせていたところに、少女から渡されたこの薄っぺらいアルミシート。なるほど。シートが体から発せらる熱を反射してくれるので、体温が奪われるのを防いでくれる。

「…ありがとう」

少女は小さく頷くことで、シンジの謝意に答える。

「これもあのバッグから？」

少女は小さく頷く。

「お店が開けるね」

少女は言っている意味がよく分からないとばかりに、首を傾げる。

「君は寒くないの？」

シートを独占してしまっていることが申し訳なく、シンジは少女に尋ねた。

「プラグスーツが、スーツ内を適温に保ってくれる…」

「そうなの」

「続きは…？」

「え？」

「「綾波レイ」の話し…。もう、終わり…？」

「聴きたいの？」

少女は小さく頷く。

「そうだね…」

次に思い出すのは、みんなで海洋研究所に行ったことだろうか。

水槽の前で、「自分はここでしか生きられない」と語った彼女。その表情はいつもと変わらないように見えたが、どこか寂し気にも見えた。

「ああ、そう言えば」

ふと、海洋研究所での印象的な思い出の一つを思い出したシンジ。

「綾波って、肉が嫌いだって…」

「ニク?」

「そう。やつぱり君も、肉が嫌いなの?」

「ニクって、…あの肉?」

「うん」

「碓くんは…、お肉を、食べるの…?」

「え? う、うん。そうだけど…」

ここまで殆ど表情というものを宿らせることのなかった少女の顔が、何か恐ろしいものでも見るかのように少しだけ歪んだ。

「そう…」

「…うん」

気のせいかな、少女の体がまるで自分から距離を置こうとしているかのように、斜めに傾いている。

この少女の反応の理由を少し考えてみて。

そう言えば、「この世界」で目覚めて以来、自分は一度も肉を、少なくとも目にして肉と分かるようなものを、口にしていない。食用の人造肉も出たことがないし、家畜は勿論のこと、人間以外の動物を目にしたこともない。この世界で肉と叫びたらエヴァを構成するとても食品用には転嫁できない人工筋肉か、あるいは…。

それに思い当たって、シンジは自分の話しが少女にあらぬ誤解を植え付けていたことに気付いたが、その時はすでに少女の思考はドツボに嵌っていた。

「碇くんは…、人を…食べるんだ…」

第壹拾七話

少女が抱いたあらぬ誤解を何とか解いたシンジは、「彼女」との思い出話を続けた。

肉が食べれないという彼女に、お味噌汁が入ったカップを渡したところ、おずおずとお味噌汁を口に、「美味しい」と言ってくれたこと。

普段からお昼ご飯を食べていない様子だった彼女に、作ってきたお弁当を渡したら、ちよつと戸惑った顔をさせてしまったこと。

それから暫く彼女は学校を休んでしまい、もしかしたら渡したお弁当が痛んでいて、お腹でも壊したんじゃないかと心配したこと。

数日振りに学校に来たと思つたら、手のあちこちに絆創膏を巻いてきてちよつと驚かされたこと。

とても優しい人で強い人だけど、何だか実は色んなところが抜けてて、どこか危なっかしくて、何だかそわそわさせられて、何だかほつとけなくて、気が付いたら彼女の姿を目で追っていたこと。

そんな彼女に突然食事会に招待されて、とてもびつくりして、そしてとても嬉しかったこと。

「ああ、そっか……」

シンジは膝に頬杖を付き、ぼんやりとつま先を見つめる。

あれから色々な事があり過ぎてすっかり忘れていたが、あの日、彼女は自分と父親との食事会を準備してくれていたのだ。

たった1度の食事会で何がどう変わるわけでもないだろうが、もし彼女を挟んで父親と食卓を囲んでいたら、自分と父親との関係もこうまで拗れてしまうことはなかったかも知れない。そうすれば、アスカを取り込んだ3号機の使徒化という事態にも、父親と協力し合うことでもっと別の結末を迎えることができたかも知れない。

全てが今更どうしようも出来ない、とうの昔に確定してしまった過去なのだが。

そう、過ぎ去った過去を、変える事なんてできない。
覆すことなんてできっこない。

左右を交差させていたつま先を、じっと見つめていたら。

「綾波レイ」は……

隣から投げかけるか細い声。視線をつま先から隣に座る彼女へと向ける。

「綾波レイ」は……、お料理を、よくしていたの……？」

「え？ 綾波が？」

問い返すシンジに、小さく頷く少女。

「えっと。どーかな。少なくとも普段から料理してる風には見えなかったけど…。彼女の部屋にも、料理道具らしいものなんて、何も無かったし…」

食事会に招待されたのは嬉しかったが、出される料理を想像して胃薬を準備した方がいいかな？と不埒なことを考えていた自分を思い出したシンジである。

「なら…、「綾波レイ」は…、普段は何をして過ごしていたの…？」

そう少女に訊ねられ、実のところ彼女の私生活については殆ど知らないシンジは、少し答えに窮してしまった。ただ、自分が知る限りでは。

「よく本を読んでいたな…。学校の休み時間とか、実験の合間とか。病室の僕を見舞ってくれた時も、確か僕が目覚めますまで本を読んでいたよ」

「そう…」

シンジのその言葉を聴いて、少女は何かに納得したように、小さな頷きを何度か繰り返した。

「だから碓くんは、私にたくさん本を持ってきてくれたのね…」

「うん…。君は、本は読まないの？」

少女は小さく頷く。

「本、読めないから……」

「どうして? 図書館にはたくさん本があったじゃないか」

「字、殆ど読めないから……」

「え?」

少女の意外な告白に、シンジは言葉を詰まらせた。少女は淡々と続ける。

「エヴァに乗るため以外の知識や技術は……私には必要ないから……。あの中での生活も、字が読めなくても、問題ない、から……」

そう言いながら少女は視線を遠くに投げる。シンジも釣られて少女の視線の先を追う。そこには闇の中に聳え立つ、巨大な塔。シンジはあの塔の中の少女の暮らし振りを思い出した。任務に就く以外は、あの部屋ですらない天幕の中で、ただ命令を待つていた少女の生活振りを。

天幕とエヴァのエントリープラグとの行き来だけを繰り返す生活。エヴァの操縦も、シンジ自身、チュートリアルなど一切読まずに動かすことができた。確かに、少女があの塔の中で生きていく上で、「文字」という「記憶」は必須ではないようだ。

記憶のバックアップとリストアを繰り返していく度に古い記憶は劣化していったという。その中で、「文字」という記憶も劣化していったのかもしれない。幾ら生きていく上で必ずしも必要とされないものであったとしても、人として身に付けるべき最低限の

知識をも劣化したのであれば、それを補うための教育をあつ塔に住む大人たちはするべきではなかったのか、とシンジは憤慨しそうになったが、あつ塔に住む大人たちにそのようなことを期待するのは端から無駄だと言うことを思い出し、怒るのも馬鹿らしくなった。

そして、自分自身はすでにあつ塔に住む大人たちと敵対する組織に身を寄せる決意をしており、つまりは隣に座る少女とは敵同士となる訳だが、そんな敵である少女に対する同情の念は一層高まっていくのだった。

「綾波レイ」は、よく、本を読んでいたのね……」

「うん……、そうなんだ」

シンジは、教室の窓際の席で本を読んでいた「彼女」の後姿を頭に思い浮かべながら答える。

「彼女」と過ごした時間なんて、そう多くはないのに。

父親から離れ、何年も預けられていた家の人の顔なんて、もう全然思い出せないのに。不思議と「彼女」の姿、仕草、立ち振る舞いはよく思い出せた。

「彼女は、本が好きだったよ……」

まるで「彼女」がそこに居るかのように暗闇を見つめながら話すシンジの横顎を無言で見つめていた少女。

僅かな沈黙の後、その少女の口から洩れた言葉に、シンジは慌てふためくことになる。

「好き……」

「は!? え…、えええ!」

自分の顔をじつと見つめる隣の少女の口から放たれた、思春期ど真ん中の少年の心を抉ってはぶち抜くその言葉に、腰を5センチばかり浮かせて顔を真っ赤にさせてしまうシンジである。

「好きって…、なに…?」

慌てふためくシンジを他所に、隣の少女は相変わらずの涼やかな表情と声音で続けた。

瞬間湯沸かし器と化していた頭が、今度は急速冷凍されていく。そして盛大に勘違いしていた自分を恥ずかしく思い、再び顔を真っ赤にさせてしまうシンジである。

そんな自分の心の中の動揺を隠すように、シンジは隣の少女から投げ掛けられた質問に、しどろもどろになりながら必死に答えた。

「え、えっと。好きっていうのは…さ。例えば、こう、さ。心が惹き付けられるというかさ。それに対して、夢中になったり…、他のことが考えられないくらいに、…熱中したりだとか…さ。それを大切にしたい…だとか、大事にしたい…だとか。そんな気持ちのことを、好きって…、言う…、んじやないかな…、って…僕は思っちゃったり…してる

わけ…なんだけど…」

「そう…」

自分の拙い説明を理解してくれたのだろうか。シンジはシンジの言葉を心の中で咀嚼しているかのように頷く少女の顔を、不安げに見つめる。その少女の赤い瞳が、そつとシンジの瞳を見つめた。

「それなら…」

「うん…」

「それなら…、碓くんは…、「綾波レイ」のことが、好き、だったのね…」

重なり合う2人の視線。

少女の言葉に虚を突かれたように固まってしまったシンジ。

相手の答えを、じつと待ち続ける少女。

暫しの沈黙。

「好き…」

まるで初めて聴く音でも言いたげに、シンジはその2文字を静かに口の中で転がした。

少女の瞳から、少しずつ視線を逸らしていき、その視線は地べたを這い、やがて漆黒の闇の中へと溶けていく。

「そっか……」

シンジは何かに納得しかのようにそう呟く。

「好きだった……んだ……」

心の中に立ち込めていた霧の一つが、少しだけ晴れたような気がした。

「綾波の……ことが……」

心の中が晴れていくと同時に。

「好き……、だったんだ……」

霧が晴れた先に立っていた彼女が、すでに遠い遠い存在であることにも気付かされて。

「僕は……」

独り言を呟いていた少年の声に嗚咽が混じり始め、少女は不思議そうに少年の顔を覗き込む。

「泣いてるの……?」

その少女の問いに、少年は腕で目を覆い、下唇を噛みしめながら頷いた。

自分の中に芽生えていた生まれて初めての感情に気付かされて。

しかしその心を育んでくれた彼女はもうこの世界には居なくて。心に空いたばかりとした穴を涙で埋めるかのように、シンジは泣き続けた。

過ぎ去った過去を、変える事なんてできない。

覆すことなんてできっこない。

分かっていたはずだ。

あの槍を抜けば、全てが元通りになる。

そんなバカげたことを信じて、制止する彼の声に耳を貸さず、強引に止めに入った彼女を排除して、槍を抜いてしまった。

取り返しのつかないことをしてしまった。

取り返しのつかないことをしてしまった僕の罪を、彼は全て背負いこみ、彼は笑顔で散っていった。

過ぎ去った過去を、変える事なんてできない。

覆すことなんてできっこない。

身に染みているはずなのに。

自分は、また同じ過ちを繰り返している。

あの時は、目の前で殺戮される「彼女」そっくりの「あれ」を助けたい一心だった。

だからあんなその場での思い付きの詭弁を弄した。

そんな事できっこない。分かっているはずなのに。

彼女は言った。

自分のその甘い考え方そのものが、生命に対する冒瀆だ、と。

全くもって、その通りだ。

過ぎ去った過去を、変える事なんてできない。

覆すことなんてできっこない。

そこにあるのは過去という名の事実。

僕は彼女を、助けられなかった。

好きな人を、助けることができなかった。

綾波を、助けることができなかった。

その厳然たる事実だけが、目の前に横たわっている。

抱えた膝に額をくっ付け、肩を震わせて泣いている少年。

その少年の隣に座る少女の手が、少年の肩へと躊躇いがちに伸びる。

少女の手が少年の肩に触れようとして。

しかし少女の手は少年の肩に触れることのないまま、何度か虚空を握った後、そのま

ま少女自身の膝へと戻る。

少女は口を開く

「ごめん…なさい…」

少年は顔を伏せたまま言う。

「なぜ…、君が…謝るの…？」

少年に問われ、少女は目を伏せる。少女自身、なぜ自分が少年に対して謝罪の言葉を口にしたのか、理解できておらず戸惑っている様子だった。暫しの間地面とにらめっこをして、そしてその視線を横にずらし、少年のつま先を見つめる。そして少女はぼそりと呟いた。

「あなたの隣に居るのが…、私で…」

少年は顔を伏せたまま頭を横に振る。

「そんなことで…、謝る必要なんて…ないよ…」

「でも…、私は「綾波レイ」のように強くない…」

少年は伏せていた顔を少しだけ上げ、隣の少女を見る。

「綾波レイ」のように、優しくもないし…。「綾波レイ」のように、人に勇気を与えることもできない…。「綾波レイ」のように…、笑うこともできない…。「綾波レイ」のように「美味しい」と言うこともできない…。「綾波レイ」のようにお料理をすることもでき

ないし、本を読むこともできない……」

何かに憑かれたように、否定の言葉を並べていく少女。

少年はそんな少女の横顔を見て、何故か少しだけ笑った。そして、再び少年は顔を伏せ、膝を額にくっつける。

「当然じゃないか……。君は……、綾波じゃないんだから」

「綾波……じゃ……ない……」

少年が呟いたその言葉を繰り返す少女の手が、ぎゅつと自身の膝小僧に爪を立てる。

「君は君だよ……」

膝小僧に立てられていた爪が、ふつと緩んだ。

「私は……私……?」

「うん。君は君さ……。わざわざ僕が知ってる「綾波レイ」になろうなんて思う必要はないんじゃないかな……。君は君で、君なりの「君」になればいいんだよ……」

隣にいる少女は「自分なんかが側に居て」と妙なことで謝ってきたけれど、きつと自分が延々と「彼女」の思い出話をしてしまったものだから、居たたまれなくなってしまうたのだろう。

でもシンジは涙を流しながらも、隣に座る少女の感謝していた。もし隣に少女が居な

かったら、自分は失ったものばかりを考えて、底のない沼へと嵌り込んで2度と抜け出せなくなっていたらどうだろうか。

少女が自分の取り留めのない、まるでうわ言のような独り言を聴いてくれたおかげで、ほら、自分の涙はすぐに止まった。

何度か鼻を嚙り、目じりの液体を拭って。

「ははっ。泣いちゃったよ……」

照れ隠しに笑って。女の子の前で男がだらしないな、と自嘲しながら、ふと隣を見て。

「ええ？ えええ？！」

シンジは驚いて、間拔けな悲鳴を上げてしまった。

隣で膝を抱えてちんまりと座っている少女。

その少女の赤い双眸から、大粒の涙が零れ落ちている。

「あれ？ ええ？ ど、どうしたの？」

目の前で女の子がぼろぼろと涙を流して泣いているという、齡14の少年の人生の中で初めてのシチュエーションに、大いに戸惑ってしまうシンジだった。

「……ええ？」

どうやらシンジに声を掛けられるまで、自分が涙を流していることに気付いていな

かっただらしい。

「え？　え？」

少女は自分の目もとに手をやり、指で目尻を撫でると、その指を見つめた。確かに濡れている。

自らの身に起きている現象をよく理解できていないらしい。しばらく指の先の液体を見つめていた少女は、目をまん丸にして、隣のシンジの顔を見つめた。

お互い戸惑い顔のまま見つめ合う2人。

少女の卵のようになつるつるとした眉間に次第に皺がより、お月様のようにまん丸だった目が細くなり、ぽかんと開いていた口が「へ」の字にひん曲がり。

ガン泣きである。

マジ泣きの始まりである。

声を上げながら泣く少女。

まるで幼子のように、人目もはばかりに泣き始めた少女。

「い、いめん」

どうしたらよいのか分からず、とりあえずとばかりに謝ってしまった。

「僕が、何か傷つけるようなこと、言ってしまったんだね…」

この場には自分と少女だけ。少女を悲しませてしまう原因は、自分にあるに違いないとシンジは思った。

そんなシンジの言葉に、少女は両手で目を覆いながら、空色の髪をふるふると揺らし、懸命に頭を横に振る。

「え？　じゃあどうして…」

「分からない…」

「え？」

「分からないけど…、勝手に…」

「勝手に…？」

少女はこくこくと、小刻みに頷く。

「碇くん…、「君は君」って言われて…。それを聞いて、胸の中が急に軽くなって…。もしたらお腹の中から…。色んなものが溢れてきてしまいそうで…」

「それで泣いちゃったの？」

少女はこくこくと、小刻みに頷く。

「…えつと…、僕に「君は君」って言われて…、その…、嬉しかったのかな？」

シンジのその問い掛けに、少女は両手で目を覆いながら言う。

「嬉しい」って…、なに？」

「え？ えっと、心がぼかぼかしたりだとか、晴れ晴れしたようだったりとか。そんな気分のことだよ」

「じゃあ、それ」

「そ、そっか…」

少女は相変わらずしやくり上げて泣いている。

その姿を横から見ていたシンジは気付いてしまった。

おいおいと泣く少女の口から吐き出される白い息に。

陽が暮れてからというものの、気温はぐんぐん下がっている。体のラインが丸見えのピッタリのスーツを着ている少女のその細い体は、見るからに寒そうだ。少女から与えられたアルミシートを羽織ってぬくぬくとしている自分が、何とも情けないと思ってしまうシンジである。

何度も何度も思案を重ねた末。

シンジは羽織ったアルミシートの左腕部分を広げると、自分の左腕を隣の少女の右腕にぴたつくつくつける。少女はスーツが適温に保ってくれると言っていたが、少女の腕は水のように冷たかったので、シンジは慌ててアルミシートを少女の左肩に羽織らせ、2人でシートの中に包まった。

シートに隙間があると外の冷気が入ってきてしまうので、なるべく2人寄り添って、

密着しあつて、シートの中に収まる。

外の空気は凍てつくような冷たさだけれど、シートの中は2人分の体温に温められ、ぼかぼかと温かかった。

シンジは少女が泣き止むまで、少女の冷たくなった体に自分の体温を分け与えていた。

第壹拾八話

「横になろつか…」

泣き疲れてしまったのだろう。膝を抱いたまま深く俯いてしまい、動かなくなってしまう。少女はこくりと頷いた。

地べたに横になって、パラシユートの生地から支柱を外し、支えがなくなった生地を毛布のように頭から被る。

アルミシートに梱包された2人は互いに向かい合い、小さなランタンを囲むようにして見つめ合う。

「碓くん…」

少女はランタンの光をその瞳に宿しながら、シンジの名を呼んだ。

「なんだい…」

シンジは光に照らされて、まるでルビーのような輝きを放つ少女の瞳を見つめながら答える。

「私は、私で、いいの…?」

少々哲学的な問いの投げ掛けに、シンジは苦笑しながらも頷く。

「うん。君は、君自身がなりたいたい君になれば、いいんじゃないかな…」

「綾波レイ」じゃなくても…いいの？」

「いいと思うよ…。君は君だ…」

柔らかな声でそう告げると、またもや少女は顔をしわくちやにさせ始めたため、シンジはもう泣かないでほしいとばかりに、慌てて言葉を紡いだ。

「君は、これからどうするつもり？」

「碓くんは…、どうするの…？」

「僕はヴィレに行く。アスカが待っていてくれると思うから」

「ヴィレに…」

「うん。それでまたエヴァに乗る」

「エヴァ…に？」

「うん。そして、父さんを止めようと思うんだ」

「碓司令を…？」

「うん」

「そう…」

少女の瞳に戸惑いが宿り、その視線がシンジの瞳とランタンの光との間を交互に彷徨

う。

「君は……？」

シンジの声に、彷徨っていた少女の視線がシンジに集中する。

「君は、これからどうするの……？」

そう問われ、少女は一度瞬きをし、鼻を吸る。

「私……、どうしたらいい……？」

少女に聞き返され、シンジは小さく笑いながら首を横に振る。

「それは、君が決めるべきだよ」

「私が……？」

「君のことは、君自身が決めなきゃ……」

「私が……、私のことを……決める……」

シンジにしてみれば至極当たり前のようなことなのに、何だか途方もない難題を突き付けられたかのような顔でそう呟く少女。

そんな少女を見てシンジは笑いそうになっちゃったが、そう言えば自分自身もネルフに連れてこられて以来、自身の命運の殆どを他者に握られ、自分で自分自身のことを決めることが出来たことなんて指で数えられる程しかなかったな、と思いつく。増してや、その人生の全てをネルフに身を捧げてきた少女なんて、自分のことを自分で決める

機会なんて、少しも与えられなかっただろう。

見れば、少女の体が震え始めている。それは寒さからくる震えだけではないことは、シンジにも分かった。ランタンに照らされる少女の顔は、何処か怯えている。

もうここまで来たんだからとばかりに、シンジは今度はそれほど躊躇わずに、震えている少女の頭をそつと抱き締めてやり、その頭をぼんぼんと叩いてやった。

「今すぐに決める必要ないよ。よく考えて、ゆっくりと決めたらいい……」

シンジの優しい手と、シンジの温もりと、シンジの柔らかな声に溶かされるように、次第に少女の体から震えは消えていき、その小さな頭はシンジの腕の中で静かに、それでいてしっかりと縦に振られた。

「ああ、そう言えば……」

ふと、シンジが呟く。

なに？と、少女が顔を上げ、シンジの顔を覗き込む。

「僕は君のこと、何て呼べばいいのかな」

今更ながらに、少女のことを「君」と呼び続けている自分に気付いたシンジ。

「やっぱり「綾波」って呼べばいいのかな？」

正直なところ少女を「綾波」と呼ぶには、違和感が残るシンジだった。

少女はシンジの腕の中で頭を横に振る。

「私は…、もう…、「綾波」でいることを…、止めたから…」

「そっか…」

自分の言葉がいつの間にか少女に一大決心をさせてしまったことに、今更ながらに本当にこれで良かったのかしらと責任を感じてしまうシンジである。

「だったら、何て呼んだらいい?」

少女は目を伏せ、暫し考えて。

「碓くんが決めて…」

シンジの目を見て答える。

「え?」

「碓くんが決めて…」

「え? ぼ、僕が?」

頷く少女。

「碓くんが私を呼ぶためのものだもの…。碓くんが決めて…」

「えー…」

突然突き付けられた難題に、唸ってしまふシンジである。

クラスメイトや友人たちをあだ名で呼んだことさえないシンジである。増してや女の子の呼び名を決めるなんて、そんな恥ずかしいこと。

ところが、そんなシンジの心情はお構いなしに、少女はじつとシンジを見つめて待っている。

「えつと…。そ、それじゃ…あ…」

少女に一大決心をさせてしまった責任を感じているシンジ。脳味噌を、フル回転させた。

あ、そう言えば。

アスカは、こう呼んでたな。

「96…。…いや、…さすがに数字で呼ぶのは…なあ…」

96。

96。

「きゅーじゅーろくを文字って、「クロ」。…なんつって…」

「うん…。「クロ」…ね」

何の躊躇いもなく頷く少女。

「いやいやいやいや！冗談だよ！冗談！」

「いい。私、「クロ」で」

「ダメだよダメダメ！」

「どうして？」

「どうしてって。「クロ」って、まるでペットみたいじゃないか」

「ペットって…なに？」

「また面倒な質問を…。ペットと言うのはそのつまり…、人間が手元に置いて可愛がる動物のことだよ」

「そう…。つまり、私は碓くんのペットになるのね」

「なんでそーなるかなー！」

「いい。私、碓くんのペットになりたい」

「ぐはあっ!？」（血反吐）



瞼の裏が眩しい。

そつと目を開けると、視界一面が真っ白。真っ白な布地。パラシユートの生地を通して、強烈な太陽な陽射しが差し込んでくる。いつの間にやら外の世界は朝を迎えていたらしい。

真っ白な生地に包まれて、少女の顔。

卵のような肌。空色の長い睫毛。ピンク色の唇。

柔らかな少女の寝顔。

そんな少女の顔がすぐ側にあつて。

「わーわああー！」

相変わらずの女性免疫不全症なシンジは、情けない悲鳴を上げて飛び起きた。

そのシンジの悲鳴に起された少女。寝ぼけまなこで、上半身を起こしているシンジの顔を見上げる。

「や、やあ。おはよう……」

シンジのぎこちない挨拶に、少女は頷いて答える。

毛布代わりに使っていたパラシュートの生地をはぎ取ると、そこは相も変わらずの赤茶けた荒野が広がっている。目覚めたらすぐ側に可憐な少女の寝顔という状況に、究極まで高鳴っていた心臓がやっとこさ落ち付いたシンジは、今日もよく晴れた空の下で大きく伸びをした。

そのシンジの後ろでは、パラシュートの生地から這い出てきた少女が、ベンチ代わりにの岩にちよこんと腰を掛けている。

「さて……、これからどうしようか……」

シンジは誰に相談するでもなく、そう独りごちた。

振り返り、岩の上の少女を見る。

「君はどうするか、決めた？」

少女は即座に頷く。

「クロ」でいい」

その少女の答えに、シンジは困ったように笑う。

「いや、君の呼び方じゃなくて。これからどうするか、決めた？」

そう問うと、少女は途端に眉の両尻を下げ、俯いてしまう。一晚経っても、まだ自分の身の振りを決めかねているらしい。

上目遣いで、シンジを見つめてくる。

その破壊力抜群の視線に、シンジは思わず助け舟を出してやりたくなかったが、寸でのところで堪えた。

「ダメだよ。自分で決めなきゃ」

「そう…」

少女は残念そうに目を伏せた。そんな少女に、たった一晚で随分と感情豊かになったものだと感心してしまうシンジである。

「僕と一緒に来てもいいし…」

シンジの声に、少女の視線が上がる。

「父さんたちのもとに帰るのもいい。それに何も、僕たちにこだわる必要はないんだ。僕や父さんたちと離れて、全然違う道を歩むって手もある。君の自由にしていいんだ」

「限らない自由」、「自由過ぎる自由」ってものが、実は一番の困りものだという話を、シンジはどこかで聞いたことがあるような気がした。

その顔に不安を色濃く浮かべる少女。少女は「自由」という名の大海原の前に。灯台も島も雲もない、何もしるべとなるようなものがない大海原の前に、飛び出すことを躊躇しているようだ。

そんな少女の顔を、シンジは優し気に見つめる。

「まだ時間はあるんだ。ゆっくりと決めたらいいよ」

少女はぎこちなく頷く。

「あ、でも」

シンジは何かを思い出したように声を上げる。

「もし僕と一緒に来るんだったら、アスカには謝つとかないとね」

「アスカ……?」

「うん。だって君。拳銃でアスカを撃っちゃっただろ?」

シンジのその指摘に、少女は一度目をぱちくりさせて、そして再びその表情に強い不

安の色を浮かべた。

「その人……。私のこと、許してくれるかしら……」

「んんんんー」

少女その問いに、唸ってしまふシンジである。

「アスカ、結構根に持つタイプだからなあ……」

以前、冷蔵庫にあった彼女のシュークリームを誤って食べてしまった時でさえ、3日間は口を利用してくれなかった彼女のことだ。肩を銃弾でぶち抜かれたことを、そう簡単に水に流してくれるとは思えない。

腕組みをしてしまふシンジに、不安のあまり顔が引きつってしまふ少女である。

「まあ、でも」

そんな少女の顔があまりにも気の毒だったので、シンジは今度は助け船を出すことにした。

「僕もアスカには色々謝らなければならないことが沢山あるから。アスカに会ったら、一緒に謝ろっか」

少女は上目遣いにシンジを見つめる。

「碇くんと……一緒に?」

「うん」

シンジがにつこりと笑うと、少女の顔からは不安の色が消え、そしてその口角は微笑に上がった。

小さく微笑む少女。

その少女の顔に、シンジの胸は強く高鳴る。

昨晩は人目も憚らずに泣いて。

今朝は小さく笑って。

感情に任せて、コロコロと素直に表情を変える少女。

それはきつと、自分が知る「彼女」にも出来なかつたこと。

「じゃあ僕は周辺を回ってみるから」

いつまでもこの岩場に留まっているわけにはいかない。周辺は断崖絶壁だが、どこかに下界に下りられる場所があるかもしれない。シンジは周辺を探索してみることにした。

自分も一緒に行くと言う少女に、足を怪我しているのでこの場で待機しているよう告げると、少女は不満顔。シンジは苦笑しながらこう命じる。

「僕が行っている間に、君は自分のことを早く決めるように」

少女はやはり不満げな顔のまま、渋々と頷く。

「あ、あと呼び方のこともね」

「クロ」でいい」

「それはダメって言うてるでしょ。じゃあ、ちよつと行つてくるよ」

シンジは少女に向かつて手を振りながら歩き始めた。

少女も、胸の前で小さく手を振って、シンジを送り出した。

シンジが去って、少女は一人になった。

シンジの背中が見えなくなつてからも、暫くシンジが歩いていった方を見つめていた少女。

視線を落とし、自分のつま先を見つめる。何とはなしに、足をぶらぶらとさせている。左足は怪我をしているというのに、不思議と痛みを感じない。両腕を天に伸ばし、背中を大きく伸ばしてみる。不思議と、肩が軽かった。

「ふうっ……」

天に伸ばした腕を一気に下ろし、軽く息を吐く。

足をぶらぶらとさせながら、空を見上げた。

——自分のことを早く決めるように。

彼はそう言っていたけれど、もう自分の心はとつくに決まっている。

あとは彼に、自分の決めたことを伝えるだけ。

彼が帰ってきたら、一言目で伝えよう。

——君のことは君が決めなきや。

そう彼に言われた時には、ただ不安しかなかったけれど。

一度決めてしまえば、心がこんなに軽くなるなんて。

空を見上げる少女の瞳に、青い空と点々と浮かぶ雲が映り込む。

「……碇くん……」

そつと彼の名前を呟いてみた。

不思議な人だと思った。

彼の声に乗せられる言葉は、不思議と自分の心の中に染み渡る。

潰れたタープの中から、ボディバッグを引っ張り出す。

フアスナーを開け、中をこそこそと探る。

手にしたのは、あちこちが傷だらけの携帯音楽プレイヤー。

何度も自分の手から零れ落ち、一度は彼に思いつきり壁に投げ付けられたものだけど、結局は自分の手の中に収まっている。もしかしたらこれが、自分を彼のもとに導い

てくれたのかもしれないと、ちよつと現実的じゃない想いに耽つてしまう。

プレイヤーの筐体に巻き付けられたイヤフォンのコードを解く。

イヤフォンの片方を右耳に入れ。

もう片方を左耳に入れ。

筐体を見つめる。

筐体の側面に並ぶ幾つかのボタン。

少女の指が並ぶボタンの上を彷徨い。

そして三角形を横に倒したような表記がある、一番大きなボタンを押した。

カタつと小さな音を鳴らせる筐体。

筐体の中にある、小さなカセット式のテープが動き始める。

耳の中に入れたイヤフォンから、小さなノイズ。

程なくして、イヤフォンから音楽が流れ始める。

少女にとっては、初めて触れるもの。耳にするもの。

様々な音色で構成される複雑な響き。

耳を伝う音に合わせて、少女の頭が揺れる。

ブツツ

突然、途切れた音楽。

不思議に思い、少女は手に持ったプレイヤーを見る。筐体の中のテープは今も滑らかに左から右へと動いている。

人差し指で、コンコンと筐体を小突いてみる。

ザーザー!!

耳を劈くようなピンクノイズ。

見開かれる少女の目。

その目に収まる瞳孔が、瞬時に縮まる。

少女の背がまるで弾かれたように反り返り、少女の体は音を立てて岩の上に倒れ込んだ。

全身が引き攣り、つま先から手の先、頭の先までがピンと伸び、小刻みに痙攣を繰り返す。

少女の手からプレイヤーが零れ落ち、カタンカタンと音を立てて岩の下に転がり落ちた。

岩の上に倒れ、痙攣を繰り返す少女の体。口の端から泡状の涎が溢れ、右の鼻の孔か

ら鼻血が垂れ始める。

痙攣に合わせてカチカチと歯を鳴らせる少女の口から。

「私は「綾波レイ」じゃない…、私は「綾波レイ」じゃない…、私は「綾波レイ」じゃない…」

全身を支配し始めている「何か」に抗うように繰り返される少女の呟き。

「私は…、私は…、私は…」

しかし次第に大きくなっていく痙攣と共に、少女の声は途切れがちになり。

「わ…、た…、し…、……」

やがて消えていった。

第壹拾九話

自分たちが降り立った台地は想像していたよりも遙かに広い場所だったらしい。延々と続く断崖絶壁を辿りながら、ようやく下界へと下りることができそうな緩やかな斜面を見つけ、引き返してきた時には、少女のもとを離れてから半日近くが経過していた。

少女が待つ岩場へと戻る。

少女は、自分が出発した時と変わらない姿で、ベンチ代わりの岩の上にちよこんと座っていた。

「やあ、ただいま」

少女に向かって手を振りながら声を掛ける。

「…おか…えり…」

少女は遠慮がちに返事をする。

シンジは少女の隣に座った。

岩の上に置かれたペットボトルに手を伸ばし、中身の水を少し口にする。

Tシャツの襟口で汗の浮く額を拭った。

「ここから、ええと、太陽があつちから昇つたから、多分西だね。西の方に2時間ほど歩いたところに、下に行けそうな場所があつたよ」

「…うん…」

シンジの説明に、少女は小さく頷く。

「僕はそこから下に下りて、とにかくあの塔から離れようと思うんだけど」

「…うん…」

「君はどうするか、決めた？」

「私…?」

シンジに問われ、少女は少し不思議そうな顔でシンジの横顔を見つめる。

「うん。ああそう言えば、呼び方は？」

「呼び方…?」

「うん。君の呼び方は決めた？ まさか「クロ」じゃないよね」

「クロ…?」

「うん」

少女はやはり不思議そうな顔でシンジの横顔を見つめている。

「私はアヤナミレイ…」

「え？」

今度はシンジの方が意外そうな顔で少女を見返す。

「私はアヤナミレイ……」

淀みない声で繰り返す少女。

「そっか……」

シンジは少女の返答を聴き、少しだけ残念そうに眉尻を下げる。少女の顔から視線を外し、数メートル先の断崖の向こう側に広がる広大な渓谷を見つめた。

「君がそう決めたんだったら……、うん」

シンジは大きく頷く。少女がこれからもその名前を名乗るのが、何故か少しだけ残念だったけれど、少女の意志は尊重したかった。

「分かったよ……、アヤナミ……」

改めて、少女の名を呼んだ。

隣の少女の体が、大きく震えたような気がした。

どこか様子のおかしい少女を、シンジは心配そうに見つめる。

「大丈夫？ アヤナミ……」

シンジのその問い掛けに少女は答えず、指を広げた自分の両手を何度かひっくり返し
ながら、じっと見つめている。

まるでその手が、本当に自分の手であるかを確かめるかのように。

20秒ほど手を見つめていた少女は、今度はその手を自分の両頬に当てた。まるで自分の顔の形を確かめるように、顔の上をペタペタと這っていく少女の両手。

少女は自分の両頬を両手で挟んだまま、ゆっくりとシンジの方へ向いた。

「いかり…、くん…？」

「なんだい？ アヤナミ…」

少女の小さな鼻の孔が両方とも大きく開き、深く深く空気を吸った。

少女は息を吸ったまま、何も喋らない。

息を吸ったなら、今度は吐き出さないと苦しくなっちゃうよ、と心配し始めたシンジ。

そのシンジの耳に、遠くの空から鳴り響く爆音が飛び込んできた。

少女のどこか呆けたような顔から視線を外し、爆音が響いてくる空へと向ける。

青い空の上に、染みのように浮かぶ何か。

シンジには、そのシルエットに、見覚えがあった。

「ネルフだ…」

シンジは慌てて岩から腰を上げる。

「アヤナミ。僕、行かなきゃ」

少女は青い空に浮かぶ染みを見つめている。

「君はどうする？ アヤナミ」

少女に決断を促すシンジ。本心では、少女に向けて自分の手を差し伸べたかった。だが、これは少女自身が決めなければならないことだと思い、両手をぎゅつと握り、その拳を地面へと向ける。

少女の答えを待った。

空の染みを見上げていた少女。

ゆつくりと、シンジへと顔を向ける。

シンジは少女のルビーのような赤い瞳を見つめる。

その瞳が、左右に一度ずつ揺れた。

「ここに…残る…」

シンジは下唇を噛んだ。

しかし、2度ほど、まるで自分に言い聞かせるように、大きく頷く。

「うん…。分かったよ…」

改めて少女の顔を見つめた。

「アヤナミがそう決めたんだっただら…」

空を見上げる。

空に浮かぶ黒い染みは、どんどんこちらに近づいてくる。

「じゃあ、アヤナミ…、僕…」

この場から立ち去ろうとして、

「碇くん…」

少女に呼び止められる。

少女は携帯食料や水の入ったペットボトルなどを手早く掻き集めると、ボディバッグの中に詰め、シンジに差し出す。

「あ、ありがとう…」

「これ…」

少女はシンジに手渡す荷物の中の一つを指差す。

「これは…」

「通信機…。これで、ヴィレの人、呼べばいい…」

「ヴィレとも通信できるの？」

「ネルフはヴィレの暗号通信技術を全て解析しているから。傍聴もできるし、通話もできる」

「そ、そうなんだ…」

シンジは少女からバッグを受け取り、自分の肩に背負った。

「じゃあアヤナミ…」

別れを切り出すシンジに、少女は小さく頷く。

シンジは岩の上にちよこんと座る少女の顔を見つめながら、一步、二歩と、後ずさり始める。

少しずつ遠くなっていく少女。

心のどこかにある、この場を去り難い気持ちをどうにかねじ伏せて、シンジは踵を返し、走り始めようとして。

「碇くん……」

再び少女のか細い声に呼び止められる。

振り返ると、岩に座っていたはずの少女が、立ち上がっていた。痛めた左足を庇うように、少し右側に傾きながら。

「アヤナミ……」

すでに遠く離れてしまった。

少女の小さな顔はよく見えず、その表情をうかがい知ることにはできない。

「碇くん……」
空から鳴り響く爆音に掻き消されそうな、少女の小さな声。

「好きよ……、碇くん……」

シンジの耳には、空から轟く爆音も、地表を撫でる風の音をも消え去り、その少女の声のみが響いた。

唐突なその言葉に、目をまん丸にしてしまうシンジ。

頬が硬直し、みるみるうちに赤くなる。

忘れていた息遣いを思い出したように、ふう、と深く息を吐いた。

やがてシンジは微笑んだ。

「うん、ありがとう…、アヤナミ…」

シンジの微笑みに誘われるように、少女も微笑む。

未だに頬を赤く染めたまま少女を見つめるシンジ。

その少女もまた、白磁のような頬を少しだけピンク色に染めている。

「またいつか。どこかで」

シンジのその言葉に、少女はほんの少しだけ間を置いて、やがてゆっくりと頷いた。

シンジは名残惜しそうに少女を見つめながら踵を返し、やがて少女に背を向け、走り出した。

数分ほど走って。

背後から空気の抜けるような音がし、振り返る。

空に向かって、眩い光を放つ火の球が、煙を引きながらぐんぐんと昇っている。おそろく、少女がネルフのV T O L機に向かって照明弾か何かを撃つたのだろう。

シンジは歯を食いしばってその煙に背を向け、懸命に走り続ける。

走って。走って。

走り続けて。

我武者羅に地面を蹴り続けていたシンジの足。

「アヤナミ」

その足が少しずつ遅くなっていき、

「アヤナミ……」

やがてその足は止まり。

「あやなみ……」

立ち止まったシンジは後ろを振り返った。

「綾波……？」

再びシンジは走り始める。

引き返し、あの岩場に戻るために、走り出す。

「綾波……綾波……綾波……！」

両腕を強く振って。

大地を思い切り蹴って。

時折地上に突き出た小さな岩に足を取られるのも構わず。

必死に走り続けて。

目の前に地面に広がる白いパラシュートが見えて。

「綾波!!」

平べったい岩があった。

少女がベンチ替わりに腰かけていた岩。

あの少女がちよこんと座っているはずの岩。

しかしその岩の上には人の影はなく。

携帯音楽プレイヤーがぼつんと置かれているだけ。

遠くの空には、こちらにお尻を向けて飛び去っていくVTOL機。

シンジは岩の上に残された携帯音楽プレイヤーを拾い上げる。

「綾波……」

彼女の名前を呟きながらしばしの間プレイヤーを見つめ、そしてVTOL機が去っていった空を見上げた。

バッグのファスナーを開け、プレイヤーを大事そうに中に収める。

VTOL機が去っていった空に背を向け、シンジは歩き始めた。

◇ ◇ ◇ ◇

緩やかな斜面を下り、ようやく下界へと降り立つ。

とはいえ景色の変化は乏しく、岩がごろごろ転がった荒野が続いている。

台地から降りたところで遭難2日目の夜を迎えたシンジは、アルミシートに包まって一夜を明かした。

人肌のない夜が、こんなにも寒いだなんて。

アルミシートの中で震えるシンジは、堪らず意味もなく電池残量が少ないランタンを

点す。そしてバッグの中から携帯音楽プレイヤーを取り出し、イヤフォンを耳に入れ、再生ボタンを押した。

イヤフォンから流れてくる、もはや聴き飽きた音楽を聴きながら、手の中のプレイヤーを見つめる。

「綾波…」

このプレイヤーを自分の手もとに届けてくれた少女の名を呟いた。

プレイヤーは全ての曲を再生し終えたら、勝手にテープを巻き戻し、冒頭から再生を始める。

もはや聴き飽きたはずなのに、どこかいつもと違うように聴こえる音楽に耳を傾けながら、シンジは眠れない夜を明かすのだった。



荒野をとぼとぼと歩き続ける。

時折立ち止まり、少女から渡された通信機に語り掛ける。

「誰か…。誰か居ませんか…」

通信機の側面のスイッチから手を離すと、スピーカーから聴こえるのはノイズのみ。

あの少女が手にしていた時にはまるで何でも出てくる魔法のポケットのようだったバッグ。しかし今は中身にあるのは音楽プレイヤーとアルミシートだけ。食糧は食べつくし、空になったペットボトルは風に飛ばされてどこかに行ってしまった。

凍えるような寒さだった夜とは打って変わって、昼間の大地の上は灼熱と化す。

視界が霞み、大地を踏む足にも力が入らない。

通信機のマイクを口に近づける。

もう半分諦めの境地に達しながらも、今日20回目のコール。

「誰か聴いていませんか……。こちら……。碇シンジです……。アスカ……。ミサトさん……。誰か……」

スイッチを離す。

スピーカーから聴こえるのは、ノイズのみ。

堪らず、通信機を地面に投げ付けようとして。

『……ばれて……。飛び出て……。ジャジャジャジャーン！』

こちらの切迫した状況とは真逆のような、バカみたいに明るい声がスピーカーから鳴り響いた。

シンジは思わず両手で通信機を握り締める。

「誰!? 誰ですか!」

『ワンコくくん。元氣してた〜?』

「え? 誰?」

『あたしだよ! あたし!』

「だから誰?」

『も〜つれないな〜。マリだよ。真希波マリっちでーす』

「ごめんなさい。誰?」

突如、背後からの激しい地響きと突風に襲われ、シンジは前のめりに地面に倒れてしまった。

地面にしたたかに打った鼻を抑えながら、後ろを振り返る。

『もー! 屋上であたしのおっぱい揉んだの忘れちゃった〜?』

八つ目の巨人が、意味不明なことを言いながら立っていた。

第貳拾話

巨大な球体が中央に陣取る大きな部屋。球体が放つ赤い光に照らされて浮かび上がる、球体を囲むように配置された様々な機器。

その機器と球体との間に床に、円筒形のカプセルが寝かされている。

カプセルの上部は中身が覗けるように窓ガラスになっており、そこから一人の少女の顔が見えた。

その少女の顔を覗き込み、様子を観察している3人の女性。

「自発呼吸あり。角膜反射あり。痛みに対して屈曲反応あるも開眼なし。バイタルは全て正常値」

伊吹マヤは手もとの端末機の画面とガラスの向こうの少女の顔とを交互に見つめながら、この場の責任者、赤木リツコに報告する。リツコは「そう」とだけ返事し、自身を持つ端末機の画面に次々と流れ込んでくる情報に神経を集中させている。

カプセルの頭部側に立ち、少女の顔を逆さから覗き込むのは葛城ミサト。

「目覚めそうなの？」

顔は少女に向けたまま、視線だけをマヤに向ける。

「意識レベルは1時間前に比べて明らかに上昇しています。もう少し時間が経てば……」

視線をリツコへと移す。

「綾波レイ」…、なのよね？」

「さあ」

リツコは端末機の画面に視線を落としたまま、肩を竦める。

「さあつて、あんた……」

呆れたようなミサトの声。

「今の私たちに確かめる術はないわよ。意識が戻ったら訊いてみればいいじゃない。

「あなたは綾波レイか？」って」

「テキトーね……」

ミサトは胸の前で組んでいた両腕を解き、腰に手を当てて溜息を吐いた。

「綾波レイ」のサルベージは初号機に残された「不純物」除去のための手段であつて、目的じゃないわ。そして、我々の目的は達成された」

そう言つて、リツコは自身が持つ端末機の画面を、ミサトに見せる。

「これ……」

ミサトは端末機が映し出す情報を目にし、息を呑む。

「ええ。初号機からヴァンダーに供給されるエネルギーは、サルベージ終了からの5時間で50%の上昇が見られ、今もその数値は上がり続けている。これだったら…」

リツコの説明の途中に突如、球体が漏らす赤い光で満たされていた室内が、白色の照明に照らされた。続けて艦内放送用のスピーカーから男性の声。

『全乗組員に通達。現時点を以て、節電要請は終了します』

「明るいつて、素晴らしいことですね」

天井から注がる蛍光色の光を眩しそうに見上げながらマヤが言う。

「マヤもだいぶ小じわが目立つようになったわね」

「なっ」

慌てて端末を日傘代わりにする部下を他所に、リツコは続ける。

「これなら全兵装の同時運用も可能。ヴァンダーの力の全てを引き出すには十分過ぎる供給量よ」

「初号機の桁外れのパワーは健在ってことか…。まかさ覚醒状態という訳ではないんでしょうね？」

「覚醒してたら私たちは生きてはいないわ」

「あっ！」

2人の話しに割り込むように、マヤが驚きの声を出す。

「なに?」

「対象の目が…」

リツコはすぐにカプセルのガラス面を覗き込む。

一方でミサトはカプセルから半歩遠ざかり、腰のホルスターから拳銃を引き抜くと、銃口の狙いをカプセルの中の少女の額に定めた。それは初号機から碇シンジを排出させた時と同様の対応であるため、リツコもマヤも驚かない。

3人の女性の視線の先では、瞬きもせず天井を見上げている少女。

リツコが指でこんこんとガラス面を叩く。

少女は瞼を下ろす。次に瞼が開いた時、その向こうに収まっていた紅玉の瞳は、ガラス面を叩いたリツコの方に向けられていた。

「聴覚、視覚に対する反応あり」

マヤの動く口に反応したのか、今度は少女の瞳がマヤへと向けられる。ガラスの向こうからじつと向けられるその眼差しに、どこか居心地の悪さを感じてしまうマヤ。観察をしているのはこちらの方なのに、少女から向けられるその眼差しは観察者と被観察者の立場を逆転させられてしまったような感覚に陥る。

リツコはカプセルの側面にあるスイッチを押した。

「私の声が聴こえる?」

その問い掛けに、少女は意識的な瞬きをする。それをYesと受け取ったリツコ。

「言葉の理解あり」

マヤは端末機に少女の観察記録を打ち込んでいく。

「声は出せる?」

リツコに言われ、カプセルの中の少女は口を開けた。小さな口を、ぱくぱくと開閉させる。

しかしその口が、音を奏でることはなかった。

「現時点での発声は不可」

「自分が誰か、分かる?」

リツコに問われ、少女の目はしばらく質問者の顔をぼんやりと見つめていた。そして両手を顔の側まで寄せると、その手のひらを見つめる。右手、左手、交互に、ゆっくりと。そして手から視線を外し、再び質問者の顔を見つめた。

「リツコ…」

その様子を見ていたミスアトは、拳銃は構えたまままでリツコに状況の説明を求める

「サルベージの直後だもの。人格の定着がまだ出来てないのかもね」

「時間を置けば定着するの?」

「さあ」

ミサトの質問に対しては曖昧に答え、リツコはカプセルの中の少女の観察を続ける。再びカプセル側面のスイッチを押した。

「葛城ミサト」

「なに？」

リツコに名前を呼ばれ、返事するミサト。

「あなたを呼んだんじゃないわ。赤木リツコ、伊吹マヤ、日向マコト、青葉シゲル……」

次々ところの艦の乗組員の名前を読み上げていくリツコ。

「式波アスカ・ラングレー、真希波マリ・イラストリアス」

リツコが読み上げる名前は艦の乗組員からエヴァアのパイロットへと移り。

「碓ゲンドウ、冬月コウゾウ……」

敵対組織の人物名へと移り。

「綾波レイ……」

「碓シンジ……」

ドン！

驚いてしまったリツコは思わず尻餅を付いてしまった。リツコが最後に口にした名前。

それを聴いた途端、カプセルの中の少女の両手がガラス面に貼り付いていた。指と指との間には、両目をおかつと見開いた少女の顔。

拳銃を構えたミスアトはその銃口をガラス面に突き付ける。

「大丈夫よ、ミスアト」

今にも引き金を引いてしまいそうなミスアトを、リツコは痛めたお尻を撫でながら諫めた。

「対象は自己認識すらまだできていないようだけれど、少なくとも私たちとで「碇シンジ」という共通認識を見出すことが出来たわ。これは大きな一歩よ」

何故か笑顔のリツコ。

「なにファーストコンタクトを楽しんでるのよ。結局のところ、これは「綾波レイ」なの？」

「結論を出すには判断材料が少な過ぎるわね」

「でも、もしこれが「レイ」だったとしたら……」

2人の会話にマヤが割って入る。何故か瞳を潤ませながら。

「自分のことを忘れてまでもシンジくんのことを想ってるってことですよね」

「はあ」

「愛、ですね！」

リツコは呆れたように溜息を吐く。

「40間近の少女趣味は痛いを通り越して惨めよ」

「なっ」

上司の辛辣な指摘に絶句するマヤである。

「どうする。このまま隔離を続ける？」

リツコはミサトに問う。

「危険はないの？」

「今のところ艦にとっての脅威となりうるデータは一つもないわね」

「そう……」

ミサトは構えていた拳銃をホルスターに収めると、腕組みをした。

暫し考えた後。

「カプセルを隣の格納庫に移動させましょう。そこで対象をカプセルから解放。ただし、格納庫内での隔離は継続とします」

サルベージ実験は艦内乗組員の殆どに秘匿したままで行われていた。実験に立ち

会ったのはこの艦における最高の頭脳を持ち主である2人の女性科学者と、最高司令官である女性艦長。立ち会った人物のうち一番の力持ちのパイロットは実験途中で何処かに行つてしまい、一番若い女性医官はパイロットに実験終了の報告に行つてしまった。つまり、ケイ素樹脂と炭素繊維と強化ガラスと金属の塊である重い重いカプセルを、決して若いとは言えない女性3人が、うんせうんせと汗水垂らしながら運ばなければならなかった。

カプセルを機関室の隣の資材置き場となつている格納庫へと移動させている途中で、ミサトの首に掛けていた艦内通話用のインターカムからコールが鳴った。ちよつと一息とばかりにミサトたちは足を止め、ミサトはヘッドセットを頭に掛ける。

「こちら、艦長です」

『日向です。地上哨戒中の8号機より入電です』

「内容は？」

『それが、艦長と直接話したい、と』

「なぜ？」

『さあ、僕に聞かれても…』

「いいわ、繋げて」

疲れてぐったりとカプセルに寄り掛かっているリツコとマヤの視線の先で、ミサトが

ヘッドセットを通じて誰かと話している。

そのミスアトが突然、

「え！ 本当に！」

大声を上げた。

大声を上げたつきり、固まってしまっているミスアト。

「艦長……？」

そんなミスアトの背中に、マヤが恐る恐る声を掛ける。

ミスアトは頭からヘッドセットを外すと、ゆつくりと2人の方に振り返った。

「シンジ……くんが……」

「え？」

「シンジ……くんが……、生きてたって……」

その言葉を口にした途端、小じわが増えたミスアトの顔がたちまちしわくちゃになり、目尻から大粒の涙を零し始めた。

「艦長……」

久しく見る事のなかったミスアトのそんな反応に、マヤも思わず目を潤ませる。

「もう……、鬼の葛城艦長がみつともない……」

そう呟き、呆れたようにこめかみを押さえるリツコも、口もとは微かに柔らかな笑み

を浮かべていた。

リツコが肘を掛けていているカプセルのガラスの向こうで、少女は手の平と額をガラスにくっ付けながら、泣いているミサトの顔をじっと見つめている。



「それで、連れて帰ってもよいのかな。姫の時みたいに着いた瞬間、バンってのはなしですよ」

真希波マリは宇宙空間の中に居た。

彼女が身を置くのはエヴァ8号機のエントリープラグ。エントリープラグの壁が映し出す映像上の宇宙の中で、マリは操縦席にだらしなく寝そべり、ソフトドリンクが入ったボトルのストローを加えながら、母艦との交信を続けていた。

「ほんとですか？ 最近の艦長はにやんだか情緒不安定だからなく。コウネンキつてやつですかあ？」

スピーカーの向こうで交信相手がわあわあ喚いている。

「じよーだんですよー。で？ 着艦許可は貰えるんですか？ え？ 5番デッキへ？ なしてあんな辛気臭いところに。あゝ、あんまし人目に付かない方がいいから、つてこと

「ですね。りよーかいです」

交信を終えようとして。

「あ、そうだ！」

何かを思い出したようなマリの声。

「姫にはまだ内緒にしといてくださいよ。へ？ なぜって、そりやああたしが姫のサブライズの瞬間を見たいからに決まってるでしょーに」

激しい揺れと強力な重力に支配されていた時間が終わり、座席から体がふわっと浮き上がる。

「宇宙に…来たんだ…」

壁付けにされた座席の対面にある小さな窓ガラスが濃紺に染まっていた。

シンジは8号機の腹部にある小さな格納庫に乗せられていた。

格納庫の天井にあるスピーカーからマリの声がする。

『ワンコくん、だいじょーぶ？ 酔ってない？』

「あ、はい、大丈夫です…。ってか、その、：ワンコくんって呼ぶの、やめてもらえません？。」

『いいじゃんいいじゃん、かわいいいいじゃん』

「可愛いって…、ああ、それと」

『なんだい？』

「アスカは本当に無事なんですよね？」

『無事ってゆったじゃん。信用ないな〜』

「そう…ですか…」

今日何度目かの質問に対し、同じ返答を繰り返す相手。ようやくシンジの顔からは緊張感が抜け、心の底から安堵したように深く息を吐く。

しかし息を吐ききった次の瞬間には、シンジの顔は険しくなっていた。

「あの…」

『なんじゃらほい？』

「アスカは、その…、女の子と一緒にだったはずですけど…」

『ああ、あれね〜』

「あれ」って…。その子は…？」

『ワンコくんの遺言通りにしたよ』

「遺言って…。僕、まだ生きてますけど…」

『姫がそう言ったのよ。もう泣きながらね〜』

「アスカが…」

『そつ。可愛かったなく、あん時の姫。あの意地つ張りを泣かしちやうなんて、憎いねコノコノオ』

「はあ…」

『サルベージは成功したよ』

マリは抑揚のない声で、シンジが求めていた情報を簡潔に伝えた。

「え…?」

その唐突な報告に、シンジはぼかんと固まってしまふ。

『ワンコくんの希望通り、「綾波レイ」は、あのコの中に入ったってこと』

「そう…、なんですか…」

シンジの声の尾っぽが、少しずつ下がっていく。

『あれあれ? 何だか嬉しそうじゃにやいな〜』

「え? そんなことないですよ」

『ほんとにく〜?』

「はい。ありがとうございます。僕の無理を聞いてくれて」

『ふーん。まあいいけど。じゃあヴンダーに戻るから。もう少しそこで我慢しててね〜』

「分かりました」

小さな格納庫で一人ぼっちのシンジ。

じつと、正面にある小さな丸い窓を見つめる。

宇宙を映し出す丸い窓の中に、あの岩場で別れた、黒いスーツの少女の顔が浮かんだ。

第貳拾壹話

小さな格納庫の扉が開くと、そこにはミサトが立っていた。

最後に別れた時と同じ。必死の制止にも耳を貸さずネルフのエヴァに自ら攫われていったシンジを、首輪爆破用のコントローラーを握りながら睨んでいた、あの時と同じように厳しい表情のまま。

「シンジくん……」

「ミサトさん……」

表情と同様の険しい声音に、シンジは気圧されたような弱々しい声で返事する。

ミサトの背後では、つい数分前までおいおい泣いていたミサトを知っているリツコとマヤが必死に笑いを堪えている姿があるが、残念ながらシンジの位置からは見えていなかった。

お互い切り出し方を見いだせず、黙って見つめ合うだけのかつての保護者と被保護者。

「どうだった…?」

最初に口を開いたのはミサトの方だった。

抽象的なミサトの問い掛け。

それでも、シンジはミサトが自分に何を問うているのか、すぐに理解できた。

シンジははつきりと頷く

「僕が、したこと…。してしまったことを、…見てきました」

「そう…」

「新しい、…過ちも…、犯しました…」

「そう…」

シンジは辛そうにミサトから視線を外し、床を睨む。

「今更僕が何をしたところで、僕の罪が贖われないことは分かっています…」

「そうね…」

「でも…、僕は決めたんです…」

再び視線をミサトに向ける。

「もう一度、僕をエヴァに乗せて下さい」

暫くシンジの顔を見据えていたミサト。

シンジは視線を外さない。

静かに、真正面からミサトの視線を受け止めている。

先に視線を逸らしたのはミサトの方だった。

ふう、と溜息を吐く。

「あなたをエヴァに乗せることは許可できません」

そのミサトの返答に、シンジは両拳を握り締め、奥歯を噛み締める。

「ミサトさん…」

ミサトはシンジに背を向けた。

「今はまだ、ね…」

「え？」

「副長」

「はい」

ミサトに呼ばれ、リッコは仰々しく背筋を伸ばす。

「碇シンジの艦への滞在は許可します。制限区域内では、一定の自由を与えてよろしい」

「分かりました」

敬礼するリッコの前を、ミサトはコツコツと足音を立てながら通り過ぎる。

リッコの隣ではマヤが口に手を当てながらクスクスと笑っている。リッコも敬礼を

維持したまま「素直じゃないわね」と呟いている。

「そう言えば…」

あることを思い出し、ミサトは足を止めてシンジに降り返った。

「サルベージの結果。訊かないのね」

そのミサトの言葉に、シンジの顔に再び緊張が宿る。

「…あの真希波さんって人から聞きました」

「…そう」

どこか暗いシンジの声。もっと違う反応を予想していたミサト、そしてリツコとマヤは、俯いているシンジの顔を意外そうに見た。

「シンジくん。アスカが持ち帰った綾波タイプの素体。確かに我々は初号機からその素体へのサルベージには成功しました」

「…はい」

リツコが念を押すように付け加えた説明に対しても、シンジは何処か上の空で返事をする。

少しの間、沈黙が続いて。

「ミサトさん」

シンジは決心でもしたかのように顔を上げ、ミサトを見つめる。

「綾波に……会えますか？」

シンジのその申し出に、リツコとミサトは目を合わせる。

彼と彼女の邂逅。

それは、ミサトらの頭に14年前の悪夢を去来させるものだった。

「リツコ……」

ミサトはリツコに意見を求める。

「2人が会ったところで、破滅に直結するとは考えづらけれど……」

「そうよ……ね……」

そう呟き、ミサトは微かに口角を上げる。

少年と少女が顔を合わせる程度で起こる危機とは何だ。必要以上に憶病になってし

まっている自分たちに、ミサトは密かに笑ってしまった。

「いいでしょう……」

ミサトの言葉に、シンジは深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

「でもシンジくん」

やや低めの声がりツコから飛んでくる。

「先に言っておくけど。素体はまだ自己認識すらできていない、言葉すら喋れていない。新しい肉体に人格が定着し切っていない状況よ。それでも会いたい？」

そのリツコの問いに、シンジはやや間を置いた後、こくりと頷いた。

「はい。お願いします」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

鈴原サクラは機関部隣の格納庫で、たった一人で「それ」と対峙していた。

自分から動こうとしない「それ」をマヤと2人でカプセルの中から引きずり出し、簡素なパイプ椅子に座らせる。そこまで終えて、ミスト、リツコ、マヤの3人は所用が出来たとこの格納庫から出て行ってしまった。

「それ」と2人きりになってしまったサクラ。ミストから命令された通り、椅子にちよこんと座った「それ」からLCDで濡れた検査衣を脱がすと、タオルで体を拭いてやる。サルベージ前の「それ」は服を脱がすのも体を洗ってやるのも一苦労だったが、目の前の「それ」は髪をわしゃわしゃと拭いている間も抵抗なし。洗濯した学校の制服であるブラウスを着せ、スカートを履かせ、髪を軽く梳かし、最後に襟もとに赤いリボンタイを結ぶ。

服を着せている間、「それ」の目は一度も瞬きをせず、ずっとサクラの動きを追っていた。

何だか観察されているようで、居心地の悪さを感じてしまう。

ようやく服を整え終えた「それ」を、真正面から見つめる。

服を着せ終えられた「それ」は、まるでサクラに対する興味を失ってしまったかのよう
うに、ぼんやりと虚空を見つめている。

「綾波……レイ……さん」

呼びかけてみる。

その呼び掛けに対する「それ」の反応はなく、ただぼんやりと、正面に立つサクラの
足もとを見つめている。

「鈴原……トウジ……」

兄の名を呟いてみる。

その呟きに対する「それ」の反応はない。

「碓……シンジ……」

途端に「それ」の頭部が動き、その音を発したサクラの顔を開いた瞳孔で見つめる。

「ははっ……」

サクラの口から漏れる乾いた笑い声。

「何よ…、それ…」

目を伏せ、下唇を噛み締める。

「何もかも…、自分のことすら忘れてるくせに…。自分がしてしまったことも…、忘れてるくせに…」

サクラが押し殺した声で呪詛のような言葉を吐いている内に、「それ」の目は再びサクラから離れ、そして何も無い床の上をぼんやりと見つめ始める。

もし、背後で扉の開く音がしなければ、サクラは目の前に座る「それ」の頬に、平手打ちくらいはしていたかも知れない。



式波・アスカ・ラングレーは数カ月ぶりに取得した休暇を、カプセル式の簡易ベッドの中で過ごしていた。

戦闘に特化した船とは言え、艦内には長期の任務に就く乗組員の精神衛生を考慮して、それなりの福利施設が揃っている。前回の休暇ではサクラやオペレーターや整備班の女の子たちを誘って、カラオケルームで一晩中マイクに向かって吠えまくったものだが、今回の休暇は何処に繰り出す気にもなれない。

「あたし…、何のために戦ってるんだろ…」

幼い頃から持ち続けている唯一の私物。母親が作ってくれたパペット人形に向かって話しかける。

「あいつ」の姿が空の彼方に消えて。

「あのコ」の笑顔がガラスの向こうに消えて。

戦って戦って、ひたすら戦い続けても、得るものはなく、失うものだけが増えていく。「あたし…、もうエヴァに乗るの…、やめよっかな…」

パイロットになって以来、一度も、心の片隅にすら思ったことがなかったことを、眩いた。

カプセルの壁に設置された受話器から呼び出し音。

こちらら休暇中だ。

無視してやろうと思った。

手に持っていたパペット人形を枕元に投げ、ふて寝を決め込む。

鳴り止まない呼び出し音。

頭に枕を被る。

鳴り止まない呼び出し音。

「ああもう！」

アスカは悪態を吐きながらそのすらりとした足を壁に向けて伸ばし、足の親指と人差し指で器用に受話器を挟み、摘み上げた受話器を自分の耳もとへと近づける。

「何よ！ 休暇中だってゆってんでしょ！」

『ひめー』

アスカの不機嫌満載な声などものともせず、スピーカーの向こうからは陽気な声。

「マリ！ 何の用よ！」

『あれあれ、姫ちゃん、ご機嫌斜めかな？』

「当たり前でしょうが！ あたしは休暇中よ！ ちつとは氣い遣いなさいよ！」

『えくく、でも』

「何よ！ 用事があるんならさっさと言いなさい！」

『えー、そんなー。そんな怖い声だと、マリ、震えて何も言えな〜い』

「ふ・ぎ・け・ん・な！ 切るわよ！」

『あれれ、いいのかな？ そんな態度で〜』

「切るわ」

『せつかくワンコくん、拾ってやってきたのに〜』

「ああそう、良かったわね。じゃあね」

『……』

『……』

『……』

『……』

『……』

「……今、なんつった？」

『じゃあ切るね。ゆつくり休んでいってね？』

「おいこら!! コネメガネ!! 今、なんてゆった!!」

『おやすみい』

「マリーーーー!!」

『ああ、それから、ワンコくん、今、あのコに会いに行ってるよ。いいのかなり、姫はそんな所で寝てて。早く行かないと、ワンコくんとあの子が先にランデブーだよお』

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『くそめがねえええええ!!』

何やら叫んでいる受話器をそっとフックに戻す。

戻した途端、

「きやははははははは！」

笑い転げるマリである。メガネの隙間から指を滑り込ませ、目じりに浮かんだ涙を拭く。

「もう姫サイッコー。受けるー。期待以上の反応だよ。あつ」

マリの視線の先。廊下の奥の扉が開き、ミサトを先頭にリッコ、マヤ、そしてシンジが入ってきた。

「あちゃ、もう来ちゃったか。これじゃあ姫、間に合わないじゃん。いや……」

マリの口の端が意地悪そうに吊り上がる。

「ワンコくとあのコの涙の再会の真ただ中に、姫乱入。これは盛り上がるわよー」

「マリ、あなたこんな所でなに油売ってるの」

「ひ、酷いです艦長。あのコもワンコくんも連れてきたのあたしですよ。2人の感動の再会に立ち会えう権利くらいあると思うけどなあ」

腰をくねくねさせながら言うマリに、ミサトは肩を竦める。

「別にいいけど。ちなみに、今の電話。相手は誰？」

「へ？」

「シンジくんのことも、あの素体のことも。乗組員に対してはまだ秘密のはずよ。誰にも言つてないでしょうね？」

「も、も、も、もちろんですともお！」

「どうだか……」

マリに対する疑いの視線を残しつつ、ミサトは機関室隣の格納庫の扉の前に立った。壁にある、パスワード用テンキー付きの開閉スイッチに手を伸ばす。

ミサトの背中を眺めながら歩く。

この期に及んで、心の中に浮かぶのは、あの岩場で別れた黒いスーツの少女の顔。なぜ、あのコのことばかり考えてしまうのだろう。

なぜ、この足は、重たいのだろう。

「彼女」のサルベージを望んだのは、自分自身なのに。

本心では夢想事に過ぎないと思つていたことが、思いがけなく叶つたというのに。自分は何か、とんでもない過ちを犯しているのではないか。

世界と人類を滅ぼしかけて。

あの少年を死なせてしまつて。

今また、自分は何か、取り返しをつかないことを…。

「やつほ、ワンコくん」

気が付けば廊下の隅に真希波マリが立っていて、シンジに向かって手を振っている。

「愛しのお姫様とご対面だね…（その後は修羅場だね）（笑）」

「何言ってるんです…」

マリの冷やかしを無理に作った笑顔でかわす。

笑っていられる心境ではなかった。

先導していたミスアトが、格納庫へと続く最後の扉の前に立った。

ミスアトは手を伸ばし、扉の側の開閉スイッチを押す。

扉が右にスライドする。

この扉の向こうに居るといふ彼女。

「それ」は、本当に。

本当に自分が会いたかった彼女なのだろうか。

「どうしたの、シンジくん」

すでに開いた出入口の向こうへと足を踏み入れていたミスアトが、出入口の前で立った

ままだ動こうとしないシンジを訝し気に見た。

「…あ、いや…」

ミサトの視線に促され、シンジは格納庫の中へと一步踏み入れる。

普段は資材置き場として使われている格納庫。廊下や居住区とは違い、空調設備は整っていないように、入った瞬間に空気の淀みを感じた。

灯りは最低限の照明のみ。

その照明が照らす真下。

ぽつんと置かれたパイプ椅子。

その椅子に座る、空色髪の少女。

背後で扉が開く音に、もう少して「それ」の胸倉を掴んでしまえばよかったサクラは咄嗟に我に返ると、慌てて「それ」の前から離れた。入ってきたのがミサトであったと分かり、すぐに背筋を伸ばして敬礼する。

「何か変わったことは？」

サクラは首を横に振る。

「特に何も。こちらかの呼び掛けには殆ど無視です。いかり…」

「「碇シンジ」という名前以外は」と言いかけて、サクラは言葉を飲み込む。

ミサトの背後に立つ、碇シンジの姿を認めて。

「え？ これ…、どーゆうことですか？」

サクラは目を点にする。

何故彼がここに居るのか。

彼は、自らの意思でヴィレから去ったのではないのか。

「込み入ってるのよ。悪いけど、他の乗組員にはこれで」

ミサトは自分の口にぴんと伸ばした人差し指を当てた。

「そん…」

上官に対して何か言い返そうとして。

再びサクラは言葉を飲み込む。

サクラのすぐ側を、誰かが音もなく通り過ぎたのだ。

それはあつという間の出来事だった。

カプセルの中から引きずり出した時も、制服を着せている時も、瞼と眼球以外の随意的な動きは殆ど見せなかった空色髪の少女。

その少女が予備動作もなくすつと椅子から立ち上がり、歩き始めた。

すぐ側に立つサクラも、「目的地」との間に立つミサトも、「目的地」の後ろに立つリツコやマヤ、マリの存在も全て無視して、まっすぐに、碇シンジのもとへと歩いていく。

「あや……」

彼が彼女の名前を呼ぼうとした時には、すでに彼女は彼の目の前に来ていた。

そして。

サクラは眉を顰めて。

ミサトは不測の事態に備えてそつとホルスターの拳銃に手を伸ばして。

リツコは研究対象を観察するような冷たい眼差しで。

マヤは頬を染め、目を潤ませて。

彼女らが見つめるその先で、少女は少年の体をその細い真つ白な腕で抱き締めていた。

両腕ごと少女の細腕に束縛されてしまったシンジ。

身動きが取れず、かと言って抗う訳にもいかず、顔中の表情筋を強張らせて固まってしまうっている。

「……シン……ジ……」

少女はシンジの胸に顔を埋めたまま、少年の名前を呟いた。

サルベージ後に少女が言葉を発するのは初めてのことだった。

「その子が誰か、分かるわね？」

ミサトが少女に話しかける。少女はシンジの胸に顔半分を埋めたまま、残りの顔半分にある目でミサトを見た。

微かに頷く。

「その子の名前は？」

ミサトは続けて問う。

少女は唇を僅かに動かして。

「…シン…シン…」

自分が今抱き締めている少年の名前を呼んだ。

長い眠りの魔法から目覚めたお姫様が、現れた王子様に熱烈な抱擁をする。

少女時代に腐るほど読んだファンシー小説や漫画で見た、そのまんまの光景が目の前で繰り広げられていて、年齢38のマヤの心は思わずときめいてしまった。

少年少女のいじらしくも睦まじい姿に心がふわふわしてしまい、赤くなってしまった自身の両頬を両手で挟み込む。

「良かったわね…、レイ…、シンジくん…」

戦いに明け暮れた14年間で久しくなかった、一服の清涼剤のようなひと時に酔いしれるマヤは、2人に惜しみのない祝福の言葉を送った。

そんな頭の中がお花畑状態のマヤの隣に立つ女性。

ピンク色のプラグスーツを身に纏った女性。

真希波マリ。

正直なところ、2人の涙の再会など、彼女にとつてはどうでもよいことだった。

そんなことよりも、この後乱入してくるはずの赤毛の彼女の登場が待ち遠しくて仕方がない。

バカみたいに大きな艦だから、居住区からこの第5格納庫まで来るにはそれなりの時間が掛かる。とはいえ、そこはあの赤毛の彼女のことだ。あの電話での様子だと、自分の予想を遥かに上回る早さでこの場に姿を現すに違いなかった。

うきうきそわそわしながら出入口の方を見つめていたら。

背後で少年の名を呼ぶ、小鳥の囀りのような細かい声があった。

振り返り、声があった方を見る。

見ると、最後に見た時にはパイプ椅子に座っていたはずの少女が、今は立ち上がっていて少年のもとまで行き、その体を抱擁していた。

マリの掛けたメガネの奥にある青い瞳。

その瞳が、かっと見開かれる。

両肩から垂れる腕の先が、小刻みに戦慄ないた。

彼女の目に映るもの。

抱き締めた少年の胸に顔をうずめた、少女の空色の髪。

「それでは……」

ミサトは少女への質問を続ける。

「あなたは……」

まるで心臓の音に耳を傾けているかのように、シンジの胸に顔半分を押し付け、目を閉じていた少女。

ゆっくりと瞼を開けて、赤い瞳をミサトへと向ける。

「あなたは、誰……?」

お花畑から少しずつ現実世界に戻ってきたマヤ。

ようやく、隣に立つマリの異変に気付く。

いつも飄々として、掴みどころがなく、どんな危機にも動じることなく常にあっけ

らかなとしている、そんな態度にどこか頼もしささえ感じる、真希波マリ。

その彼女が、王子様とお姫様を見開いた目で凝視し、口はだらしなく半開きとなり、肩から手までが激しく震えている。

「どうしたの？」

明らかに普通でない様子のマリに、マヤは心配そうに声を掛ける。

マリは視線の先の少年少女を凝視したままで、マヤの呼び掛けにも気付いていない様子だ。

「……どうして……」

マヤは独り言のようにぼそりと呟く。

「……どうして……、……あいつから……、「あの人」の匂い……が……」

何かがおかしい。

ふらふらと、こちらに歩み寄ってくる彼女を見ての、第一印象がそれだった。

それは見まごう事なき、彼女の姿。この世界で言うところの14年前と、寸分違わぬ姿で立つ彼女の姿。

当然だ。彼女は、「彼女」と全く同じ遺伝子を持つ複製体なのだから。

ではこの胸に抱く違和感の正体は一体何なのか。
気が付けば、彼女は目の前に立っていた。

その彼女に、両腕ごと抱き締められる。

彼女の肌と直に触れ合うのはこれが2度目。

久しぶりに彼女と直に触れ合う。本物の肌。本物の髪。

久しぶりのはずなのに、強烈に感じてしまう違和感。

「…シン…シン…」

自分の胸に顔をうずめたまま、自分の名を奏でる彼女の声。

知っている声。

それは間違いなく彼女の声。

それでも。

それは紛れもなく自分の名前なのに、まるで知らない国の知らない言葉で語られてい
るような、自分の名前。
誰だ。

誰だ。

コレは一体、誰だ。

「あなたは、誰…?」

顔つきが変わったような気がした。

サルベージは成功したはずなのに、どこか魂の抜け殻のようだった少女の顔。どこかどう変わったのか。

その変化を明確に説明することはできないけれど、ミストにはそう見えた。その体に、たった今、人格が宿ったかのように。

あなたは誰。

そう問うた途端、少女の顔つきは変わったのだ。

殆ど、本能で、ミストはホルスターから拳銃を抜いていた。

第貳拾貳話

「碇シンジ!! 今すぐそいつから離れなさい!!」

バン!!

マリが怒鳴ったのと、ミサトが拳銃の引き金を引いたのは殆ど同時だった。

次の瞬間、その場に居た全員が我が目を疑った。

ミサトが狙いを付けた拳銃。

銃口から放たれた円錐形の銃弾。

銃弾の先には空色髪の少女の額。

銃弾は、少女の額の1センチ前で、止まっていたのだ。

硝煙を纏ったまま、空中で静止している銃弾。

あと1センチでその額を貫いていたはずの銃弾。

それを、少女は顔色一つ変えず、目を寄せて見つめている。

少女は一度だけ瞬きをした。

それがまるで合図だったかのように、銃弾はまるで見えない指にでも操られているかのように、くるりと半回転。

その向かう先を180度変えた銃弾。

ふつと、その姿を消した。

「あ、う!!」

皆の前から銃弾が消えたと同時に、濁った悲鳴。

人の倒れる音。

悲鳴を上げ、床に倒れたのはミサトだった。

「ミサトさん!」

サクラが悲鳴のような声を上げながら、倒れたミサトのもとに駆け寄る。

ミサトは苦悶の表情を浮かべ、左腕を抱えている。その左袖はまるで銃弾でも掠めたかのように切り裂かれ、その下の肉は削り取られ、傷口からは大量の血を溢れ出させている。サクラはすぐにポケットから取り出したハンカチをミサトの傷口に縛り付けた。

「わああああ!?!」

ミサトの応急処置をするサクラの背後から上がったのは、シンジの悲鳴。

振り返ったサクラはまたもや目を疑うことになる。

少女に抱き締められていたシンジ。

少女の胸と、シンジの胸。

少女の腹と、シンジの腹。

少女の腕と、シンジの腕。

少女の手と、シンジの背中。

少女の体と、シンジの体との境目が、無くなっている。

少女の体と、シンジの体が融合を始めている。

少女の体が、シンジの体を吸収し始めている。

少女の体が、シンジの体を喰っている。

「ワンコお!!」

マリは叫んだ。

叫んで、シンジを抱き締める少女に向かって突進した。

他にもっと良い方法があったかも知れないが。科学の最先端に行くエヴァンゲリオンのパイロットでありながら、頭が沸騰していたマリがこの場で唯一選べた行動が、突進という非常に原始的な手段だった。

少女に向かって、肩から突進する。

少女の細い肩に突っ込んで、シンジの体から引き離そうとした。
しかし。

「ガッ!？」

マリの悲鳴。

横から飛んできた何かによって、マリの体は横に吹っ飛んでしまう。

床に転がるマリの体。そのマリの側に、マリの体を吹き飛ばした資材置き場備え付けの大型ハンマーが、重い音を立てて転がっていく。

ハンマーの先端が直撃した脇腹を抑え、床の上で身悶えしながら、自分の側に転がったハンマーを見る。自分を襲ったハンマーを投げたのは誰か。考えなくても分かった。今もシンジの体を両腕で抱き締め、その体を喰っている少女を睨み付ける。

少女も、床に倒れているマリを見下ろす。

少女が口を開く。

それは少女の口から発せられる、少年の名前以外の初めての言葉だった。

「あら…、マリ…。どうして…、ここに…?」

少女に名前を呼ばれ、マリは苦痛に顔を歪めながらも口の端を上げた。

「やあ、先輩。お久しぶりだにやあ…」

少女は涼やかな目でマリを見下ろす。

「マリ…、わたしになにかご用事…？ わたし…、今、あなたに構ってられないの…」
少女はマリから目を離し、目の前のシンジの顔を見つめる。

「やつと…、シンジを…、この手に…、抱き締めることが…、できたのだから…」

少女の表情は変わらない。その顔から表情筋というものが一切こそげ落ちたような顔。

少女の声音も変わらない。感情というものを一切感じさせない、平坦な声。

それでも、シンジを見つめる顔、シンジの名前を呼ぶ声は、どこか恍惚としと色が浮かんでいた。

軍人であるミサトとパイロットであるマリとは違い、技術者であるリツコとマヤは目の前で急転する事態に体を動かすことすら出来ていない。リツコはこの冷徹な科学者らしくなく、シンジを喰う少女の姿を驚愕と恐怖の表情で見つめている、ように見えるが、それは偽装であった。

リツコの両手はジャケットの両ポケットに突っ込まれたまま。

ポケットに隠れた右手。

その手に握られているもの。

少女の首に巻かれた、DSSチョーカーの起動コントローラー。

リツコは、コントローラーのスイッチを、指を掛けた。

「ぎゃっ!」

隣で上がったリツコの悲鳴に、本当に動けなくなっていたマヤはようやく首だけ動かせるようになり、すぐさまリツコの方を見た。

リツコが、小刻みに震えている自身の右手を見つめている。

「ひっ!」

今度はマヤが悲鳴を上げる番だった。

リツコの右手。

その5本の指。

それらが全て、第2関節の位置からバラバラの方向に曲がっていたのだ。

リツコの右ポケットから、DSSチョーカーの起動コントローラーが零れ、音を立てながら床に落ちた。

「そのあなた…」

自分に掛けられたその声に、リツコは激痛で顔中に脂汗を垂らしながら、声を発した少女を見た。

「久しぶりの…、親子の再会…、なんですもの…。水を…、差さないで…」

「…親子ですって…?」

「母さん…なの…?」

すぐ側から聴こえる声。

少女はすぐに腕の中のシンジの顔を見る。

「ええそうよ…。ええそうよ…。シンジ…」

表情も声音も一切変えず、唇だけを動かして声を発する少女。

しかしその声には、明らかな興奮が混じっていた。

「そんな…。どうして母さんが…」

シンジの顔に酷い困惑の表情が広がっていく。

「シンジ…。ここは騒がしいわ…。静かにさせるから…。ちよつと待っていて…」

「うそ…。何よ…。これ…!」

サクラは目を疑った。

少女の後ろに置かれていた大きなカプセルが、ゆつくりと宙に浮き始めたのだ。

カプセルだけでない。格納庫に置かれていたあらゆる資材が、宙に浮き始めている。

自分たちの足は、しっかりと床に付いている。艦の重力制御装置が停止した様子はない。

では、今日の前で起きている現象は一体何か。

分からなかったが、この現象を誰が引き起こしているのかくらいは、サクラにも分かった。

そして、宙に浮いた様々なこれらの物体が、自分たちに襲い掛かってくることも、サクラには予想できることだった。

「ミストさん!!」

その叫び声はシンジのものだった。

左腕の激痛と目の前の異様な光景に動けなくなっていたミストは、そのシンジの声でようやく呪縛から解き放たれる。

「ミストさん!あのドアは!」

シンジが睨む方向。

格納庫の奥にある、大きな鉄の扉。

「あれはエアロック…」

口走ってしまった後で、ミストは強く後悔する。

シンジは少女に抱き着かれ、浸食されてしまった体のうち、まだ満足に動かせる2本の足を懸命に動かしした。

少女を自分の体に引っ付かせたまま、大きな鉄の扉へと走り出す。

「ダメよ!シンジくん!」

シンジはミサトの制止に耳を貸さず、扉の横にある開閉スイッチを体当たりで押す。扉が開き、中に転がり込む。

すぐに内側の開閉スイッチを押し、扉を閉じた。

鉄の扉の向こうに現れたのは、白一色で塗装された筒状の長い長い部屋。

シンジが転がり込んだ出入り口から、数百メートルも奥にある、この部屋の突き当りにあるのは大きな円形状のハッチ。ハッチの丸い窓からは、外の宇宙が見えた。

部屋の出入り口には、赤く塗装された、嫌でも目立つ丸いボタンがある。

シンジは再び体当たりで、その丸いボタンを押した。

途端に室内を耳障りな警告音が木霊し、天井からぶら下がる回転灯が点滅し始めた。

シンジは生唾を飲み込みながら、部屋の遙か奥にあるハッチを見つめる。

シンジはハッチに向かって走り出した。

もう覚悟は出来ている。

「これ」が一体何者であるか。

母を名乗るが、それは真実なのか。

今はそんなことはどうでもよい。

今分かっていること。

「これ」は危険だ。

自らが望んだ「彼女」のサルベージ。

つくづく、自分はやることなすこと裏目に出るらしい。

自分が犯した過ちは、自分の大切な人たちを悉く傷付けた。

そして、今自分の体に引っ付いている「これ」は、更に多くの人々を深く、もう後戻りできないまでに傷つけていくに違いなかった。

これしか方法はない。

自分が犯した過ちを清算できる方法は。

もう覚悟は出来ている。

この世界に何の未練もないと言えば、嘘になるけれど。

できれば、あの岩場で別れた空色髪の彼女と。

空で別れたあの赤毛の彼女と。

もう一度会いたかったと思うけれど。

今の自分にそんな猶予は許されない。

つい一昨日も、同じ決断を下したばかり。

何かの気紛れで。いや、気紛れなどではない。あのコが自らの命を危険に晒してまで、生きながらえたこの命。

再びこの場で手放してしまうのは、あのコにとても申し訳ない気持ちができるけれど。でも、もう覚悟は出来ている。

自分が犯した過ちを清算するために、宇宙へ飛び出て、自分諸共「これ」を宇宙の藻屑にする覚悟は。

耳障りな警告音が鳴り響き、目障りな回転灯の光が部屋の方々を照らす中、前方のハッチがゆっくりと開き始めた。

室内はたちまち減圧。

室内の空気はあつという間に宇宙空間へと吸い出され、そしてシンジと、シンジを抱き締める少女の体も、ハッチへ向かって一気に引っ張られた。

まだまだ遠くにあった全開のエアロックハッチが、あつという間に目の前にまで迫る。

もう間もなく自分を襲うであろう、真空と摂氏マイナス270度の死の世界に身構えていた。

「シンジ…」

頭上から降ってくる、涼やかな声。

シンジは瞑っていた目を開け、顔を上げた。

目に飛び込んできた光景に、驚愕する。

空色の髪の後ろに広がる白い何か。

それはあたかも熾天使が背負う6枚の羽。

少女の背中から生えた6枚の扇状の白い何か、開いたエアロックハッチを塞いでしまっていた。

少女は涼やかな眼差しでシンジを見下ろしている。

「これでようやく…、2人きりに…、なったわね…」

シンジは呻くように言う。

「本当に…、母さんの…?」

少し前にした問いを再び繰り返した。

少女はシンジの体深くに侵入していた腕を一旦引き抜くと、その手でシンジの両頬を

挟む。

「ええ…、そうよ…。ただいま…。シンジ…。随分…。待たせてしまった…。わね…」

「エヴァの制御システムになつてはるはずじゃ…」

「その役目は…。もう終わったの…。これからは…。ずっと…。一緒…」

頬に当てた手を滑らせ、耳を撫で、うなじを撫で、背中へと回す。

「さあ…。私と一緒に…。お父さんのところに…。帰りましょう…」

シンジは激しく首を横に振った。

「イヤだ！ 僕は戻らない！」

「シンジ…。あなたの幸せは…。私と…。碓ゲンドウの…。2人の許にある…」

「嘘だ！ 父さんも母さんも、僕の幸せなんて少しも考えなかつたくせに！」

体を揺さぶり、少女の拘束から逃れようとするシンジの頭を、少女は両手で柔らかく

包んだ。

「ああシンジ…。ごめんなさい…。ずっと側に…。居てあげられなくて…」

「離して！ 離せ！ 僕をみんなのもとに帰して！」

「シンジ…。今は眠りなさい…。母の許で…」

再び少女の体がシンジの体に侵食し始める。

「止めて！ 止めてよ！ 母さん！」

シンジは必死に抗うが、その体は徐々に少女の体へと埋没していく。



「ハッチ、閉じてます。エアロック内、気圧正常。シンジくんの反応も確認」

エアロック室内のモニターを見ていたマヤからの報告に、ミサトは短く安堵の溜息を漏らす。しかしすぐにマヤの悲壮な声が続き、ミサトは奥歯を噛み締めることになる。

「ですが、反応は徐々に弱まっています」

「マリ。説明してもらおうわよ」

リツコは左手で節々が腫れ上がってしまった右手を抑えながら言った。

マリも鉄の塊が直撃した脇腹を抑え、床に這い蹲っている。垂れた髪の間隙から覗く顔に、いつもの陽気な表情はない。

「あれは…、碓ユイ…、でもそんなはず…」

マリが呟いたその単語を、リツコは聞き逃さない。

「碓ユイって、シンジくんのお母さん？」

20年以上前にエヴァアへのダイブに失敗し

て、戻ってこなかったっていう…」

リツコのその問いに、マリは一瞬躊躇いの表情を浮かべたが、やがて小さく頷いた。「そう。その後のサルベージも拒否したのに。なんで今更…」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

すでにシンジの体は首から下が全て少女の体の中に埋まっていた。

「ああ…、それにしても…」

少女はシンジの頭を抱き締めながら、周囲をぐるりと見渡す。

「なんて…、無粋な…、船かしら…。私たちの…、初号機の…、美しさが台無し…よ…」
シンジはすでに抵抗する力を失い、ぐったりとしている。もはや顔の半分までが少女の体に沈み、唯一出ている右目を薄く開けながら、少女の顔を見上げる。

「母さん…」

少女はシンジを見る。

「待っていて…。あなたの…、初号機から…、余計なものを…、取り除いてあげる…」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『艦長！ 葛城艦長！』

ミサトのインターカムから日向の怒鳴り声が響く。

「なに？」

『艦長！ どこに居るんです！ すぐ艦橋に来てください！』

「報告なさい」

『艦のシステムがハッキングを受けてます！ このままじゃ武器管制システムが乗っ取られてしまう！』

「ハッキングもとは？」

『今調べて…、え？ どうゆうことだ…？』

「なに？」

『ハッキングもとは艦内！ 機関部第5格納庫のエアロックからです！』

日向の悲鳴のような報告はリツコの耳にも届いた。

「ミサト。「敵」はいよいよ艦の掌握に打って出てわ。あなたは艦橋に戻って、事態を收拾して。マヤ、あなたも行きなさい」

「分かったわ！」

「は、はい！」

ミサトとマヤはリツコに従い、艦橋に向かうため廊下へ向かった。

走り出そうとして。

しかし、2人の足は前に出ない。

廊下への出入り口に人影。

ミサトは出入り口を塞ぐように立つ人物の名を呼ぶ。

「アスカ…、あなたいつからここに…」

ミサトの行く手に、赤毛の少女が立っていた。

第貳拾參話

居住区から着の身着のまままで駆け込んできたらしい。スウェットパンツにタンクトップという部屋着満載の格好で立つアスカは、ミサトの問いに腰に手を当てながら言う。

「あのバカが帰ってきたっつーから来たんだけど。え？ なに？ シンジのママも来てるの？」

事態の深刻さまで把握していないのか、軽い口調で尋ねてくるアスカ。

マリが体を起こして、アスカの方に顔を向ける。

「アスカ…、あれは確かに碇ユイ…。でも違う…、何かが…」

普段の立ち振る舞いとは懸け離れた歯切れの悪いマリの声。アスカはそんなマリを無視するように、スタスタと奥の扉に向かって歩き始めた。

「んじや、挨拶くらいはしとかないとね」

「アスカ！ 待って！」

ミサトの怒鳴り声も無視して、アスカは歩き続ける。

歩いている途中で、一度身を屈め、床に手を伸ばす。

あるものを拾い上げた。

「ついでに言つとかないとね。いい加減、子離れしろつて」

「アスカ！」

再びミサトの怒鳴り声。

エアロック室へ繋がる扉の前まで来て、ようやくアスカの足が止まった。

「それにしてもさあ、碇家つて、ドーしてこう揃いも揃つて、面倒くさいやつらばかりなのかしら。シンジはうじうじしてるしき、親父は頭どーかしちやつてるしき。せめてお袋さんくらいはまともであれつーの」

振り返つて、ミサトを見る。

「ね？ そう思わない？ ミサト」

肩越しに見えるアスカの横顔。もう何を言つても意志を曲げない、決意を秘めた顔。

「アスカ……」

もはやミサトに彼女を止める術はない、

アスカは扉に向き直る。

「あゝあゝ面倒くさ」

短くなつてしまった後ろ髪を掻き回しながら、準備運動とばかりに首を捻る

「ほんと、ドーしてあたしはこんな面倒な一家の息子に惚れちやつたのかしらね」

扉の開閉スイッチを押す。

「まあ、惚れちゃったんだから、仕方ないっか……」

エアロック室への扉が開いた。

「じゃああたしは将来のお婿さんをゲットしてくっから。そっちはそっちで頑張つて。んじゃねー」

振り返らずに手を振る。

アスカがエアロック室に入った直後、扉は閉まり、アスカの姿は見えなくなった。

アスカが消えていってしまった扉をしばし呆然と見つめていた一同。

リツコが真っ先に我に返る。

「ミサト……」

リツコの呼びかけに、ミサトは頷く。

「ここは任せたわ。マヤ、行きましよう」

ミサトとマヤは、今度こそ艦橋へと向かった。

◇
◇
◇
◇
◇

扉の向こうでは、回転灯が放つ光が忙しくなく部屋の方々を回っている。

廊下のような筒状の長い長い部屋。その一番奥に佇む人物の姿をアスカの青い瞳が捉える。

まるで天使のように6枚の翼を広げて、筒状の部屋の一番奥を占拠している少女。

どこか現実離れした光景に、しかし28年の人生の中で散々現実離れした光景を見てきたアスカは少しも怯まず、少女に向かって歩き始める。

遠くにあつた少女の姿がはつきりと見えるようになって、アスカは殊更軽い口調で口を開いた。

「ハロウ、ミセス・イカリイ」

6枚の翼の中心に居る少女は顔を上げ、スタスタと裸足で歩いてきた赤毛の少女の姿を認める。

「あら…、どなたかしら…」

少女の顔が上がり、アスカは真正面から少女の顔を見ることになる。

ここに来て、アスカは少しだけ下唇を噛んだ。

たった2日間だけど、濃密な時間を共に過ごした「それ」。

顔をしわくちやにして泣いて、大声を上げて笑って、たどたどしい声で自分の名前を呼んで。

今、自分の視線の先に佇む少女の体は、紛れもなく「それ」の体。そして「それ」の体に埋没してしまっている、見覚えのある頭とつむじ。

暴れそうになる心臓を落ち着けるため、目を閉じ、1度だけ深く深呼吸をする。改めて強い決意を胸に刻み、アスカは目を開いた。

「シンジくんをお迎えに上がりました」

まるで友人を遊びに誘うような口調で呼びかける。

そんなアスカの呼び掛けに、少女は少しだけ驚いたように、そして少しだけ嬉しそうに、目を丸くする。

「まあ…、では…、あなたはシンジの…、お友達…?」

「あく、友達っつーか」

アスカは雑に切り揃えられた後ろ髪をわしやわしやと搔く。

「嬉しいわ…。シンジに…、こんなかわい…、お友達が…、いるなんて…。シンジは…、昔から…、人見知りだから…、なかなか…、お友達が…、できなかったの…」

「そうですねー。シンジくんとは、確かに親しくさせていたたいはいるんですが…、そのお…」

「なにか…、奥歯に物が挟まったような…、言い方ね…。友達では…、ないの…?」

「お友達ってゆーよりは、こう…、ステディな関係といえますか…」

「まあ…」

「将来を誓い合った仲ってゆーか」

「あら…」

少女の顔から、どこか嬉しそうだっただ表情が瞬時に消える。

「それは聞き捨てならないわ…」

その小さな口から発せられる声が、一層低くなった。

「とゆーわけで、あんたはさっさとシンジを置いて、後は若い者に任せてどっか行つてく
んないかな〜」

少女の口調の変化に合わせるように、アスカの口調も急に雑になる。

「いい年したババアが息子にべったりとか見ているこつちが恥ずかしくなんだけど」

「あなた、とつても下品な子ね」

少女の表情は変わらないが、声はどこか不機嫌そうに低い。

「え？　そうです？　結構いいところの出なんですけど」

「あなたのような子に、うちのシンジはやれないわ」

「やらなくて結構。奪っていきますから。それとね」

アスカは右手で引き摺っていた大型ハンマーを掲げ、その頭部を少女に向けた。

「その体はレイのものよ！ さっさと出て行ってちょうだい！」

そう言い終わるよりも早く、アスカは大型ハンマーを両手に持つと、エアロック室の一番奥に陣取っている少女に向かって突進を始める。

少女まであった距離の半分をあっという間に駆け抜けると、床を踏み締めた右足に全精力を込め、跳躍。ハンマーの頭部を頭上に高々と掲げた、所謂上段の構えをとるアスカの体が、天井すれすれまで浮く。

目指すは6枚の翼を広げた少女。

走ってきた力と、跳躍した力と、落下する力と、自身の体重とを、それら全てハンマーの頭部に乗せて。

少女の頭部目掛けて振り下ろした。

振り下ろしたハンマーが、少女の頭部まであと50センチと迫ったところで。

視界の右隅から自分に迫ってくる何かに気付いたアスカは咄嗟に構えを解いて、右から襲ってくる何かに対してハンマーを構える。

アスカを襲う何か。それはエアロック室の壁を這う、何本もの大きな鉄製のパイプ。その内の一本がバキバキと大きな音を立てて勝手に壁から剥がれ、まるで白い大蛇のようにアスカに向かって襲い掛かってきたのだ。

鉄製の大きなパイプと、鉄製のハンマーの柄。破壊的な音と共に、それらが接触。

宙に浮いていたアスカの体は、左の壁に吹っ飛んだ。

「下品な上に…、乱暴だなんて…。最近の…、若い子って…、嫌ね…」

鉄製のパイプによって壁に叩き付けられたアスカを、少女は冷めて目で見ながら抑揚のない声で呟く。

「時代は変わったのよ！ お母さま！」

ハンマーによって鉄製のパイプによる強襲の衝撃を辛うじて和らげていたアスカは、左肩から血を流しながらも自分を壁に叩き付けた鉄製のパイプを跳ね除ける。

「あなたの頃より、女はずっと逞しくなったの！」

再びハンマーを構え、少女への突進を再開。

「しつこいコって…、シンジ…、苦手だと…、思うの…」

そう言いながら、少女は素早く2度ほど瞬きする。

するとまたもや壁を這う大きな鉄製のパイプが、今度は2本同時に壁から剥がれ、アスカに向かって襲い掛かる。

「あなた、母親を名乗る割には、シンジのこと、何も知らないのね！」

アスカは襲い掛かってくる2本の鉄製のパイプを、ハンマーを振り回して弾き返した。

「シンジはね！ あたしみたいにガンガン引っ張ってやんないと、ダメな子なのよ！」

さらに2本の鉄製のパイプがアスカ目掛けて襲い掛かるが、アスカの突進は止められな

い。

瞬きする臉と声を発する口以外を動かすことがなかった少女の顔。その眉間に、一本の縦皺が寄った。

「うちのシンジは…、ダメな子…、何かじゃ…、ないわ…」

その声に微妙ではあるものの明らかに苛立ちを乗せた少女は、今度は少し長めに瞬きをした。

するとアスカが走る床が急に隆起し、床の鉄板が弾け飛ぶ。

その鉄板の下を這っていた何十本ものケーブルが誰も触れていないの勝手に引き千切られ、まるでケーブル自体が生きている触手のようにウネウネと動き始めた。

ケーブルはアスカの足首に、太腿に、腰に、腕に、脇に、首に、たちまちのうちに絡み付いていく。

「あたしはおたくの子のダメなところ散々見てきましたけどおお！」

しかし全身を拘束されてもなお、アスカは突進を止めない。体に絡み付いた何十本ものケーブルを引きずりながらも、少女目指して前進を続ける。

拘束するアスカと床の穴との間でピンと伸びたケーブル。

「それでもなお、あんたのダメ息子を貰ったげるってゆってんの！」

そのケーブルが徐々に千切れ始める。

「ついでにあんたのバカ旦那のアホな所業も正してあげようとしてんだから！」

限界まで引つ張られたケープルはついに引き千切れ、拘束から逃れたアスカはあと3歩のところまで迫った少女に向かって突っ込む。

「こんな良い花嫁さん！ そうそう居ないと思うんですけど、どーですかあーお母さま ああ!!」

上段に構えたハンマーを、今度こそ少女の頭部目掛けて振り下ろした。



艦橋に駆け込むと、事態の対応に追われていたオペレーターたちが一斉に足音がした方を見た。

艦の最高司令官の登場に、青ざめていたオペレーターたちの顔に少しだけホツとした表情が浮かぶ。しかしその艦長の左袖が血で染まり、縛られたハンカチが真っ赤になっているのを見て、再びオペレーターたちは顔を青ざめさせる羽目になる。

オペレーターの一人、日向マコトは席を立ち駆け寄ろうとする。

「艦長、どうしたんですか……！」

ミサトはさっと右手を上げて、日向に席に戻るよう指示。

「全艦に緊急コードを発令！ 第5エアロックに敵侵入！ 全ての隔壁を閉鎖しなさい

！」

「敵だって!?!」

「私の失態よ。現場はリツコたちが対応している。そつちの状況は？」

今は一切の質問は受け付けられないという態度のミサトに、日向は納得できないように眉間に皺を寄せながらも自分が操るコンソールの画面をミサトに見せた。

「システムへの侵入が止まりません。あらゆる防壁が機能していない。まるでシステムが侵入者を排除すべき敵と認識してないかのようです」

日向の報告を受け、ミサトは深刻な顔をしながら様々な警告のメッセージが流れる画面を見つめる。

システムへの侵入者とは、疑いようもなく初号機からサルベージされた「あれ」。

「あれ」は初号機のコアから現れたもの。

「あれ」は、初号機の分身。初号機そのものである。

そして、この艦は初号機を動力源として動いている。

つまり侵入者は、艦の本体そのもの。

システムが侵入者を敵として認識していないのも、当然であった。
「くそっ！　まずい！」

日向が画面の隅に流れた警告メッセージを見て叫んだ。

「全ての砲塔がエネルギーを充填中！」

「えー！　うそー！　冗談でしょー！」

髪をピンクに染めた女性オペレーターが双眼鏡を構えながら叫んでいる。

「大砲が全部こっち向いちやってんですけどー！」

「ダメだ！　兵装システムはこちらからのアクセスを拒否してるー！」

「セキュリティシステムが機能していない以上、人力でやるしかないでしょう！　どいてー！」

ミサトの背後に居たマヤはそう怒鳴ると、日向を押しつけて席に座る。

「マヤ、任せていいのね？」

「従来のセキュリティシステムを全て破棄！　新たにシステムを一から組み直します！」

砲塔の発射までは！」

席から突き落とされ床に尻餅を付く日向は、ずれたメガネを直しながら隣の席の画面を見た。

「あと一分！」

「上等！ ああ、やっぱりタッチパネルには慣れないわね！」

マヤは自身の肩に掛けていた端末機をコンソールの上にドンと置いた。

「相手は今世紀最高の科学者か何だか知らないけど……！」

端末機からケーブルを引っ張り出し、コンソールに繋げる。

「所詮は20年以上も初号機の中に引き籠つてた骨董品ババアでしょ！」

端末機に並ぶ、前時代的なキーボードを猛烈な速さで叩き始めた。

「ずっと科学の最先端で戦い続けてきた私達が負けるはずないじゃない！」

第貳拾四話

「くそっ……」

アスカは悔しそうに呻いた。

少女の頭部目掛けて振り下ろされたハンマー。

そのハンマーが少女の頭部にあと5センチと迫ったところで止まってしまったのだ。

ハンマーの先端を中心にして広がる、オレンジ色に光る八角形の輪。

「AT……フィールド……」

自身の渾身の一撃を阻んだ絶対不可侵の壁の通称を呟いた。

オレンジ色の八角形の輪の向こうで、ギョロつと少女の瞳が動き、アスカの顔を見る。

「あなたに……、大事なシンジは……、やれないわ……。出直して……、らっしやい……」

少女の足もとの床が弾け飛び、その下から飛び出した数十本のケーブルの束が、アスカの腹部にめり込む。

アスカの体は「く」の字に曲がって吹き飛び、数百メートルもある筒状のエアロック室を縦断して、その背中は格納庫へ通じる扉に叩き付けられた。

床へと崩れ落ち、動かなくなったアスカを、無感動な眼差しで見つめる少女。

ふと何かを察知し、虚空を見つめながら3回ほど瞬きをする。
「あのコの相手を…、していたから…、気付かなかったわ…」



「やりました！ セキュリティプログラムが侵入者を排除！ 武器管制システムは我々の支配下にあります！ やったな、マヤ！」

画面上の赤い警告が全て緑に変わったのを確認し、日向はマヤに労いの言葉を掛けながらその肩を叩いた。

「この程度…、朝飯前よ…」

そう強がるマヤだったが、全精力を使い果たしたとばかりに額から大量の汗を流しながら深く息を吐き、だらしなくぐったりと背もたれに寄り掛かった。

差し迫った危機は脱し、艦橋のあちこちで歓声上がる中、ミサトはインターカムに話しかける。

「こちら艦橋。リツコ、こっちは何とかなった。マヤがやってくれたわ」

「敵」が立て籠もる第5エアロック室前の格納庫。

リツコ、マリの他、駆けつけた保安部の警備兵たちがエアロック室前の扉に詰めている。

「こつちはアスカが突入して以来変化なしよ」

リツコがインターカムからのミサトの応答に答える。2人の会話に、マヤが割って入った。

『先輩。艦内セキュリティを「敵」から取り戻しました。今、エアロック室内の映像を出します』

「マヤ、よくやったわね」

『はい』

ミサト、リツコが持つそれぞれの端末機の画面に、エアロック室内に備え付けられたカメラの映像が映し出された。

「アスカ…!?!」

まず最初に目に飛び込んできたものに、ミサトは悲痛な呻き声を上げる。

エアロック室の白い床。その上に横たわって、動かなくなっている人影。

白い床に広がる、短くなった赤い髪。

「リツコ！」

ミサトはすぐにエアロック室前に詰めているリツコの名を呼んだ。

『だめよ！ 扉は内側からロックされてる！』

「艦内での爆発物使用を許可します！ すぐに突入を！」

『分かつてる。…えっ…？』

エアロック室内を映し出す映像に変化があり、ミサトもリツコも画面を凝視した。

艦の外へと通じるハッチに向かって、筒状の形をしているエアロック室。

その一番奥、ハッチの前に佇む空色髪の少女。

その少女の背中から、まるで鳥の翼のような、白い扇状のものが広がっており、ハッチを塞いでいる。

その少女の前に浮かぶ、八角形の光の輪。

ミサトは息を呑んだ。

「ATフィールド…」

「あれ」は初号機の分身のようもの。

であれば、「あれ」が初号機をはじめとするエヴァや使徒のみにその使役を許された、絶対不可侵の壁を操ることができたとしても、不思議ではない。

そしてその壁の発生は、「あれ」の前ではあらゆる通常兵器の使用は意味を成さないこ

とを、ミサトらに知らしめるものだった。

ミサトは歯噛みしながらインターカムに囁く。

「突入…中止…」

通話相手も意見を交わさないままで、ミサトの見解に同意したらしい。

『分かったわ…』

リツコの返事が聴こえた。

映像内の変化は続く。

少女は背中に生やした6枚の翼を切り離すと、すつと移動を始めた。その足は床に付いておらず、空中を浮遊しながら、長い長いエアロック室内を移動している。数百メートルはあるエアロック室の丁度真ん中まで移動を終えて、少女の2本の足は床へと降り立った。

少女の前に1つだけ発生していた光の輪。

それが、少女が床へと降り立った後から1つ増え、2つ増え。

次々と光の輪が出現していく。

まるで少女を囲むように発生していく幾つもの光の輪は、やがてその範囲をどんどん拡大していき、筒状の室内を埋め尽くしていく。

そして。

最後に一瞬、画面一杯に光の輪が広がり。

それを最後に画面は真つ暗になった。

「カメラが物理的に破壊されたようです」

一緒に映像を見ていたマヤが報告した。

「エアロック室内はATフィールドで満たされています。こんな強力なフィールドを観測したのは、本部を破壊したあの「第10の使徒」以来です」

「鉄壁の防御という訳ね……」

マヤの報告を聴き、ミスアトは頷きながらも何処か納得できないような表情をした。

「……あんなところに立て籠もって、一体何をするつもり……?」

スピーカーの向こうで、ミスアトが黙ってしまった。

リツコはそんなミスアトに進言する。

「艦長。エアロック室を含む、第5区画の放棄を提案します」

そのリツコの提案に、その横でサクラから手当てを受けていたマリが顔を上げた。

「放棄後、即刻第5区画を本艦から切り離し、主砲をもってこれを破壊するべきです」

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと待つてくださいいよ!」

マリが珍しく慌てた様子でリツコに食って掛かる。

「あの中にはまだ姫もワンコくんも居るんですよ！」

「両名の生存は未確認です。今は本艦の安全を優先するべきです」

「だああああ！ この血も涙もない冷酷科学者が！」

マリは自身の栗色の髪を両手で掻き混ぜた。

「そもそも2人いつぱんに失ったら、誰がエヴァ動かすってゆーの！」

「あなたが居るでしょう」

「あたしを過労死させる気か！」

インターカムのスピーカーから2人の言い争いが聞こえてくる。

リツコの提案は、「敵」が艦の一角に立て籠もった時点でミサトも真つ先に思いついたものだった。一方で、マリの主張も無視できないものだ。組織の最高責任者として、今は一切の私情を排しているこの頭であっても、あの2人を同時に、特にヴィレのエースパイロットであるアスカを失うのは、ヴィレにとって大きな痛手となる。

ミサトが逡巡している間にも、事態は刻一刻と変化していた。

床が。

いや床どころの話ではない。

艦全体が、大きく揺れたのだ。

「なにが起きてるの!」

ミサトは部下に状況報告を求めると。

「艦のスラスタが動いています!」

宇宙空間での艦の姿勢制御を司るスラスタ。ミサトが艦の軌道修正を指示した覚えはない。

一体誰がそんなこと、とミサトは原因の追究を求めるようなことはしなかった。

誰の仕業か。

それは考えるまでもない。

「くそっ! 今度は艦の自動操舵システムに……!」

マヤが悪態を吐きながら、慌てて端末機のキーボードを叩き始めている。

艦の操舵を担っている大柄の女性が叫ぶ。

「艦の軌道が変わります! 仰角が下がっています!」

「すぐに修正を! このままでは衛星軌道を外れるわ!」

「やっています! やっていますけど……!」

操舵手が報告を言い終える前に、異変は起きた。

「なに?」

騒めきが起こる艦橋。

艦橋内のあらゆる照明が一齐に消えたのだ。

一瞬にして暗闇に包まれる艦橋内。

「こんな時に停電……?」

マヤが、艦のシステムとの接続が断たれてしまい、画面がフリーズしてしまっている端末機を悔しそうに見つめている。あと2秒もあれば、自動操舵システムに侵入していた「敵」を排除できていたのに。

その横で、日向が真っ暗になったコンソールの中で、唯一光っている警告ランプを見て叫んだ。

「主機から……、初号機から本艦へのエネルギー供給が断たれました!」

ミサトは舌打ちをする。

「立て籠もってる側が兵糧攻めとはね……!　すぐに予備電源に切り替えて!」

「はい!」

ミサトの指示から10秒後に、艦内は文明の光を取り戻した。

「予備電源に切り替え完了!」

その報告に、マヤはすぐさま端末機を起動させ、艦内システム全てのコンピュータセキュリティをチェックする。

「…消えてる…」

見つけ次第、秒で消してやろうと思っていた、自動操舵システムを占拠し掛けていたはずの侵入者は、その姿をシステム上から消していた。

「艦長！ 自動操舵システムをオフにしました！ マニュアルで姿勢制御が可能です！」

マヤからの報告に、ミサトは操舵輪を握る操舵手に言った。

「すぐに軌道修正を！ 艦を衛星軌道に戻して！」

「了解！ ……あ、…あれ？」

大柄な女性の操舵手は必死に総舵輪を操っているが。

「軌道修正できないんですけど…」

「はあ？」

ミサトは操舵手を睨んだ。

「スラストが動いてないんです…」

日向が叫んだ。

「艦長！ 予備電源から動力機関へのエネルギー供給ができません！」

「なんですって…！」

今度は日向を睨む。

「中継器となる初号機がエネルギー供給を妨害しています…!」

日向のその報告に、ミサトはコンソールの端を拳で殴る。

「敵」の狙いはこれか…! 初号機を機関部の中心に据えたのが仇となったわね…」

ミサトは悔いるように歯噛みしながら、艦橋の正面に設置された巨大な画面を見つめた。

画面上には、巨大な円。

その円を囲む、一回り大きな、点線で描かれた円。

内部の円は、地球を、外部の円は、艦の軌道を示している。

艦の位置を示す光の点滅が、点線を少しずつ外れ、内部の円へと少しずつ近づいていく。

「艦長…」

日向は言う。

「今現在、我が艦はあらゆる動力を喪失しています」

日向の報告に、マヤの顔が青ざめた。

「それって…、操舵不能…ってこと…?」

「艦の墜落まで、あとどれくらい?」

ミサトは日向に訊ねた。

「あと、20分です……」

日向は事実をありのまま伝えた。



「副長、艦長に8号機の発艦許可貰つといて！」

マリはそう言い残し、サクラによる手当てでも終わらないまま床から腰を上げ、出入口へ向かい始めた。

「マリ！ どこに行くの！」

リツコがマリを呼び止める。

「艦が沈んでるってんなら、やるこた決まってるでしょ！」

「まさか！ 無茶よ！ いくらエヴァでも！」

「無茶は承知」がヴィレのモットーでしょ。んじゃ、よろぴく〜」

軽やかな声を残して、マリは走り去ってく。

最終章

第貳拾伍話

青。

視界一杯に、青。

これは空。

青い空。

瞳を動かす。

手が見える。

黒い手が。

赤褐色の岩に投げ出された黒い腕が見える。

その黒い腕を空に掲げてみる。

黒い指の隙間から覗く太陽。

その眩しさに思わず目を細める。

背中に硬くて冷たい感觸。

平べったい岩の上に寝ていたらしい体を起こしてみる。
体を起こすと、頭の位置が高くなる。

途端に、激しい頭痛。

脳味噌が内側から破裂したのかと錯覚するほどの頭痛。

右手で額を抑えながら、左手を岩に付き、倒れそうになつた体を支える。

頭の中にミキサ―でも突つ込まれ、攪拌されたような感觸。

全身を支配する震えと発汗。

いつ終わるとも知れない頭痛に耐えながら、同じ姿勢のままたつぷりと一時間。

ようやく頭痛が引く。

呼吸が落ち着いてきた。

鼻の周りに違和感がし、右手の甲で鼻の周りを拭つてみる。甲に、干からびた血が付着していた。口の端にも涎が伝つた痕があり、それも手で拭う。

周囲を見渡す。

大きな岩がそこかしこに転がる荒野。

少し遠くに目をやれば、たくさんの岩山を抱えた台地が幾つも重なつて続く。

時折吹き付ける強い風が、地面の上の土を巻き上げている。

冷たい風が肌を撫で、髪を揺らす。

それでも、不思議と風の音はしなかった。

耳に違和感。

耳に触れてみる。

耳の孔に、「何か」が突っ込まれている。

耳の孔に突っ込まれた「何か」から、紐が伸びている。

耳から伸びている黒い紐。

紐は腰掛けている岩の端っこまで続いている。

その紐を、手繰り寄せてみる。

暫く引つ張っていると、岩の下から引きずり上げられた黒い物体が現れた。

手を伸ばし、その黒い物体を拾い上げる。

手のひらサイズの箱のような物体。

箱の側面には、幾つかのボタンが並んでいる。

その内の、三角形を横に寝かしたような表記のある一番大きなボタンを押してみる。

耳の孔に突っ込まれた「何か」に、僅かな変化。「何か」から、ほんの微かに、小さな音。サーーという、耳を澄まさなければ聴き取れないほどの小さなノイズが鳴っている。

る。

しかしそれ以上の変化はなく、小さなノイズが鳴り続けるだけ。

両手で持った黒い箱を見つめ、微かに鳴るサーーという小さなノイズに耳を傾けながら、何もせず、ただぼんやりと佇み、たつぷりと1時間。

『あーあー、テストテスト』

突如人の声。

『本日は晴天也、本日は晴天也。…ちゃんと録れてるのかな？ これ…』

耳の孔に突っ込んだ「何か」から、突然、男性の声。

『まあいいや。誰か知らないけど、こんにちは、これを聴いている人』

まるで一陣の涼やかな風のような、若い男性の声。

『そっちの世界はどうかな？』

空はどうかな？ 青いままかな？

海はどうかな？ 生命の青を取り戻しているだろうか？

地上はどうだろう。人々の笑顔は戻ってきているかな？

それらは、みんな彼が望んだものなのだけけれど。

もし、彼の望みが叶えられていて。

世界がすっかり元通りになっていたらならば、このテープはここで止めてほしい。

もし、彼の望みが叶えられず、海も大地も赤いままであったならば、どうかこのまま聴いていてほしい。

……。

……。

……。

…そっか。

どうやら…。

僕たちは失敗したようだね。

そうか。僕は彼の望みを叶えられなかったんだ。

彼には、また辛い思いをさせてしまったようだね。

そうか…。

…そっか…。

…うん。

…こんなこと、誰とも知らない君にお願いするのは、とても変なことなんだろうけれど。

もし…。

もしこれを聴いている君の側に彼が居て。

もし彼がとても困っているようだったら。

その時は、どうかお願いだ。

彼を助けてやってはくれないだろうか。

僕にはもう彼に手を差し伸べることはできない。

きつと、僕にはもう差し伸べる手すらないだろうから。

きつと、僕の頭と首から下は、もう離れ離れになつてしまつているだろうからね。

でも、今、これを聴いている君なら、きつと彼に手を差し伸べることができる。

だつて、君はまだ生きているんだから。

だから、どうか、彼に手を差し伸べてほしい。

彼を救つてやってほしい。

彼がもう2度と、絶望に打ちひしがれないで済むように。

彼の前に再び大きな困難が立ち塞がったとしても、恐れず強い心で前に進むことができ

きるように。

彼に手を差し伸べ、彼の背中を押してやってほしいんだ。

君に手を差し伸べてやってほしい少年。

その名前は、『碇シンジ』

「…いかり…、しんじ…」

『無茶苦茶なお願いをしてるってことは分かってるんだけどね。』

でもなぜか、不思議と、これを一番に聴いてくれた人は、僕の願いを聞き届けてくれると思うんだ。

きつとこのプレイヤーを手に取った人は、彼のとっても近しい人で。

それでいて、きつと、彼のことごとくても大好きな人だろうから。

そうだとしたら、僕らは同志だ。

僕の願いは、きつとそのまま君の願いだろうから。

だからきつと君はやってくれると信じているよ。

ははっ、ちよつとプレッシャーになつちやつたかな？

じゃあ、頼んだよ。

最後まで聴いてくれて、

ありがとう…』

耳の孔のイヤフォンから、ブツリと音がした。

再び、サーーと鳴る小さなノイズ。

身体にぴったりと引っ付いた黒いスーツを纏った少女は、紐を引っ張って両耳からイヤフォンを外した。

手の中に収まる黒い携帯音楽プレイヤーを見つめる。

「いかり…、しんじ…」

イヤフォンから聴こえた名前を、小さく呟いてみた。

足音がした。

はっとして、顔を上げる。

少し大きな岩の向こうから、人影が現れた。

「やあ、ただいま」

岩の向こうから現れたのは、一人の少年。

華奢な体つき。短くまとまった髪。黒曜石のような瞳。

何故か、胸が高鳴った。

「…おか…えり…」

少年の急な呼び掛けに、たどたどしく返事をする。

少年は少女の隣に座る。肘と肘が触れ合いそうになるほどの、近い距離。ペットボト

ルの水を飲む少年が鳴らす、喉の音までもがよく聴こえてくる。

少年は彼が現れた岩の方を眺めながら言った。

「ここから、ええと、太陽があつちから昇つたから、多分西だね。西の方に2時間ほど歩いたところに、下に行けそうな場所があつたよ」

「……うん……」

少年が何の説明をしているのか、よく理解できなかつたが、取り合えずとばかりに頷いた。

「僕はそこから下に下りて、とにかくあの塔から離れようと思うんだけど」

「……うん……」

少年がいう「あの塔」。周囲を見渡した時にちらりと見えた、遠くで天高く聳え立つ巨大な塔のことを言っているのだろう。

「君はどうするか、決めた？」

「私……？」

突然話を振られ、慌てて少年の横顔を見つめる。

「うん。ああそう言えば、呼び方は？」

「呼び方……？」

「うん。君の呼び方は決めた？ まさか「クロ」じゃないよね」

「クロ…?」

「うん」

状況が。少年の言っていることの意味が分からず、ひたすら混乱してしまう。

私は…。

私は…誰…。

「私は綾波レイ…」

「え?」

少年が意外そうな顔で少女を見返した。

「私は綾波レイ…」

そう…、

私は…、

綾波レイ…。

私は

綾波

レイ

ネルフ所属。

第一の少女。

エヴァンゲリオン零号機専属パイロット。

綾波レイ。

「そっか…」

少年は少し低い声で呟く。

「君がそう決めたんだっただら…」

自分を納得させるように頷く少年。

「うん、分かったよ……」

そしてこちらに顔を向けて言った。

「綾波……」

『あやなみ』

少年の声で、その名前を呼ばれた瞬間。

少女の目の前を、眩い光が瞬いたような気がした。

痛みでぼんやりとしていた頭の中が、急に今の空のように隅々まで晴れ渡ったような気がした。

「大丈夫？ 綾波……」

隣の少年が、心配そうに声を掛けてきた。

自分の両手を見つめる。

真っ黒な両手。初めて見る、黒のプラグスーツ。

その手を自分の顔にぺたぺたと這わせ、自分の顔の形を確かめる。そう。これは間違いないく私。

この手も、この顔も。

これは、綾波レイ。

でも、感じる。

私の中に居る、もう一人の誰かを。

綾波レイの中に居る、もう一人のアヤナミレイを…。

では。

それでは今、隣に座っている少年は。

——その名前は、碓シンジ。

「いかり…、くん…?」

「なんだい? 綾波…」

自分の問い掛けに、淀みなく返事をする少年。

いる。

彼が、すぐ隣に、いる。

私を、見つめて、くれている。

暫く見つめあっていた2人。

少年はふと少女から目を離し、空を見上げた。

空の彼方から爆音が聴こえてくる。

「ネルフだ……」

少年は、苦い顔をした。慌てて岩から腰を上げる。

「綾波。僕、行かなきゃ」

その顔に強い焦燥を浮かべながら少女を見下ろす。

少女は青い空に浮かぶ飛行物体を見つめている。

「君はどうする？ 綾波」

空を見上げ、飛行物体を見ていた少女。

ゆっくりと、少年へと顔を向けた。

あなたに付いていく。

喉まで出かけていた言葉。

しかし、何故かその言葉を素直に口にすることを躊躇われた。
少年の顔を見つめる。

——もし彼がとても困っているようだったら。

その時は、どうかお願いだ。

箱から出したばかりのジグソーパズルのようにバラバラになっていた頭の中身が、少しずつ組み上がっていく。

——彼を助けてやってはくれないだろうか。

彼を助ける。

彼を助ける。

碇シンジを助ける。

そのために、今、自分がしなければならぬこと…。

彼と一緒に行く？

いいえ。

彼を引き留める？

いいえ。

彼を助けるために、今、自分がしなければならぬこと…。

少女はゆっくりと頭を横に振った。

「……に……残る……」

少女のその返事に、少年は少しだけ表情を曇らせた。その顔に、少女の胸がズキリと痛む。

「うん……。分かったよ……。綾波がそう決めたんだっただけ……」
大きさを増していく爆音。

「じゃあ、綾波……、僕……」

少年が別れの言葉を言いかけて。

「碇くん…」

少女が引き留める。

少女は携帯食料や水の入ったペットボトルなどを手早くかき集めてボディバッグの中に詰め、少年に差し出した。

「あ、ありがとう…」

「これ…」

少女は少年に手渡す荷物の中の一つを指差す。

「これは…」

「通信機…。これで、ヴィレの人、呼べばいい…」

ヴィレ…。

ヴィレって…なに？

「ヴィレとも通信できるの？」

「ネルフはヴィレの通信暗号技術を全て解析しているから。傍聴もできるし、通話もできる」

何故か自分の口から、自分が知るはずもないことがポロポロと漏れていく。

そう。

これはきつと、私の中に居る、もう一人の…。

「そ、そうなんだ……」

少年は少女からバッグを受け取り、肩に背負った。

「じゃあ綾波……」

別れを切り出す少年に、少女は小さく頷く。

少年は一步、二歩と、後ずさりを始める。

少しづつ遠くなつていく少年。

そして少年は踵を返して。

何かが胸の中から溢れそうになる。

心が張り裂けそうになる。

叫んでしまいたい。

待って！

その背中に抱き着いてしまいたい。

行かないで！

咄嗟に立ち上がって、しかしすぐに左足に痛みが走り、続く一歩が出ない。

「碇くん……」

自分でも気付かないうちに、少年の名前を呼んでいた。

足を止めてくれた彼。

振り返ってくれた彼。

「綾波…」

彼が名前を呼んでくれている。

その声を、何時までも聴いていたいと思った。

すぐにも、少し離れてしまった彼のもとに駆け寄りたと思った。

でも今は…。

「碓くん…」

今、自分がしなければならぬことは、彼のもとに駆け寄ることではないから。

今の自分に許されることは、これくらいだから。

「好きよ…、碓くん…」

自分の想いを彼に伝える。

そんな機会は決して訪れないであろうと思っていた、この瞬間。

今は、このひと時を噛み締めて。

短い言葉に、今の自分の全てを乗せて。

遠くの彼の顔が、微笑んだように見えた。

「うん、ありがとう…、綾波…」

彼の微笑みに誘われるように、少女も微笑む。

「またいつか。どこかで」

彼のその言葉に、少女はゆっくりと頷く。

彼は名残惜しそうに少女を見つめながら踵を返し、やがて少女に背を向け、走り出した。

少女は離れていく少年の後ろ姿を、見えなくなるまでずっと見つめ続けていた。



彼は去っていった。

残された少女は、彼の姿が消えた方向を、しばらくぼんやりと見つめていた。

空から轟く轟音が間近まで迫っている。

少女は手もとに残しておいた信号拳銃を天に向かって掲げ、引き金を引いた。

銃口から放たれた照明弾は煙の尾を引きながらぐんぐん空へと昇っていき、空中で眩い光を放つ。

V T O L機が少女の居る岩場の比較的平坦な場所へと着陸する。2つの回転翼が巻き起こす突風が、少女と少年を守ったパラシュートを何処かへ吹き飛ばしてしまった。V T O L機の側面からタラップが降り、そこから長身の男が、武装した兵士たちを伴って降りてくる。地上に降り立つと同時に兵士たちは散開し、周辺の警戒に当たり始める。

V T O L機が着陸する様子を岩に腰かけたままぼんやりと見つめていた少女。男の姿を認め、すくつと立ち上がる。相変わらず左脚は痛むので、左脚に体重を掛けないよう少し右側に傾きながら。

びっこを引きつつも、男のもとに向かって歩いていこうとしたら、少女が足を怪我しているらしいことに気付いた男は右手を上げ、その場で待っているよう少女に指示を出した。

男が少女のもとに歩み寄ってくる。目もとは細いバイザーで隠れているため、外からその表情を伺い知ることはできない。

男が少女のすぐそばに立つ。少女を一瞥した後、周囲をぐるりと見渡す。少女は黙っ

て、男の顔を見上げています。

一通り周囲を確認して、男は低い声で少女に言った。

「あれは……？」

短い問い掛け。

少女には、男が言う「あれ」の意味がすぐに理解できた。

少女は地面を指さす。

細い指がさす地面には、一人分の足跡。少女や男のものではない靴の足跡。VTOL機が起こす突風によって消えかかっている足跡が、2人が居る場所から西へと向かって続いている。

「そうか……」

足跡の存在を認め、男は深く頷いた。

「よくやった……」

不意に男から掛けられたその言葉に、ぼんやりと地面の足跡を眺めていた少女は、視線を上げて男の横顔を見た。

「あれが死ぬと、ユイが悲しむから……」

男は足跡が向かっている西の空を見つめている。男の表情は相変わらず読めないが、口角が少しだけ上がっているように少女には見えた。

男はVTOL機に向かって歩き出す。
少女はびっこを引きながら、男の背中を追った。

VTOL機のタラップの側まで行くと、兵士の一人がゲンドウに話しかけた。
「西に向かつて何者かの足跡が続いています。追跡しますか？」

ゲンドウは首を横に振る。

「目的は果たした」

そう言つて、背後に立つ少女を見る。

「撤収だ」

そう言い残し、ゲンドウはタラップの急な階段を上つていき、機内へと入つていく。
少女もゲンドウの後を追う。

左脚を痛めているため、手すりに寄り掛かりながら一段一段、慎重に。

最後の一段になって、ふと振り返る。

VTOL機から少し離れた岩に、一晩、彼女と彼を温めてくれた白いパラシュートが引つ掛かつていた。そこからさらに視線を上げ、少年が去つていった西の空を見つめる。

手すりを握る少女の両手に、ぎゅつと力が籠もつた。

階段の最後の一段になって立ち往生している少女の顔の前に、白い手袋を嵌めた手が差し出された。

びっくりした様子の少女は少し目を丸くして、厳つい手の持ち主の顔を見上げる。

機内から、ゲンドウが少女に向けて手を差し伸べていた。

少女は今一度西の空を見つめると、振り返り、差し伸べられたゲンドウの手を遠慮がちに握る。

ゲンドウに導かれるままに、機内へと入った。

斜向かい向いの席に座るネルフの最高司令官、碓ゲンドウ。

ゲンドウは、窓ガラスから見える眼下の赤茶けた大地を見ている。

ゲンドウと行動を共にし、彼が乗る機に同乗するのはこれが初めてではない。そんな時は決まって、ボックス席の窓側にゲンドウが座り、少女はその斜向かいの廊下側の席に座る。交わされる会話はほぼなく、ゲンドウは機内でこなすべき仕事があれば窓ガラスの外の風景に目をやって、機が目的地に着くのを静かに待っていた。

この日もゲンドウは窓側の席、少女はその斜向かいの廊下側の席。会話はなく、ゲンドウは肘掛に立てた腕に顎を乗せ、窓ガラスから外の景色を眺めている。

それはいつもと変わらない光景。

ただ、その様子を向かいの席からそっと見守る少女には、ゲンドウの姿がいつもと違つて見えた。

いつも彼の周りを漂う張り詰めた空気が、この日は少しだけ柔らかいように感じた。目は相変わらず細いバイザーで隠れているが、その横顔は、いつもよりも少しだけ穏やかに見えた。

ゲンドウは肘掛から体を起こすと、背中を座席の背もたれに預け、お尻の位置を少し前にずらし、足を向いの席の下まで伸ばす。

少女の顔に、少しだけ驚きの表情が浮かぶ。

随分とリラックスした姿勢。

視線は変わらず窓ガラスの外へやっただまま。

しかし、その口角は間違はなく曲線を描いている。

お腹の上に組まれたゲンドウの手。親指同士が忙しなく、くっ付いたり離れたりしている。

そんな見たことのない最高司令官の姿を横目で見つめていた少女に対し、ゲンドウは不意に声を掛けた。

「レイ……」

急に声を掛けられてしまい、観察でもするかのようにゲンドウを見つめていた少女

は、咄嗟にゲンドウから視線を逸らした。目の前の空いた座席を見つめながら一呼吸置き、今度は顔ごとゲンドウに向ける。

ゲンドウは変わらず視線を窓ガラスの外に向けたまま。

彼からの言葉を、じっとして待つ。

「今まで苦勞を掛けたな……」

最高司令官からの思いもよらぬ言葉に、少女は刹那の間に3回瞬きをした。ゲンドウに向けていた顔をゆっくりと正面に戻す。もう一度ぎゅつと、今度は少し長めの瞬きをし、再び顔をゲンドウの方へと向ける。

ゲンドウは変わらず視線を窓ガラスの外に向けたまま。

少女は続くゲンドウからの言葉を待ってみたが、それっきり、ゲンドウの口から少女へ言葉が発せられることはなかった。

窓ガラスに映るゲンドウの顔が見えないだろうかと少しだけ頭を上げ、視線の位置を変えてみたが、太陽の光が窓ガラスを明るく照らして邪魔をする。ゲンドウの表情を見ることは叶わないと悟った少女は、視線を膝の上に交差させていた自分の手に落とす。

少女は自分の手を見つめて。男は窓の外を見つめて。

以後、2人の間に交わされた会話はなく、機は静かな2人を粛々と目的地へと運んでいく。



V T O L 機から降りてくる礎ゲンドウを、副司令の冬月コウゾウが待っていた。

「素体の捜索隊が消息を絶った。最後の連絡直後にエヴァ8号機の飛翔を確認。素体はヴィレに渡ったと考えるべきだろうな」

「そうか」

冬月の報告に、ゲンドウは短く答える。まるで他人事のような態度の最高司令官に、冬月は不満げに言った。

「どうする。我々にエヴァのパイロットは残されていないぞ」

「問題ない」

冬月はタラップを踏む、今にも消え入りそう軽い足音に気付いた。

視線を上げると、タラップの上に黒スーツの少女の姿。足を怪我でもしているのか、手すりに体重を預けながら急な階段を苦労して降りてきている。

「生きていたか…」

冬月は半分呆れ気味に鼻から溜息を吐いた。

「お前の息子は？」

「無事だそうだ」

2人が会話している間に、少女は何とか最後の段まで辿り着く。

搭乗時と同様に、ゲンドウは少女に向かって手を差し伸べた。やはり少女はゲンドウの手を躊躇いがちに手に取り、やや高い位置にある最後の段を降り切り、地面へと立った。

冬月は少女を見下ろす。

「本当に問題ないのか」

それはゲンドウに向けられた言葉。

「ああ」

ゲンドウの何の根拠も添えられない短い返事に、冬月は再び不満げに鼻から溜息を吐く。

「第一の少女」

冬月は見下ろしている少女に声を掛ける。目の前に立っているのに、目を合わせようともせず、冬月の胸の辺りをじっと見つめている少女に。

「君は誰だね？」

そう訊ねられ、少女は初めて顔を上げ、冬月と目を合わせた。

冬月は昨日も全く同じ質問を少女に投げ掛けた。

その時の少女は今にも自我崩壊を始めてしまいそうな、目も虚ろで憔悴し切った酷い顔をしていたものだ。

しかし今、自分を見上げている少女。一晩の野宿で疲労が伺えるが、顔の一番目立つところに収められた2つの瞳が放つ輝きは、昨日とは全く違うものだった。

ただそれだけで、昨日の少女とは全くの別人物のように見えてしまう。

少女が、その小さな唇を動かした。

「私は…、綾波レイです…」

その名を名乗るに最も相応しい声音で。

誰も疑う余地など抱かせない、妙な説得力さえ持ち合わせる口調で、少女は名乗った。

「レイ」

ゲンドウからの呼び掛けに、少女は冬月から視線を逸らした。

「休め。疲れただろう。あとで部屋に医者を見向かわせる」

ゲンドウはそれだけを言い残して去っていく。

離れていくゲンドウの背中を目で追う少女。

その少女の横顔を、冬月はじつと見つめている。



ゲンドウが指示した部屋。

天幕が張られただけの、部屋とすら呼べない部屋。

カーテンを開けて、中に入る。

「碇くん…」

ほつりと彼の名前を呟く。

部屋の中にほのかに残る、あの少年の匂いを感じた。

部屋の隅にあるゴミ箱に目をやると、中には固形食の包装紙が丸めて投げ込まれている。

いつも適当に丸めて部屋の隅に投げている寝袋が、丁寧に畳まれて置かれている。

簡素なパイプ椅子に腰を下ろす。

「碇くんが…、ここにいた…」

嘯みしめる様に、少女は呟いた。

ゲンドウが予告した通り、医者がやって来た。

少女の痛めた左足を診察し、中等度の内反捻挫と診断され、足首にサポーターが巻か

れた。

医者は少女に鎮痛剤を渡し、部屋から去っていった。

部屋に少女以外、誰も居なくなつて。

少女は椅子から立ち上がり、びっこを引きながら部屋の隅へと歩いていく。

部屋の隅にあるゴミ箱を覗き込む。

その中には、使用済みの白い包帯。

医者が少女の足首の診察のために、既に巻かれていたものを取り外し、ゴミ箱に捨てたものだ。

少女はゴミ箱から包帯を拾い上げ、再びびっこを引きながら椅子へと戻る。

椅子に腰かけ、手にした包帯を見つめた。

暫く、じつと包帯を見つめていて。

そして包帯を左の前腕に巻き付け、包帯の端を片手のみで器用に結ぶ。

椅子から腰を上げ、カーテンをくぐつて部屋の外へと出た。

◇
◇
◇
◇
◇

照明が落とされた司令室。

部屋の中央に配置されている、背もたれたが限界まで下ろされたリクライニングシートに、深く腰掛けるゲンドウ。

真つ暗な天井を見上げながら、ただひたすらその時を待つ。

他者に運命を委ねることを最も忌むべきものとし、望むべき状況は自らの手で作り出すことを信条としてきたゲンドウにとって、「待つ」ことだけに費やされる時間は苦痛以外のなにものでもない、はずだった。

ネルフ本部開設以来、長年使い続けてきたこの椅子。

今日、初めてリクライニング機能を使った。

ベッドに入って休むことすら少ないゲンドウにとって、ここまでリラックスして何かに身を預けるのは、「彼女」がその姿を消した日以来のことだった。

そしてその時はやってきた。

背もたれから体を起こすゲンドウ。

天井を見上げたまま、立ち上がった。

「戻ったか……」

まるで見つめる先に居る誰かに語り掛けるように呟く。

「初号機の覚醒……、13号機の覚醒……、そして君の受肉……、全て君の預言通りだ……」
椅子の前のテーブルに備えられたスイッチの一つを押す。

「冬月」

呼びかけから数秒後。

『なんだ？』

彼の腹心からの応答。

「レイを呼べ……」

「……分かった」

第貳拾六話

薄暗い廊下の奥から少女が歩いてくる。

びっこを引いて、歩いてくる。

「碓から部屋で休むよう言われていたのではないか」

少女を探していた冬月はようやくその姿を見つけ、溜息を零しながら少女に言った。

少女は冬月に向かって歩きながら、軽く頭を下げる。どうやら冬月に対して謝罪しているらしい。

「もういい。碓が呼んでいる。司令室に行きたまえ」

少女は冬月の側を通り過ぎながら小さく頷き、最寄りのエレベーターの前で立ち止まった。

エレベーターが来るのを待つ少女。痛めた左足に体重を掛けないよう、右に傾きながら、じっと立っている。

その姿を暫し観察し、ふと、少女が歩いてきた方に目を向ける冬月。

廊下の突き当りにあるもの。
扉。

あの扉の向こうは何があつたか。あまりにも大き過ぎる構造物であるため、どの階のどの部屋に何があるかなど、いちいち覚えてなどいない。

ただ、あの扉の向こうが何であつたか。

冬月は覚えていた。

そこにあるのは資料室。ネルフにまつわるあらゆる文献が収められた書庫。

「資料室に何の用が……」

少女に訊ねようとして、再びエレベーターの方へと視線を向ける。

エレベーターに乗ってしまったのか、すでにそこには少女の姿はなかった。

資料室へ入る冬月。

人の出入りが殆どない部屋なので、空気は淀み、あらゆる場所を埃が被っている。

資料室には紙ベースで蓄積された様々な文献が雑然と積み重なって保管されているが、全ては電子化されサーバーに保存されているため、部屋の真ん中にぽつんと置かれた端末機で閲覧が可能になっている。

冬月は端末機を起動させ、閲覧履歴を確認する。最終閲覧日時はいい10分前。

どれもこれも一昔前であれば第一級の極秘資料であるが、人類の殆どが「消え」、秘匿する相手が居なくなつた今では、この資料室に立ち入れる者ならば誰でも閲覧が可能な状態である。

冬月は怪訝そうに眉を顰めながら画面に見入る。

「なぜ、「あれ」はわざわざこれを……」

「綾波レイ」という存在がこの世に誕生して以来、「綾波レイ」を名乗つてきた彼女たちは、冬月からネルフの大人たちにとつて、命令に従順な使い勝手の良い道具だつた。そして運用していく上で様々な問題を孕んだ彼女たちも、下された命令に一切の疑問を抱かず盲目なまでに従うという一点においては、実に優秀な道具だつた。

彼女たちは彼女たちに命令する組織に対して、「なぜ」を持たない。だから、知ろうともしない。

この部屋に立ち入る権限を持つ者はほんの一握りしかおらず、彼女はそのほんの一握りの1人だつたが、この本部が誕生して20年近く。その間、彼女がこの部屋に立ち入つたことなど、一度もなかつた。

なぜ、今更になつて。

彼女は「過去」の資料を読む必要があつたのか。

タッチパネルでページを捲つていた冬月の手が止まつた。

いや。そもそもなぜ彼女は…。

「なぜ彼女は…これを読めるのだ…」

テーブルの隅に設置された通信機からコール音。

ゲンドウはスイッチを押す。

『碇』

「冬月。レイはどうした？」

出頭を命じた少女は、まだ司令室にその姿を現してはいない。

『碇』

しかし冬月はゲンドウの質問に答えず、逆に質問を返してきた。

『お前が連れて帰った少女。あれは本当にレイか？』

ゲンドウの眉間に皺が寄る。

「何を言っている」

『あれが資料室で文献を読んだ履歴がある』

「文献を、「読んだ」？」

『ああ。主にジャイアントインパクト。そして25年前のコアへのダイレクトエント

リーとサルベージ実験に関する資料だ』

ゲンドウはバイザーの奥の目を細めた。

スピーカーの向こうで冬月は続ける。

『碇、繰り返し問うが、あれは本当にレイか?』

ゲンドウは冬月の問い掛けには答えず、低い声で言う。

「レイはどこだ?」

エレベーターの前に来た冬月。

エレベーターのカゴの位置を示す電子表示に目をやる。

奥歯を噛み締めた。

通信機のスイッチを押す。

「あれ」は地下に向かっている…!」



巨大な縦穴の真ん中を通る巨大なリフト。本来は巨大な人型兵器の昇降用に設置さ

れたリフトの、これまだ巨大な踏み台の隅っこに、まるで箸の先端に引つ付いたお米粒のように、ちよこんとその少女は座っていた。

縦穴の中は照明の類は一切ない。少女が着こむ黒いスーツ。グローブの甲の部分に仕込まれたライトが青白い光を灯している。しかし縦穴はあまりにも巨大すぎて、小さなライト程度では少女の周辺をぼんやりと照らすことしかできない。縦穴の壁ははるか遠くにあるはずなのだが、とてもそこまで光は届かず、少女の位置からは真つ黒な壁がすぐ目の前にあるように見える。

降下を続けるリフト。数メートル先も見通せない闇。常人であれば平衡感覚と時間感覚を失い、発狂してしまいそうになるような空間だったが、リフトの隅っこにぼつんと座る少女は、微動だにせず涼やかな眼差しで暗闇を見つめていた。

リフトは何時間も掛けて降下し、ようやく縦穴の最深部へと至る。

少女は踏み台からびよんと跳ね、地面へと着地。左足を痛めていたことを忘れていたようで、着地した瞬間にバランスを崩し、その場に尻餅を付いてしまう。お尻を擦りながら立ち上がり、下半身に付いた埃を叩いて払って歩き始めた。

少女の足が踏む地面。何かが風化し、小さく細かく砕けた、白い残骸のようなものが敷き詰められている。まるで砕けた白骨のようなものの上を、少女は涼やかな顔で歩いていく。

縦穴の底も、やはり真つ暗闇。底がどのような形状で、どれくらいの広さなのかも分からない。

小さなライトの乏しい明かりのみで、少女は暗闇の中を歩いていく。

何時間歩き続けただろう。

もはや少女を地上へと戻すためのリフトの位置すら分からない。しかし少女ははなから地上へと戻ることなど考えてないかのようには、暗闇の中を彷徨い続けた。

そしてその声は、何の前触れもなく、突然に暗闇の中から掛けられた。

「ああこつち。こつちだよ。そこの君」

少女は足を止めた。

声が出た方へと目を向けるが、そこは相変わらずの闇。

「うん君だ。君を呼んだんだ」

少女は声のする方へと歩き出す。

「そうそう。こつちだこつち。そのまままっすぐ」

声の導きのままに歩いていく。

「はいストップ。ストップだよー。おーい」

声に言われるままに、歩みを止める。

「うん。よく来てくれたね。ありがとう。でもごめん。君、僕のこと踏んでるんだけど」
声が真下から聴こえたので、少女は視線を自身の足もとに落とす。

言われて気付いたが、今までの何かの白い残骸が敷き詰められた地面とは明らかに違う感触が、足の裏にある。

足をどけてみる。

少女の足のあつた場所に、人の目があつた。

グローブのライトを人の目がある部分に向ける。

そこには奇妙なものがあつた。

それは人の顔。

と思われもの。

ただし、人の顔というには、色々なものが足りない。

確かに目はあるし、まつ毛も眉毛もあるし、耳も頬もある。

しかしそれだけだ。

本来2ずつ対となつてあるはずのそれらは、1つしかない。

その顔は、本来あるべき頭部の4分の3を失つていた。

口も鼻もないし、頭部の下にあるべき四肢、体幹もない。

そんな頭部の4分の1しかない姿で、少女に語り掛けてくる「顔」。

常人であれば驚愕、または恐怖し、悲鳴の一つでもあげるなり、腰を抜かすなりしうなものだが、少女は平然とした表情のまま、無感動にその「顔」を見つめている。また、同時に何故そんな状態で生きているのか。口すらない状態でどうやって声を出しているのか。そんな疑問も湧いてくるはずだが、少女は表情を一切変えず、涼やかにその「顔」を見つめている。

「あー、ちよつとライトを避けてくるかな。眩しくてかなわないよ。うん、ありがとう。…あれ？ 君って」

「顔」は少女の顔を初めて確認できたらしい。

「やあ君だったのか。「こつち」に戻ってきていたんだね。もしかしたらあの録音、聴いてくれたのかな」

少女は小さく頭を縦に振る。

「それでわざわざこんなところまで僕に会いに来てくれたんだね」

その言葉に対しては、少女は小さく頭を横に振った。

「そうなのかい？ ああ、なるほど。目的は「あれ」ってことか」

「顔」の瞳がぎよろりと動き、闇の奥を見つめる。

「あれ」なら多分、あの辺りに落っこちてると思うよ」

少女も、「顔」が見つめる闇の奥に視線を向ける。グローブのライトをその方向に照ら

してみるが、乏しい明かりでは闇の奥までは照らすことが出来ない。

「でも君」

「顔」に呼び掛けられ、少女は足もとに視線を落とす。

「見たところエヴァもないようだし。どうやってあれをここから運び出すつもりだい？」

「顔」にそう問われ、少女はぱちくりと瞬きをする。

そんな少女の反応に、「顔」の目が愉快そうに細まった。

「ははは。そこまで頭が回っていなかったのかな」

「顔」のそんな言葉に、少女は口の両端を少しだけ下げる。どうやら笑われて、少しだけ不機嫌になっているらしい。

「きつと彼を助けたい一心で、他のことは目に入らなかつたんだろうね。あの時の彼と一緒にだ」

少女の不機嫌さを察知した「顔」は、慌ててフォローを入れる。「彼と一緒に」という「顔」の言葉に、少女の顔が少しだけ和らいだ。

暗闇の中から現れて以来、殆ど表情を変えることがなかった少女。

自分のこんな姿を見ても、驚きも恐怖も見せず、涼やかな表情で自分を見下ろした少女。

しかし、そんな少女であっても、注意深く観察してみれば、心の動きに合わせてその表情に変化させている。

そんな少女を、「顔」はどこか嬉し気に見上げた。

「彼のことが好きなんだね？」

唐突な「顔」の指摘に、少女は再び目をぱちくりとさせる。

やがて両頬を染めつつ、こくりと静かに頷いた。

心の動きに合わせて変化する少女の表情。

特に「彼」のことであれば、その変化はより顕著に表れるらしい。

「ありがとう、彼を好きでいてくれて」

そう言った「顔」は、少女の赤く染まった頬を見て、一つしかない頬を満足そうに緩めている。

「僕も彼のこと、好きだよ。彼を好きな者同士、きつと僕らは協力し合えるだろうね」

少女は深く頷く。

「うん。…彼は今、困った状況なのかな？」

少女は目もとを引き締め、少し険しい眼差しで頷く。

「彼を助けるためには、「あれ」が必要なんだね？」

「顔」は再び闇の奥に一つしかない瞳を向けた。

少女も「顔」が見つめる闇の奥を見ながら、頷く。

「じゃあ「あれ」を持って、すぐに駆け付けてあげないとね」

少女は「どうやって？」と言いたげに、首を傾げている。

「知らないかな？ アダムとリリスの禁じられた融合の話しを」

少女は「でも」と言いたげに、「顔」を見つめる。

「うん、そうだね。僕は第一から第十三に堕とされた身。君も第二の欠片でしかない。だから融合は不完全なものになるだろうけれど、それでも僕たちの目的を達成するにはそれで十分じゃないかな？」

少女は暫く考え込む様子を見せ、そしてゆっくりと頷いた。

その少女の返事に、「顔」は満足げに目を細める。

「じゃあ決まりだ。ごめんね。ホントは協力し合う証に、君と握手くらいはしたいんだけれど、今の僕はこんな有様だから」

少女は「構わない」と頭を横に振る。

「ありがとう。ここに来てくれたのが君で、本当に良かったよ」

「顔」の心からの謝意に、少女は頷くことで答えた。

そして少女はゆっくりとその場に膝を折る。

地面の「顔」に向けて、両手を差し伸べる。

水を掬うような動作で、そつと、大事そうに「顔」を両手で拾い上げた。膝を伸ばして立ち上がり、手の中の「顔」を見つめる。

「顔」の一つしかない目も、少女を見上げる。

「まさかこんな状態になってしまっても、彼の役に立てるなんて思わなかったよ」
嬉し気な「顔」の表情に釣られるように、少女も少しだけ口角を上げた。

「あれ？ そう言えば」

何かを思い出したように、「顔」は目をぱちくりとさせた。

「確か君って、肉が苦手なんじゃなかったっけ？」

「顔」のそんな指摘に、少女は口を開く。

「碇くんのためだもの…。我慢するわ…」

そんな少女の答えに、「顔」は目を細める。

「愛、だね」

その一文字がこの世界で最も尊いものであるかのように呟く「顔」。そんな「顔」に、少女は顔を近づけ、その小さな口を大きく広げた。

少女の口の端から覗く小さな犬歯が、「顔」の眼球に触れ、そしてブチュリと潰して行く。



高速エレベーターが地下の最深部へと到着する。

エレベーターから降り立つ、1人の人物。

左手に持った、手のひらサイズの端末機の画面を見た。その画面に映し出される発信機の信号を辿って、暗闇の中を歩き始める。右手に持った懐中電灯の強烈な光が、闇を切り裂いていく。

暫く歩いて。

懐中電灯の光の中に、闇の中で佇む人影が浮かび上がった。

足を止める。

「レイ……」

黒のスーツを着た人影に、呼びかけた。

こちらに背を向けていた人影は、ゆっくりと振り向く。

やがて現れた人影の顔に、ゲンドウは少しだけ息を呑んだ。

振り向いた少女は、お椀のように組んだ両手で、何かを大切そうに持っている。

少女は声を掛けてきたゲンドウをじっと見つめながら、両手を口に近づけ、手に残っ

ていた最後の一欠片を口に入れた。

もぐもぐと咀嚼。まるでリスのように膨らむ少女の両頬。

口の中のものを歯でこなごなに砕いたら、ごくりと喉を鳴らして飲み込んだ。

口を開けて、はあ、と一息漏らす。少女の吐息が白い蒸気となって、宙へと立ち昇り、そして消えていった。

少女は口の周りにべつとりと付いた真つ赤な液体を、右腕で拭う。

まだ口の周りには赤い液体が残っていたが、少女は気付いていないのかそれ以上拭おうとはせず、空っぽになった手をぶらんと下げた。

「碇司令……」

少女は自分に声を掛けた男の名を静かに言う。

「何をしている。…レイ」

ゲンドウは低い声で訊ねる。

「食事を……」

少女は答えようとして、咄嗟に口を噤み、手で口を覆った。

両手で口を押さえている少女を、ゲンドウは見つめている。

少女まではあと数歩の距離。

しかしゲンドウの足は、これ以上少女に近づくことを拒否している。

そんな自分の体の反応に戸惑いながら、ゲンドウは少女に問いかけた。

「お前は本当に、アヤナミレイか…?」

相変わらず両手で口を押えている少女。ゲンドウから問われても、沈黙を守ったまま。

両頬を膨らませ、肩で深く呼吸をしている。

少女の目はまん丸に開かれ、額には脂汗が伝い、何処か顔色も悪い。

「どうやらえずいてしまったようだ。久しく口にするの事のなかった動物性たんぱく質と脂質に、胃がびっくりしてしまっただらう。今口を開いてしまえば戻してしまえばいい。うなのか、少女はゲンドウの問い掛けに答えることなく口を両手で塞ぎ続け、ゆっくりと鼻で息をしながら、食道をせり上がってきそうなるものを、胃の中へと落とし込んでいく。

「答える…、レイ…」

そんな少女の事情など知らないゲンドウは、再度問いかける。

口を開けることすらままならず、一人、消化管の不快感と闘っていた少女は、ゲンドウの催促に仕方なしに目を閉じ、乱れた呼吸を強引に封じ込めた。

口から手を離す。

涙目になりながら、ゲンドウを見つめる。

「はい。私は綾波レイです…」

鼻の奥に胃酸の臭いを感じながら、少女は答えた。

ゲンドウは少女の顔をじっと見つめる。

「何を食べていた…?」

「そこに落ちていたものを…」

「腹が減っていたのか…」

「はい…」

「美味かったか…?」

「酷い味でした…」

「拾い食いは行儀が悪い上に不衛生だ…」

「はい…、2度としません…」

「うむ…」

会話を重ねていく内に、少女の顔からは脂汗が引いていき、血色も少しだけ良くなり、呼吸も落ち着いてきた。

ゲンドウは硬直していた足をようやく前に出し、一步、少女に近づく。

「レイ…」

「はい…」

ゲンドウの呼び掛けに、少女は静かに返事する。

「お前に頼みたいことがある」

「はい……」

「13号機を単座式に換装した」

「はい……」

「今から13号機に乗れ」

「……」

「13号機で、ユイを迎えに行つてほしい」

「……」

少女は返事をしない。

ゲンドウは、少女を見つめたまま黙って少女の返事を待つ。

長い沈黙。

この地下に音源となるようなものはなく、また酷く広大な空間のため音を反射させるものも少なく、向かい合った2人が声を発しなければ周囲は全くの無音に包まれる。

鼓膜を震わせるものがなく、ゲンドウの耳に耳鳴りが響き始めた頃になって、ようやく少女は口を開いた。

「碓司令……」

「なんだ……」

「それは出来ません……」

「綾波レイ」という存在がこの世界に誕生して約20年。幾度も代替わりを重ね、個体ごとに多少の差異はあつたとしても、その本質は変わらない。

碇ゲンドウの命令に対する、絶対的な服従。

碇ゲンドウは、この日初めて「綾波レイ」という存在からその言葉を聴いた。

自分の命令に対する、否定の言葉を。

バイザーの奥の目が険しくなる。

「なぜだ……」

少女は抑揚のない声で答える。

「不可能だからです」

「なぜ、不可能なのだ」

「この世界に、碇ユイというヒトは、存在しないからです。存在しないものを、迎えにくいことはできません」

ゲンドウはゆつくりと首を横に振った。

「それは違う」

ゲンドウは、この男にしては珍しく、少女に対して言葉多めに丁寧に話しかける。

「今しがた、ユイはお前の素体を使ってこの世界に復活を遂げたばかりだ。ヴィレの戦艦で、彼女は私たちの迎えを待っている」

少女に向かって、促すように右手を差し伸べる。

「レイ。13号機に乗れ。ユイを迎えに行くのだ……」

白い手袋に覆われたゲンドウの手を、赤い双眸で見つめる少女。

その手から視線を上げ、ゲンドウの顔を見つめる。

そしてゆっくりと頭を横に振った少女に、ゲンドウの顔は再び険しくなった。

「司令。それは彼女ではありません」

「なぜ、お前がそんなことを言う」

問い質すゲンドウの声が、僅かばかり荒くなる。

「知っているからです」

「なぜ、知っている」

「司令。初号機の中に居たのは、あなたの最愛の人ではありませんでした。「あれ」は、エヴァ、いいえ。あなた方リリンや使徒の祖となるもの。アダムやリリスをしてさらに遡るもの。この地球上に存在した全ての生命の始祖」

少女に差し伸べていた手。

その手を下ろし、少女から一步遠ざかる。

「レイ…、お前…、もしや…」

何かに気付いた様子のゲンドウ。その顔に、バイザー越しでも分かる程の驚愕の表情が浮かぶ。

少女は、その半生の大半を沈黙と共に過ごしてきた少女は、珍しく滔々と話しを続ける。

「あなた方が初めてエヴァへの直接接触を試みた時、被験者となったあなたの最愛の人は、エヴァの中の「それ」の存在に気付きました。そして接触を試みた自分たちの行いが、「それ」を目覚めさせ、ひいてはセカンドインパクトの再来を促す結果となりうることも気づいた彼女は、自らを犠牲にして「それ」をエヴァの中に封じ込めました。その時点で彼女の自我は崩壊しましたが、彼女は強い人でした。自我を滅ぼされてもお、エヴァの中に留まり、エヴァの制御システムとして「それ」をエヴァの中に封印し続けたたのですから」

そう話す少女の声には、世界を救うためにその身を犠牲にした女性。少女の素となつた女性に対する敬畏を抱いているのか、少なからず熱量が籠っていた。

しかし、そんな少女の顔に、一筋の影が宿る。

「しかし「それ」は巧妙でした。彼女が施した封印を自らの力では解けないと悟つた「それ」は、外からその封印を破るようしむけたのです。碇司令。あなたが彼女のサルベ―

ジを試みた時、彼女は自我を失つてもなおサルベージを拒否しました。しかし彼女に成りすました「それ」は、あなたにあるメッセージを授けたはずです」

少女に言われ、ゲンドウは眉間に深い皺が寄った。

「そう。あなたが彼女が立てた計画と信じ、人類補完計画として実行してきたものは、「それ」が彼女が施した封印を破るために企てたものです。そして今日、彼女の封印は破られました」

少女はゲンドウを見つめる。その瞳に、微かな憐憫の情を籠めて。

「碓司令。「あれ」は碓ユイではありません。長い間彼女の封印の中で過ごした結果、「あれ」は彼女の残留思念と溶け合い、あたかも彼女のようにふるまっています。碓司令」

「やめろ…」

否定の言葉を言うゲンドウの声が震えている。

「「あれ」は決して碓ユイではありません」

しかし少女は追い打ちを止めない。「見てきた」事実を、淡々とゲンドウに告げている。

「やめろと言っている…」

「碓ユイという人格は、もうこの世界には存在しないのです」

乾いた破裂音。

「ユイを愚弄するな……」

碇ゲンドウが握った拳銃の先から立ち昇る硝煙。

銃口が睨む先にあるのは、黒いスーツを纏った空色髪の少女。

その胸に、大きな穴がぼっかりと空いていた。

少女の上半身が大きく波打ち、喉奥からせり上がってきた大量の血液が、少女の口から溢れ出す。

「碇司令……」

大量の血を吐き出す口で、少女は彼女が慕ってきた者の名を呼ぶ。

碇ゲンドウが構える拳銃は続けて3発の銃弾を発射する。

放たれた銃弾は少女の脇腹を、肩を貫き、そして少女の首を貫いた。

「ユイは消えん。ユイは永遠だ……」

低く、震えた、まるで呪詛を吐くような声でゲンドウは言った。

少女の細い首は一発の銃弾で肉と骨の半分以上を抉り取られる。頭部の重さを支えきれなくなった首は根元から折れ、大量の血飛沫を吹き出しながら少女の頭部は背中央へと倒れていった。

しかし体と文字通りの首の皮一枚繋がっていた頭部は、地面に落下することなく首か

らぶらんとぶら下がる。

ゲンドウは拳銃の短い銃身の先にある少女の体を睨む。

鼻で、荒く空気を出し入れしながら。

胸、腹、肩に大穴を開け、首が折れた少女。

自分が放った銃弾によって、その細い体は無残なまでに破壊された少女。

しかし少女の体は倒れない。

「リリンの王に資する才覚をもった男」

その声は、少女の体から聴こえてきた。

「そんな君であっても、最愛の人を失えばこうも簡単に理性と知性を手放してしまうんだね」

しかしその声は、明らかに少女の声ではない。

「君のその姿はとても悲しいけれど、でもとても愛おしいとも思ってしまうよ」

少女の両手が動き、千切れかけた頭部を持ち上げる。

「愛に突き動かされるままに己の身すら焼き、全てを捧げるその姿はとても美しいよ……でも……」

折れた首の根元に、頭部をぐいぐいと押し付けた。

「碇ゲンドウ……」

白銀の髪の下に収まる2つの紅玉の瞳が、ゲンドウを見つめた。

「かわいそうに……」

憐れみを漂わせた瞳に見つめられ。

「黙れ……！」

ゲンドウはさらに拳銃を撃つ。

「碇ゲンドウ。君とは色々と言ひ合いたいことがあるけれど、ごめん。今は君と話している暇はないんだ」

何故か放たれた銃弾は全て少女の体に辿り着く前に、まるでそこに見えない壁でもあるかのように跳ね返された。

少女。いや、体は少女のままだが、首から上は少年の顔をしたそれは踵を返し、ゲンドウに背を向ける。

ゲンドウは少年の顔をした少女の背中に、悲痛な叫びを叩き付けた。

「待て……！ レイ……！ 待ってくれ……！」

少年の顔をした少女は、2度と、ゲンドウに振り向くことはなかった。

「すまない。シンジくんが待っている」

第貳拾七話

ドクン。

それは地面が振動するほどの大きな音だった。

生命の源となる音。

律動的な収縮によつて、全身に命の源を懸け巡らせる音。

生命体の中央で、密やかに、慎ましやかに鳴るはずの音。

それが、露骨に、大つぴらに、大仰に、大雑把に、大胆に、盛大な地響きと共に轟いた。

その音を合図にしたかのように、変化は起きた。

少年の顔をした少女の体が、肥大化し始めたのだ。

肩が、背中が、腕が、尻が、足が。内部から膨張し始める。

少年の顔をした少女の体を包んでいた黒のスーツはたちまちはち切れ、中の真っ白な肌が露出した。

身体の膨張は止まらない。

2倍、3倍どころでは収まらず、頭部が地下の天井に到達してもなお、その体は肥大化し続ける。

もはや2本の巨木と化した足。地下の空間に敷き詰められた数多の白い残骸たちを吸収して、ぐんぐんと伸びていく巨木。

「レイ……」

その足もとで、ゲンドウは巨大化を続けるその生命体を、呆然と見上げていた。

巨大な顔が、縦穴の中を上昇していく。

生命体の巨大化は止まる気配を見せず、その肩幅は縦穴の直径を優に越したが、なぜかその生命体の体には物理的な制限というものは働いておらず、肩や腕が周囲の岩盤に当たってもまるですこに何も無いかのようにすり抜けていく。

リフトや巨大エレベーターが数時間掛けて下降した大地を穿つ巨大な縦穴を、巨大な顔はものの数分ですり抜け、ついに生命体の頭部は地表に露出。赤い大地の上に、真っ白な顔と白銀の髪がぼつかりと突き出た。

薄い雲が覆った空。それでも光源のない地下から出てきた巨大な顔は、柔らかな自然光を浴びて眩しそうに目を細める。

そしてなおも生命体の体は大きくなり続ける。

縦穴を塞ぐように建てられた巨大な構造物。周囲の山々を遥かに上回る高さを誇るその構造物をも、生命体の顔はあっさり追い越していく。

そして空に立ち込めていた雲を突き抜け、膨張によつて巻き起こる風圧で雲を吹き飛ばし、構造物周辺をあっという間に晴天にしてしまった生命体の顔は、ついに成層圏へと到達する。

真っ赤な大地から、その上半身をよきつと突き出した巨大過ぎる白い生命体。

その生命体の近くを、炎を纏い煌めく流れ星が、光の尾を引いて通り過ぎていった。



艦橋ではオペレーターの悲鳴のような叫び声が木霊していた。

「高度150キロ、時速は20,000キロを突破！ 艦底温度は3,000度を超えました！ ……ですが…」

悲痛な表情で計器を読み上げていた日向。しかしその表情に、ほんの少しだけ希望が宿る。

「ですが仰角は40度を維持！ 艦底の耐熱パネルに損傷なし！ ヴンダー、持つてます！」

重力に引かれるままに高度を下げ始めた艦。地表から数百キロ上空にあった艦は、重力に引つ張られてあつという間に大気圏へ引きずり込まれ、再突入と共にその艦体は瞬く間に炎に包まれた。

あらゆる動力を失っていた艦は適切な突入角度を保てぬまま、発生する超高温の熱の壁によって空中でバラバラになるはずだった。しかし昇降舵等を駆使して懸命に艦をコントロールした乗組員らの必死の努力によって艦首を上げることになった艦は、その姿を辛うじて保っていた。

そして艦の姿をこの世界に留めた最大の殊勲者は、今もなお、燃え滾る艦底の船首バルブに張り付いている。

太古の昔に滅んだ翼竜のような風貌のヴンダー。その頭部に抱き着くエヴァ8号機。8号機が背負ったロケットブースターのノズルは、オレンジ色の噴射ガスを大量に吐き

出し続け、ブンダーの艦首を懸命に押し上げていた。

大気圏再突入での空中爆散。そんな最悪の事態を免れたヴンダーだったが、しかし迫りくる死は未だにその大きな口を広げたままである。

「高度100,000メートルを切りました！　速度は時速10,000キロまで減速

！……しかし」

刻一刻と変化していく計器を大声で読み上げていた日向。

「速すぎますー！」

空中での爆散という事態は免れたが、今度は地上への激突による爆散という事態が待っている。

「地上まであと1分！　艦長！」

激しい振動の中、艦長席にしがみ付きながら立っているミサト。日向の悲痛な叫びに、1秒間だけ目を閉じる。

そして。

「マリ！　今までよくやってくれたわ！　あなただけでも逃げてー！」

ミサトの声を背中で聴き、オペレーターたちは無念とばかりに目を閉じた。

「なに…、言ってるの…！　諦めるなんて…、ヴィレらしくないじゃん…！」

歯を食いしばりながらエヴァ8号機の操縦桿を握るマリ。

その背中中、まるで炎に包まれたようにオレンジ色に光っている。

ATフィールドを張り巡らせるとはいえ、再突入時の8号機の周辺温度は1万度を超えていた。その超高熱はATフィールドを浸透してエヴァの背中に襲い掛かり、さらに神経接続を通じてマリの方に襲い掛かっていた。

『無理よ！ マリ！ 奇跡でも起こらない限り……！』

通信機からのミサトの声に、マリは激痛に身を振らせながらも不敵に笑う。

「奇跡を待つより……、捨て身の努力……でしょ！ 艦長さん……！」

遠のき掛ける意識を必死に手繰り寄せ、エヴァを操るマリ。

「ATフィールド！ 反転！」

エヴァの背中に張り巡らせていたATフィールドを一点に凝縮させると、後方に向けて一気に解放。エヴァの背中から、まるでジェット噴射のように凝縮されたATフィールドの光の束が吐き出される。

「止まれええええええ!!」

『止まれえええええ!!』

艦橋内に、マリの渾身の叫び声が木霊した。

「無理よ…、マリ…」

ミサトは呻いた。

日向は目の前に迫った死の恐怖に抗いながら、懸命に状況を伝える。

「時速3, 000キロまで減速。高度4, 000メートル」

8号機パイロットによる捨て身の努力は、数字上でも明らかに現れていた。しかし、

「地上まで、あと20秒。ダメです…、艦長」

ミサトは艦橋の窓から見える風景を見て、こんな状況の中で不謹慎にも少し笑ってしまつた。

ほんの数分前まで、遥か下にあつた大地。幾層もの大気に覆われ、淡く光つていた大地。

その大地が、今ははっきりと見える。赤い山、赤い土、赤い岩、赤い川、赤い湖。

その中に、天に向けて伸びる、巨大な構造物

それは、ミサトらが明後日に攻略作戦を予定していた、彼らの敵対組織の総本山だ。何の因果か落下地点はネルフ本部の近くらしい。

これも天の采配か。

あるいは乗組員と8号機パイロットらの努力によって実つた奇跡か。

破壊すべきネルフ本部が目の前にある。

このまま艦ごとあの巨大構造物に突っ込んでやろうか。
そんな考えがミサトの頭に過った時。

「なにあれ！」

オペレーターの一人が、素つ頓狂な声を上げた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

大地からよきつと生えた、人の形をした巨大な白い生命体。
体を巨大化させ、ひたすら天を目指していた生命体。

目指す宇宙を見上げ、ひたすら膨張を繰り返してきた生命体。
その生命体の前を、炎を纏い煌めく流れ星が駆け抜けていく。

落ちていく流れ星を、まるで全ての色素を失ったかのように全身が真っ白な生命体の
体の中で、唯一赤い、巨大な目が追っていく。

それまで顎を上げ、空ばかりを見つめていた生命体は、初めて首を折り、地上へと落
ちていく流れ星に合わせるように顔を動かしていく。

上半身だけで成層圏を突破してしまっている超巨大生命体。

しかし下半身や手は、まだ地面の下。



「わあああああ!!」

目前に迫った地上に、艦橋のそこかしこから悲鳴が上がった。

殆ど全員が、やがて来る破壊的な衝撃に備え、目を瞑り、頭を抱えた。

ミサトだけは目を閉じず、艦橋の外を睨んだ。

「最期の時」を見届けることが、自分に与えられた最後の使命とばかりに。

どんどん迫ってくる赤い大地。

地上に転がる岩。その岩と日光が地面に作る影までもが、はつきりと見えた。

その赤い地表が、突如、白に染まる。

目を閉じた2秒後にやってくるはずだった破壊的な衝撃。

自分の人生に幕を下ろす合図となるはずの衝撃。

自分の体をバラバラにするはずだった衝撃。

それが来ない。

頭を抱え伏せていたマヤは、おそろおそろ閉じていた目を開ける。

年季ものの端末機のキーボードが見えた。

「え……？」

コンソール上に置いた端末機を抱くように伏せていたマリは、ゆっくりと体を起す。

艦橋の窓の外に見えたのは、突き抜けるような青空。

「え……？」

事態が呑み込めず周囲をキョロキョロと見渡す。

自分と同じように、きよとんとした顔のオペレーターたちがいる。

背後を見ると、やはりきよとんとした顔のミサトが立っていた。

「艦長……、何が……」

自分と同じように、きよとんとしているミサトがこの事態を把握しているとはとても思えない。それでもこの不可解な事態の答えを求めたいマヤは、訊ねずにはいられなかった。

「手が……」

ミサトはぼつりと言う。

「手が、生えてきたのよ……」

「は……？」

「わあああああー！」

しんと静まり返っていた艦橋内に、再び方々から悲鳴が木霊した。

床が浮き上がるような浮遊感の後、今度は床に叩き付けられるような強力な重力。

ミサトは立っていられず、その場に這いつくばる。

「なんだ…、これ…！」

日向が声を上げる。

日向が見る計器。高度計。それが恐るべき速さでその数字を膨らませているのだ。

その上昇速度は、ロケットブースターによる宇宙空間への打ち上げの比ではなかった。

「なんだあれは!!」

その声に、ミサトは全身に感じる巨大な重力に耐えながら、視線だけを上げた。

艦橋の窓。

その窓の向こう。

「人の…顔…?」

窓の外に見えるもの。

あまりにも巨大過ぎて現実味がないが。

それは紛れもなく人の顔。

ミサトらが乗る超大型戦艦。それを遥かに凌駕する大きさの顔。

「いや〜ん、イケメ〜ン!」

どこかで調子の外れた声上がる。

ピンク色の髪の毛のオペレーターが、窓の外にある巨大な顔を見て、両頬を手で押さええな

がら嬌声を上げている。

「天子様があたしを迎えに来てくれたんだね。これってやつぱりあたしたちもう死んじやつてるってことかな？」

いつも調子の外れた声で調子の外れたことを言うピンク色の髪の女性オペレーター。

しかし、この非現実的な現状を説明するうえで、調子の外れた女性オペレーターが言っているその幻想めいた説が、最も現実的であるようにミサトには思えた。



地上へ落下していく流れ星。

白い生命体は、地下に隠れていた右手をゆつくりと上げて地上に出すと、その手を広げ、落ちていく流れ星に合わせて手をゆつくりと動かしながら、そつと流れ星を受け止める。受け止めた衝撃で流れ星が壊れてしまわないよう、生命体は一度手をゆつくりと沈めて落下の力を逃し、手の甲が地上に触れる寸前のところで今度はゆつくりと手を上げ始めた。

もつとも、ゆつくりと言ってもそもそもが巨大過ぎる生命体。その手はゆつくりと上がっているように見えて、実際は一秒間でこの星で最も高い山を越えるほどの速度で上

昇っていた。

右手をゆっくりと上げる生命体は、その肘を折り、手のひらをゆっくりと自身の顔に近づけていく。

さらに左手もゆっくりと上げてやはり顔に近づけ、右手と左手とを重ね合わせ、流れ星を両手で包み込むように支えた。

生命体の膨張はなおも止まらない。

すでに一番高い雲は生命体の腰よりも下にあり、生命体の顔周辺の空間は青から濃紺へと変わった。

生命体の頭部は、ついに宇宙空間へと到達したのだった。

生命体。

その顔に微笑みを湛えた少年の顔をした白い生命体は、手のひらにある流れ星を愛おし気に見つめる。

生命体はゆっくりと頭を前に傾ける。

手のひらに、その顔を近づけていく。

手のひらにちよこんと乗っている流れ星に向かって、顔を近づけていく。

◇
◇
◇
◇
◇

「わあああああ!!」

迫ってくる巨大過ぎる顔。またもや艦橋のそこかしこから悲鳴が上がる。

中には、

「いや〜ん! 正面から見てもイケメ〜ン!」

などと調子の外れた声も聴こえてくるが。

どんどん近づいてくる巨大な顔。

彼らが乗る超巨大戦艦は、その顔の鼻の孔の大きさにすらならない。

誰かが叫んだ。

「押し潰される!!」

空中での爆散を免れ。地上への激突を免れ。

すでに2度の避けがたい破局の危機を、2度とも免れてきた艦。

2度とも免れたその先で、まさか突如現れた謎の巨大過ぎる生命体の顔に押し潰されるといふ、誰も想像できないような悲惨な結末が待っているとは。

迫りくる巨大な顔に、生きる希望を掴みかけていた艦橋の全員が、(「初対面でキスなんて積極的〜」などとはほざいているピンク色の髪の毛のオペレーターを除いて) 三度絶望の淵に叩き落された。



巨大過ぎる白い顔は、巨大過ぎる白い手のひらの上の流れ星に、触れるところまで近付いた。

巨大過ぎる白い顔の一番目立つところに収まる、2つの目。

大きく瞼が開かれた右目。

その中に収まる、紅玉の瞳。

その瞳を覆う角膜が、ついに流れ星へと触れる。

小惑星並みの大きさを誇るその瞳は、豆粒のような大きさしかないその小さな流れ星を、そのまま押し潰してしまふかに思われた。



艦橋内は阿鼻叫喚の図。

艦より遙かに大きな巨大な赤い球が、今まさに艦橋を押し潰そうとしているのだから無理もない。

ミサトですらも、ただ歯を食いしばり、胸元の十字架のペンダントを握り締め、迫りくる巨大な赤い球を睨むことしかできないでいた。

『さあ、僕にできることはここまでだ…』

艦橋をその瞳で押し潰すかに思われた超巨大生命体。

しかしあらゆる自然界の法則を覆し続ける巨大生命体の瞳は、物理の制約を一切無視して、艦橋の窓をすり抜ける。

『「あれ」も君に丁度いいサイズにしておいたよ。だから…』

艦橋に突っ込んだ真っ赤な瞳のある一点が、急速に隆起する。

『シンジくんを救うんだ…、綾波レイ…!』

隆起した箇所が弾け、そこから黒い何かが飛び出した。

第貳拾八話

艦橋の前面を埋め尽くす巨大過ぎる真っ赤な瞳の角膜。

その一部が急速に隆起し、そして弾けた。

弾けた個所から飛び出す何か。

何かは数メートル下にある艦橋の床に膝を折って着地する。

自分が立つ場所から10メートル前の床に降り立った何か。

白い肌。空色の髪。黒のプラグスーツを身に纏った少女。

ミサトは歯噛みする。

「ハんな時……」

敵パイロットの艦内侵入。

次から次へと起こる不測の事態にミサトはうんざりしたように毒づきながら、腰のホルスターから拳銃を抜いた。

「動くな！　ゼーレのパイロット！」

銃口を10メートル前の少女の額に向ける。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

少年の言葉に背中を押され、角膜を突き破って外に飛び出した。

飛び出すと、そこは船の艦橋。

オペレーター達が、驚愕の表情でこちらを見上げている。

飛び出した場所から数メートル下の床に着地。

「動くな！　ゼーレのパイロット！」

途端に、どこからか、怒鳴り声が聴こえた。

おそらく自分に向けられている厳しい、そして懐かしい声。

顔を上げる。

前髪の隙間から見える人影。

赤いジャケットを身に纏った人物。

その人物が構えた拳銃の銃口は、正確にこちら側に向いている。

その人物が発した言葉は警告。動けば撃つという意味表示。

しかし今はその警告を無視する。

無視し、着地の衝撃を和らげるために折っていた膝を一気に伸ばした。走り出す。

拳銃を構えた人物が叫ぶ。

「動くなと言っている!」

その人物は構えた拳銃を今にも発砲してしまいそう。

それでもなお、警告を無視続ける。

警告に従う代わりに、叫んだ。

「葛城一佐!」



「葛城一佐!」

こちらの警告を一切無視して走り出した少女。

指を掛けていた引き金を引き絞ろうとした瞬間に、その少女が発した叫び声に、ミサトは目を丸くする。

「碇くんは!」

立て続けに少女の叫び声。

全身の産毛が逆立つような震えを感じた。

ミサトは拳銃を降ろすと艦橋奥の出入り口の一つを指差す。

「E5から行つて！ そのまま真つすぐ！」

少女はミサトが指し示す出入口へと向かう。

少女と、ミサトとが、すれ違う。

「ありがとう……！」

少女はミサトに向かって礼を言うと、軽い足音を残して艦橋を後にした。

こちらに背を向けて出入口へと駆けていく黒いスーツの少女の背中を呆然と見送っていた日向。

「艦長！ どうゆうつもりですか！」

たちまち、敵の侵入をみすみす見逃したミサトに対して抗議の声を上げる。しかしミサトは日向の抗議に耳を貸さず、すぐさま次の指示を下す。

「E5から第5エアロックまでの隔壁を全て解放しなさい！」

「え？」

「早くー！」

「は、はいー！」

ミサトの激しい剣幕に気圧され、日向は艦内の隔壁の操作を始めた。

ミサトは首に掛けたインターカムに話しかける。

「艦長から保安部へ。艦内に侵入したゼーレパイロットへのあらゆる攻撃を禁ずる。い

いこと？ 綾波レイに、手出しは無用よ！」

「どうなつてんだよ？」

青葉シゲルが日向に囁き掛けてくる。

「知るもんか……！」

日向は吐き捨てるように言った。

「何か文句でもある!？」

背後から叩き付けられたミサトの厳しい声に、日向も青葉も肩を震え上がらせた。

「いいえ！ 何も！」

「艦の現状報告を！」

「は、はい！ 現在艦は高度800kmを維持。動力は失われたままですが、墜落の危機は脱しました。8号機も無事です」

「かんちよ〜!!」

「今度は何よ!」

ミサトは心底うんざりした表情で、調子の外れた声で叫んだピンク色の髪の毛のオペレーターを睨んだ。

「イケメンが…、消えちゃいました…」

そのオペレーターは悲し気に立ち竦んだまま、艦橋の窓を見上げていた。

ミサトも艦橋の窓を見上げる。

濃紺の空に広がる、星々の群れ。

確かに、そこを埋め尽くしていたはずの、巨大過ぎる顔の巨大過ぎる瞳が消えている。

「なんだったの…、「あれ」は…」

マヤがぼつりと呟く。

全員がマヤと同じ感想を抱きながら、窓の外に広がる宇宙を呆然と見上げている中。

「あれ」が何だったのか。その詮索はあとよ。 私たちは次の手を打つわ」

ミサトの声がオペレーター達の意識を現実へと引き戻す。

「次の手って…、何を始めるつもりですか!」

日向がすぐに聞き返した。

「やられたらやり返す! それがヴィレのモットーでしょ!」

「初めて聞きましたよ！」

「いいから！ 後部第2砲塔は使える？」

「エネルギー充填率は50パーセント。一発だけなら行けます！」

「よろしい。後部第2砲塔、砲撃準備」

「後部第2砲塔、砲撃準備よろし！」

「砲身右20度旋回！ 射角10度下げ！」

「右20度に旋回！射角10度…さげ…。これって…、艦長…！」

「いいから！」



廊下を駆ける。

初めて乗り込んだ艦。

大小様々な通路が複雑に入り組み、交差する。

知らない者が一度足を踏み込めば、たちまち迷子になってしまうような迷宮のような艦は、しかし少女が駆ける廊下はずっと一本道なので、迷う要素はなかった。本来なら途中に様々な分岐があるはずだが、二股に分かれた分岐は一方が隔壁で閉じられ、通路

が交差する十字路は3つある分岐のうち2つが隔壁で閉じられ、少女に他の通路へ行く選択肢を与えない。

少女は自分を誘導してくれたかつての上官を信じて、躊躇なく一本道を突き進んでいく。

階段があれば鉄の床を蹴って飛び越え、5メートル下の床へと着地する。

そして走り続ける。

走って走って。

走り続けて。

大きな部屋に転がり込んで。

目指す前方の壁に、人集りが見えてきた。

「副長！ 来ました！」

警備兵の怒鳴り声に、赤木リツコは後ろを振り返った。

廊下の奥から、黒いスーツを纏った空色の髪の少女が走ってくる。

「点火！」

リツコの合図と共に、警備兵の一人は手に握って拳銃型のコントローラーの引き金を

引いた。

人集りが割れ、その向こうに現れた鉄の扉。

その扉の周辺が瞬き、轟音と共に分厚い鉄の扉が吹っ飛んだ。

外れた扉の向こう側から現れたもの。

眩い光。

強烈な光を放つ、幾重にも張り巡らされた八角形の輪。

破壊された扉の脇に立つ、何処か見覚えのある女性。

金に染めた髪を短く刈り込んだ女性は、光の輪を指さして叫んでいる。

「シンジ君はあの中よー！」

その女性の叫び声に、頷いて応える。

そして、自分の両手に握っていたもの。

深い深い地底から持ち出したもの。

あの眼球から飛び出した時から、両手に持つて抱え、ここまで全力で駆けてきて、運んできたもの。

それは深紅の槍。

二股に分かれた赤い槍の先端を、光の輪に向けて構えた。床を蹴り跳躍。

槍の先端を前方に突き出し、走ってきた力、跳躍した力、自身の全体重。それら全ての力を槍の先端に込めて、眩い光を放つ八角形の輪に向かって突っ込んだ。

ATフィールド。

外部からのあらゆる干渉を拒む壁。

八角形の光の輪を幾重にも折り重ねて構築された、絶対不可侵の壁。

槍の先端が触れた瞬間、光の輪はまるで風に吹かれた石鹸の泡のように軽々と吹き飛ばされ、散り散りとなっていく。



そこは光に満たされた空間だった。

何重もの光の輪に囲まれた密閉空間の中で、一人佇む学生服のブラウスとスカートを身に纏った少女。

彼女は、光の輪の外の事態を測りかねていた。

この粗野で無粋な鋼鉄の船を粉々に破壊する極めて激しい衝撃に備えるため、こうし

て自分の周りに光の壁を溢れさせたのだが、その衝撃が一向に来ないので。

そして地上に向かって墜落をしていたはずの船が、今は急速な上昇を見せている。

「何が…、起きているの…？」

少女の顔には感情が宿っていないが、その声には明らかに戸惑いの色が混じっていた。

「なに…？」

ふと、少女は前方を見つめる。

前方を埋め尽くす光の輪の向こうから、爆発音のようなものが聴こえたのだ。

「なにか…、くる…！」

自身が構築したATフィールドの塊に違和感。

ATフィールドの塊に、異物が食い込んでくる感触。

いかなるものも通さない壁。

ましてや、何百もの層に重ねて構築したこのATフィールドの塊は、たとえ間近で超新星爆発が起きたとしてもこゆるぎもしないはず。

その絶対不可侵の壁に、いとも容易く食い込んでくるもの。

「まさか…！」

少女が眉間に深い皺を寄せ、そう呟いた瞬間。

彼女の前を塞いでいた光の塊の一部が音もなく泡となって消え失せ、光の塊の真ん中にぽっかりと空いた穴の中から、何者かが飛び出してきた。



赤い槍を前方に突き出し、光の壁が幾層にも折り重なった光の塊の中を突き進んでいく。

槍の先端は触れる光の壁を瞬時に泡と変え、槍を握る者に壁を穿つ衝撃すら感じさせない。まるで極めて濃い、光る霧の中を進んでいるよう。

そしてついに光の霧が途切れる時がやってきた。

光の霧が晴れたその先。

光の霧の向こうに現れた者。

光の霧に囲まれた中に佇むスカート姿の少女。

自分の姿と、瓜二つの少女。

光の霧の中を突き進んできた黒スーツの少女は、二股の槍の切っ先をスカート姿の少女の顔に突き立てるべく、槍を大きく振りかぶった。

光の壁の穴から飛び出してきた者。

黒スーツを着た、空色髪の少女。

自分の姿と、瓜二つの少女。

スカート姿の少女は目を細め、奥歯を噛み締め、黒スーツの少女を鋭く睨んだ。

「あの筐体に押し込めて追い出したはずなのに……！」

黒スーツの少女は目を細め、スカート姿の少女を鋭く睨んだ。

「碇くんを……返して……！」

頭上に掲げた槍に渾身の力をこめ、その先端をスカート姿の少女の頭部に向けて突き出した。

少女の小さな鼻の先端に、槍の切っ先が触れる。

少女の顔が恐怖に引き攣り、頬に一筋の冷や汗が伝った。

しかしスカート姿の少女の鼻に突き立てられた槍の切っ先が、それ以上進むことはなかつた。

引き攣っていたスカート姿の少女の顔に、酷薄な笑みが浮かんだ。

あと少し。

この槍を、もう数ミリ突き出せば、その先端は標的の顔を穿つのに。

黒スーツの少女は懸命に槍を進めようとするが、しかし槍はこれ以上前進することを拒む。

なぜなら、槍を構える少女の腕に、足に、腰に、床から伸びた大量のケーブルが巻き付き、彼女の体を拘束していたからだ。

「槍も届かなければ…、ただの棒ね…」

大量のケーブルに四肢を拘束され、じたばたと必死に体を動かそうとしている黒スーツの少女を冷笑するスカート姿の少女。

細い腕を、腰を、足を何十本ものケーブルで締め上げられ、激痛が走る。

それでもなお少女は。

「碇くんを…！」

全身に走る痛みにも顔を顰めながらも、体を前に進めようとする。

「返して…！」

槍を前に進めようとしている。

細い足で床を押し、瘦せた背中中で上半身を前に突き出し、枝のような腕を懸命に伸ばす。

槍が少しずつこちらに近づいてきたので、スカート姿の少女は顔に驚きの表情を浮かべながら、二歩後ろに下がった。

「あなたといい…、きつきのコといい…。最近の女のコの…、しつこきは…、どうかして
るわ…。これじゃ…、シンジが…、可哀そうよ…」

「碇くんを……!」

ついに黒スーツの少女の腕に絡み付いたケーブルが根負けした。限界まで伸び切ったケーブルはついに千切れ始め、拘束の力が急速に緩んだ腕は、拘束されることで溜め込まれた力を解放するかのようになり、握った槍諸共に一気に前に突き出された。

「返して……!」

槍の切っ先は、再びスカート姿の少女の顔に襲い掛かった。

眩い火花が弾け飛ぶ。

両手を痺れさせる硬い衝撃。

黒スーツの少女の表情に、悔しさが滲んだ。

スカート姿の少女に突き立てられるはずの槍の切っ先。

それが、鉄の板によって阻まれていたのだ。

少女と少女の間には何もなかった。

しかし、黒スーツの少女が銅線入りのケーブルすらも引き千切つてその槍を前に押し出す姿を見るや、スカート姿の少女は瞬時に部屋の壁と床の鉄板を見えざる手によって片っ端から引き剥がし、自身と少女の間に並べて鉄の壁を構築したのだ。

少女の頭部に届くはずだった槍の切っ先は、今度は文字通りの鉄壁によって、止まってしまったのだ。

「その槍でも…、非力なあなたじゃ…、この壁は打ち破れない…」

スカート姿の少女の顔が、鉄の壁の隙間から見える。

歯を見せて笑っていた。

「ありがとう…」

目を細めて、満足そうに黒スーツの少女を見つめている。

「こんなにも…、私の息子を…、愛してくれて…」

鉄の壁を通して、涼やかな声が黒スーツの少女の鼓膜をくすぐった。

スカート姿の少女は、自分の背後に張り巡らせていたATフィールドの塊を一旦解い

てそれらを結晶化させ、その右手にATフィールドの結晶を集め始めた。

黒スーツの少女が持つ真紅の槍の前に、ATフィールドはたちまちその効果を失ってしまう。それでもスカート姿の少女は、ATフィールドをその白い手にかき集める。少女の手のひらの上で、無数のATフィールドの結晶が、超高速で踊り狂う。結晶同士が激しくぶつかり合い、弾け飛び、結晶同士と空気との摩擦熱で、手のひらに膨大な熱エネルギーが発生する。

このエネルギーを生み出しているのはATフィールド。しかし槍がATフィールドの効力を無効化するものであっても、ATフィールドによつてすでに発生したエネルギーまでは、無効化することはできない。

手のひらの上に発生させた、まるで極小の太陽のような光の塊。

スカート姿の少女は、その光の塊を、鉄の壁の向こうにいる黒スーツの少女に向けた。

「さようなら…。私の分身…」

触れるもの全てを一瞬にして蒸発させてしまうほどの熱量を持った光の塊。

その光の塊を、黒スーツの少女に向けて解き放つ。

白い手から光の塊が離れようとした、その時。

黒スーツの少女の肩越しに、少女が光の壁に開けた穴の中を、ゆらゆらと揺れながら歩いてくる人影が見えた。



光のトンネルの中を歩く。

「あたしの中の…、バルディエルちゃん…」

全身くまなく打ち、意識は朦朧としたまま。視界も霞んでしまっている。

「かわいい…、かわいい…、バルディエルちゃん…」

今にも折れてしまいそうな膝に鞭打ちながら、ゆらゆらと歩き続けて。

やがて光のトンネルを抜け、少し広い場所に出ってきた。

そこに居たのは、こちらに背を向け、前方に立ち塞がる鉄の壁に赤い二股の槍を突き立てている黒スーツの少女。

鉄の壁の隙間からは、その壁に隠れて閉じこもっている、スカート姿の少女が見える。

スカート姿の少女は右手を光らせながら、黒スーツの少女を見ていた。

その顔に、薄笑いを浮かべて。

ところが、スカート姿の少女は、こちらの存在に気付いたらしい。

その少女の目が黒スーツの少女から外れ、こちらに向けられる。少女の顔から、薄笑いが消えた。

一方のアスカは笑った。

はしたなくも、舌なめずりをしながら。

左目を塞いでいた眼帯を外す。

「あんたに…、あたしをもうちよい喰わせてあげるから…」

眼帯の向こうから現れたのは紫色の肌。そのまるで腐った骸のような肌の中に収まる、真紅の瞳。

「あたしに…、あんたの力を貸しなさい！」

その瞳が禍々しく光り出し、瞳の周囲の肌をマグマのように赤く染めていく。

アスカは歯を食いしばって左眼周辺を襲う激痛に耐えながら、ここまで引きずってきた大型ハンマーの柄を両手で持ち、頭上に高々と掲げた。

「どおりやあああああああ!!」

掛け声を上げながら跳躍。

2人の少女の間に立ち塞がる鉄の壁に向かって、襲い掛かった。

「くっ!?!」

スカート姿の少女は咄嗟に左手を前方に翳した。左手から放たれる、光の輪。

光の輪が、鉄の壁をハンマーで打ち砕こうとしているアスカに向かって、急速に迫っていく。

ハンマーを頭上に掲げて諸手を上げている状態のアスカ。その胴体は、無防備に開けられている。

そこに迫っていく光の輪。

しかしその光の輪はアスカに迫る直前で掻き消えた。

黒スーツの少女が、槍で光の輪を薙ぎ払ったのだ。

「出直してきましたよお!! お母さまあああああ!!」

アスカの渾身の力で振り下ろされたハンマーの先端が鉄の壁に触れた。

瞬間、分厚い鉄の壁はいとも簡単に粉々に打ち砕かれた。

ついにスカート姿の少女の前に立ち塞がっていた最後の壁が崩れ落ちた。

黒スーツの少女は槍を抱え込み、露わになったスカート姿の少女に向かって再度の突進。

「行きなさい!! えこひいき!!」

アスカも握っていたハンマーを投げ捨てると、黒スーツの少女の背中に抱き着き、そ

の華奢な背中ごと黒スーツの少女が抱え込む槍を前進させる。

二股の槍の先端が、白いブラウスの胸の前にまで迫って。

「調子に乗るなあ小娘どもがああああ!!」

卵のような白い額に、無数の血管が浮かび上がる。

顔中に怒りの表情を浮かべるスカート姿の少女は、ついに右手の光の塊を弾けさせた。

光の塊は幾つものATフィールドの結晶となって別れ、まるで火花のように方々へと散らばらる。

凄まじい熱量を孕む結晶たちは、あつという間にエアロック室の中を火の海にする。

スカート姿の少女は光の塊を弾けさせた反動で後方へと跳躍し、2人の少女から一気に距離を取る。

「焼け死ねっ!! ガキどもっ!!」

大きな炎の向こうで、なおも槍を抱えて突っ込んでこようとする2人の少女に向かって、次々と炎を纏うATフィールドの結晶を放った。



「艦長！ 本当にやるんですか!？」

「愚問！ 我々ヴィレが、やられつつ放しで黙っていられるものですか!？」

怒りを通り越して笑みすら浮かべているミサトの顔を見て、日向は諦めたように天を仰ぎ、そして砲塔を操作する操縦桿を握った。

それを見た隣のピンク色の髪をしたオペレーターが嘆く。

「やっぱこの艦の人みんな頭おかしいよぉ〜!？」

「標準固定よし！ 目標周辺の乗組員も、エアロック室内部の者を除いて全員退避完了済み！ いつでも撃てます!？」

「よろしい！ 全員耐ショック姿勢!？」

ミサトと操縦桿を握る日向を除く全員が、姿勢を低くし、頭を抱える。

「撃てえ!!」

ミサトの勇ましい号令が木霊した。



ついに、あの忌々しい二人の小娘の姿が炎に巻かれて見えなくなった。それでもまだ油断はできない。

あの二人の小娘の尋常ではないしつこきは、身に染みているのだ。

あとはこのエアロック室をまるごとペしやんこにして、あの小娘どもを押し潰してしまおう。

スカート姿の少女が頭の中で勝利に向けての算段が固まったその時。

背後から気配を感じた。

振り返る。

振り返ったとしても、その後ろにあるのは炎と、その炎の向こう側にある、少女が背中から切り離れた白い6枚の翼。その6枚の翼が塞いでいるのは。開放されたままのエアロックハッチ。

その気配は、ハッチの向こう側から。

ハッチの向こう側は、宇宙空間。

その宇宙空間の中を、高速で飛来してくる何か。

炎に囲まれても汗の一つも掻かなかった額に、一筋の冷や汗が伝った。

宇宙空間を切り裂いてやってくる「何か」。

自分にとって脅威となりうる、何か危険なものが高速で近づいて来ている。

少女は、咄嗟にハッチ側に向かって何重ものATフィールドを張り巡らせた。

直後に、ハッチ周辺が爆ぜた。

宇宙空間からやってきた「何か」は、ハッチ周辺の壁を丸ごと破壊し、なおもその勢いを留めず、6枚の翼も粉々に砕き、さらに前進してくる。

何かはついに少女が張り巡らせたATフィールドに到達。

何ものをも通さない絶対不可侵の壁は砕けることそなかったが、膨大な運動エネルギーを抱え込んだままやってきた「何か」によつて大きく押され、その背後にいた少女ごと押し潰してしまひそうになる。

「こんなもの……!!」

少女はATフィールドを押し込んでくる「何か」に向かつて両手を掲げた。

途端に、少女と何かの間に、何重もの分厚いATフィールドが張り巡らされる。

「こんなもののおおおおお!!」

少女はその手に幾筋ものATフィールドの結晶を迸らせて、自分を押し潰そうとする「何か」を懸命に押し返そうとした。



まるで太古に滅んだ翼竜のような姿をした戦艦。その丁度左後ろ足にあたる艦後部に備えられた電磁加速砲が放った弾体は、照準通り正確に己の尻、艦体後部の機関室隣に配置された第5エアロック室へと真つすぐに突き進んでいった。

しかし。

攻撃の成果を分析していた日向は悔し気に言う。

「ダメです。弾体は…、ATフィールドに弾かれました」

意気消沈している日向に、しかしミサトはその目から生気を失わない。

「そんなことは百も承知よ！ マリ！」

ミサトが叫んだ瞬間、スピーカーから陽気な声が鳴り響いた。

『ほいほいほーいー！』



高速で飛来してきた砲弾を、分厚いATフィールドで何とか弾き返した少女。肩で息をしながら、大穴が開いたエアロック室の壁を睨んでいた。

穴の向こうは広大な宇宙空間。

その大きな穴を、何ものかが塞いだ。

少女の赤い2つの瞳と。

巨人の黄色い8つの瞳とが交錯する。

大穴を覗き込む8つの目を宿した巨人。

その巨人が、開いた穴に向かってその巨大な手を突っ込んできた。

細長い筒状の構造をしたエアロック室の壁を次々と破壊しながら近づいてくる巨人の手。

少女は直ちにATフィールドを再構築させる。

しかし巨人は、この世界でATフィールドの使役を許された、数少ない存在。穴に突っ込んだ手にATフィールドを張り巡らせ、少女が構築したATフィールドをたちまち中和させ、霧散させてしまう。

迫ってくる巨大な手。少女はただちに床を蹴って、エアロック室の奥へと一気に下がる。

なおも追いかけてくる巨大な手に対し。

「舐めるなああああ!!」

再び無数のATフィールドの結晶を発生させ、巨人の手に向かって一斉に放った。

鋭利な刃と化した無数のATフィールドの結晶たちは、巨人の手をあつという間にズタズタに破壊する。

手首からその下の前腕部、装甲の下の筋肉や神経までをぼろ雑巾のように破壊された巨人の手は、少女まであと一メートルの位置で、ようやく止まった。

巨人の手は、大穴が開いた壁を塞いだまま動かなくなった。

動かなくなった手を見て、少女は震えた溜息を吐く。

長い溜息を吐き切って。

そしてようやく少女は気付く。

自分が火の海にしたはずのエアロック室の中から、いつの間にか炎が消えていることに。

壁に穴が開いたことよって急速に室内の酸素濃度が下がり、室内を満たしていた炎が鎮火してしまったらしい。

そしてもう一つ気付く。

自分は、巨人の手から逃れるために、エアロック室の奥へと引き下がった。

それはつまり。

背後に気配を感じた。
背筋に、冷たいものが走った。

「碓くんを……」
「シンジを……」

背後を振り返った瞬間。

「返して……！」

少女の脇腹に、真紅の槍が突き刺さっていた。

最終話

「なんですって…!?!」

リツコからの報告に、ミサトは悲痛な声を上げる。そんな上官に対し、リツコは同じ報告を繰り返した。

『エアロック室内から全ての生体反応が消えたわ』

「そんな…! マリ、本当に船外には誰も出てないんでしょうね?」

『間違いありませんよ! 艦長が大砲で艦体ぶっ飛ばした直後に8号機でちゃんと塞ぎました! あたしが姫を見落とすはずないじゃないですか!』

いつになく真剣な声音でマリの返事が返ってきた。

ミサトは再度モニターを睨む。

モニターには、エアロック室内を映し出した映像。槍を持った彼女がエアロック室内に飛び込んだ時に、リツコが投げ入れた小型カメラから送られてきたもの。

2人の少女が標的に槍の先端を突き立てた瞬間、画像全体を眩い光が支配した。閃光

は30秒ほど続いた後に消失。

光が消えた後に現れた室内。ズタズタに破壊された8号機の前腕が突っ込まれた室内。

そこに、人影は一つもなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

綾波レイは光の奔流の中に居た。

光はある一点に向かって凄まじい速さで流れている。その一点がまるでブラックホールのように、周囲の光を悉く吸い込んでいたのだ。

光が集まる場所を背にして、それは浮かんでいた。

眩い光の中に浮かぶ黒い影。煙のような、黒い「澱み」。

光の中でゆらゆら揺れる黒い「澱み」は、光の奔流に流されまいと必死に藻掻いているようにも見える。

そんな黒い「澱み」に、綾波レイは右手を差し伸べる。

近づく真白い手に怯えるように、黒い「澱み」は声を発した。

「何を……！ 近づくな……！」

まるで男の声と、女の声とが重なったような、そんな不可思議な声を発する黒い「澱み」に、綾波レイは涼やかな声で言う。

「本来あるべき場所へ…、帰るの…」

すると黒い「澱み」は女の声のみで言った。

「嫌よ…。せつかくシンジと…、会えたのに…。シンジの側に…。居たい…。シンジは…、私が守らなければならないの…。この世界は…。シンジにとっては辛いことばかりだもの…。あの子は…。私が守らなくちゃ…」

そして次に黒い「澱み」から発せられた声は、再び男の声と女の声とが重なった不可思議なものだった。

「こんな世界…。壊してしまわなくちゃ…！」

綾波レイは静かに頭を横に振る。

「碇ユイも、碇ユイの仮面を被ったあなたも…。この世界に干渉することは…許されない…」

「なぜ…。シンジが苦しんでるんだもの…。私にはこの世界を矯正する力がある…」

「私はシンジを苦しみから永遠に解き放つてやることができるの…！」

「彼らの世界は…。彼らの未来は…。そこで生きる彼ら自身の手で切り拓かれるもの…。一度でも…。この世界から離れることを選んであなた達が出来るとは…。この世界で

何が起きようとも…、たとえ愛するものが傷ついたとしても…、彼らが生きる姿を、黙って見守ることだけ…」

「あなたは悪魔よ…！　こんな辛い世界で、シンジに生き続けろと言うの…！」

「あなた達は神ではないわ…。碓くんは…、すでに選択している…。この世界で生き続ける、と…。碓くんも…、この世界も…、すでにあなた達の手から離れているの…」

「すでに一度…、この世界から離れた者…。貴様は我々をそう言ったな…」

黒い「澱み」から発せられた声。男のみの、まるで氷の刃のような、冷たい声。

「ええ…」

綾波レイはその声を、涼やかな眼差しで受け止める。

「それは貴様自身でもないか」

再度、刃のような冷たい声。

「ええ。分かっているわ…」

それでもなお、綾波レイは涼やかな眼差しでその声を受け止める。

綾波レイは差し伸べていた右手で、黒い「澱み」に触れる。

触れた瞬間、「澱み」と綾波レイの手との間に眩い燐光が幾つも弾けた。

続けて綾波レイは左手も差し伸べ、黒い「澱み」に触れる。やはり左手と黒い「澱み」が触れた瞬間、幾つもの燐光が弾け飛ぶ。

両手で黒い「澱み」を包み込んだ綾波レイは、そのまま黒い「澱み」を自身の胸へ寄せる。

そしてそつと抱き締めた。

たちまち、綾内レイの胸からも無数の燐光が溢れ出す。

眩い燐光たちはやがて柔らかな光の螺旋へと変化する。

その螺旋は、まるで赤子が眠りにつくための揺り籠のよう。

光の揺り籠の中に、黒い「澱み」はその身をゆつくりと委ねた。

「我々が深い深い眠りについた時」

黒い「澱み」から漏れる男の声。しかしその声に刃のような冷たさはもはやなく、毛布に包まれて温められたように和らいでいる。

「いつかまた、世界が我々を必要とする時が来る。滅びかけの世界を抹消し、新たな世界を始めるために……。そう信じていたのだがな……」

綾波レイは抱き締めた黒い「澱み」に、その真っ白な頬をそつと寄せた。

「あなた達がこの地球にもたらした生命の息吹は……。幾度も大輪の花を咲かせたわ……。幾つもの絶滅の危機を乗り越えて……。そして今、彼らは再び滅びの危機に直面しているけれど……。でも大丈夫よ……。彼らはきつとまた乗り越えられる。だって……。彼らはあなた達の子供たちだもの……」

「そうか……。ならば……。ならばせめて……。我を褒めてくれ……。見事な華を……。咲かせる種を撒いた者……。として……」

微睡む黒い「澱み」の声は、途切れ途切れになっていく。

そんな「澱み」に、綾波レイは赤子を寝かしつける母親のような声で囁き掛ける。

「ええ……。よくやったわね……。そしてありがとう……。私たちに、未来を生きる命を与えてくれて……」

「ふむ……。今は貴様のその言葉で……。満足する……。ことに……。しよ……。う……。か……」

やがて「澱み」は光の螺旋の中で、少しずつその影を綾波レイの胸の中へと沈めていった。



真つ白な光に満たされた空間。

そこに2人の少女が立っていた。

お互い体に一切のものを纏わぬ、生まれたままの姿。

透き通るような白い肌。

空色の髪。

2つの真つ赤な瞳。

体のあらゆる部分が寸分違わず同じ色、形をした2人の少女。一卵性双生児どころではない、まるで鏡を合わせたような、複製体のような2人。

ぱつと見では見分けなどこれっぽっちもつかないような2人だが、しかしそれぞれの人格によって形作られているその面持ちは明らかに異なっており、2人がそれぞれ全く別の人生を歩んできた、全く別の人物であることが分かる。

そんな2人が、人一人分の隙間を開けて肩を並べて立っている。

まるで誰かが来るのを待っているかのように。

やがて、白い光の向こうから、その人物は現れた。

その少女も、やはり先の2人と寸分違わず同じ顔、同じ体をしている。

自分と全く同じ顔をした2人の少女の前に、その少女は立った。

少女はおもむろに口を開く。

「時間がないわ…。手早く進めましょう…」

その少女の言葉に、肩を並べた2人の少女のうち、右側に立っていた少女は真剣な表情で頷いた。

左側に立っている少女は、どこかぼんやりとした表情でぼけーっと突っ立っている。正面の少女は言う。

「槍の力によつて器を失つた皆の魂は、新たな主を求め初号機のコアへともう間もなく吸収される。でも、あのコアから生まれた私たちなら、その流れに逆らうことができる。私たちが、彼らを助けましょう」

正面の少女は、2人の少女の顔を交互に見た。

「ただし、私たちの非力な力では、助けられるのは1人につき1人まで。誰が誰を助けるか…。簡単なことね。あなた達が今、一番大切にしたいものを助けたらいい…」

正面の少女は、右側の少女を見る。

「あなたはもう決まっているわね…」

右側の少女は頷く。

迷いのない少女の表情に、正面の少女は表情を崩し、少しだけ微笑んだ。

「どう？ 彼つて…、とても素敵な人でしょ？」

そう問われ、右側の少女は両頬を赤らめ、俯いてしまう。

そんな少女を、正面の少女はまるで可愛い妹を見るような、優しい表情で見つめた。

「お願いね…、彼のこと…」

少女は顔を俯かせたまま、頷いた。

次に正面の少女は、左側の少女を見る。

「あなたはどなの？」

そう問われた左側の少女。

「ああああ……」

即座に正面の少女に向けて唸る。

その唸り声に、正面の少女は眉根を寄せた。

「違う。今はインスタントラーメンのことはどうでもいい」

正面の少女にびしやりと言われ、左側の少女はくりくりとした可愛らしい目を天に向けて、ちよつとだけ考え込む。

すぐに何かに思い当たったようで、笑顔で正面の少女を見た。

「ああああすうううかあああ」

その返事を聞き、正面の少女は柔らかく微笑む。

「では決まったわね」

「あなたは……」

右側の少女がおずおずと口を開く。

「あなたは……、どうするの……？」

右側の少女のその問い掛けに、正面の少女は一瞬、ほんの少しだけ寂しそうな顔をし

た。

しかしその寂し気な表情はすぐに打ち消し、再び柔らかく微笑む。

「ありがとう…」

問いに対する返事の代わりに、感謝の言葉を右側の少女に送る。

「あなたのおかげで…、碓くんに直接…、私の想いを伝えること…、できた…」

右側の少女は眉根を寄せ、目を潤ませる。

「どこか頼りなく映る右側の少女のその表情。正面の少女は、につこりと笑う。

「頑張つてね…。あの赤毛の女の子に…、負けちゃだめよ…」

その静かなエールに、右側の少女は顔を俯かせ、肩を震わせながら頷いた。

「それとあなた…」

左側の少女を見る。

「ああああ…」

「あらゆる軛から解き放たれたあなたは、私たちの希望よ…。どうか、そのまま自由に生きて…。私たちが見いだせなかった可能性を、あなた自身の手で掴んで…」

「ああああ…」

言っている意味が伝わらなかったのか、左側の少女は不思議そうに首を傾げ、唸っている。

そんな様子の少女に、正面の少女は少し困ったように笑ったが、何かを思い出したように急に真顔になった。

「自由に生きるのはいいいけれど、でもこれだけは守って」

「うあ？」

「2度と、私と同じ顔で、人前でゲップなんてしないで…」

「ああ？」

「特に碓くんの前では…」

「ああああ…」

まるでがさつな妹を叱りつける様に言う正面の少女。

そんな少女と、ちょっとバツが悪そうに口をへの字曲げている左側の少女の様子に、右側の少女は手もとに口を当ててクスクスと笑っている。

そんな右側の少女にも、正面の少女の鋭い視線が向けられる。

「あなたもよ…」

「え？」

急な矛盾の変更に、右側の少女の笑い声が止まった。

「せつかく、碓くんを攫ったのに。ぽつと出の青二才に美味しいところ全部持っていかれるなんて。そんな調子で、あの赤毛の子と張り合えるの？」

「うう……」

姉から厳しい叱責をくらい、しゅんとしてしまう妹。

「ああはっはっは……」

そんな2人の様子に、末っ子が声を出して笑っている。

真つ白な光に満たされた空間の中を、3人の姉妹たちが上げる小鳥のような笑い声が、慎ましやかに木霊していた。

2人の少女が去り、一人残った少女。

背後から声があった。

「ぽつと出の青二才」は酷いな」

振り返ると、銀髪の少年が困った顔をして立っていた。

少女は少年の抗議の声を無視し、目線で話しの続きを促す。

「初号機の掌握は済んだよ」

少年の報告に、少女は小さく頷いた。

「でもいいのかな？」

少女は「何が」と首を傾げる。

「僕がこれからすること。それは君がやってもいいことだと思うけど」

少年の言葉に、少女は小さく頭を横に振る。

そして自身のお臍を見下ろした。右手で、そつとお臍の周りを撫でてみる。

「私は「これ」と約束したから……。「これ」を本来在るべき場所へ返すと……」

「でもこれでシンジくんとは……」

少年のその言葉に、少女は顔を上げ、後ろを振り返る。自分とよく似た2人の少女が去っていった方へと、視線を向けた。

「私の想いは、妹たちが引き継いでくれたわ……」

少女の言葉に、少年は感慨深げに深く頷いた。

「想いは引き継がれる……か……。単体生物の僕らにはない発想だったな。代を紡いでいく、人間ならではの考え方だからね」

少女は改めて少年に向き直る。

「そして、碇ユイの願いは私が引き継ぐわ…」

「そっか」

そう言つて、少年は少し寂し気に微笑んだ。

「じゃあ、ここでお別れだね」

別れを切り出す少年。

少女はそんな少年に、すつと右手を差し出す。

その手を、少年は意外そうに見つめる。

少女は微笑んで言った。

「ありがとう、渚カヲル…」

少年の白い手が、少女の白い手と交差する。

「こちらこそありがとう。綾波レイ…」



室内を突如眩い閃光が瞬き、激しく明滅する。

その明滅は10秒ほど続き、ドンという何かが床に落ちたような音と共に、光は現れた時と同じように唐突に消えた。

光の消失と共に、2人は居た。

冷たい鉄の床に横たわる2人。

一人が、ゆっくりと目を醒ます。

もう一人も、ゆっくりと目を醒ます。

お互い向き合うように倒れている2人。

お互いの手は、固く握られている。

お互いの顔を確認し、共に笑顔を見せる2人。

1人が言った。

「あんたの声…、聴こえたよ…」

その言葉に応えるように、もう一人も口を開ける。

「あああすううかああ…」

「レイ…」

アスカはにつこりと笑って自分の名を呼ぶ、ブラウスとスカートを着た少女の空色の

髪に手を伸ばす。そつと、空色の髪を掻き上げ、少女の頭を撫でた。

少女はアスカの手に、くすぐったそうに肩を竦ませる。

「あ、す、か……。す、き……」

少女はたどたどしい言葉で言う。

「あたしも……。レイが大好きだよ……」

「与圧完了。気圧、酸素濃度、共に問題なし」

「早く開けて!」

不測な急速減圧を受けて緊急閉鎖されていた隔壁が開き、ミサトはエアロック室に駆け込んだ。

「アスカ!」

床に倒れていたアスカのもとに駆け寄ろうとして、足もとに落ちていた眼帯に気付く。

眼帯を拾い上げ、改めてアスカのもとに駆け寄った。危惧した通り、アスカの顔の3分の1がまるで死人のように紫色に変色していた。ミサトは、周囲の肌を焦がす勢いで煌々と光るアスカの左目に、眼帯を巻き付ける。左目を塞いだ眼帯は、まるでその下で

マグマがふつふつと沸き立っているかのように赤く光り、激しく隆起していたが、やがて光も隆起も消失していった。

「まったく、無茶して…」

「無茶はヴィレのモットーでしょ…」

ミサトの半分は心配し、もう半分は呆れたような声に、アスカは肩を竦めて答えた。

「ねえ、アスカ…」

「なに？」

「シンジくんは…？」

目の前の少女の髪を愛おしそうに梳いていたアスカの手が、ミサトのその問いに止まった。

「あのバカ、まだ還ってないの…？」

アスカの呆れたような声。

ミサトは室内を見渡す。

ここには、自分とアスカと少女と。その3人以外の姿はない。

「シンジくん…」

ミサトは焦燥を露わにした顔で呟く。

そんなミサトの腕を、誰かが触れた。

ミスアトは、自分の腕に触れた手の主の顔を見る。

純粹無垢な赤い瞳が、ミスアトを見つめていた。

その少女は大きく口を開く。

「うあ・いい・うおお・ぶうう」

「え？」

不明瞭な少女の発語に、ミスアトは思わず聞き返してしまふ。

「ああ・ういい・おお・ぶううう」

「え？ ごめん。分かんない……」

「ぶうううううう!!」

自分の言っていることを理解しようとしないうミスアトに、イライラし始めた少女は頬を膨らませて抗議した。

そんな2人のやり取りを微笑みながら見ていたアスカは、ミスアトに助け舟を出してやった。

「大丈夫」だつてさ。ミスアト

アスカがそう言つた、その時だった。

再び強烈な光が瞬き、激しく明滅する。

ミスアトもアスカも少女も、あまりの眩しさに目を瞑り、手で目を塞いだ。

直後、ドンという音が響いた。

目を開く。

霞んだ視界の中に見えるもの。
腕。

黒と白の腕。

黒いスーツを纏った腕。

自分の腕。

その黒い腕に巻かれた白い包帯。

その包帯は途中から剥がれ、自分から少し離れた場所へと伸びている。

その包帯の先を、誰かが握っている。

包帯の先を握る手。

少年の手。

少年の手が、包帯の先を握っている。

自分と同じように、鉄の床に横たわる彼。

閉じられた瞼が、薄く開いた。

瞼の隙間から現れる、彼の瞳。

黒曜石のような瞳と、目が合った。

彼の目が大きく見開かれ、驚いたように私を凝視する。

驚きはやがて喜びへ。

両眉をハの字に傾け、口角を上げ、瞳を潤ませ。

しかし、その喜びは唐突に消える。
何かに気付いたように、私の顔をじっと見つめる彼。

彼の眉間に皺が寄った。

目を細め、下唇を噛む。

それは悲しみの表情。

私の心臓が、驚掴みされたようにズキンと痛む。

しかし、彼はその顔から悲しみの表情をすぐに消した。

改めて私の顔をまじまじと見る。

そして彼はそつと目を閉じた。

再び瞼が上がった時、彼の顔には柔らかい笑みが宿っていた。

彼の手が包帯を手繰り寄せる。

包帯に引つ張られる私の手。

彼の手に近づいていく私の手。

彼は、私の手をそつと握った。

私の体温を確かめるように、私の手のひらを撫でる彼の手。
ゆっくりと指と指とを絡める。
そして、彼は静かに口を開いた。

「ありがとう…、クロ…」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ E p i l o g u e ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

『現在、高度55キロメートル、時速13,357キロ』

『艦首温度、1600度。耐熱シールドに異常なし』

『エンジン再点火まで5秒前、3、2、1、点火。エンジン点火』

『エンジン点火確認。逆噴射開始』

『艦体の減速を確認。現在時速10,112キロ、9,887キロ、9,237キロ…』

『高度5万メートルを切りました。全て順調です』

『了解。再突入シークエンス終了。各部署より報告』

『重力制御装置問題なし』

『自律動作正常に作動中』

『遠隔操作異常なし』

『全て異常なし。全艦、警戒シフトにて航行中』

『目標確認。旧第3新東京市上空は全方位クリア。地表のコア化状況はカテゴリー1
0』

『本艦の空間座標を確認。作戦開始ポイント到達まであと10秒』

『了解。全艦戦闘シフトへ移行』

『全艦フォーメーションを戦闘シフトへ移行します』

『エヴァ8号機β』

『はいはいはい。8号機、オールオツケー』

『作戦ポイントに到達』

『8号機β、発進せよ』

『8号機、発進しまーす!』

『8号機、本艦より切り離し成功。自律飛行へ移行しました』

『続けて新2号機α』

『こちら2号機。いつでもいいわ』

『了解。間もなく切り離しポイ…ちよちよ、ちよつとあなた!』

『アースカー！』

『ちよつとレイちゃん！ 今は邪魔しちやだめよ！』

『アースカー！』

『ははっ。レイ、そこに居んの？』

『うーん！』

『待つてなさい。姑さまに約束した通り、あのバカ親父…じゃなかった、舅さまをいつちよ揉んできてやつから』

『もんでもんでー！』

『なるべく早く帰るから。それまではそこのお婆さんのゆーこと、よく聞いてんのよ？』

『うーん！』

『ちよつとアスカ。お婆さんはないでしょう』

『アスカー！』

『なーに？ レイ？』

『がんばれー！』

『うん、アスカちゃん、頑張っちゃう！』

『あ、ねえねえレイレイ。あたしにもお願い』

『マリリンもがんばれー！』

『合点承知の助え！』

『ちよつとあんた達。切り離しポイントをすでに10秒オーバーしてるんだけど』

『え？ あれま』

『誰に言ってるのよ、リツコ。このアスカ様の手に掛ければ10秒のマイナスなんて、あつという間に取り返してやるんだから』

『いいからさつさと行きなさい』

『はいはい。じゃあレイ！ 行ってくるわ！』

『いつてらつしやーい！』

『2号機、発進！』

『新2号機α、本艦より切り離し成功』

『2号機及び8号機は降下用空母へ着艦せよ』

『りようかーいー』

『今行ってるわ』

『続けてエヴァ11号機』

『はい…』

『本艦より切り離した後、11号機は2号機及び3号機の降下を援護』

『……』

『どうしたの？ 11号機』

『……』

『復唱せよ。11号機』

『その依頼は承服しかねます……』

『ちよつとあんた！ 今、なんつった！』

『…アスカは任務に集中しなさい。11号機、何か問題でも？』

『私とヴィレとの契約内容は、初号機及び碇くんの護衛。2号機と8号機の護衛は契約の範疇にありません』

『この期に及んで何言ってるのよ！ さっさとあたしたちの援護に付きなさい！』

『そーだよそーだよ。このままじゃ背中が寂しいじゃくん』

『契約内容にないものを無理強いする……。これがブラック企業……』

『あんたがつい先日まで居たネルフの方がよっぽどブラックでしょうが！』

『非正規職員に対する正規職員の不当な圧力……。これがパワハラ……』

『あんたねえ……！』

『あーもう分かった分かった。艦長裁量により11号機パイロットを現時刻をもって正規職員に登用します。これで文句ない？』

『艦内行動の自由は？』

『認めます』

『職員食堂の利用は？』

『認めます』

『有給休暇の取得は？』

『認めます』

『シャワー室の利用は？』

『シャワーは正職でも2週間に1回までよ』

『あんなたちねえ！』

『11号機、発進します』

『あ、えつと…、11号機、切り離し成功しました』

『こらあ、キュウジウロクー！』

『もういいから。作戦シークエンスをすでに1分オーバーしてるわ。目標は？』

『旧第3新東京市の上空に敵影を確認！ エヴァ13号機です！』

『来たわね…』

『さらに機影。ネーメズイスシリーズです。その数…、1,000を超えています！』

濃紺の空の中に瞬いてた星々はやがて消え、周囲はオレンジ色の炎に包まれた。
轟音と共に激しい縦揺れ。

オレンジ色の炎の隙間に見える、青い空。

眼下に広がる、赤い大地。

「戻ってきたんだ……。地球に……」

青いスーツに身を包んだ少年は座席に深く身を沈めながら呟く。

何度か右手を握っては開き、握っては開く。

少年が体を預ける座席の前方にある画面に、文字が浮かびあがった。

『心拍ノ上昇ヲ確認。少シ緊張シテルノカナ』

その文字に、少年は微笑む。

「ふふっ。プラグスーツを着てたら、君には何でも筒抜けになっちゃうね」

『ソナナコトハナイ。ボクニワカルノハ、君ノ体温ト血圧、心拍数、酸素飽和度、アトハ
心電図クライ』

「それだけ分かれば十分じゃないの？」

『ニンゲントイウノハ複雑怪奇。カラダノ表面的ナ変化ダケデ、スベテヲオシハカルコ

トハデキナイ。ダカラコソ、ニンゲンハオモシロイ』

「ははっ。そうなんだ」

『アトスーツ内ニ排出サレタ尿ノ分析デ君ノ健康状態ヲチェックデキル。今朝ノ分析ハ。少シペーハー値ガ酸性側ニカタムイテイル。サイキン野菜ブソクジャナイカイ?』
「うん。やっぱり配給されてる食事だけじゃ十分な野菜は採れないよ…っ。そんなことまでしなくていいよ!」

『スマナイネ。ボクハコノ世界デ一番君ノコトヲ知ツテイル存在ニナリタインダ』

「ちよ、ちよつと怖いよ…」

『フッフッフ…』

「だからその「…」が怖いつて」

2人の会話(?)に割って入るように、緊張感のこもった声が聴こえた。

『旧第3新東京市の上空に敵影を確認! エヴァ13号機です! さらに機影。ネーメズイスシリーズです。その数、1,000を超えています!』

続けて女性の声。

『聴こえたわね、シンジくん。あなたのお父さんはこちらの降伏勧告には従うつもりはないですよ』

緊張感を孕んだ声に対し、少年は苦笑いしながら言った。

「でしようね。父は僕に似て、頑固ですから」

女性は呆れたように言う。

『ほんと。似た者親子ね』

「父が色々と迷惑掛けます」

女性是和らいだ声で言う。

『とりあえず、あなた達の親子関係も、一度は決着付けとかないとね』

「はい。ミサトさん」

『あれあれ？ でもあちらさんって、もうパイロットさん一人も残ってないんじゃないかな
かったかにやく？ ダミーでも使ってるの？』

『ダミーシステム計画は14年前の起動失敗を受けて破棄されてるはずよ。13号機は
初号機同様に第2使徒由来のエヴァ。この度初号機で起きたことと同様のことが、13
号機でも同時多発的に起きているとも考えらるわ』

『つまり第2使徒由来のエヴァの中にはみんな、「あれ」が潜んでるってことか。第2使
徒由来のエヴァって、あと何機あんの？』

『13号機以降は全部ね』

『うへっ。じゃあ親父さんがとち狂って14号機以降を全部覚醒させる前にちやつちや

とケリつけないとね』

『現状、彼我兵力差は1対9か。分が悪いわね』

『なーに言ってるのよりツコ。分の良い戦いなんて、14年前から今日まで一度も無かったじゃない。ほら、シンジ。あんたもさつきと来なさいよ』

『ワンコくーん。周りのモブつこたちはあたしたちに任せてくれちゃっていいから、ワンコくんと初号機はあの13号機をお願いね〜』

『…碓くんは、私が守るから』

『だからあんたはあたしたちの援護つつってんでしょうが!』

「ふふっ」

『ドウカシタカイ?』

「あ、いや。この雰囲気。何だか14年前に戻ったような気がして。いいな、って思っちゃった」

『ソレハ違ウヨ。シンジクン』

「え?」

『時間ハ不可逆的ダ。決シテ戻ルコトハナイ。ソシテボクタチガ立ツテイル「今」ハ、過去ノボクタチガ様々ナモノヲ積ミ重ネタ上ニ出来タ「今」ナンダ』

無機質な画面に無機質な文字で綴られる言葉。しかし少年には、その文字が自分の言葉を宥めているように思えた。

「うん。そうだね」

画面の文字を、少年は噛みしめる様に見つめる。

過去の自分たちが。みんなが。

様々な犠牲を払った末に到達した先が、「今」なのだ。

あらゆる犠牲は、決して「過去」に戻る為に払われたものではない。

そしてあらゆる犠牲の上に至った「今」、自分がまだこの世に存在することができて、そして再びエヴァに乗っているのは、過去を懐かしむためでもない。

『ソシテコレカラ始マル戦イモ、甘美ナ過去ヲ取り戻ス為ノ戦イデハナイ』

「うん。未来を切り拓くための戦い、だよね」

『コノ戦イニ、君ト肩ヲ並ベテ臨ムコトガ出来テ、僕ハトテモ光荣ダヨ』

『シンジくん、準備はいいかしら?』

「はい、いつでも行けます」

『初号機。ヴンダー機関部との切り離しまで、あと1分。初号機切り離した後、ヴンダーは縮退炉による航行へと切り替えます』

「ミサトさん」

『なに?』

「ありがとうございます。またエヴァに乗せてくれて」

『仕方ないでしょ。初号機の新しいコアOSが、ヴァンダーの主機になるのも拒否して、シンジくん以外は一切受け付けないとか言い出すんだから。なんなのアレ。前のコアOSよりもよっぽど厄介じゃないの』

「ははっ。でも前よりもシンクロ率は上がってますから。前よりも上手く動かせるよう
な気がします」

『また人間やめないでよ』

「分かってます」

『…シンジくん』

「はい」

『ありがとう。また、エヴァに乗ってくれて…』

「はい…」

『初号機切り離しまで、後5秒、3、2、1』

『初号機、発進します』

『初号機、本艦より切り離し成功。本艦はこれより縮退炉による航行へと移行します』
『艦長より全艦へ回線開きます』

『ヴィレの皆さんに伝えます。全艦及び全機はこれよりネルフとの戦闘に入ります。
かつてない、大規模な戦いとなるでしょう。』

そして残念ながら、これが最後の戦いになるというわけではありません。
ですが私は確信しています。

後に降り返って、この戦いの勝利こそが、14年に渡る長い戦争の終わりへの始まり
だったと言えることを。

この戦いに身を投じてくれた皆さんに、感謝します』

『新2号機α及び8号機β降下開始。接敵まであと1分』

『準備ハイイカナ？ シンジクン』

「うん。いつでもオーケーだ」

『デハ30秒後ニエヴァノコントロールヲ譲ルヨ』

「うん。…あ、カヲル君」

『ナンダイ?』

「今は未来から片時も目を逸らさないよ。でも、この戦いを生き抜いたら、その時は…」

『「カノジョ」ヲ探シニ行ク、カイ?』

「うん。…だめかな?」

『僕トシテハ、君ニハ僕ダケヲ見テイテ欲シイケド』

「ははは…」

『フフフ。分カツテルヨ。僕モコノママジャフエアジャナイト思ツテイタカラ』

「フエアじゃないって、どうゆうことかな…?」

『アノ赤毛ノコモ、「カノジョ」ノ妹モ、ズツト我慢スルツモリデイルハズダヨ。「カノ

ジョ」ガ還ツテクルソノ日マデ』

「何を我慢してるの?」

『…時々キミノソノ天然ブリニハ呆レルヲ通り越シテ殺意スラ沸イテシマウヨ』

「ちよ、ちよつと怖いよ。カヲルくん」

『キミヲ殺シテ僕モ死ヌ』

「な、何言ってるの…! カヲルくん…!」

『H a h a h a。デモコレデコノ戦イガ終ワツタ後モ退屈シナクテ済ミソウダ。モチロ

ン僕モ負ケルツモリハナイヨ』

「カヲルくん…。カヲルくんが何を言っているのか…、僕には全然分からないよ…」

『シンジクン。ユーハブコントロール』

「え？ あ、アイハブコントロール」

『見エテキタ。13号機ダ』

「こちら初号機！ 13号機を目視で確認！」

『了解』

『こちら2号機！ うはっ！ 凄い数！ ハンマーもう一本持つてくるんだったわ』

『こりやどこ撃つても当たるねえ』

『碇くん。危ないときは言つて。すぐに駆け付けるから』

『全艦、戦闘準備完了』

『ならば結構。ヴァンダーより全艦へ。これより、ネルフ本部制圧作戦を開始します』



「え？」

「??？」

「どうしたの？ カヲルくん」

「??？」

「え？ あと2分で13号機と接触するんだけど」

『Unknown 確認』

「え？ どこどこ？」

『Unknown 。エントリープラグ内ニ異物アリ』

「え？ 異物？」

『シンジクン。プラグ内ニ何かヲ持チコンダカイ？ 持チコム場合ハ事前ニ申請ガ必要

ダヨ？。』

「いや、僕は何も…」

『異物ハ君ガ座ルシートノ後ロニアルミタイダ。アイハブコントロール』

「ゆ、ユーハブコントロール。え？ このシートの後ろ？」

『ソウダヨ』

「えつと…。どこかな？ ん？ ……おつ。ああ、あった、あった。これだこれだ」

『見ツカツタカイ？』

「え…？ これって…」

『ナンダイ？』

「これ…。僕の…」

『ソレハ以前僕ガ直シテアゲタモノダネ』

「ずっと失くしたと思ってたのに…」

『エントリープラグデ無クシタノカイ？』

「いや。失くしたのはあの時だ。てつきりエアロックに吸い出されそうになった時に、艦の外に行っちゃったと思ってたんだけど」

『デハナゼ初号機ノエントリープラグノ中二…』

「ふふっ…」

『ドウシタンダイ？ シンジクン』

「いや。何度も僕の手から離れたはずなのに、結局は僕のもとに戻ってくるんだなって思ってる」

『呪ワレテルネ』

「や、やめてよ」

『ちよつと初号機！ 目の前に13号機来てるわよ！』

『オツト。詮索ハアトダ、シンジクン。ユーハブコントロール』

「アイハブコントロール。そうだね」

『接敵マデアト10秒』

「了解。エヴァンゲリオン初号機！ 碇シンジ！ 行きます！」

—おしまい—